河内長野市遺跡調査報告 XXXI

日野観音寺遺跡

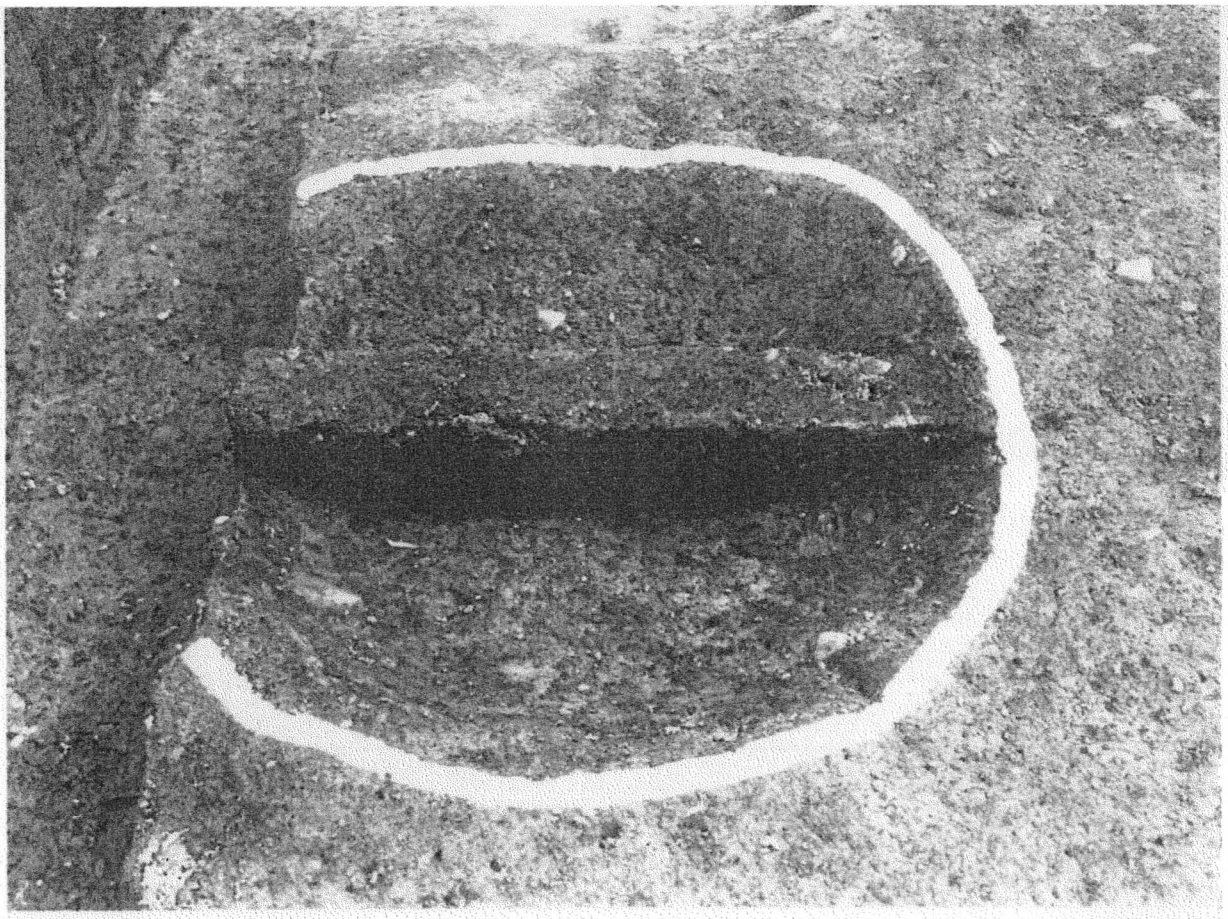
２００５年３月

河内長野市教育委員会
河内長野市遺跡調査会

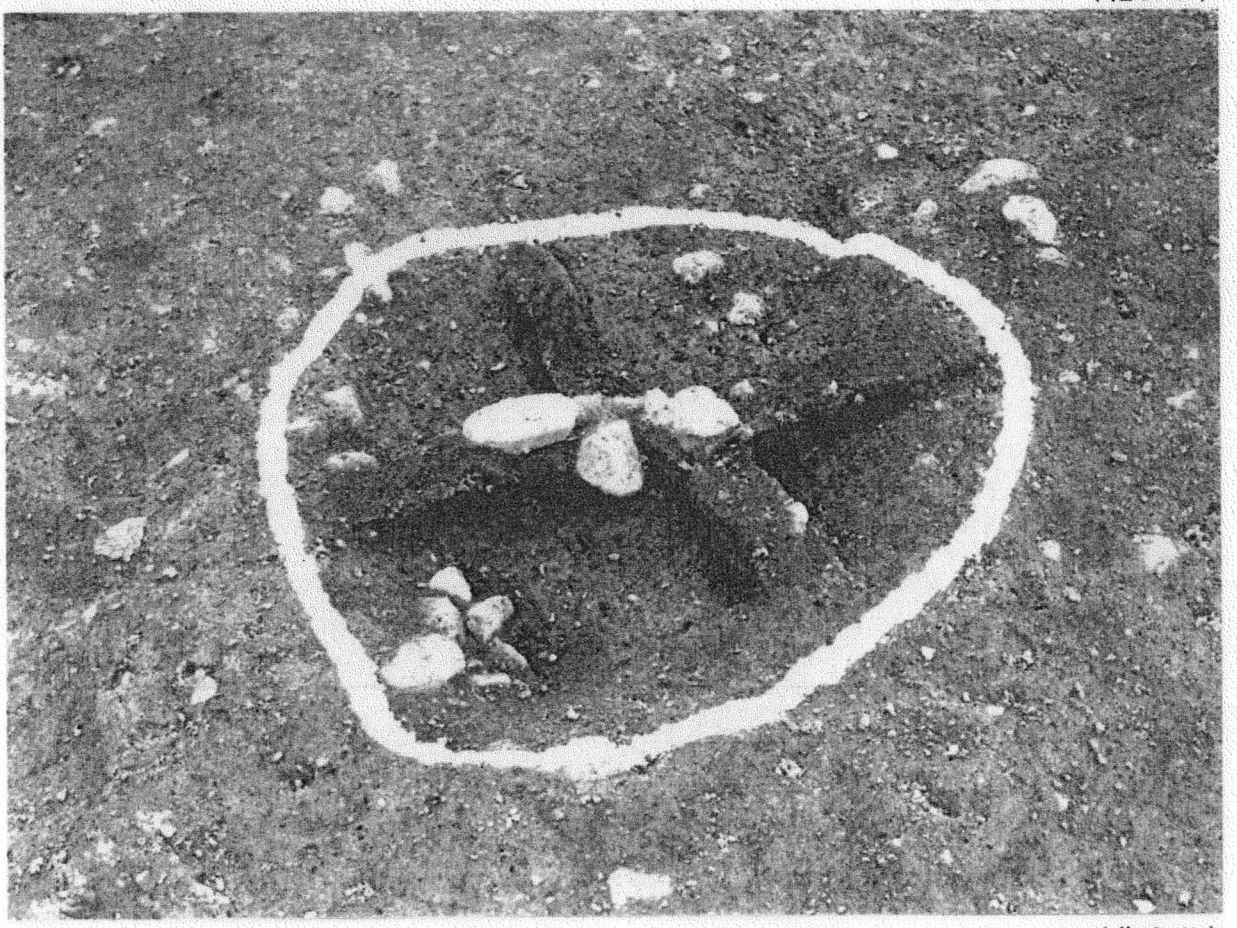
河内長野遺跡調査報告書ＸＸＸＩ

日野観音寺遺跡
正　誤　表

頁	行など	誤	正
27	1	区別するのもの、	区別するものの、
33	第19図	2　断面黒塗り	2　断面白抜き
33	第19図	3　断面白抜き	3　断面黒塗り
88	3	②床土	③床土
88	3	④	⑤
88	4	⑤10YR4/3	⑥2.5Y4/3
92	2	④	③
92	3	⑨	⑩
105	3	SK15、SK18	SK4、SK5、SK9
115	第5表	第Ⅰ・Ⅱ調査区焼土坑	第Ⅰ・Ⅱ調査焼土坑計測表
115	24	遺物　瓦器片	遺物　なし
115	28	遺物　なし	遺物　瓦器片、土師片
115	31	遺物　土師皿	遺物　土師皿、瓦器埦
115	32	遺物　なし	遺物　瓦器皿、瓦器埦
115	32	規模　1.08　0.88　0.18	規模　1.53　1.3　0.88
115	34	規模　1.53　1.3　0.88	規模　1.08　0.88　0.18
図版46		SK4(162・164)、SK5(165・168)	SK4(162・164・165)、SK5(168)



ＳＫ１８（北より）



ＳＫ１９（北より）

序　　文

大阪府の南東部に位置する河内長野市は、豊かな自然に恵まれ、高野街道に代表される、和歌山や奈良へ向かう街道の要衝として発展してきた街です。このため、市内には数多くの文化財が残されています。

この様な河内長野市も大阪市内への通勤圏に位置しているため、住宅都市として発達してきました。この住宅開発がもたらした自然や文化財に対する影響も大きなものがあります。特に、地下に眠る埋蔵文化財は、開発と直接的に結び付く大きな問題です。

遺跡に託されている河内長野の先人達のメッセージである文化遺産を保護・保存し、現在の、更には未来の市民へと伝えていくことは、現代に生きる私達の責務であります。河内長野市においては重要な課題である開発と文化財保護との調和のため、開発に先立ち埋蔵文化財の発掘調査を実施し、その把握に努めています。

本書は発掘調査の成果を収録しています。皆様が先人達の残したメッセージの一部でもある文化財に対するご理解を深めて頂くと共に、文化財の保護・保存・研究するための資料として活用して頂ければ幸いです。

これらの発掘調査に協力して頂きました施主の方々の埋蔵文化財への深いご理解に末尾ながら謝意を表すものです。

平成17年3月

河内長野市教育委員会
教育長　福　田　弘　行

例　　言

1．本報告書は、平成12～16年度に河内長野市教育委員会及び河内長野市遺跡調査会が実施した日野観音寺遺跡（ＨＫＴ01－１・01－２・01－３・02－１・02－２）の発掘調査報告書である。調査にかかる費用は、河内長野市（環境経済部農とみどりの整備課、クリーンセンター推進室）が負担した。
2．発掘調査は、河内長野市教育委員会教育部社会教育課参事兼課長補佐尾谷雅彦・同係鳥羽正剛・同嘱託福田和浩を担当者として実施し、内業作業は、河内長野市立ふれあい考古館館長中西和子の指導の下に行った。
3．本書の執筆は鳥羽、福田が行い、松尾和代（市立ふれあい考古館館員）が補佐した。文責は各文末に記している。
4．発掘調査及び内業整理については、下記の方々の参加・協力を得た。（敬称略）
庵ノ前智博・大塚和矢・大塚美幸・大西京子・喜多順子・小浜加奈子・斎田菜穂子・末永　剛・杉本祐子・谷岡能史・藤田徹也（現富田林市教育委員会）・枡本裕子・牟田口京子・撫養健至（現スタジオ３３株式会社）・矢倉嘉人・安間克己
5．発掘調査については、下記の方々の指導、協力を得た。記して感謝する。（敬称略・順不同）
橋本久和（高槻市教育委員会）・株式会社総合文化企画・株式会社夏原技研・近畿古環境研究会・株式会社東海アナース・株式会社安西工業・国際航業株式会社・写測エンジニアリング株式会社・株式会社パスコ・宗教法人観音寺
6．写真撮影は、遺構については鳥羽・福田・中西、遺物については中西が行った。
7．本調査の記録はスライドフィルムなどでも保管されており、広く一般の方々に活用されることを望むものである。

凡　　例

1．本報告書に記載されている標高は、ＴＰを基準としている。
2．土色については、「新版標準土色帖」1990年度版による。
3．平面測量基準は、国家座標第Ⅵ系による５ｍメッシュを基準に実施したものである。
4．図中の北は、座標北である。
5．本書の遺構名は、下記の略記号を用いた。
ＳＡ…杭列　　ＳＢ…掘立柱建物　　ＳＤ…溝・暗渠　　ＳＫ…土坑
ＳＰ…ピット　　ＳＷ…石敷き・石組み・石列　　ＳＸ…落ち込み　　ＳＹ…窯
6．遺構実測図の縮尺は、1/10・1/20・1/30・1/40・1/50・1/60・1/80・1/200・1/250・1/300・1/500である。
7．遺物実測図の縮尺は、土器1/4・石器2/3・金属製品1/3・銅銭原寸を基準としているが、遺物の状況により変えている。
8．遺物名は、土師質土器を土師質、瓦質土器を瓦質、須恵質土器を須恵質と略称し、器種名を付した。器種名については、本調査会の標記によるものとする。
9．遺物の断面は、土師器・土師質土器・石製品が白抜き、須恵器・瓦器・瓦質土器・須恵質土器・陶磁器が黒塗り、瓦・金属製品が斜線である。
10．文中の瓦器埦の型式分類は、尾上実氏の和泉型瓦器椀の編年に基づくものである。
11．遺物番号と写真図版の番号は一致する。
12．細片のため図化できなかった遺物は、器種名・遺物番号を省略し記していない。

目　　次

序文
例言
凡例
目次
挿図目次
表目次
図版目次
付図目次
第１章　はじめに …… 3
　第１節　調査に至る経過 …… 鳥羽 …… 3
　第２節　位置と環境 …… 福田 …… 4
　第３節　調査の方法 …… 福田 …… 12
第２章　調査の成果・第Ⅰ調査区 …… 福田 …… 15
　第１節　基本層序と遺構面の認識 …… 15
　第２節　第Ⅰ－１調査区 …… 21
　第３節　第Ⅰ－２調査区 …… 36
　第４節　第Ⅰ－３調査区 …… 52
　第５節　まとめ …… 72
第３章　調査の成果・第Ⅱ調査区 …… 鳥羽 …… 77
　第１節　第Ⅱ－１調査区 …… 77
　第２節　第Ⅱ－２調査区 …… 88
　第３節　第Ⅱ－３調査区 …… 92
　第４節　まとめ …… 105
第４章　まとめ …… 福田 …… 107
　第１節　日野観音寺遺跡の景観復元 …… 107
　第２節　焼土を伴う土坑について …… 114
第５章　考古地磁気年代推定 …… 119
　第１節　日野観音寺遺跡における考古地磁気年代推定(二次磁化除去前) …… 119
　第２節　日野観音寺遺跡における考古地磁気年代推定(二次磁化除去後) …… 128

挿　図　目　次

第１図　河内長野市遺跡分布図(1/40000) …… 1
第２図　遺跡位置図 …… 4
第３図　市域地質図 …… 5
第４図　窯平面図 …… 11
第５図　調査区配置図及び区割設定図(1/2500) …… 13

第Ⅰ調査区

第６図　第Ⅰ－１～３調査区配置図(1/1000) …… 16
第７図　第Ⅰ調査区遺構面対応関係図 …… 19・20
第８図　ＳＤ１・２遺構断面実測図(1/20) …… 21
第９図　ＳＫ１遺構実測図(1/20) …… 22
第10図　第Ⅰ－１調査区遺構配置図(1/250) …… 23・24
第11図　第Ⅰ－１調査区土層断面実測図(1/60) …… 25・26
第12図　ＳＫ３遺構実測図(1/20) …… 27
第13図　ＳＫ４・６遺構実測図(1/20) …… 28
第14図　ＳＫ７遺構実測図(1/20) …… 28
第15図　ＳＫ８遺構実測図(1/20) …… 29
第16図　ＳＰ10・11遺構実測図(1/20) …… 30
第17図　ＳＰ17・19遺構実測図(1/20) …… 30
第18図　ＳＷ１遺構実測図(1/40・1/60) …… 31・32
第19図　ＳＷ１出土遺物実測図 …… 33
第20図　第Ⅰ－１調査区包含層出土遺物実測図(１) …… 34
第21図　第Ⅰ－１調査区包含層出土遺物実測図(２) …… 35
第22図　第Ⅰ－２調査区遺構配置図(1/250) 及び土層断面実測図(1/60) …… 37・38
第23図　ＳＤ７遺構実測図(1/50・1/20) …… 39
第24図　ＳＫ11遺構実測図(1/20) …… 39
第25図　ＳＰ23・31出土遺物実測図 …… 40
第26図　ＳＰ23・25～27・31、ＳＷ２遺構実測図(1/20・1/50) …… 41・42
第27図　ＳＷ２出土遺物実測図(１) …… 43
第28図　ＳＷ２出土遺物実測図(２) …… 44
第29図　ＳＸ10出土遺物実測図(１) …… 45
第30図　ＳＸ10出土遺物実測図(２) …… 46
第31図　第Ⅰ－２調査区第１包含層出土遺物実測図(１) …… 47
第32図　第Ⅰ－２調査区第１包含層出土遺物実測図(２) …… 48

第33図　ＳＡ１遺構実測図(1/80)…… 49
第34図　第Ⅰ－２調査区第２包含層出土遺物実測図 …… 51
第35図　第Ⅰ－３調査区第１面遺構配置図(1/250) …… 52
第36図　第Ⅰ－３調査区土層断面実測図(1/60)…… 53
第37図　ＳＫ14遺構実測図(1/20)…… 54
第38図　第Ⅰ－３調査区土坑配置図(1/250) …… 55
第39図　ＳＫ15遺構実測図(1/20)…… 56
第40図　ＳＫ16遺構実測図(1/20)…… 56
第41図　ＳＫ17・19遺構実測図(1/30)…… 56
第42図　ＳＰ32・36遺構断面実測図(1/20)…… 57
第43図　ＳＸ12出土遺物実測図(１)…… 58
第44図　ＳＸ12出土遺物実測図(２)…… 59
第45図　ＳＹ１遺構実測図(1/30)…… 60
第46図　ＳＹ１出土遺物実測図 …… 61
第47図　第Ⅰ－３調査区第１包含層出土遺物実測図 …… 62
第48図　ＳＤ９遺構断面実測図(1/20)…… 62
第49図　第Ⅰ－３調査区第２面遺構配置図(1/250) …… 63
第50図　ＳＤ13遺構実測図(1/40)…… 64
第51図　ＳＤ13出土遺物実測図 …… 65
第52図　ＳＫ20遺構実測図(1/20)…… 65
第53図　ＳＫ21遺構実測図(1/20)…… 66
第54図　ＳＫ22遺構実測図(1/20)…… 66
第55図　ＳＫ23遺構実測図(1/20)…… 68
第56図　ＳＫ24遺構実測図(1/20)…… 68
第57図　ＳＫ25遺構実測図(1/20)…… 69
第58図　ＳＫ28遺構実測図(1/20)…… 69
第59図　ＳＫ26遺構実測図(1/20)…… 69
第60図　ＳＫ27遺構実測図(1/20)…… 70
第61図　ＳＫ29・30遺構実測図(1/20)…… 70
第62図　第Ⅰ－３調査区第２包含層出土遺物実測図 …… 71

第Ⅱ調査区

第63図　第Ⅱ－１調査区遺構配置図(1/300) …… 77
第64図　第Ⅱ－１～３調査区配置図(1/1000)…… 78
第65図　第Ⅱ－１調査区土層断面実測図(1/60)…… 79・80
第66図　ＳＫ１遺構実測図(1/20)…… 81

第67図　ＳＫ４遺構実測図(1/40)…… 82
第68図　ＳＫ５遺構実測図(1/20)…… 82
第69図　ＳＫ４・５出土遺物実測図(1/20)…… 83
第70図　ＳＫ６遺構実測図(1/40)…… 83
第71図　ＳＫ７遺構実測図(1/20)…… 84
第72図　ＳＫ９遺構実測図(1/20)…… 84
第73図　ＳＫ９出土遺物実測図 …… 85
第74図　ＳＫ14遺構実測図(1/20)…… 86
第75図　ＳＫ15遺構実測図(1/20)…… 86
第76図　ＳＫ18遺構実測図(1/20)…… 87
第77図　第Ⅱ－２調査区遺構配置図(1/300) …… 88
第78図　ＳＫ22遺構実測図(1/20)…… 88
第79図　第Ⅱ－２調査区土層断面実測図(1/60)…… 89
第80図　ＳＫ23遺構実測図(1/20)…… 90
第81図　ＳＫ24遺構実測図(1/20)…… 90
第82図　ＳＫ25遺構実測図(1/20)…… 91
第83図　第Ⅱ－３調査区遺構配置図(1/500) …… 92
第84図　ＳＢ１遺構実測図(1/60)…… 93
第85図　ＳＢ２遺構実測図(1/60)…… 94
第86図　ＳＢ３遺構実測図(1/80)…… 95
第87図　ＳＢ３出土遺物実測図 …… 95
第88図　ＳＫ28遺構実測図(1/40)…… 96
第89図　ＳＫ28出土遺物実測図 …… 97
第90図　ＳＫ30遺構実測図(1/20)…… 97
第91図　ＳＰ２・３出土遺物実測図 …… 98
第92図　ＳＷ１遺構実測図(1/60)…… 99
第93図　ＳＷ１出土遺物実測図 …… 100
第94図　第Ⅱ－３調査区包含層出土遺物実測図 …… 101
第95図　第Ⅱ調査区確認調査出土遺物実測図 …… 102
第96図　第Ⅱ－３調査区土層断面実測図(1/60)…… 103・104
第97図　第Ⅰ調査区景観復元図 …… 109
第98図　日野村絵図 …… 111
第99図　神社範囲推定図 …… 112
第100図　第Ⅱ調査区景観復元図 …… 113
第101図　焼土坑の平面形の割合 …… 114

第102図　焼土坑の規模散布図 …… 116
第103図　土坑の平面形と焼土の有無の割合 …… 116
第104図　広岡(1977)により西南日本の考古遺跡焼土の測定から求められた
過去2000年間の地磁気永年変化曲線 …… 120
第105図　Shibuya(1980)により西南日本の考古遺跡焼土の測定から求められた
過去2000年間の地磁気永年変化曲線 …… 120
第106図　各試料の残留磁化方向の等面積投影図 …… 124
第107図　広岡(1977)により西南日本の考古遺跡焼土の測定から求められた
500～1400年の地磁気永年変化曲線と測定結果 …… 125
第108図　Shibuya(1980)により西南日本の考古遺跡焼土の測定から求められた
500～1400年の地磁気永年変化曲線と測定結果 …… 126
第109図　中島・谷崎(1990)により3タイプに分類された消磁ベクトル図 …… 128
第110図　パイロット・サンプルについての消磁ベクトル図 …… 130
第111図　消磁前(ＮＲＭ)と消磁後の残留磁化方向の等面積投影図 …… 131
第112図　500～1400年間の広岡(1977)の偏角－伏角図と消磁後の測定結果 …… 134
第113図　500～1400年間のShibuya(1980)の偏角－伏角図と消磁後の測定結果 … 134

表　目　次

第1表　河内長野市遺跡地名表 …… 2
第2表　調査区名対照表 …… 12
第3表　第Ⅰ調査区遺構計測表 …… 74・75
第4表　日野観音寺と牛頭天王宮の規模データ …… 110
第5表　第Ⅰ・Ⅱ調査区焼土坑計測表 …… 115
第6表　熱残留磁気測定結果 …… 123
第7表　考古地磁気測定結果(平均磁化方向) …… 124
第8表　考古地磁気年代推定年代 …… 126
第9表　熱残留磁気測定結果 …… 132
第10表　考古地磁気測定結果(平均磁化方向) …… 133
第11表　考古地磁気年代推定年代 …… 135

図　版　目　次

図版１　第Ⅰ調査区　調査地遠景(北より)、第Ⅰ調査区全景(北より)
図版２　第Ⅰ－１調査区　第１面　全景(南より)、ＳＤ２完掘状況(南より)
図版３　第Ⅰ－１調査区　第２面　全景(南より)、全景(東より)
図版４　第Ⅰ－１調査区　第２面　全景(西より)、ＳＷ１全景(東より)
図版５　第Ⅰ－１調査区　第２面　ＳＷ１(東より)、ＳＷ１(北より)
図版６　第Ⅰ－１調査区　第２面　ＳＷ１調査風景(東より)、ＳＷ１杭検出状況(南より)
図版７　第Ⅰ－１調査区　第２面　ＳＫ３(南東より)、ＳＫ７炭検出状況(西より)
図版８　第Ⅰ－２調査区　第１面　全景(南より)、全景（北より）
図版９　第Ⅰ－２調査区　第１面　全景(東より)、ＳＷ２全景(東より)
図版10　第Ⅰ－２調査区　第１面　ＳＷ２(北側石組)(東より)、ＳＷ２(南側石組)(東より)
図版11　第Ⅰ－２調査区　第１面　ＳＰ23断面、ＳＤ７(西より)
図版12　第Ⅰ－２調査区　第２面　全景(北より)、全景(東より)
図版13　第Ⅰ－２調査区　第２面　ＳＡ１(南より)、
　　第Ⅰ－３調査区　第１面　全景(東より)
図版14　第Ⅰ－３調査区　第１面　ＳＤ８(東より)、ＳＹ１(東より)
図版15　第Ⅰ－３調査区　第２面　(上段)全景(北より)、(中段)全景(北より)
図版16　第Ⅰ－３調査区　(上段)第２面　焼土坑群(東より)、ＳＫ14
図版17　第Ⅰ－３調査区　第２面　ＳＫ20(南より)、ＳＫ28(南より)
図版18　第Ⅰ－３調査区　第２面　ＳＫ21検出状況、ＳＫ21完掘状況
図版19　第Ⅰ－３調査区　第２面　ＳＫ27検出状況(西より)、ＳＫ27完掘状況(西より)
図版20　第Ⅱ調査区　調査地遠景(南より)、第Ⅱ調査区全景
図版21　第Ⅱ－１調査区　調査区全景(東より)
図版22　第Ⅱ－１調査区　第Ⅱ－１調査区(東より)、第Ⅱ－１調査区(東より)
図版23　第Ⅱ－１調査区　ＳＫ１(北より)、ＳＫ２(南より)
図版24　第Ⅱ－１調査区　ＳＫ４(東より)、ＳＫ４(北より)
図版25　第Ⅱ－１調査区　ＳＫ５(西より)、ＳＫ６(北より)
図版26　第Ⅱ－１調査区　ＳＫ９(北より)、ＳＫ９(東より)
図版27　第Ⅱ－１調査区　ＳＫ10(北より)、ＳＫ11(北より)
図版28　第Ⅱ－１調査区　ＳＫ12(西より)、ＳＫ13(北より)
図版29　第Ⅱ－１調査区　ＳＫ15（南より)、ＳＫ16（南より)
図版30　第Ⅱ－１調査区　ＳＫ18（北より)、ＳＫ19（北より)
図版31　第Ⅱ－２・３調査区　第Ⅱ－２調査区全景(西より)、第Ⅱ－３調査区全景(東より)
図版32　第Ⅱ－２調査区　調査区北部(西より)、調査区南部(西より)

図版33　第Ⅱ－２調査区　ＳＫ22(南より)、ＳＫ23(南より)
図版34　第Ⅱ－２調査区　ＳＫ24(南より)、ＳＫ25(北より)
図版35　第Ⅱ－３調査区　調査区全景(西より)、調査区全景(北より)
図版36　第Ⅱ－３調査区　ＳＢ１(北より)、ＳＢ２(北より)
図版37　第Ⅱ－３調査区　ＳＢ２・３(北より)、ＳＢ３(西より)
図版38　第Ⅱ－３調査区　ＳＢ３－Ｐ１(北より)、ＳＫ29(南より)
図版39　第Ⅱ－３調査区　ＳＫ30(西より)、ＳＫ31(東より)
図版40　第Ⅱ－３調査区　ＳＷ１(西より)、ＳＷ１(西より)
図版41　遺物　第Ⅰ調査区　ＳＷ１(２・３)、第Ⅰ－１調査区第１包含層(４～11・23・25・27～29)、ＳＰ23(32)、ＳＰ31(31)、ＳＷ２(33・34)
図版42　遺物　第Ⅰ調査区　ＳＷ２(35～37・39～47・51・56～58)
図版43　遺物　第Ⅰ調査区　ＳＷ２(60～63)、ＳＸ10(64・65・67～70・78)
図版44　遺物　第Ⅰ調査区　ＳＸ10(72・73・75～77・80・81)、第Ⅰ－２調査区第１包含層(86・87)、第Ⅰ－２調査区第２包含層(100・106・108・109・111・112)
図版45　遺物　第Ⅰ調査区　第Ⅰ－２調査区第２包含層(117)、ＳＸ12(119・121～123・125・129・131・132)、ＳＤ13(154～157)、第Ⅰ－３調査区第２包含層(160)
図版46　遺物　第Ⅱ調査区　ＳＫ４(162・164)、ＳＫ５(165・168)、ＳＫ９(169・170)、ＳＢ３(173・174)、ＳＫ28(175・176)
図版47　遺物　第Ⅱ調査区　ＳＰ２(177)、ＳＰ３(178)、ＳＷ１(182～184)、第Ⅱ－３調査区包含層(185～189・192・194・195)

付　図　目　次

付図１　第Ⅰ調査区遺構全体図(1/250)
付図２　第Ⅱ調査区遺構全体図(1/200)

第１図　河内長野市遺跡分布図（1/40000）

番号	文化財名称	種類	時代
1	長野神社遺跡	社寺	室町以降
2	河合寺遺跡	社寺	平安以降
3	観心寺遺跡	社寺	平安以降
4	大師山古墳	古墳	古墳（前期）
5	大師山南古墳	古墳？	古墳（後期）
6	大師山遺跡	集落・生産	弥生（後期）・平安
7	興禅寺遺跡	社寺	中世以降
8	烏帽子形八幡神社遺跡	社寺	室町以降
9	塚穴古墳	古墳・墳墓	古墳（後期）・近世
10	長池窯跡群	生産	平安～近世
11	小山田1号古墓	墳墓	奈良
12	小山田2号古墓	墳墓	奈良
13	延命寺遺跡	社寺	平安以降
14	天野山金剛寺遺跡	社寺・墳墓	平安以降
15	日野観音寺遺跡	社寺・生産	縄文・平安～近世
16	地蔵寺遺跡	社寺	中世以降
(17)	岩湧寺遺跡	社寺	平安以降
18	五ノ木古墳	古墳	古墳（後期）
19	高向遺跡	集落	旧石器～中世
20	烏帽子形城跡	城館・生産	中世～近世
21	喜多町遺跡	集落	縄文・古墳～中世
22	烏帽子形古墳	古墳	古墳（後期）
23	末広窯跡	生産	中世
24	塩谷遺跡	散布地	縄文～近世
25	流谷八幡神社	社寺	平安以降
26	蟹井淵南遺跡	散布地	中世
27	蟹井淵北遺跡	散布地	中世
28	天見駅北方遺跡	散布地	中世
29	千早口駅南遺跡	社寺	中世
30	岩瀬薬師寺遺跡	社寺	中世以降
31	清水遺跡	散布地	中世
32	伝「仲哀廟」古墳	古墳？	
(33)	堂村地蔵堂跡	社寺	近世
(34)	滝畑埋墓	墳墓	近世
(35)	中村阿弥陀堂跡	社寺	近世
(36)	東の村観音堂跡	社寺	近世
(37)	西の村観音堂跡	社寺	近世
38	清水阿弥陀堂跡	社寺	近世
39	滝尻弥勒堂跡	社寺	近世
(40)	宮の下内墓	墳墓	古墳
41	宮山古墳	古墳	古墳
42	宮山遺跡	集落	縄文・奈良
43	西代藩陣屋跡	散布地・城跡	飛鳥～奈良・江戸
44	上原町墓地	墳墓	近世
45	惣持寺跡	散布地・社寺	縄文・奈良・鎌倉
46	栗山遺跡	祭祀	中世～近世
47	寺ケ池遺跡	散布地	縄文
48	上原遺跡	散布地	旧石器～近世
49	住吉神社遺跡	社寺	近世以降
50	高向神社遺跡	社寺	中世以降
51	青が原神社遺跡	社寺	中世以降
52	膳所藩代官所跡	城館	江戸
53	双子塚古墳跡	古墳	古墳
54	菱子尻遺跡	散布地・社寺	縄文～近世
55	河合寺城跡	城館	中世
56	三日市遺跡	集落・古墳他	旧石器～近世
57	日の谷城跡	城館	中世
58	高木遺跡	散布地	縄文
59	汐の山城跡	城館	中世
60	峰山城跡	城館	中世
61	稲荷山城跡	城館	中世
62	国見城跡	城館	中世
63	旗蔵城跡	城館	中世
64	権現城跡	城館	中世
(65)	天神社遺跡	社寺	中世以降
(66)	葛城第15経塚	経塚	平安以降
67	加賀田神社遺跡	社寺	中世以降
68	庚申堂遺跡	社寺	近世以降
69	石仏城跡	城館	中世
70	佐近城跡	城館	中世
71	旗尾城跡	城館	中世
72	葛城第16経塚	経塚	平安以降
(73)	葛城第18経塚	経塚	平安以降

番号	文化財名称	種類	時代
(74)	葛城第19経塚	経塚	平安以降
(75)	笹尾塞	城館	中世
(76)	大沢塞	城館	中世
(77)	三国山経塚	経塚	平安以降
(78)	光滝寺遺跡	社寺	中世以降
(79)	猿子城跡	城館	中世
80	蟹井淵神社遺跡	社寺	中世以降
(81)	川上神社遺跡	社寺	中世以降
82	千代田神社遺跡	社寺	中世以降
83	向野遺跡	集落・生産	縄文・平安～近世
84	古野町遺跡	散布地	中世
85	上原北遺跡	集落	中世
86	大日寺遺跡	社寺・古墳・墳墓	弥生～近世
87	高向南遺跡	散布地	鎌倉
88	小塩遺跡	集落	縄文～奈良
89	加塩遺跡	集落	古墳（後期）
90	尾崎遺跡	集落	古墳～中世
91	ジョウノマエ遺跡	城館？	中世
92	仁王山城跡	城館	中世
93	夕コラ城跡	城館	中世
94	岩立城跡	城館	中世
95	上原近世瓦窯	生産	近世
96	市町東遺跡	散布地	弥生・中世
97	上田町窯跡	生産	近世
98	尾崎北遺跡	集落	古墳～中世
99	西之山町遺跡	散布地	中世
100	野間里遺跡	集落	平安
101	鳴尾遺跡	散布地	中世
102	上田町遺跡	散布地	古墳・中世
103	上原中遺跡	散布地	古墳・中世
104	小野塚遺跡	墳墓	中世
(105)	葛城第17経塚	経塚	平安以降
106	薬師堂跡	社寺	中世以降
107	野作遺跡	生産	中世
108	寺元遺跡	集落・社寺	縄文・奈良・中世
(109)	鳩原遺跡	散布地	中世
110	法師塚古墳跡	古墳	古墳
111	山上講山古墳跡	古墳	古墳
112	西浦遺跡	集落	古墳・中世・近世
113	地福寺跡	社寺	近世
114	宮の下遺跡	集落	平安～中世
115	栄町遺跡	散布地	弥生・古墳・中世
116	錦町遺跡	散布地	中世
(117)	太井遺跡	散布地	縄文・中世
118	錦町北遺跡	集落	弥生・中世・近世
119	市町西遺跡	集落	縄文・中世
120	栄町南遺跡	集落	中世
121	栄町東遺跡	散布地	弥生・中世
122	楠町東遺跡	散布地	弥生
123	汐の宮町南遺跡	散布地	弥生・奈良
124	汐の宮町遺跡	散布地	中世
125	神ガ丘近世墓	墳墓	近世
126	増福寺	社寺	中世以降
127	三昧城遺跡	墳墓・城跡	中世・近世
128	松林寺遺跡	社寺	近世以降
129	昭栄町遺跡	散布地	中世
*130	東高野街道	街道	平安以降
*131	西高野街道	街道	平安以降
*132	高野街道	街道	平安以降
133	上原東遺跡	散布地	弥生・中世・近世
134	地蔵寺東方遺跡	散布地・墳墓	弥生・鎌倉
135	本多町北遺跡	散布地	中世
136	下里町遺跡	散布地	古墳・中世
137	あかしあ台遺跡	散布地	近世
138	岩瀬北遺跡	集落	中世
139	岩瀬近世墓地	墳墓	近世
140	昭栄町東遺跡	散布地・池跡	縄文・中世・近世
141	三日市北遺跡	集落	縄文・弥生～中世
142	三日市宿跡	宿跡に伴う街並	中世～近世
143	上田町宿跡	宿跡に伴う街並	中世～近世
144	滝尻遺跡	散布地	縄文・古代・中世
145	市町北遺跡	散布地	中世

（　）は地図範囲外　＊は街道につき地図上にプロットせず

第1表　河内長野市遺跡地名表

第１章　はじめに

第１節　調査に至る経過

今回の日野観音寺遺跡の調査は日野地区大堂前ほ場整備事業と日野ふるさと施設整備事業に伴うものです。

調査は大きく第Ⅰ調査区と第Ⅱ調査区に分けられている。

第Ⅰ調査区は(仮称)日野地区大堂前ほ場整備事業に伴い実施した。原因者は河内長野市(担当：環境経済部農とみどりの整備課)であり、発掘調査は平成12年度から平成14年度にかけて４次にわたって実施した。

第１次調査は確認調査として、平成13年２月13日から同年３月23日にかけて実施した。調査は２ｍ×２ｍの調査坑を110ヶ所設定しておこなった。その結果、確認調査地域で広範囲にわたって遺構、遺物を確認した。この結果を踏まえて開発協議を進め、工事により保存上影響のある範囲について第２～４次に分けて調査を実施した。第２次調査は平成14年３月４日から同年３月31日にかけて実施した。調査面積は1800㎡である。第３次調査は平成14年５月20日から同年９月13日にかけて実施した。調査面積は約1000㎡である。第４次調査は平成14年６月24日から同年８月30日にかけて実施した。調査面積は約1000㎡である。全調査面積は約3,800㎡であった。

第Ⅱ調査区は(仮称)日野ふるさと施設整備事業に伴い実施した。原因者は河内長野市(担当：環境経済部クリーンセンター推進室)である。発掘調査は平成13年度から平成14年度にかけて２次にわたって実施した。第１次調査は確認調査として、平成14年１月28日から同年３月26日にかけて実施した。調査は３ｍ×３ｍ、2.5ｍ×2.5ｍ、２ｍ×18ｍ、２ｍ×14ｍの調査坑を51ヶ所設定し行った。その結果、確認調査地域で広範囲にわたって遺構、遺物を確認し、この結果を踏まえて開発協議を進めた。

第２次調査は工事により保存上影響のある範囲について、平成14年５月２日から同年７月31日にかけて実施した。調査面積は3006㎡である。

内業調査は平成15年度から平成16年度にかけて実施した。整理作業に伴う業務は平成15年４月23日から平成16年３月15日まで実施した。また報告書刊行に伴う業務は平成16年５月10日から平成17年３月18日まで行った。内業調査及び報告書刊行業務にかかる費用はほ場整備事業・ふるさと施設整備事業とも河内長野市(担当：環境経済部クリーンセンター推進室)が負担した。

調査は市教育委員会の指導のもとに、河内長野市遺跡調査会が実施した。

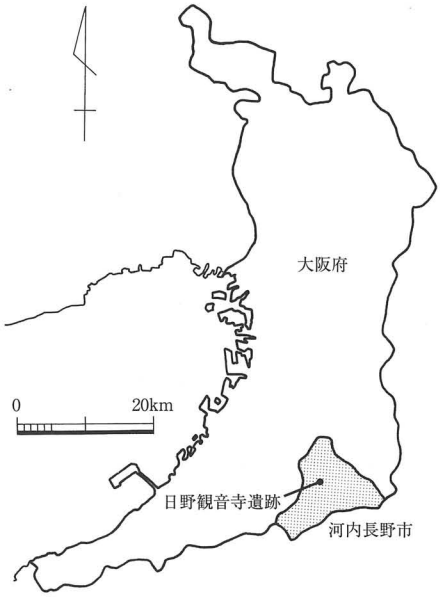
鳥羽

第２節　位置と環境

１．位置と自然環境

日野観音寺遺跡が所在する河内長野市は大阪府南東端に位置しており、南は和歌山県、東は奈良県と接している。市域の70％は山間部で、南部には和泉山脈が東西に走り、東部には金剛山地が南北に伸びている。また市内には加賀田地区や小山田地区など各所に、これらの山地から北に向かって派生する丘陵地形が見られる。

主な河川は、和泉山脈を水源とし、石見川・天見川・加賀田川・石川などが北流し、市内北部で石川に合流したあと、大和川にそそぎ大阪湾に至る。その他には市西部の小山田丘陵西側に、堺市方向に向かって北流する西除川（天野川）がある。



第２図　遺跡位置図（1/1000000）

当遺跡は、河内長野市西部に位置する日野地区に所在している。南方に位置する和泉山脈を水源とする石川が当地区で大きく蛇行し、左岸に河岸段丘による谷が形成されている。当遺跡は、その段丘上と小山田丘陵の東斜面との間の比較的緩やかな斜面地に立地している。

また、当市域は地質的に、中央構造線に沿って帯状にある領家帯の南縁付近に位置している。これらは、主に領家花崗岩から成っており、当市で最も起源の古いおよそ１億1000万年前から9000万年前にできた岩石である。分布範囲は、天野山－日野－加賀田－寺元を結ぶ線より南側から岩湧寺付近－金剛山地北側までと、当市北東部金胎寺山付近に分布する。

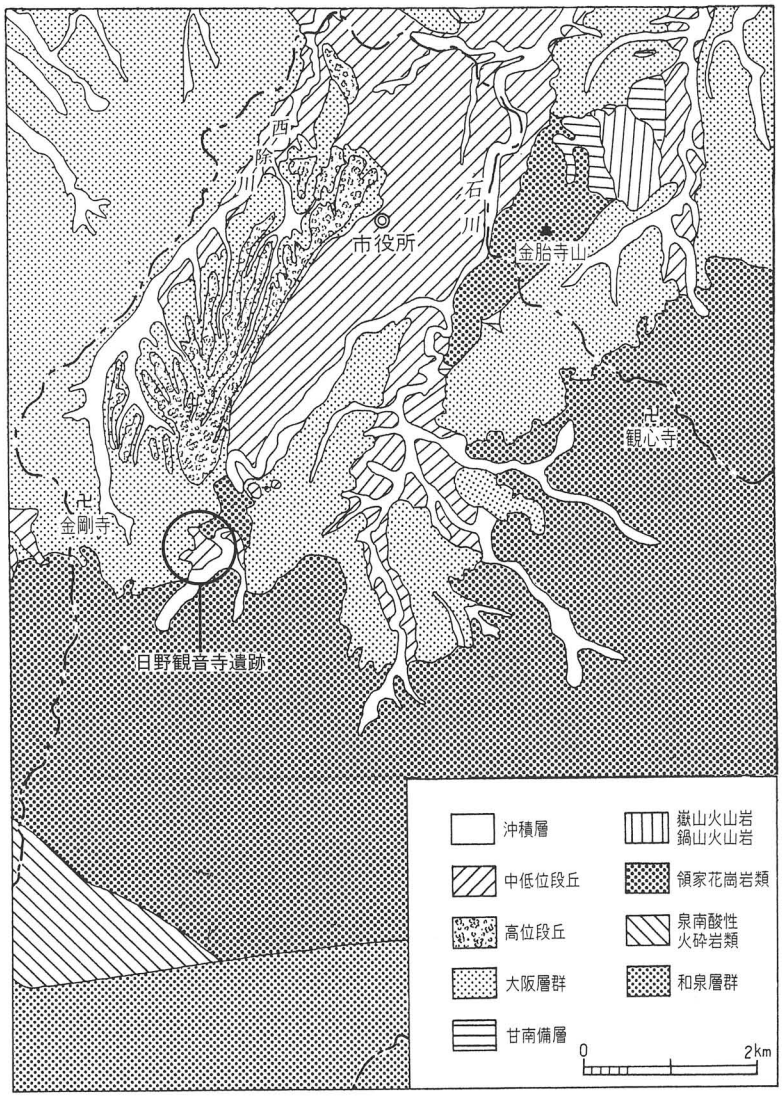
岩湧寺よりさらに南側は、和泉層群と呼ばれる約7000万年前に中央構造線に沿ってできた沈降地帯に堆積した層がある。つまり、和泉山脈は岩湧寺付近を境に、地質的に明瞭に区分できる。その境付近には東西方向の断層が走り、高度も岩湧山が約898mなのに対して、北側では300m前後と分けることができる。

このような和泉山脈の固い岩盤の地層に比べて、小山田や加賀田などの丘陵地は、大阪層群と呼ばれる十分固結していない砂や砂礫層によって形成されている。これらは羽曳野丘陵など大阪平野の他の丘陵と同じであり、約300万年前から30万年前に、当時海や湖であった底に堆積したものである。

そして今から約250～280万年前に和泉層群など、後に和泉山脈・金剛山地になる部分が、

南北方向からの圧縮によって隆起し始め、これらの山地を形成していったのである。

ちなみに当遺跡の範囲は、領家花崗岩と大阪層群の分布する範囲の境に位置している。そのことは、調査区によって遺構検出面の地層が大きく異なることからも確認される。



第３図　市域地質図

２．歴史的環境と既往の調査

河内長野の歴史

河内長野市域は、前述のように、ほとんどが山間地であるため、遺跡の多くは平坦地が広がる市内北部、現在の市街地を中心とした地域や、石川や天見川などの河岸段丘上に位置している。中世になると、宗教関係の遺跡や山城などの遺跡が山間部にも認められるようになる。

当市における旧石器時代の遺跡は、小山田丘陵上にある寺ヶ池遺跡、石川左岸の河岸段丘上に広がる上原遺跡、高向遺跡、天見川右岸に位置する三日市遺跡が知られている。寺ヶ池遺跡や高向遺跡では、有舌尖頭器が出土している。三日市遺跡では、181点に及ぶ石

器、石核、剥片が出土しており、ナイフ形石器、尖頭器、スクレイパー、楔形石器などの石器が確認されている。

しかし、これらの石器については、表採や包含層からの出土であり、また出土した石器の中に縄文や弥生時代のものが含まれていることから、明確に旧石器時代のものとするには疑問もある。また、遺構についても、現在まで未確認であることからすると、当市における旧石器時代についての詳細は不明としか言えない。

それに比べ、縄文時代になると、当市においても人々の営みを垣間見ることができる。向野遺跡、高向遺跡、三日市遺跡、三日市北遺跡、小塩遺跡、喜多町遺跡、宮山遺跡、滝尻遺跡、太井遺跡、高木遺跡など、現在19ヶ所の遺跡が知られている。三日市遺跡では、楕円押型文が見られる高山寺式の土器片が出土している。早期のものと考えられ、当市で最も古い。また、三日市遺跡からみて天見川の対岸に位置する、小塩遺跡でも楕円押型文が施文された早期の土器が出土している。

高向遺跡からは、縄文時代前期の北白川下層式のCやD字形の爪形文、羽状縄文の土器片が見られる。縄文時代中期～後期の遺跡では、前述の三日市遺跡や石川流域に位置する宮山遺跡があり、北白川C式、中津式土器が出土している。遺構としては、三日市遺跡では土坑が2基、宮山遺跡で竪穴住居跡が検出されている。同じ石川流域の向野遺跡では、北白川上層式、元住吉山式Ⅰ式など後期の土器が出土している。その他に当遺跡から南に2.4kmに位置する滝尻遺跡でも、後期から晩期にかけての土器片が出土しており、石川の最上流部における縄文遺跡として注目される。また、滝尻遺跡と同様に山間部の縄文遺跡としては、当市市街地から東に6kmの石見川上流部に位置する太井遺跡で、北白川C式、中津式、彦崎式など中期末から後期にかけての破片が出土している。

縄文時代晩期には、三日市遺跡で滋賀里Ⅲ式土器、船橋式土器が出土しており、天見川流域の喜多町遺跡、石川流域の上原遺跡でも後期から晩期とみられる縄文土器が出土している。この他にも、菱子尻遺跡、寺ケ池遺跡、高木遺跡では縄文時代の石器が表採・出土している。

このように当市においては多くの縄文遺跡があるが、その特徴は、中期末から後期にかけて遺跡が広がることである。早期や前期のものは、天見川流域の三日市・小塩遺跡周辺、石川流域の高向遺跡などで検出されるのみであるが、中期以降、これらの遺跡も含め市内各地で縄文時代の遺跡が確認されるようになる。これは大阪府下の縄文遺跡増減の傾向とも合致しており[註1]、当市を含めて人々の生活に大きな変化があったと考えられる。

市内には、三日市遺跡、錦町北遺跡、栄町遺跡、汐の宮町南遺跡、市町東遺跡、市町西遺跡、塩谷遺跡など現在17ヶ所の弥生時代の遺跡が確認されている。古くは高地性集落として著名な大師山遺跡、近年では、30棟近くの竪穴住居群が検出されている三日市北遺跡などがある。しかし、多くの遺跡が顕著な遺構は確認されておらず、散布地として認識されている。

これらの弥生遺跡の特徴は、前期の遺跡が全く見られず、一部大師山遺跡などで後期の遺跡も見られるが、多くは中期の遺跡であることだ。さらにこれらも、長期間にわたって存続した形跡が認められず、短期間で廃絶する中小規模の集落であると考えられる。つまり、縄文時代晩期に市内各地で認められた人々の痕跡が、弥生時代前期には消え、中期になって再び各地で認められるが、後期になると大師山遺跡など局所的になる。前期や後期の遺跡・遺物については今後発見される可能性もあるが、大きく遺跡の消長を変えるものではないだろう。

古墳時代になると、前期に全長50mの前方後円墳である大師山古墳が出現する。弥生時代の集落跡である大師山遺跡の西端に位置している。埋葬施設は粘土槨であったと推定され、内行花文鏡、管玉や鍬形石、車輪石などの石製品、刀子や鉄剣などの鉄製品、埴輪などが出土している。当地域の地域首長墓と考えられるが、市内では、これに続く首長墓の系譜は見いだせない。また、その頃の集落遺跡としては三日市遺跡があり、竪穴住居6棟が検出されている。

古墳時代中期には、三日市遺跡で小型の方墳が4基見つかっている。集落も同じく三日市遺跡において、竪穴住居8棟と掘立柱建物2棟が検出されている。

古墳時代後期には、全国的に横穴式石室を埋葬施設とする古墳が作られ、群集墳を形成する。市内では三日市遺跡で横穴式石室の古墳が4基検出されており、それに位置づけられる。その他に三日市遺跡から北方約1.5kmに位置する大日寺遺跡では、7世紀初頭に作られた横穴式石室が1基検出されている。烏帽子形古墳、五ノ木古墳など、現在の当市市街地周辺にも、これらの後期古墳が認められるが、どれも単独で立地しており、散漫な分布状況である。また後期の集落は、三日市遺跡に加え、小塩遺跡、加塩遺跡、尾崎北遺跡、西浦遺跡など天見川と加賀田川の合流部に当たる中位・高位段丘上に広がるようで、竪穴住居、掘立柱建物が多数検出されている。その中でも小塩遺跡からは、滑石製の子持勾玉が出土しており注目される。その他にも、三日市遺跡から北方1.4kmに位置する喜多町遺跡でも後期の竪穴住居が検出されている。

さらに、これら以外にも、高向遺跡や滝尻遺跡などで古墳時代中期や後期の遺物が確認されており、市内各地で古墳時代に人々が生活していたと思われる。しかし、古墳や集落など遺構として認められるのは、三日市遺跡から市街地にかけての天見川流域であり、この地域を中心にして古墳時代は展開するようである。

古代には、小塩遺跡、尾崎遺跡、三日市遺跡、喜多町遺跡など、古墳時代後期に出現した集落が古代においても断続的に営まれている。三日市遺跡では、方形塼が出土しており、終末期古墳か寺院があった可能性が考えられる。尾崎遺跡では、桁行21m、梁行9.6mを測る平安時代の大型掘立柱建物が検出されている。他の建物が不明だが、荘園領主に関わる建物と考えられる。その他、喜多町遺跡では奈良時代の井戸や土坑、掘立柱建物を検出し、多くの遺物と共に製塩土器が出土している。石川流域では、高向遺跡、野間里遺跡で

この頃の遺構が検出され、向野遺跡では平安時代の屋敷地といえる遺構が確認されている。

また、このような集落遺跡の他に、小山田丘陵では火葬墓が検出され、三日市遺跡の古墳の中からは、奈良時代の蔵骨器が見つかっている。当市域は錦部郡と呼ばれ、当市北西部に位置する高向地区を本拠とする高向氏や、富田林南部を本拠とする錦部氏などの渡来系氏族と関係が深い地域である[註2]。そのため、先進的な火葬墓の風習が取り入れられた可能性が考えられている。

その他に、小山田丘陵の長池窯跡群、石川流域河岸段丘上の三日市遺跡、上原遺跡、日野観音寺遺跡、石見川流域の寺元遺跡では炭焼窯が検出されており、中世以降に当地域の特産品となる炭の生産へとつながるものと考えられる。

中世には、市内の遺跡が急増する。これは、観心寺と金剛寺の発展に伴うものと考えられる。観心寺は、市域東部に位置し、大宝年間(701～704)に役小角によって創建された雲心寺が、平安時代に空海の弟子実恵らによって再興された寺院である。中世以降は在地武士層とのつながりを強め、南北朝時代には南朝側の拠点になった。金剛寺は、市域西部にあり、奈良時代の行基の創建と伝えられ、平安末に阿観によって再興された真言宗の寺院である。南北朝時代には観心寺と共に南朝の拠点になり、南朝の天皇の行幸も多かった。またこの頃、高野参詣のための高野街道が天見川沿いに整備され、金剛寺に向う天野街道など、街道沿いに集落の分布が見られるのも特徴である。

社寺関連の遺跡は、観心寺遺跡、天野山金剛寺遺跡、岩瀬旧薬師寺跡、大日寺遺跡、惣持寺跡、長野神社遺跡、加賀田神社遺跡などがあげられる。観心寺遺跡では、平安時代～鎌倉時代にかけての遺物が出土している。また、隣接する寺元遺跡では同じ頃の建物跡や石組み遺構が検出されており、観心寺七郷をなす寺元村落の一部と考えられている。天野山金剛寺遺跡では、鎌倉～室町時代の建物跡、墳墓群、井戸、土釜埋納遺構等が検出されている。岩瀬旧薬師寺跡は、南北朝時代に観心寺の岩瀬の関が置かれた場所で、土坑や石組遺構などと共に鎌倉～室町時代の遺物が多く見つかった。その多くは瓦であり、また仏具も見られることから、文献には見られない寺院跡と考えられている。大日寺遺跡では、礎石建物と考えられる遺構や石積基壇が検出され、瓦が多く出土していることから寺院跡と考えられ、屋敷墓なども確認されている。長野神社遺跡は、遺構については不明だが、中世から近世にかけての遺物が出土している。遺物の中に本殿造営以前の瓦や瓦器皿が含まれることから、神社以前の神宮寺の存在が推測されている。加賀田神社遺跡は、顕著な遺構は確認されなかったが、鎌倉～室町時代の瓦が大量に出土した。烏帽子形八幡神社からは、本殿の修理時に床下より土師質・瓦質の皿が入れられた土釜が出土し、本殿の墨書から文明12年(1480)に建立された際の地鎮に使用されたものと考えられ、中世の土器の実年代を考える上での貴重な資料になっている。

集落遺跡では、三日市遺跡、高向遺跡、尾崎遺跡、上原北遺跡、市町西遺跡、岩瀬北遺跡などがある。三日市遺跡では建物が多数検出され、11～15世紀頃までの集落の変遷を読

み取ることができる。また、高向遺跡、尾崎遺跡でも建物跡や墳墓が見つかっており、集落の一部と考えられている。市町西遺跡では、南北朝～室町時代初めにかけての建物が4棟、土釜埋納遺構などが検出されている。岩瀬北遺跡では、建物3棟、溝、土釜埋納遺構などを検出し、14～15世紀頃の屋敷地と考えられている。また、上原北遺跡では、炭焼窯群と鎌倉末～南北朝時代の建物跡が近接した場所から検出されている。

また生産遺跡としては、向野遺跡や野作遺跡でフイゴの羽口、鉄棒、鋳型の破片が検出されている。鍛冶関連の工房跡と考えられ、当市北方の美原町周辺で同時期に発展した河内鋳物師の南限とも推測されている。また、前述の上原北遺跡に加え、長池窯跡群、宮山遺跡でも、炭焼窯が検出されている。

城館は、市内に多数あるが、その中でも文献にもよく登場する烏帽子形城跡が著名である。現在でも本丸跡や、曲輪跡、土塁などの遺構が残っているが、発掘調査により、主郭に相当する地点から礎石建物が検出されており、室町時代の遺物が出土している。ジョウノマエ遺跡からは、同じ頃の建物、井戸等が検出されており、地名から城館に関連するものと推測されている。その他にも多くの城館が知られているが、近年行われた分布調査により、中世の城館として痕跡を残すものは3例だけであった[註3]。その他については不明であるが、今後の発掘調査などにより認識される可能性がある。

近世の当市は、近江膳所藩、西代藩、伊勢神戸藩、幕府領、狭山藩、和泉陶器藩、旗本の知行地、また金剛寺・観心寺領など、時期により村々により領主が異なる。現在の市街地にあたる本多町には膳所藩の河州出張所が、西代町には膳所藩から別れた西代藩の陣屋が一時期ではあるが設置されていた。それらの地点では発掘調査も行われ、前者からは遺構は不明だったが、17～19世紀頃の陶磁器が出土した。後者からは、石組みの溝など陣屋に関する遺構と共に陶磁器、漆器、下駄などの木製品、藩主であった本多家の家紋のある瓦など多くの遺物が出土し、当時の生活の一端を垣間見ることができる。

その他、三日市遺跡では、近世初頭の墓地や寺院跡、瓦窯などが検出されており、墓の副葬品に天目茶碗や美濃・唐津などの陶磁器が見られる。近世に発展した高野街道の宿場であった三日市宿跡からは、近世の建物や桶枠を設置した土坑、暗渠に加え、多くの陶磁器が出土している。また、地蔵寺遺跡では、本堂の北側部分が調査され、近世の礎石建物が確認されている。

日野の歴史

日野は、古くは「比野」とも書き、平安時代、元慶7年(883)の観心寺勘録縁起資財帳にその名が見られる。また、広島市西区三滝寺に安置されている阿弥陀如来坐像には、「観音寺・・・敬白　日本国河内国錦部郡日野村・・・」という墨書が胎内背面に残されており、仁平4年(1154)の年号が書かれている。ちなみにこの如来像は、現在の日野観音寺から南に200mの所にあった塚堂廃寺にあったものが、終戦後に売却されたようである。

その他に金剛寺文書には治承4年(1180)、文治4年(1188)、建久元年(1190)の寄進状などに「南限日野境」など日野の名が見られる。

南北朝時代になると、日野周辺は、金剛寺を中心にした戦乱の舞台になっている。詳細は、堀内氏によってまとめられている[註4]。以下、合戦、文書に見られる日野について概略する。

①延元2年・建武4年(1337)…東条合戦

楠木正成(南軍)と細川顕氏(北軍)との合戦

北軍が南軍を追って金剛寺に攻め込んだ。その際、金剛寺「大手三城戸口」を打ち破り、「数ヶ所坊舎」を焼き払ったと、日根野盛治軍忠状『日根文書』にある。

②正平4年・貞和5年(1349)…仁王山合戦

楠木一党と高師直・師泰一党との合戦

四条畷合戦に勝利した高師直・師泰一党の楠木残党を一掃するための合戦。南北両軍が天野仁王山と日野、高向で戦っている。北軍が日野、高向の両面から攻撃し、南軍の要塞であった仁王山に攻め登った。貞和5年の淡輪助重軍忠状に、「四月廿二日日野高岡(高向か?)合戦」とある。

③正平9年・文和3年(1354)

北朝の光厳院・光明院・崇光院の3上皇が南朝方によって金剛寺に移され、同年に南朝の後村上天皇も金剛寺に移り行在所となった。その際に金剛寺の諸坊は公家の宿坊となり、さらに「・・・日野、高向、上原・・・マテ、官軍下部宿住」と金剛寺所蔵の日経琉第三愚草本の禅恵奥書にある。

④正平15年・延文5年(1360)…天野合戦

後村上天皇が観心寺へ移った後、河内国守護の畠山国清が金剛寺に攻撃。「大門并諸仏堂并坊舎三十五宇、令焼失畢」「大門往生講堂、予持仏堂并坊、及于牢被焼失」と禅恵奥書にある。さらに「・・・、寺僧等成不住、高瀬、滝尻所々隠居、・・・」とあることから、金剛寺の寺僧が高瀬や滝尻(金剛寺より南方、滝畑方面)に「隠居」したようである。従って、その途中に位置する日野地区もこれらの争乱に巻き込まれたと考えられる。

⑤文中2年・応安6年(1373)…天野合戦

後村上天皇が崩じ、楠木正儀が北朝に下った後に起こった、細川春氏が率いる北軍と四条隆俊を大将とする南軍との戦い。四条隆俊は討死し、南朝天皇は、吉野に避難した。この戦いによって河泉地域での内乱が事実上、終息した。

以上が、南北朝期の合戦の概略であるが、「日野村」としての初見は、観音寺所蔵の大般若経奥書に見られる。巻8に「為日野村書之　丙寅(至徳3年・1386)三十清書了沙門比

丘健才謹書」とある。大般若経は、至徳３年に観音寺に寄寓した健才という僧が、６００巻の写経奉納を発願したものであり、奥書に詳しい記載はないが、当時の郷土資料として貴重なものである。その他、巻３７０には、応永２年(1395)の奥書があり、「河内国錦部郡長野庄日野村」とあり、以下同様の記載が頻出する。

江戸時代になると、日野村は、当初幕府領となる。そして寛永11年(1634)近江膳所藩石川忠総の所領、慶安４年(1651)から同藩の本多俊次の所領、延宝７年(1679)からは膳所藩本多氏より分封された河内西代藩領本多伊予守忠恒の所領になり、享保17年(1732)に本多氏の転封により、伊勢神戸藩領になる。そして明治を迎える。

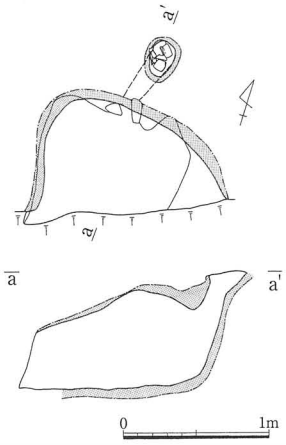
その頃の日野村の様子を描いたものに「日野村絵図」がある。絵図に年代の明記はないが、「天和三年癸亥上原村起畑」とあることから、少なくとも天和３年(1683)以降に描かれたものである[註5]。この絵図の中には、観音寺が見られ、それと並んで牛頭天王宮が描かれている(第98図)。牛頭天王宮は、明治41年(1908)に高向神社に合祀され、現在日野地区には所在していない。絵図の様子を見ると、少なくとも江戸時代には、お寺と神社が並んだ景観であり、大きな伽藍ではないことが分かる。また神社は観音寺の東隣に位置していることから、今回の第Ⅰ調査区は、この神社の範囲に一部重なると推測される。

その他、現在高向神社に祀られている牛頭天王坐像は、鎌倉時代の作と推測され、日野に所在した牛頭天王宮の主神であった可能性が考えられている[註6]。この推測が妥当であるならば、日野の牛頭天王宮は、鎌倉時代まで遡るものと考えられる。

既往の調査について

日野観音寺遺跡では、昭和62年に今次調査の第Ⅱ調査区南側にあたる地点で、農道の改修工事に伴い小規模な調査が行われている[註7]。道路法面の調査で多くが削られ、遺構の残りは良くないが、炭焼窯が２基確認された。

その中でも、窯１は焚口側半分が削られたが、煙道部を含め上部もよく残っていた。高さは0.7m程ある。窯体奥壁の煙道部両側には、0.4×0.2mの河原石が置かれ、排出口には甕片が見られた。出土した遺物から、これらの窯は平安時代中頃のものと認識されている。



福田　　第４図　窯 平面図

註１『(財)大阪府文化財調査研究センター調査報告書第55集　向出遺跡』　2000年８月　財団法人大阪府文化財調査研究センター

註２『河内長野市史　第1巻(下)古代・中世』　河内長野市

註３『河内長野市文化財調査報告書第34輯 河内長野市城館分布調査報告書』　2001年３月　河内長野市教育委員会

註４『天野合戦と金剛寺々辺の中世城郭』　堀内和明

『河内長野市文化財調査報告書第34輯 河内長野市城館分布調査報告書』　2001年３月　河内長野市教育委員会

註５『河内長野市文化財調査報告書第７輯　河内長野の古絵図』　河内長野市教育委員会

註６『平成12年度特別展図録　千年紀　先人からの贈り物－市指定文化財展－』　河内長野市教育委員会

註７『河内長野市文化財調査報告書第14輯　河内長野市埋蔵文化財調査報告書Ⅱ』1988年3月　河内長野市教育委員会

第３節　調査の方法

１．調査地の地区割、調査区名について

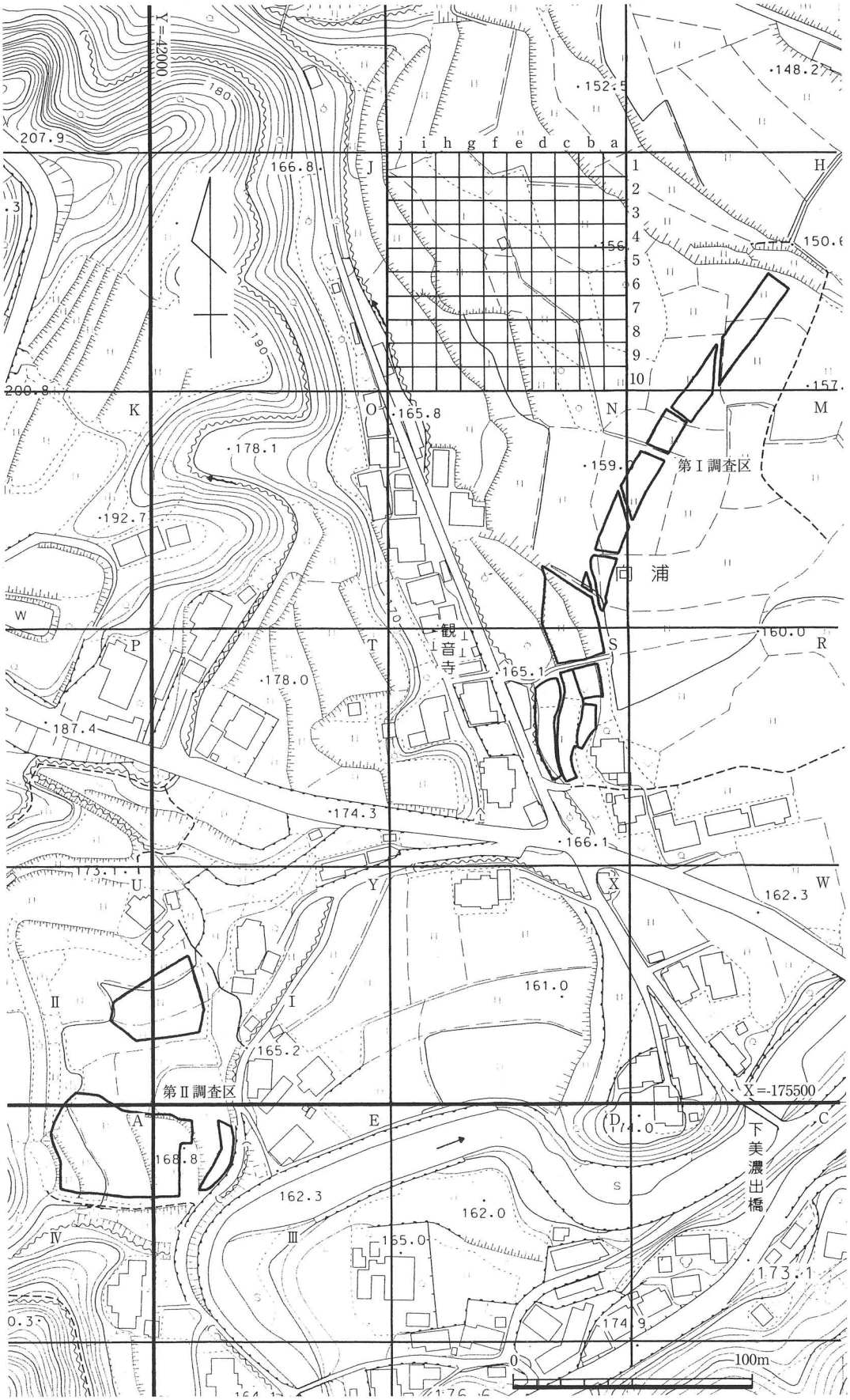
当該事業は、数次にわたる調査のため各調査区が入り組んでいる。調査時は、それぞれの事業ごとに調査を行い、測量・遺物の取り上げを行った。また、地区割については、国土座標を基準にした地区割を使用し、遺跡全体での位置関係が把握できるようにした。この地区割は、大中小の３段階を設定した。Ｘ＝－175.000km、Ｙ＝－41.500kmを始点として500m方眼のブロックをⅠ～Ⅳに分け、大ブロックとした。その大ブロックを100m方眼で、25等分しＡ～Ｙの中ブロックとした。そして、中ブロックを10m方眼で100等分し、小ブロックとした。小ブロックの表示は、南北方向の列を東からａ～ｊ列とし、東西方向の行を北から１～10行とした。つまり、ある調査区の10m方眼のブロックを示す場合、「Ⅰ－Ｓ－ｄ４」となる。遺物の取り上げ等は、基本的にこの地区割を用いた。

また、調査区名についてであるが、調査時の名称のまま記述すると煩雑になるため、整理段階において、新たに調査区名を設定した。つまり、調査時の調査区名と報告書内でのそれとが異なることになる。その対応関係については、第２表を参考にして頂きたい。

調査の成果については、当遺跡北側に位置する「第Ⅰ－１～３調査区」（ほ場整備事業）と南側の「第Ⅱ－１～３調査区」（ふるさと施設整備事業）の２つに章を分けて記述する。

	事業名	地区名	報告書内地名
ほ場整備事業	HKT02－2	1区	第Ⅰ－1調査区
	HKT01－3	7区	〃
	〃	1～3区	〃
	HKT01－3	4、5区	第Ⅰ－2調査区
	HKT01－2	3～5区	第Ⅰ－3調査区
	HKT01－3	6区	〃
	HKT02－2	2区	〃
ふるさと施設事業	HKT02－1	1区	第Ⅱ－1調査区
	〃	2区	第Ⅱ－2調査区
	〃	3区	第Ⅱ－3調査区

福田　　第２表　調査区名対照表



第５図　調査区配置図及び区割設定図（1/2500）

第２章　調査の成果・第Ｉ調査区

第１節　基本層序と遺構面の認識

第Ｉ－１～３調査区は、すぐ西側に小山田丘陵の裾部に位置している日野観音寺があり、東側約300ｍには、当調査区で大きく西に曲がり蛇行している石川が流れている。当調査区は東西30ｍ、南北230ｍと狭長であり、また斜面地に位置しているため、調査区ごとに堆積環境が異なる。大きくは、北部に位置する第Ｉ－１調査区の比較的緩やかな部分と、中・南部に位置する第Ｉ－２・３調査区の斜面地に分けられる。したがって、層序・遺構面の認識もそれによって異なるため、それぞれ分けて記述する。

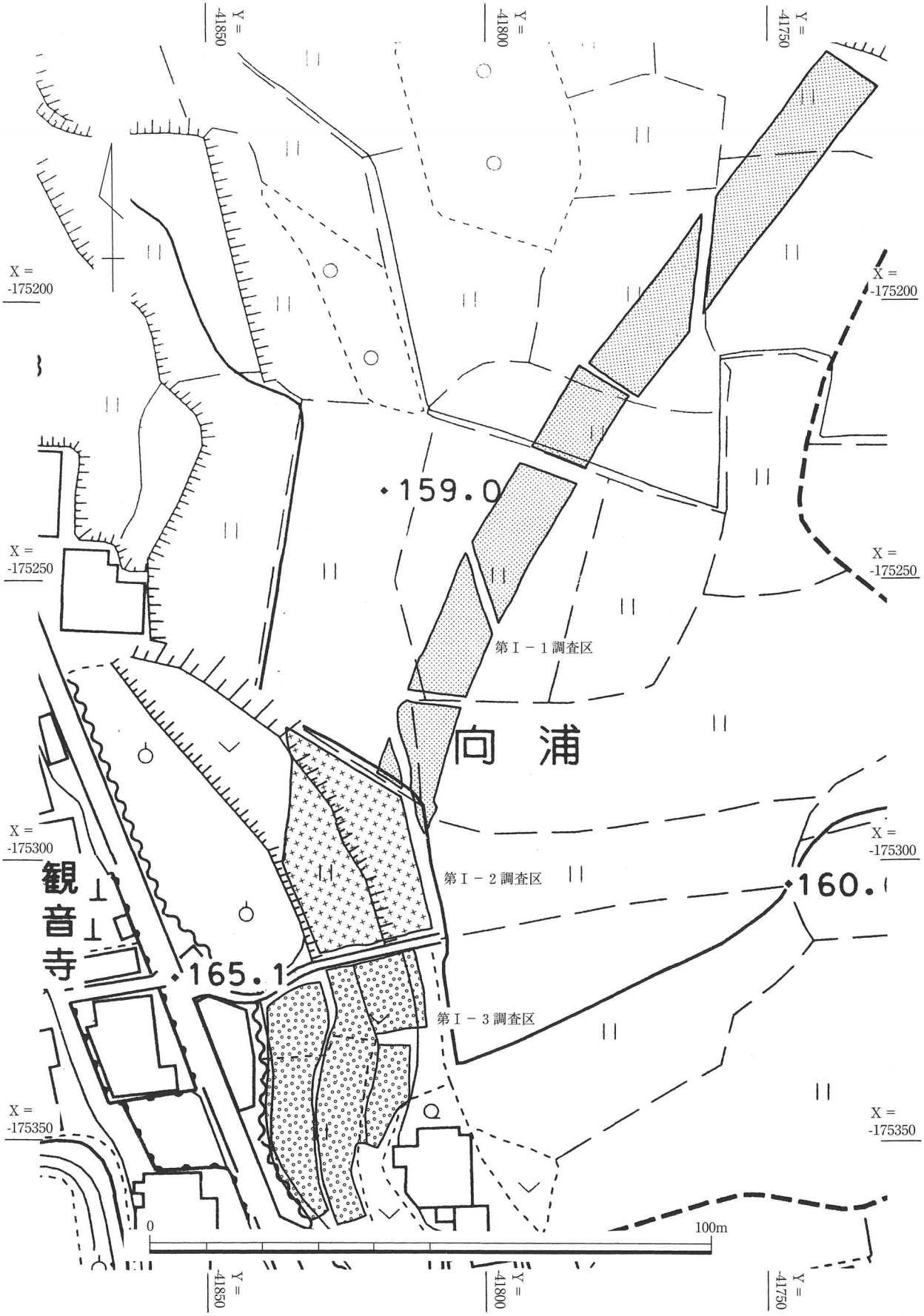
１．第Ｉ－１調査区（第７・11図）

第Ｉ－１調査区は、調査区の北側に位置し、東西に狭く、南北に長いトレンチである。トレンチ最南部では、現地盤の高さがT.P158.66ｍ、北部で157.1ｍ、一段下がった最北部で156.1ｍを測るが、北に位置する石川に向って緩やかに傾斜しているため、比較的安定した堆積状況を示す。最北部と最南部では、層序は若干異なるものの、その変化は緩やかである。ここでは、そのなかでも比較的層序関係が明瞭であったトレンチ中央部について記述し、他の部分との差異を後述する。

トレンチ中央部では、表土から約0.2ｍは現代の耕土が堆積している。下層には、それに伴う床土層が見られる部分もあるが、明瞭でない所もある。そして、その下層に⑬層の灰オリーブ色をベースにした旧耕土層が堆積する。この層は部分的に現代の耕土層により削平されている。さらに下層にはオリーブ黒色シルト層が堆積しており、⑯・⑰層の２層に分けられる。このシルト層からは瓦器片等が出土しているため、⑯層の上面で遺構検出を行い、第１面と認識した。そして、⑰層の下層が地山面となり、第２面とした。

最北部での層序は、中央部に比べると若干状況が異なる。層自体の酸化も強いが、大きな違いは地山層の変化で、北側に行くにつれて粒度が粗くなっていく。最北部では、２～３cm大の礫層によって構成されている。この付近は、石川まで約100ｍに位置しており、トレンチ北側に石川方向に下がる大きな段差がある。粗い粒度の地山層を含めて考えると、最北部で見られる礫層は、石川の旧河道の堆積層と考えられる。つまり、これらの礫層が堆積した時は、石川が現在の位置よりも南側にあり、それが次第に北側に移動した結果、現在のようになったものと考えられる。また、トレンチ中央部より続くオリーブ黒色シルト層も北側ほど粒度が粗くなり、明瞭でなくなる。また酸化の度合いも強くなっている。

次にトレンチ南部の状況であるが、大きな違いは、上下２層認識できたオリーブ黒色シ



第6図　第Ⅰ－1～3調査区配置図（1/1000）

ルト層の下層部分が見られず、上層のみ堆積していることである(⑤層)。上層を除去すると地山層が見られ、遺構を検出した。この変化の要因は、地形自体の標高が南に向って徐々に上がっていくこともあるが、石敷き遺構(ＳＷ１)の存在が大きいと思われる。詳細については後述するが、石敷き遺構は護岸施設として設置されたようで、この遺構を境に堆積環境が異なる。つまり、石敷き以北はオリーブ黒色シルト層が２層見られ、それ以南が上層のみである。そして、遺構も石敷き以南から検出される。

また、トレンチ中央部は、現在でも地下水位が高く、西側丘陵から流れ込む水の通り道になっている。そのため、調査時は夏であったが、遺構面が乾燥することは無かった。そのような状況が、オリーブ黒色シルト層堆積時にもあったと考えられる。トレンチ北側になると地下水位が次第に低くなり、前述したように酸化度合いが高くなっている。それに伴って、遺構も若干検出されるようになる。つまり、トレンチ中央部は、黒色シルト層堆積時は湿地のような状況であったと考えられ、その南北で人々が活動していたと考えられる。

２．第Ｉ－２・３調査区(第７・22図)

第Ｉ－２・３調査区は、第Ｉ－１調査区の南西側に位置し、すぐ西側に観音寺が位置している。調査区の形状は、現在の耕作地により歪になっており、全体としては逆Ｓ字状に蛇行していて、舌状に飛び出した高台になっている。さらに各耕作地は棚田になっており、周辺の地形に沿って、基本的に東西に狭く南北に長い形状になっている。そして東側に向って下がっていく。また、第Ｉ－１調査区の南端につながる第Ｉ－２調査区の東端には、大きな段差があり、石垣が残っている。この段差自体は、調査区西側にあったと推測される牛頭天王宮または明治時代にあった小学校の整地に伴うものと考えられるが、もともと第Ｉ－２・３調査区からの東側に向かっての傾斜があったと考えられる。

その様子は、堆積状況からも読み取ることができる。第Ｉ－２調査区の層序を見ると、表土から0.15～0.2mは現代の耕土層がある。それらの下層に、第Ｉ－２調査区西側の上段部分(第Ｉ－２調査区上段)では、⑪・⑫・⑯層などが堆積しており、これらの上面を第１面とした。当初はこれらの層を地山層と考えていたが、土壌化層のブロック土を若干含むことから、整地の際の盛土層と認識した。しかし、遺物が全く出土しなかったため、時期は不明である。次に第Ｉ－２調査区東側の下段(第Ｉ－２調査区下段)では、表土の下層に黄褐色の旧耕土層(③・⑨層)がある。さらに下層にオリーブ褐色極細砂層(⑤層)があり、遺物や焼土を含むため、この上面で遺構検出し、第１面とした。つまり、上段と下段では、第１面とした層がつながっている訳ではない。しかし、耕土層を除去した面として認識した。

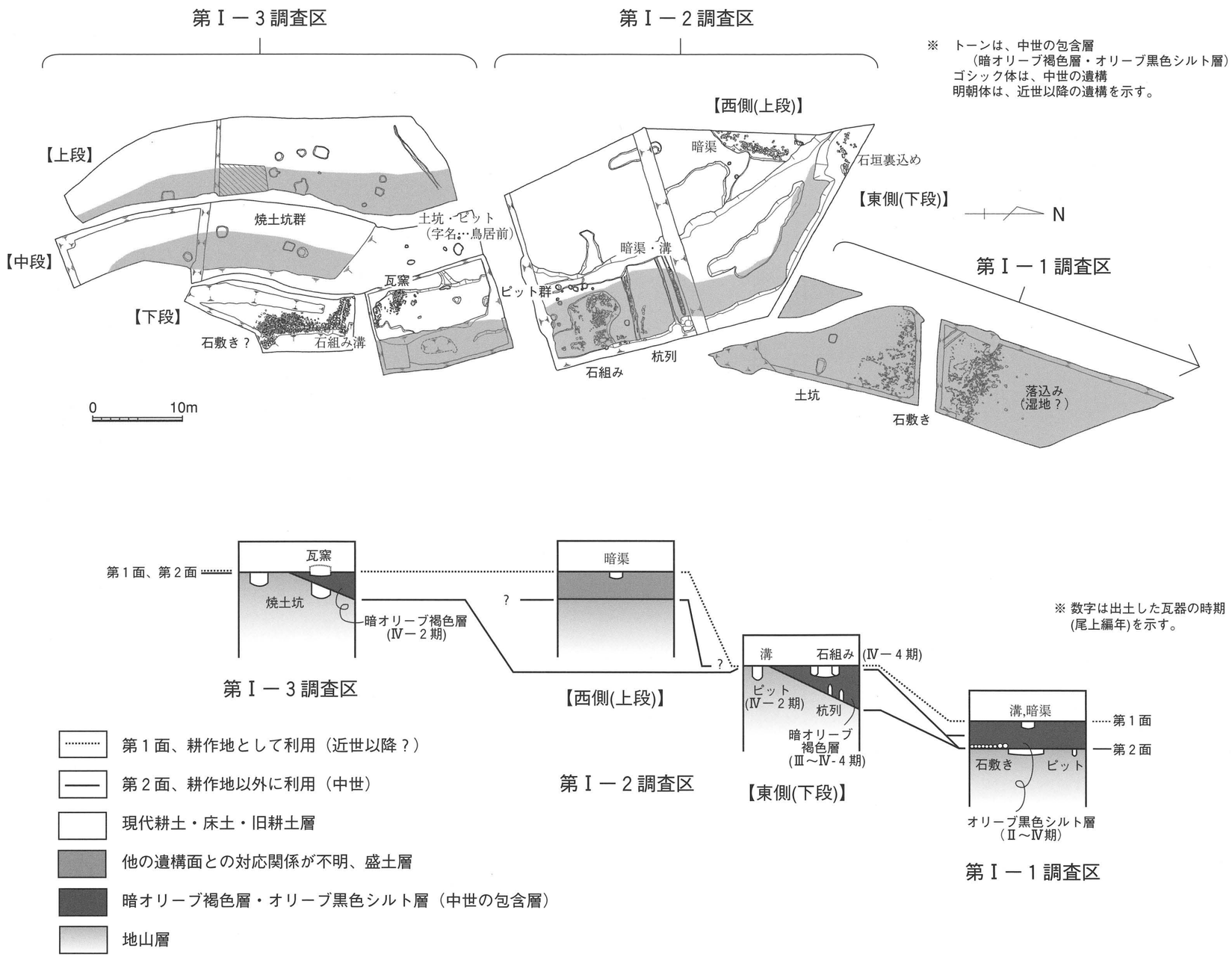
次に上段の⑭～⑯・⑲層の下層を地山層として扱い第２面とした。下段の⑤層の下層には炭・遺物・焼土混じりの層が何層か見られたが、それらをすべて除去した面を同じく地山面として認識し、第２面とした。この炭混じり層は、下段の東側に多く堆積し、それを

除去した第２面は、現状での棚田としての段々下がる地形ではなく、トレンチ西側からだらだらと傾斜する地形であった。

そのような状況は、第Ⅰ－３調査区の各段差(西側より上段・中段・下段)でも見受けられ、表土である現代耕土・床土層を除去した後の、各段差の東側には、必ず暗オリーブ褐色層(⑤～⑦層)が堆積していた(第７図参照)。そこで、この暗オリーブ褐色層上面を第１面とし、それを除去し、地山層を検出した面を第２面とした。

３．第Ⅰ－１調査区と第Ⅰ－２・３調査区との遺構面の認識について

前項まで述べてきたように、第Ⅰ－１調査区と第Ⅰ－２・３調査区とは大きく堆積環境が異なる。第Ⅰ－１調査区では、オリーブ黒色シルト層の上面を第１面、それを除去した地山層検出面を第２面とした。また第Ⅰ－２・３調査区では、段差ごとに見られる暗オリーブ褐色層上面を第１面、除去した地山面を第２面としている。さらに第Ⅰ－２調査区上段部分の第１面は、盛土層の上面と認識したため、他の第１面と対応するかは不明である。このように、それぞれの調査区の遺構面同士が、必ずしも対応するとは限らない。それは、第Ⅰ－１調査区と第Ⅰ－２調査区と位置上、土層の連続性を証明できないからである。したがって、遺構面の対応関係については、個々の遺構や遺物の関係から検討する必要があり、詳細については後述する。



第7図　第Ⅰ調査区遺構面対応関係図

第２節　第Ⅰ－１調査区の成果

１．第１面（第10図）

第１面は、旧耕土層を除去した、オリーブ黒色シルト層上面である。部分的に未調査の部分もあるが、当面での遺構の数は少なく、検出した遺構は、溝や暗渠など耕作に関係するものが多い。

（１）溝

［ＳＤ１］（第８図）

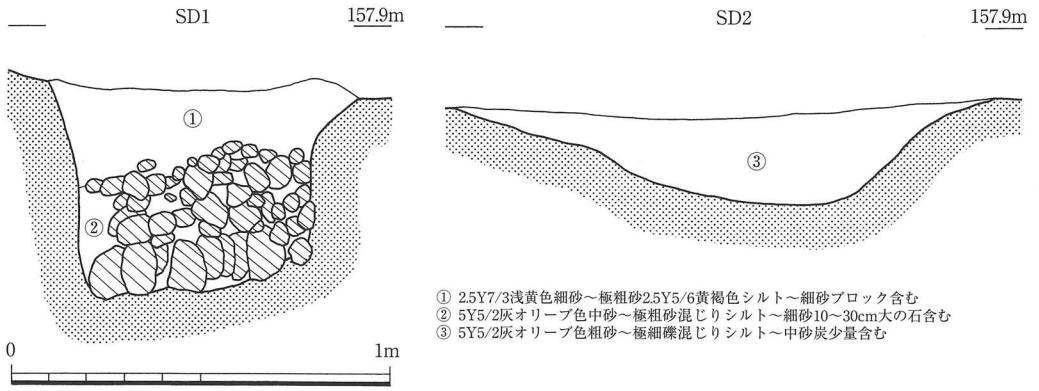
調査区中央部やや南側で検出した。検出長15m、幅1.2m、深さ0.5mを測り、溝の両端は調査区外に伸びる。主軸はＮ－17°－Ｗである。溝埋土の下部には拳大の石が充填してあることから、暗渠として利用されていたと考えられる。また、溝は旧耕土を切って掘削され、さらに溝のすぐ南側には、現在の用水路が主軸を同じにして流れている。これらのことから、当遺構は現在の水田の地割が形成された以降、または形成時に、掘削されたものと考えられる。

遺物は出土しなかった。

［ＳＤ２］（第８図、図版２）

調査区中央部、東側で検出した。南北方向に伸びる溝で、主軸はＮ－10°－Ｅである。検出長５ｍ、幅1.1m、深さ0.15mを測る。埋土は、灰オリーブ色の旧耕土層を主体にしている。溝の南側は調査区外に伸び、北側は第１面が未調査のため平面では確認できていない。おそらく北北東の方向に続くと考えられる。溝の主軸は、現在残る水田の地割と異なり、また埋土が旧耕土層であることから、現在の地割になる以前に掘削された耕作に関する溝と考えられる。

遺物は土師質土器や瓦器が出土したが、細片のため実測できなかった。おそらく下層の遺物が混ざったものと思われる。



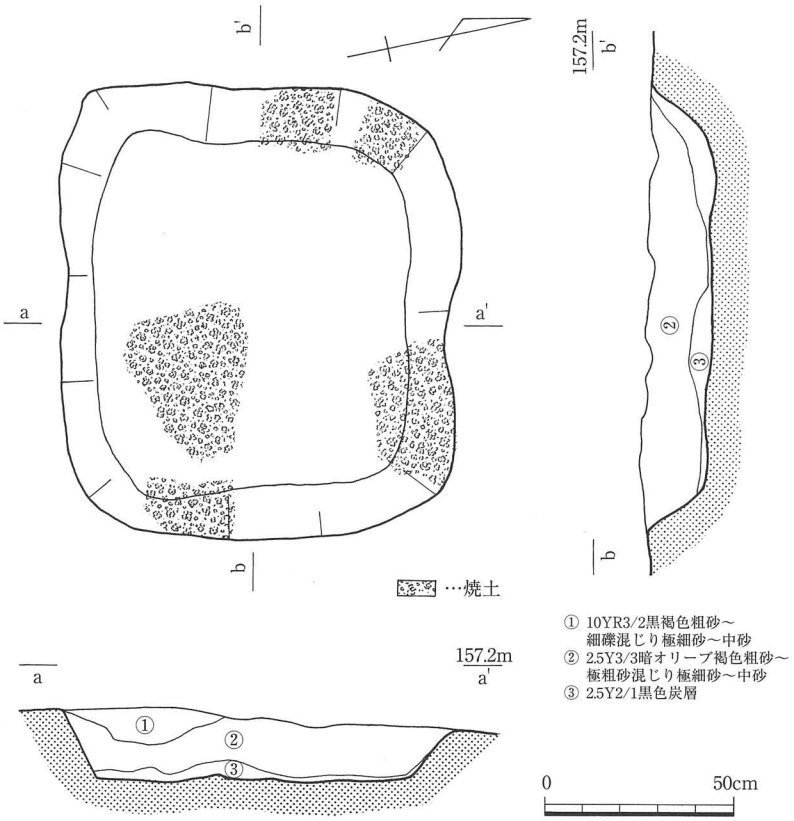
第８図　ＳＤ１・２遺構断面実測図（1/20）

（2）土坑

［ＳＫ１］(第９図)

調査区北部で検出した。平面形はほぼ方形で東西に若干長く、長軸1.3m、短軸1.2m、深さ0.2mを測る。北西部側面に焼土層が見られ、北東部も若干焼けている。埋土には炭が含まれる。

遺物は出土しなかった。

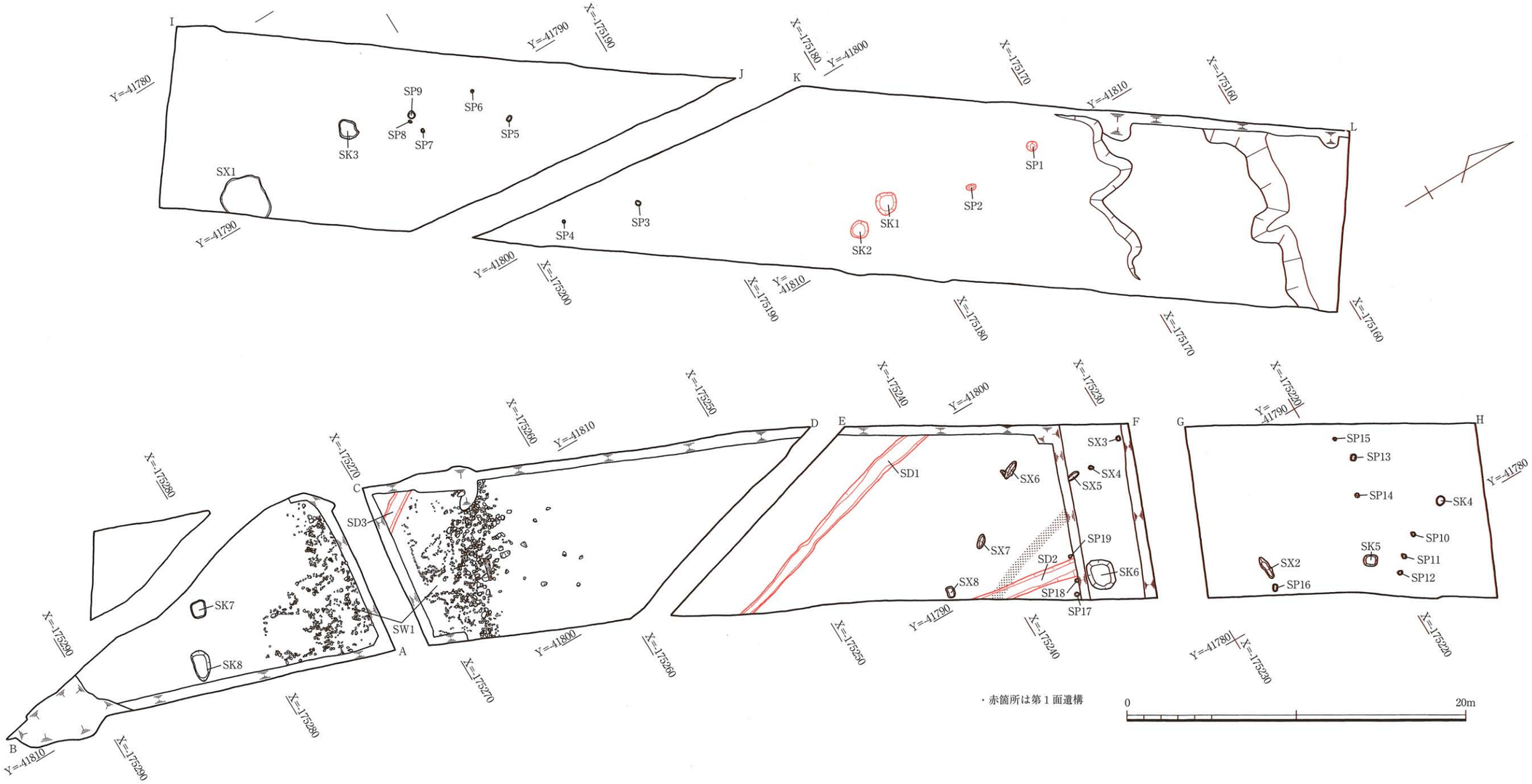


第９図　ＳＫ１遺構実測図（1/20）

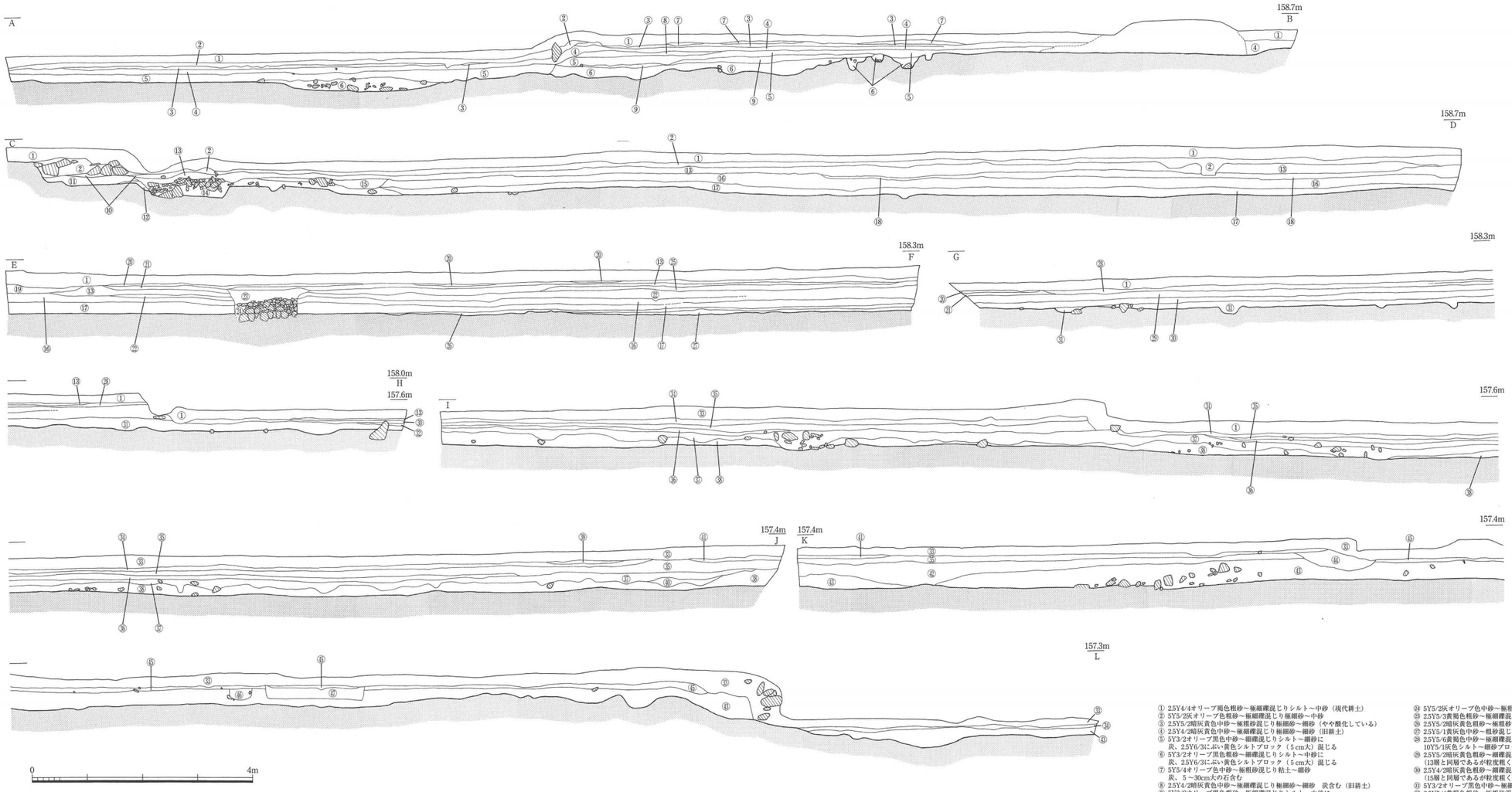
２．第２面(第10図)

第２面は、第1面を検出したオリーブ黒色シルト層を除去し、地山層を検出した面である。前述したように当調査区では、中央部付近に湿地帯、最北部に川の存在が推測される。そのため検出した遺構は、その狭間の部分にまとまって見られる。

北側の遺構がまとまっている部分は、ピットや土坑を検出した。ピットの多くは暗灰黄色の極細砂が主体の埋土である。それに比べＳＫ４・５などの土坑は、黒褐色のシルトが主体の埋土である。土坑からは瓦器片が出土しており、細片であるが尾上編年のⅢ～Ⅳ期にかけてのものである。したがって、これらの遺構は、13～14世紀頃の遺構と考えられる。ピットからは遺物が出土しなかったため、詳細は不明だが、埋土の違いから時期の異なるものと考えられる。また、湿地の北端で、遺構群の南端の部分には、円弧状に酸化している帯が見られた。この酸化帯は他の部分より若干盛り上がっており、さらに遺構群と湿地



第10図　第Ⅰ－１調査区遺構配置図（1/250）



① 2.5Y4/4オリーブ褐色粗砂～極細礫混じりシルト～中砂（現代耕土）
② 5Y5/2灰オリーブ色粗砂～極細礫混じり極細砂～中砂
③ 2.5Y5/2暗灰黄色中砂～極粗砂混じり極細砂～細砂（やや酸化している）
④ 2.5Y4/2暗灰黄色中砂～極細礫混じり極細砂～細砂（旧耕土）
⑤ 5Y3/2オリーブ黒色中砂～細礫混じりシルト～細砂に
炭、2.5Y6/3にぶい黄色シルトブロック（5cm大）混じる
⑥ 5Y3/2オリーブ黒色粗砂～細礫混じりシルト～中砂に
炭、2.5Y6/3にぶい黄色シルトブロック（5cm大）混じる
⑦ 5Y5/4オリーブ色中砂～極粗砂混じり粘土～細砂
炭、5～30cm大の石含む
⑧ 2.5Y4/2暗灰黄色中砂～極細礫混じり極細砂～細砂　炭含む（旧耕土）
⑨ 5Y3/2オリーブ黒色粗砂～極細礫混じりシルト～中砂に
炭、2.5Y6/3にぶい黄色シルトブロック多く含む
⑩ 7.5Y6/3オリーブ黄色中砂～極細礫（用水路の埋土）
⑪ 7.5Y3/2オリーブ黒色粗砂～極粗砂混じりシルト～中砂（旧耕土）
⑫ 5Y4/1灰色中砂～中礫混じりシルト～細砂
⑬ 5Y5/2灰オリーブ色粗砂～細礫混じりシルト～中砂　炭やや含む（旧耕土）
⑭ 10Y5/2オリーブ灰色中砂～細礫混じりシルト～細砂
5～20cm大の石多く含む（暗渠埋土）
⑮ 7.5Y7/2灰白色粗砂～細礫に7.5Y4/2灰オリーブ色シルト～細砂ブロック混じる
⑯ 5Y3/1オリーブ黒色細砂～極粗砂混じりシルト～極細砂　炭含む
⑰ 5Y2/2オリーブ黒色細砂～極細礫混じりシルト～極細砂　炭・有機物含む
⑱ 7.5Y5/2灰オリーブ色粗砂～極細礫混じりシルト～中砂
⑲ 7.5Y4/1灰色中砂～極粗砂混じりシルト～細砂
⑳ 10Y5/1灰色中砂～細礫混じりシルト～細砂
（現代耕土に攪拌されずに残った旧耕土）
㉑ 2.5Y5/6黄褐色中砂～極細礫混じりシルト～細砂
（現代耕土床土・2層に比べ酸化が強い）
㉒ 2.5Y5/2暗灰黄色中砂～極粗砂混じりシルト～細砂　炭やや含む
㉓ 2.5Y7/3浅黄色細砂～極粗砂に2.5Y5/6黄褐色シルト～細砂ブロック含む
㉔ 5Y5/2灰オリーブ色中砂～極粗砂混じりシルト～細砂10～30cm大の石含む
㉕ 2.5Y5/3黄褐色粗砂～極細礫混じり極細砂～中砂（旧耕土）
㉖ 2.5Y5/2暗灰黄色粗砂～極粗砂混じり極細砂～中砂（全体には広がらない）
㉗ 2.5Y5/1黄灰色中砂～粗砂混じりシルト～細砂（全体には広がらない）
㉘ 2.5Y5/6黄褐色中砂～極細礫混じりシルト～細砂に
10Y5/1灰色シルト～細砂ブロック含む
㉙ 2.5Y5/2暗灰黄色粗砂～細礫混じり極細砂～中砂　炭やや含む
（12層と同層であるが乾度粗くなる）
㉚ 2.5Y4/2暗灰黄色粗砂～細礫混じり極細砂～中砂　炭やや含む
（15層と同層であるが乾度粗くなる）
㉛ 5Y3/2オリーブ黒色中砂～極細礫混じりシルト～細砂3～5cm大の石多く含む
㉜ 2.5Y5/4黄褐色粗砂～極粗砂混じりシルト～中砂
㉝ 2.5Y5/2暗灰黄色粗砂～極細礫混じり極細砂～中砂（現代耕土）
㉞ 2.5Y5/3黄褐色極細礫混じり極細砂～細砂（現代耕土床土）
㉟ 2.5Y3/2黒褐色中砂～細礫混じり極細砂～細砂　土器片含む
㊱ 2.5Y3/3暗オリーブ褐色中砂～細礫混じり極細砂～細砂に
2.5Y6/8明黄褐色シルト～極細砂ブロックやや含む
㊲ 2.5Y5/2暗灰黄色中砂～細礫混じりシルト～細砂2～3cm礫含む
㊳ 2.5Y6/3にぶい黄色中砂～細礫混じりシルト～細砂2～3cm礫含む
㊴ 2.5Y6/2灰黄色粗砂～極細礫混じり極細砂～中砂（現代耕土）
㊵ 2.5Y4/4オリーブ褐色粗砂～極粗砂混じり極細砂～中砂5～10cm大礫含む
㊶ 10YR5/3にぶい黄褐色中砂～極粗砂混じり極細砂～細砂（土器に酸化斑あり）
㊷ 10YR3/3暗褐色粗砂～細礫混じり極細砂～中砂
㊸ 2.5Y4/3オリーブ褐色極細砂～中砂　細礫～20cm大礫含む
㊹ 2.5Y3/2黒褐色粗砂～細礫混じり極細砂～中砂　炭多く含む
㊺ 2.5Y6/6明黄褐色中砂～粗砂混じりシルト～細砂
（㊹を埋めた後水田の床土として貼ったもの）
㊻ 10YR4/4褐色粗砂～極粗砂混じり極細砂～中砂（酸化が激しい）
㊼ 10YR3/4暗褐色粗砂～細礫混じり極細砂～中砂ブロック含む

第11図　第Ⅰ－1調査区土層断面実測図（1/60）

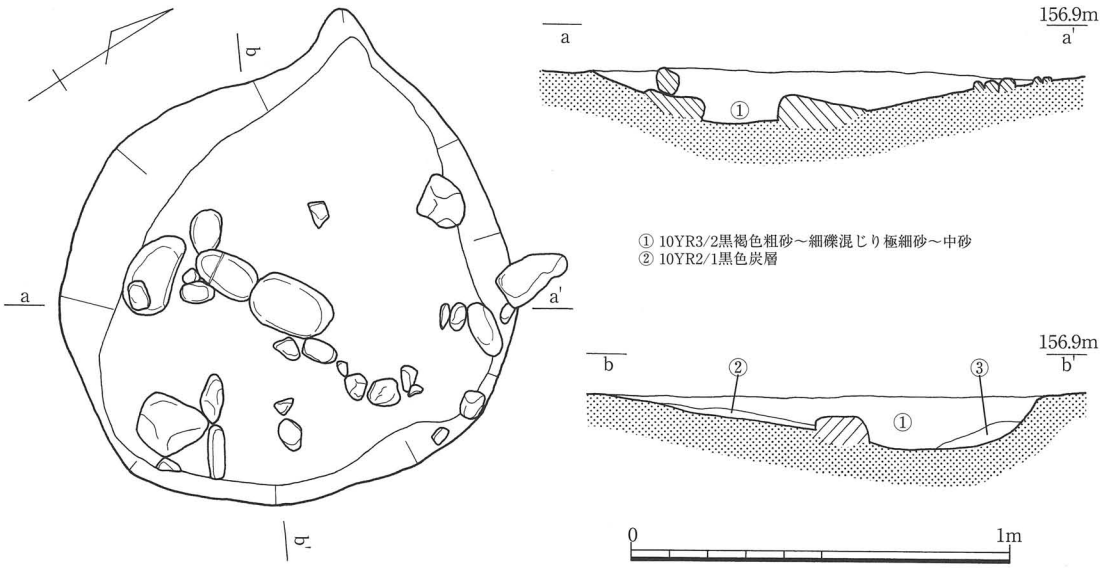
の間に位置している事から、酸化帯はこれらを区分するのもの、堤や畦などの痕跡であると考えられる。

（1）土坑

［ＳＫ３］（第12図、図版７）

調査区北部で検出した。平面形は隅丸方形で、北東部に若干突出部を持つ。長軸1.28m、短軸1.15m、深さ0.14mを測る。突出部付近と土坑底部付近に若干の焼土が見られ、埋土には炭が含まれる。

遺物は出土しなかった。



第12図　ＳＫ３遺構実測図（1/20）

［ＳＫ４］（第13図）

調査区北部で検出した。平面形は楕円形で、長軸0.58m、短軸0.5m、深さ0.18mを測る。埋土は黒褐色のシルトが主体である。

遺物は土師質土釜片や瓦器片が出土したが、細片のため実測できなかった。

［ＳＫ５］

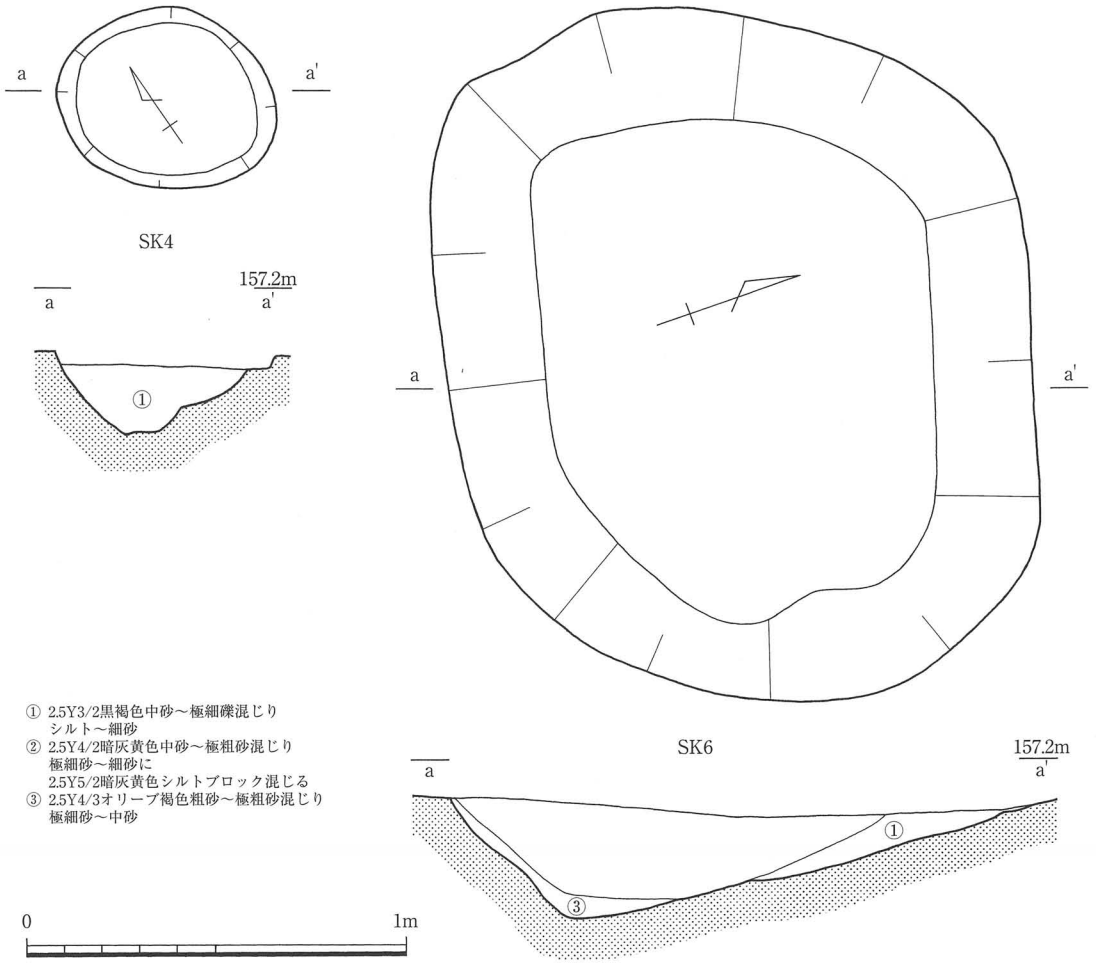
調査区北部で検出した。平面形は隅丸方形で、長軸0.79m、短軸0.7m、深さ0.32mを測る。埋土は黒褐色のシルトが主体である。

遺物は土師質土器片や瓦器片、サヌカイト片が出土したが、細片のため実測できなかった。

［ＳＫ６］（第13図）

調査区中央部で検出した。平面形は隅丸方形で、長軸1.78m、短軸1.52m、深さ0.3mを測る。

遺物は出土しなかった。



第13図　ＳＫ４・６遺構実測図（1/20）

［ＳＫ７］（第14図、図版７）

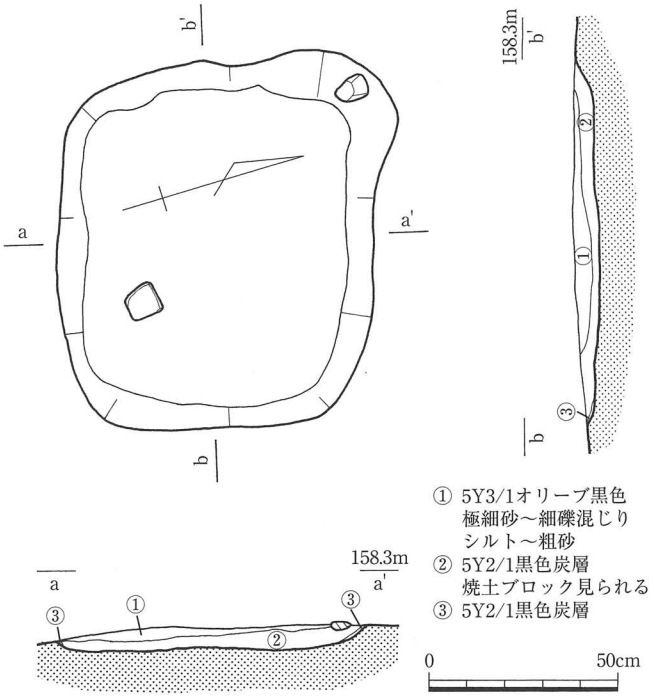
調査区南部で検出した。平面形は隅丸方形で、長軸1.0m、短軸0.9m、深さ0.07mを測る。埋土は、下層に炭層が多く堆積している。

遺物は、炭より上層の埋土内から瓦器片が出土したが、細片のため実測できなかった。

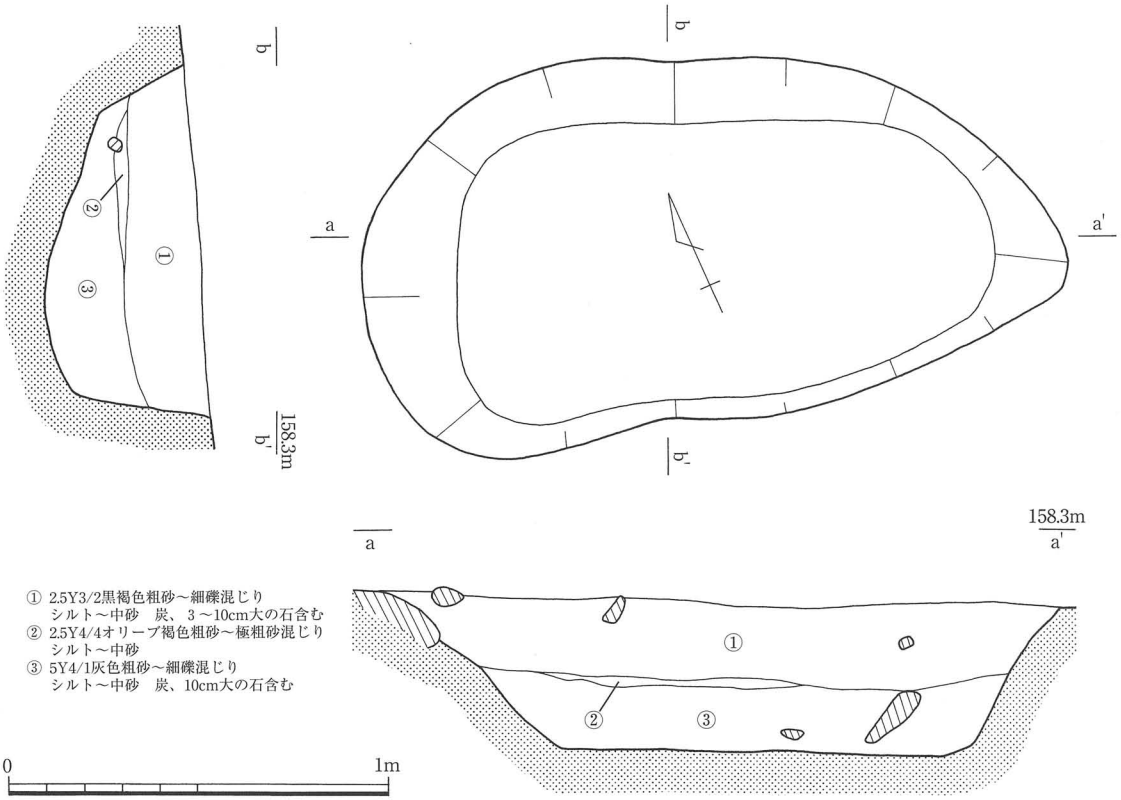
［ＳＫ８］（第15図）

調査区南部で検出した。平面形は楕円形で、長軸1.87m、短軸0.96m、深さ0.42mを測る。埋土は黒褐色や灰色のシルト～中砂が主体である。

遺物は出土しなかった。



第14図　ＳＫ７遺構実測図（1/20）



第15図　ＳＫ８遺構実測図（1/20）

（２）ピット

［ＳＰ10］（第16図）

調査区北部で検出した。平面形は楕円形で、長軸0.32m、短軸0.26m、深さ0.1mを測る。埋土は、暗灰黄色の極細砂が主体である。

遺物は出土しなかった。

［ＳＰ11］（第16図）

調査区北部で検出した。平面形は楕円形で、長軸0.34m、短軸0.27m、深さ0.14mを測る。埋土は、暗灰黄色の極細砂が主体である。

遺物は出土しなかった。

［ＳＰ17］（第17図）

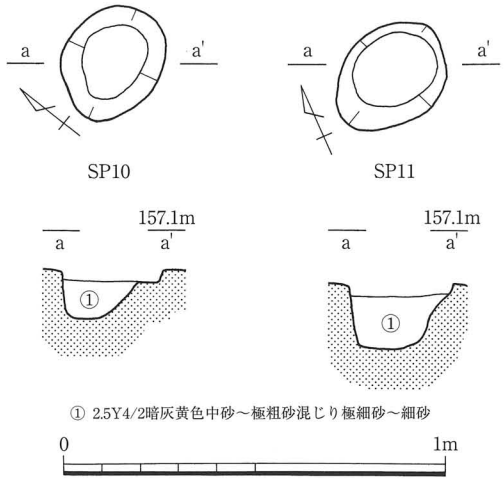
調査区中央部で検出した。平面形は円形で、径0.14m、深さ0.09mを測る。埋土は、暗灰黄色のシルトが主体である。

遺物は出土しなかった。

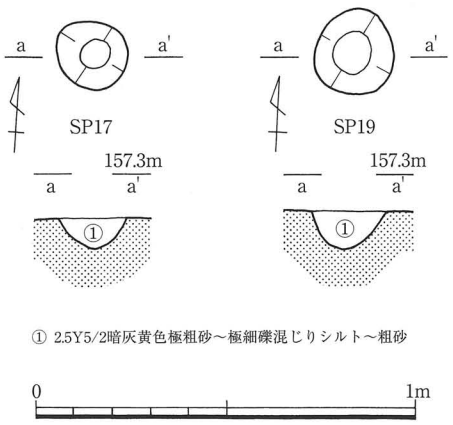
［ＳＰ19］（第17図）

調査区中央部で検出した。平面形は円形で、径0.21m、深さ0.1mを測る。埋土は、暗灰黄色のシルトが主体である。

遺物は出土しなかった。



第16図　ＳＰ10・11遺構実測図（1/20）



第17図　ＳＰ17・19遺構実測図（1/20）

（３）石敷

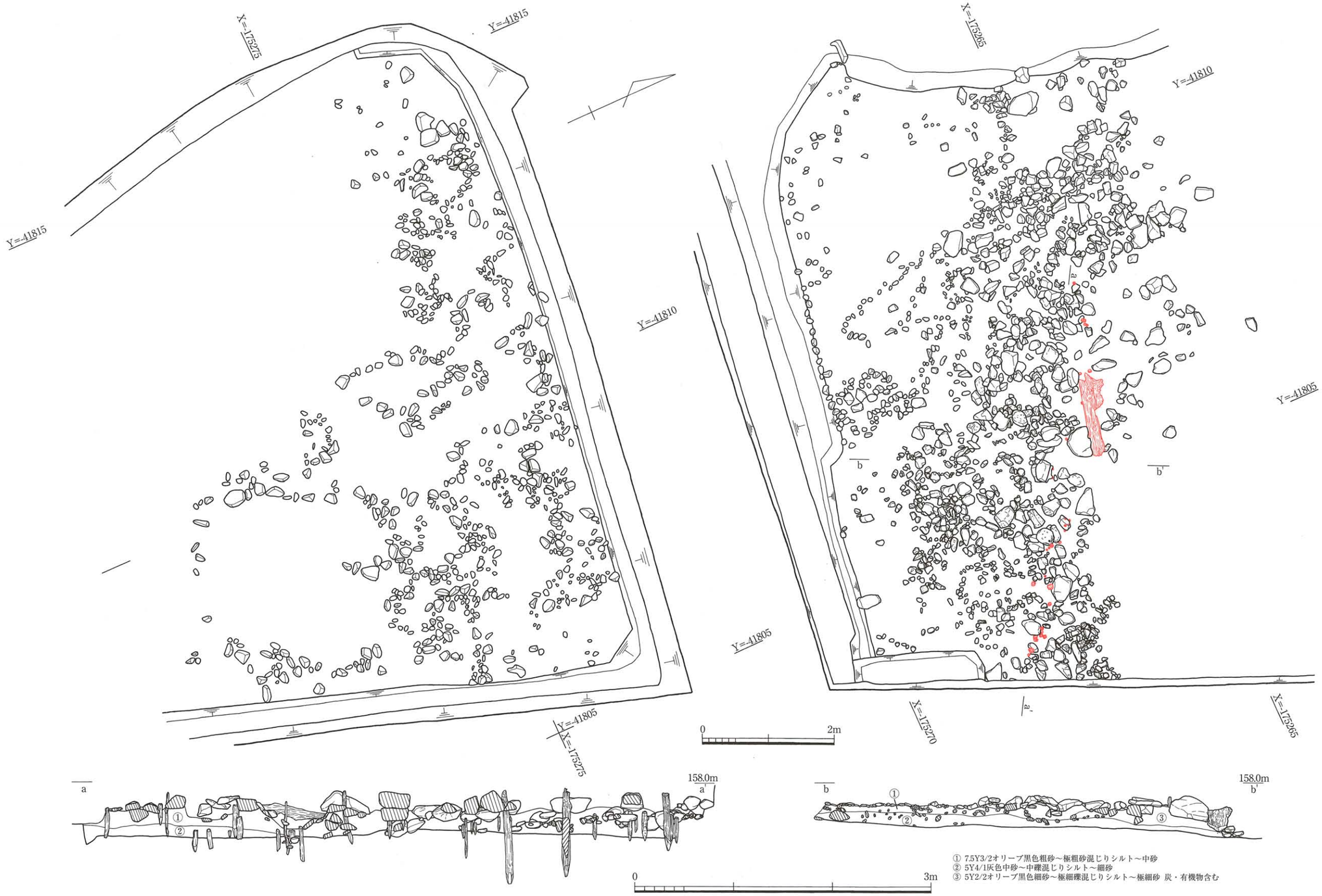
［ＳＷ１］（第18・19図、図版４～６・41）

調査区南部で検出した。人頭大から２～３cm大の礫を敷き詰めている石敷きの遺構である。南北12～13mの範囲で検出され、東西は10mを測り、調査区外に広がる。使用している石は、北側部分には拳～人頭大の石を、南側には２～３cmの礫を用いている。現在の水路を挟んだ南側部分にも拳大の石が検出されているが、北側のように敷き詰められておらず、後世の耕作などで大きく乱されているようである。

また、石敷きの北側部分には、杭が東西方向に打設されている。トレンチ東端から東西６m、南北0.5mの範囲で杭が打たれており、杭は短いもので0.1m程、長いもので１m程あり、太さも径３～10cm程のものを用いている。杭はおおよそ0.5～0.6m間隔で打たれ、その間にも杭が打たれている。全体としては不規則に打たれている印象がある。杭の深度は、一部検出面よりも0.5m程と深いものもあるが、多くは検出面よりも0.2m程であり比較的浅い。石敷きの北側部分には人頭大の石が多く、おそらくこれらの杭は、石を設置する前に打たれた、土留め用のものと考えられる。

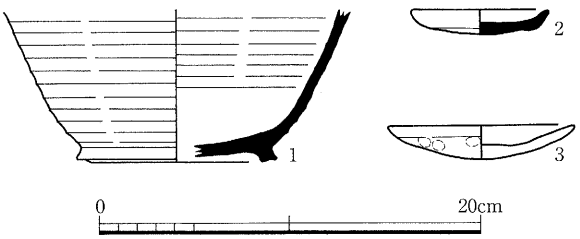
前述したように、当遺構の北側には、南北約30mの幅で、西側の丘陵部から流れ込む谷水によって形成された湿地帯があったと考えられる。また、当遺構の南側には、ＳＫ７・８などの遺構が検出されている。つまり、この石敷き遺構は、湿地帯と遺構群の間に位置していることになり、護岸施設として機能していたと考えられる。また、日野観音寺や東隣に位置していた牛頭天王宮の北東隅に位置していることから、寺域を示す施設の可能性もある。

当遺構からは、瓦器埦片など若干の土器が出土した。瓦器埦片は、細片のため実測できないものが多かったが、須恵器壺（１）や土師質皿（２）、瓦質皿（３）などが図示できた。これらは、石敷きを覆うオリーブ黒色シルト層中で検出されていることから、遺構が埋没した時期を示すと考えられ、瓦器埦片は尾上編年でⅡ～Ⅳ期に当たることから、石敷き遺



第18図　ＳＷ１遺構実測図（1/40・1/60）

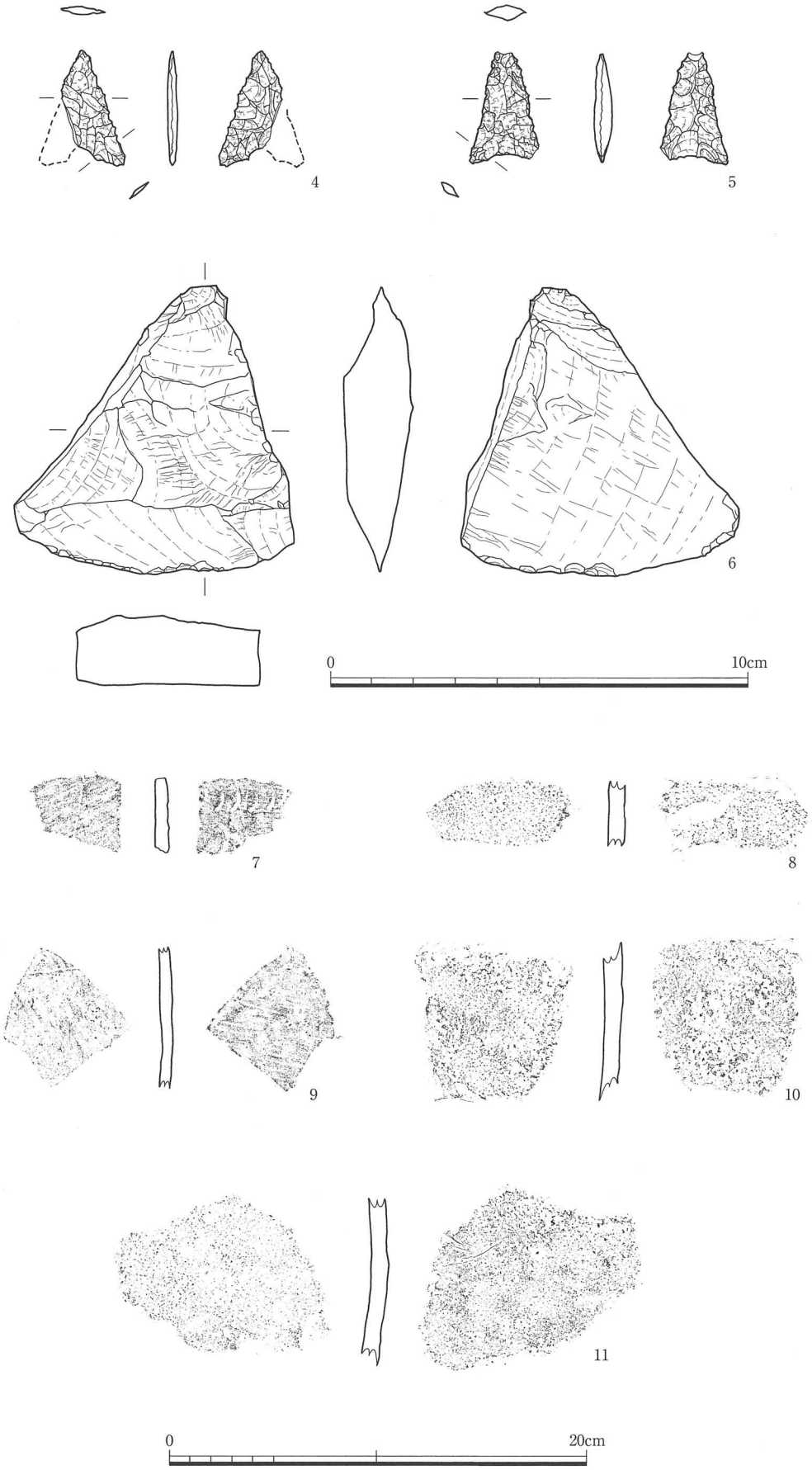
構は14世紀頃には埋まっていると考えられる。また、遺構が設置された時期は、遺物片が確認される12世紀頃と推測される。



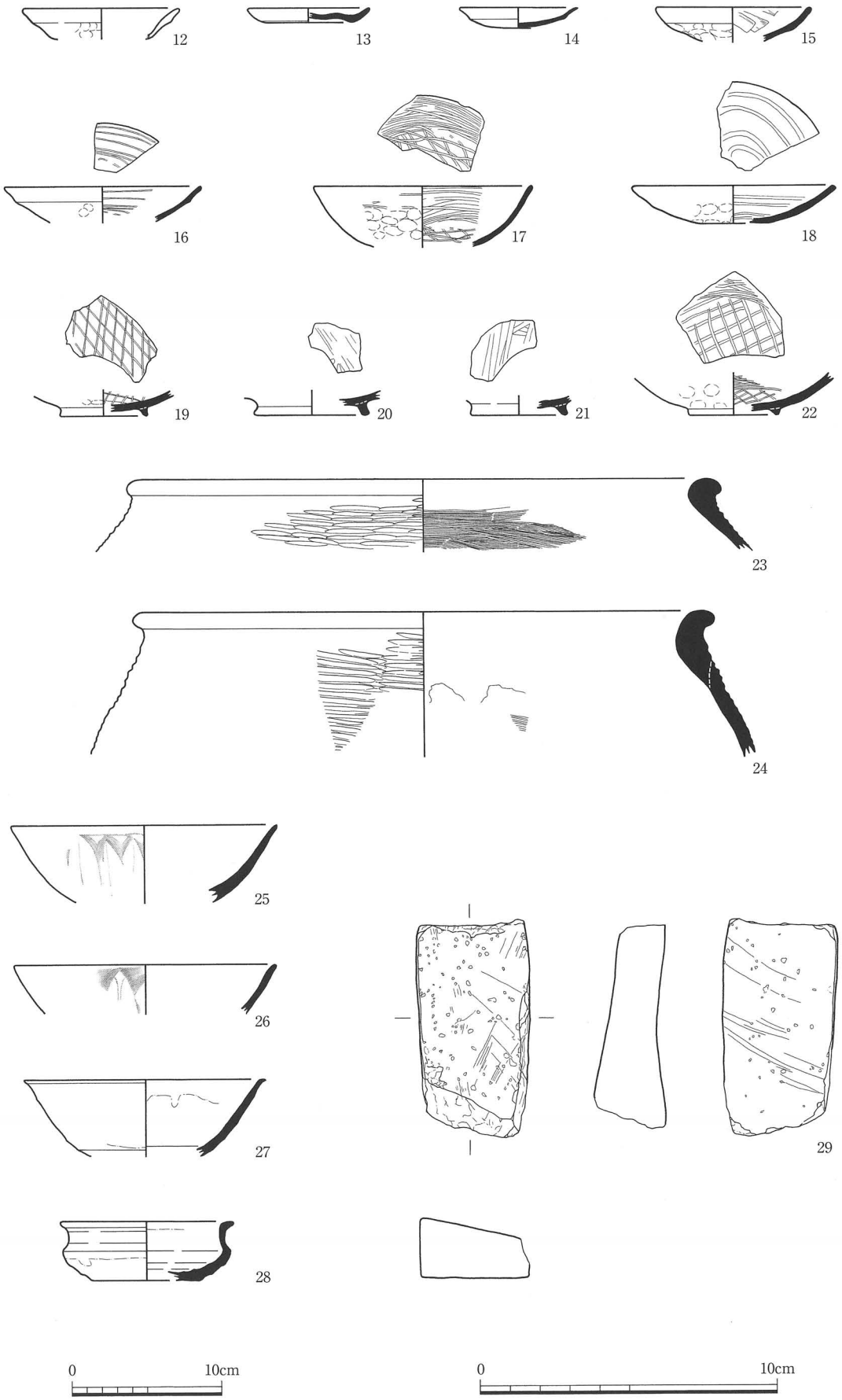
第19図　ＳＷ１出土遺物実測図

（４）包含層の遺物（第20・21図）

第２面検出時に掘削したオリーブ黒色シルト層からは、多くの遺物が出土した。土師質皿(12)や瓦器埦(16～22)、瓦質皿(13～15)・甕(23・24)、青磁碗(25・26)、白磁碗(27)、瀬戸香炉(28)、砥石(29)など中世の遺物が大半であるが、中にはサヌカイト製の石鏃（４・５)、削器(６)や地山面に近い位置で、縄文土器片(７～11)も出土した。



第20図　第Ⅰ－１調査区包含層出土遺物実測図（１）



第21図　第Ⅰ－１調査区包含層出土遺物実測図（２）

第３節　第Ｉ－２調査区の成果

１．第１面(第22図)

第Ｉ－２調査区は、調査区東側の下段、西側の上段とで層序が異なる。層序の記述の際にも述べたように、下段は現代耕土及び旧耕土を除去した面を第１面としたが、上段は現代耕土・床土層下面で、地山上層の盛土上面を第１面とした。そのため層序関係的には同一面ではないが、耕土層を除去した面として認識した。

遺構については、上段では顕著な遺構は確認できなかった。検出したのは、暗渠(ＳＤ４)や土坑(ＳＫ10)であるが、土坑からは遺物が出土せず、暗渠からは瓦片などの遺物が出土したが、建物等に伴う遺構は検出できなかった。

（１）溝・暗渠

［ＳＤ４］

調査区上段北部で検出した。主軸Ｎ－20°－Ｅで、南北方向に伸びる。長軸8.4m、短軸1.2mの範囲に10～30cm大の石が見られる。深さは0.17mを測る。これらの石列は、本来暗渠であったと考えられるが、本来の石の配置は大きく乱れている。また、暗渠の北側は、上段と下段の段差形成の際に削られたようで、北側には続かない。

遺物は土師質・瓦質土釜片、瓦器片、瓦片などが出土した。瓦は後述のＳＸ10などから出土しているものと同じである。これらの遺物は、暗渠構築時や段差形成時に入り込んだり、投棄されたものと考えられる。

［ＳＤ５］

調査区下段で検出した。東西方向に伸びる溝で、主軸はＮ－70°－Ｅである。検出長7.0m、幅0.5mを測る。溝内には、10～30cmの石が隙間なく入れられている。暗渠として機能していたと考えられる。

遺物は出土しなかった。

［ＳＤ７］(第23図、図版11)

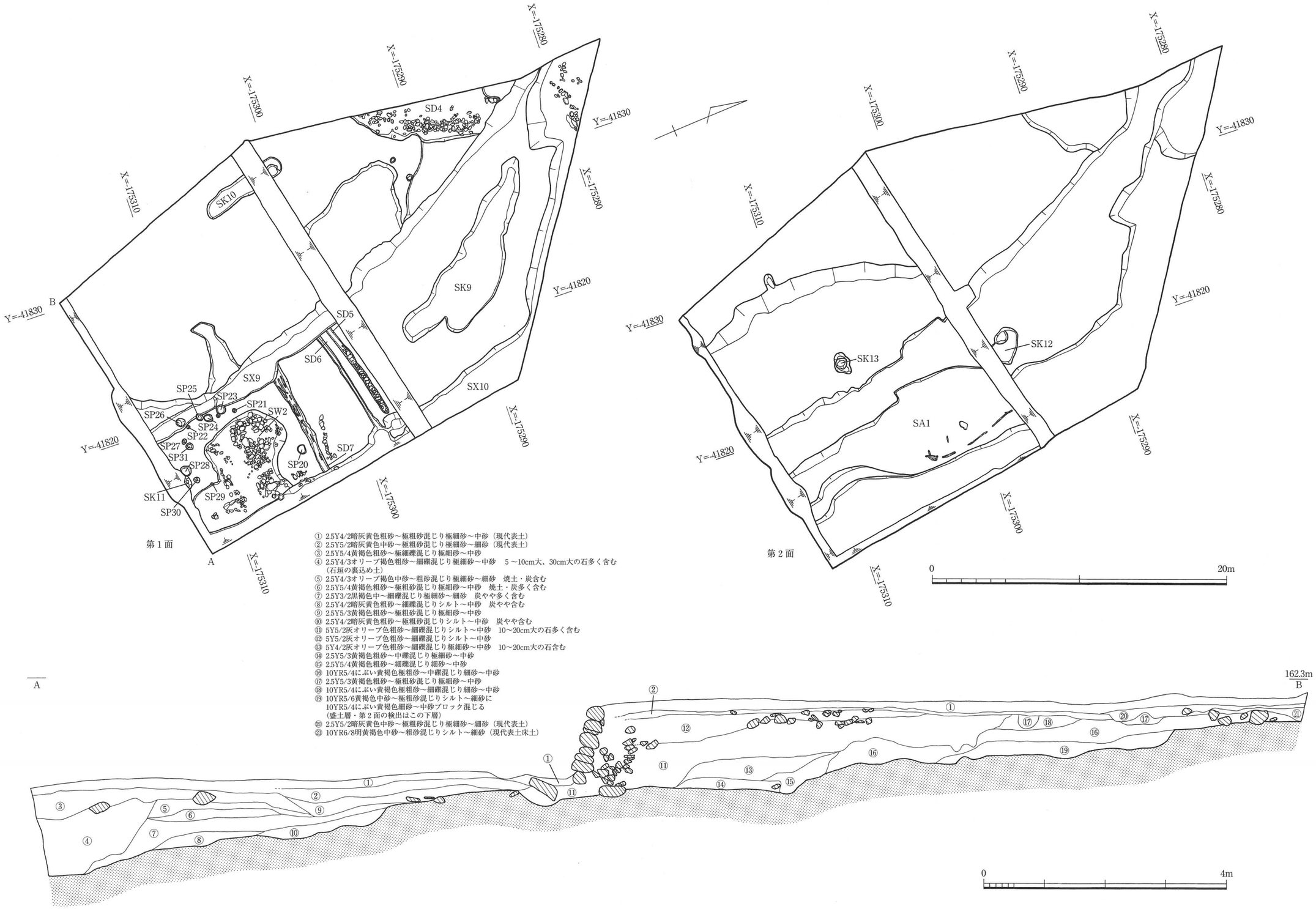
調査区下段で検出した。東西方向に伸びる溝で、主軸はＮ－75°－Ｅである。検出長約8.2m、幅0.9m、深さ0.08mを測る。溝内には、径５cm程と２cm程の竹が埋められていた。暗渠として機能していたと考えられる。

遺物は瓦器片が出土したが、細片のため実測できなかった。

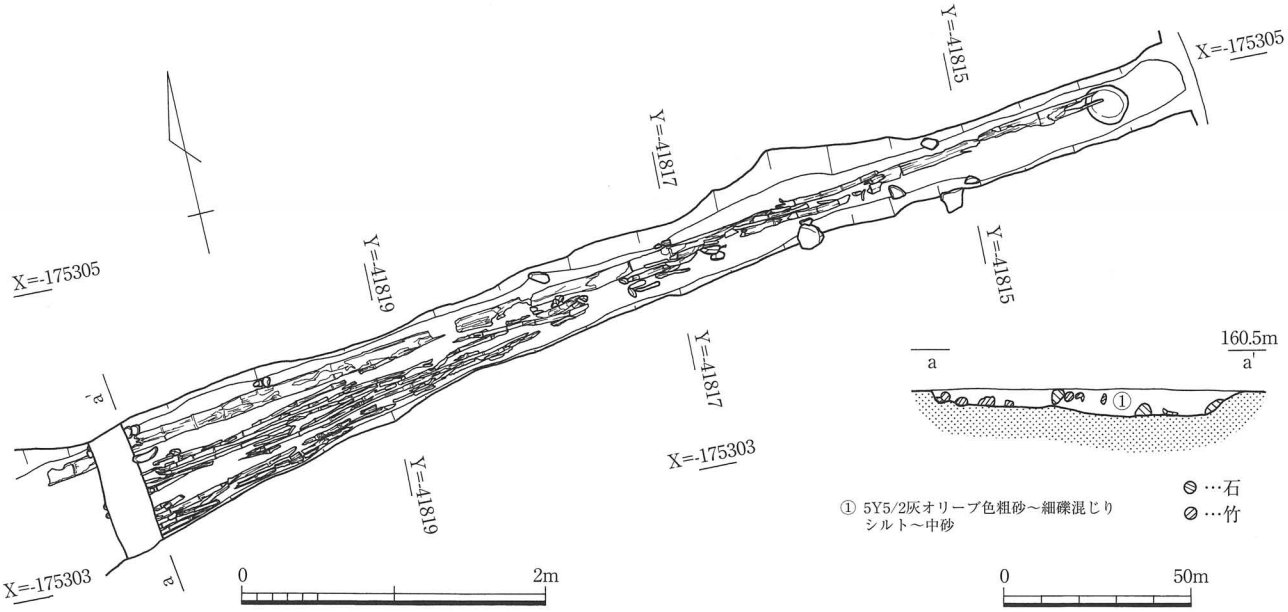
（２）土坑

［ＳＫ９］

調査区下段で検出した。平面形は不定形で東西に長く、長軸14.6m、短軸3.7m、深さ



第22図　第Ｉ－２調査区遺構配置図（1/250）及び土層断面実測図（1/60）



第23図　ＳＤ７遺構実測図（1/50・1/20）

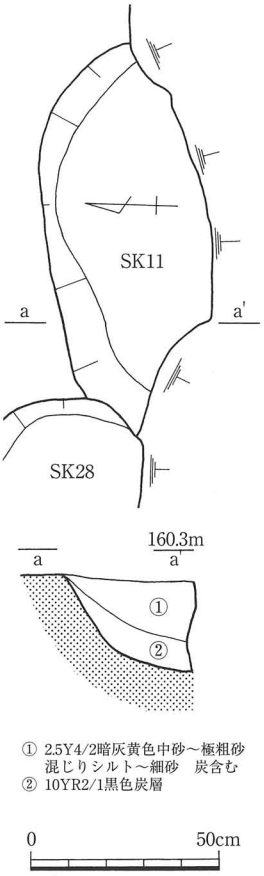
0.28mを測る。埋土には人頭大の石が多く含まれていることから、耕作地の整地に伴い、不要な石を廃棄するために掘削された土坑の可能性がある。

遺物は出土しなかった。

［ＳＫ11］（第24図）

調査区下段で検出した。南側が側溝掘削のため削平され、平面形は不明だが、おそらく円形で残存部分の径は0.95m、深さ0.24mを測る。埋土下層に炭を含む焼土坑である。

遺物は出土しなかった。



第24図　ＳＫ11遺構実測図（1/20）

（３）ピット

［ＳＰ23］（第25・26図、図版11・41）

調査区下段で検出した。平面形は円形で、径0.65m、深さ0.32mを測る。埋土は、暗灰黄色のシルト～中砂が主体である。５～20cm大の石を含む。

遺物は土師質皿(30)、瓦器埦(32)が出土した。瓦器埦は、口径13.3cm、器高3.1cmを測り、体部外面は指おさえ後ナデ調整され、内面はヘラミガキが若干見られる。尾上編年のⅣ－２期に相当する。土師質皿は、口径7.55cm、器高1.55cmを測る。口縁部がやや外反するタイプで、口縁部をヨコナデ、底部内面をナデ、外面を指おさえ後ナデ調整している。

［ＳＰ25］（第26図）

調査区下段で検出した。平面形は不定形で、長軸0.5m、短軸

0.45m、深さ0.24mを測る。埋土は、暗灰黄色のシルト～中砂が主体である。

遺物は瓦器が出土したが、細片のため実測できなかった。

［ＳＰ27］(第26図)

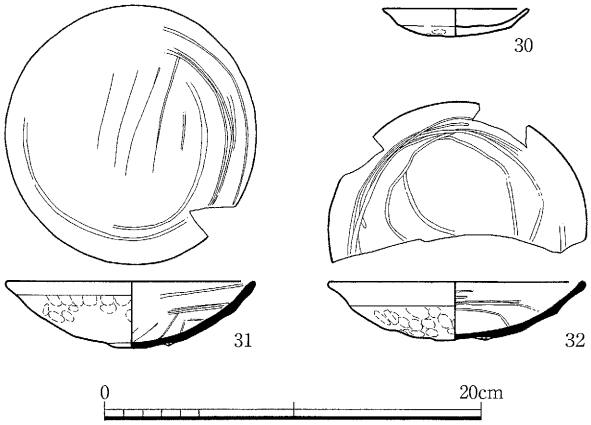
調査区下段で検出した。平面形は楕円形で、長軸0.4m、短軸0.32m、深さ0.22mを測る。埋土は、暗灰黄色のシルト～細砂が主体である。

遺物は瓦器片が出土したが、細片のため実測できなかった。尾上編年のⅢ期頃の所産と思われる。

［ＳＰ31］(第25・26図、図版41)

調査区下段で検出した。平面形は円形で、径0.4m、深さ0.09mを測る。埋土は、暗灰黄色のシルト～中砂が主体である。

遺物は瓦器椀(31)が出土した。口径12.9cm、器高はやや歪んでいるため、3.0～3.5cmを測る。体部外面は指おさえ後ナデ調整され、内面はヘラミガキが若干見られる。高台は断面半円形のものがつくが、形骸化しており、高台のつく最終形態である。尾上編年のⅣ－２期に相当する。



第25図　ＳＰ23・31出土遺物実測図

（４）石組み

［ＳＷ２］(第26～28図、図版９・10・41～43)

調査区下段で検出した。南北6.5m以上、東西4.5m以上の規模を測る落ち込みの中に、10～80cm大の石で作られた石組みが２基検出された。落ち込みの北側には東側に開いた「コ」の字状の石組み(北側石組み)と「Ｌ」字状に配置された石組み(南側石組み)があった。

【北側石組み】

10～70cm大の石で構築されている。主軸は東西で、西側が塞がり、東側に広がった溝になっている。遺構の東側は、現代の石垣によって削平されており、どのように伸びるかは不明であるが、検出された長さは5.4m、深さ0.2～0.3mを測る。幅は西側が１m、東側が0.5mあり、東に向うほど狭くなっている。

溝内からは、土師質皿(33～48)、瓦器椀(49～58)、瓦質土釜(59・60)・甕(61～63)など多くの遺物が出土した。瓦器椀は、尾上編年のⅣ－２～４期のものであり、これらの遺物は14世紀頃に埋められたと考えられる。その他に溝底から長軸1.15m、短軸0.2mの板が出土したが、特に加工された痕跡は見られなかった。

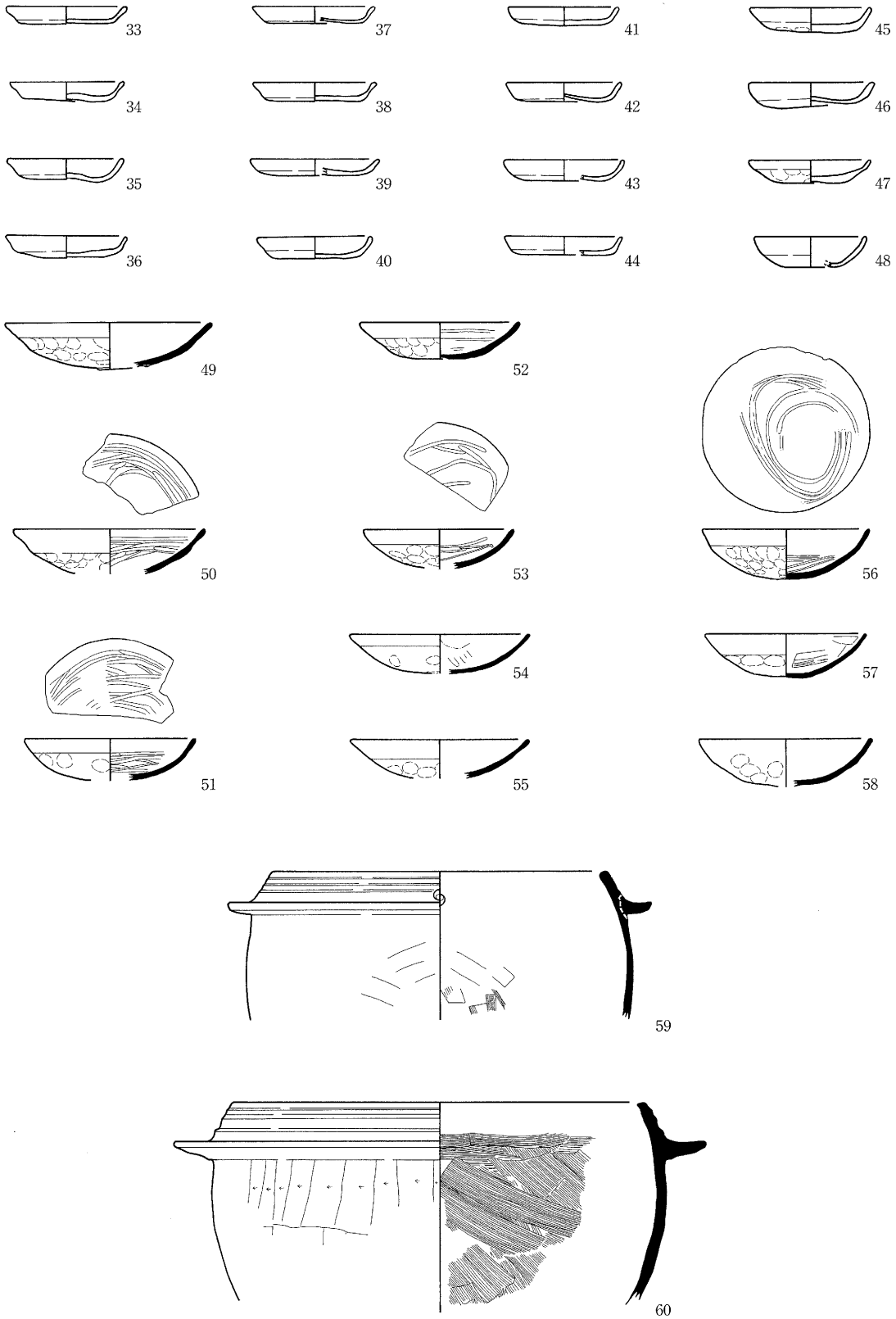
【南側石組み】

10～80cm大の石で構築されている。東西方向に設置された石組みは、検出長1.8m、幅

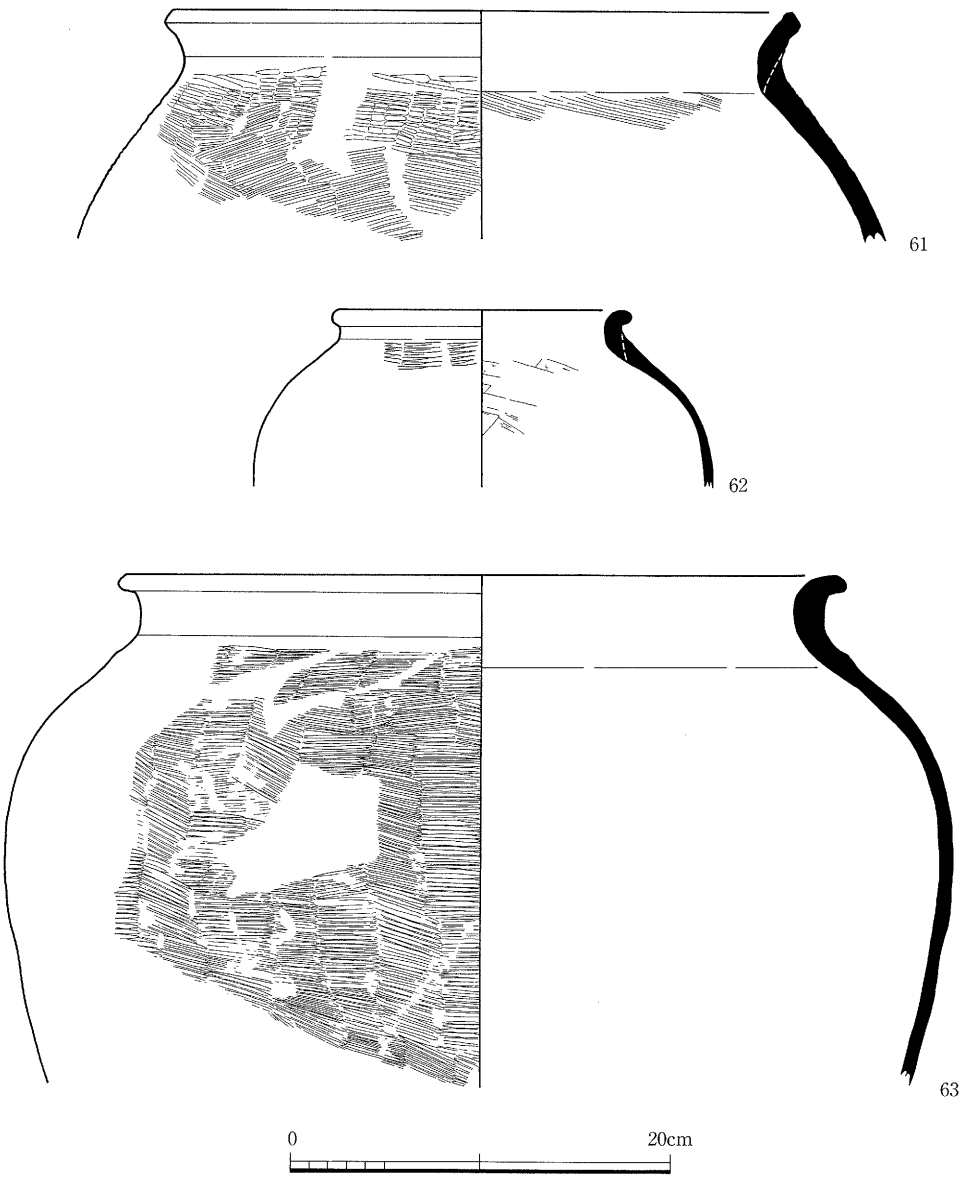
① 2.5Y4/2暗灰黄色粗砂～極細礫混じりシルト～中砂（炭、5～20cm大の石含む）
② 2.5Y4/2暗灰黄色中砂～極粗砂混じりシルト～細砂（炭含む）
③ 2.5Y4/2暗灰黄色粗砂～極細礫混じりシルト～中砂

① 2.5Y4/3オリーブ褐色粗砂～極細礫混じり極細砂～中砂　焼土（炭含む）
② 2.5Y3/1黒褐色粗砂～極粗砂混じり極細砂～中砂（炭多く含む）
③ 2.5Y5/4黄褐色粗砂～極粗砂混じり極細砂～中砂（炭含む）
④ 2.5Y2/1黒色炭層
⑤ 2.5Y3/3暗オリーブ褐色粗砂～極細礫混じり極細砂～中砂
⑥ 5Y4/1灰色粗砂～細礫混じり極細砂～中砂（炭含む）
⑦ 5Y4/1灰色粗砂～細礫混じりシルト～中砂（炭含む）

第26図　ＳＰ23・25～27・31、ＳＷ２遺構実測図（1/20・1/50）



第27図　ＳＷ２出土遺物実測図（１）



第28図　ＳＷ２出土遺物実測図（２）

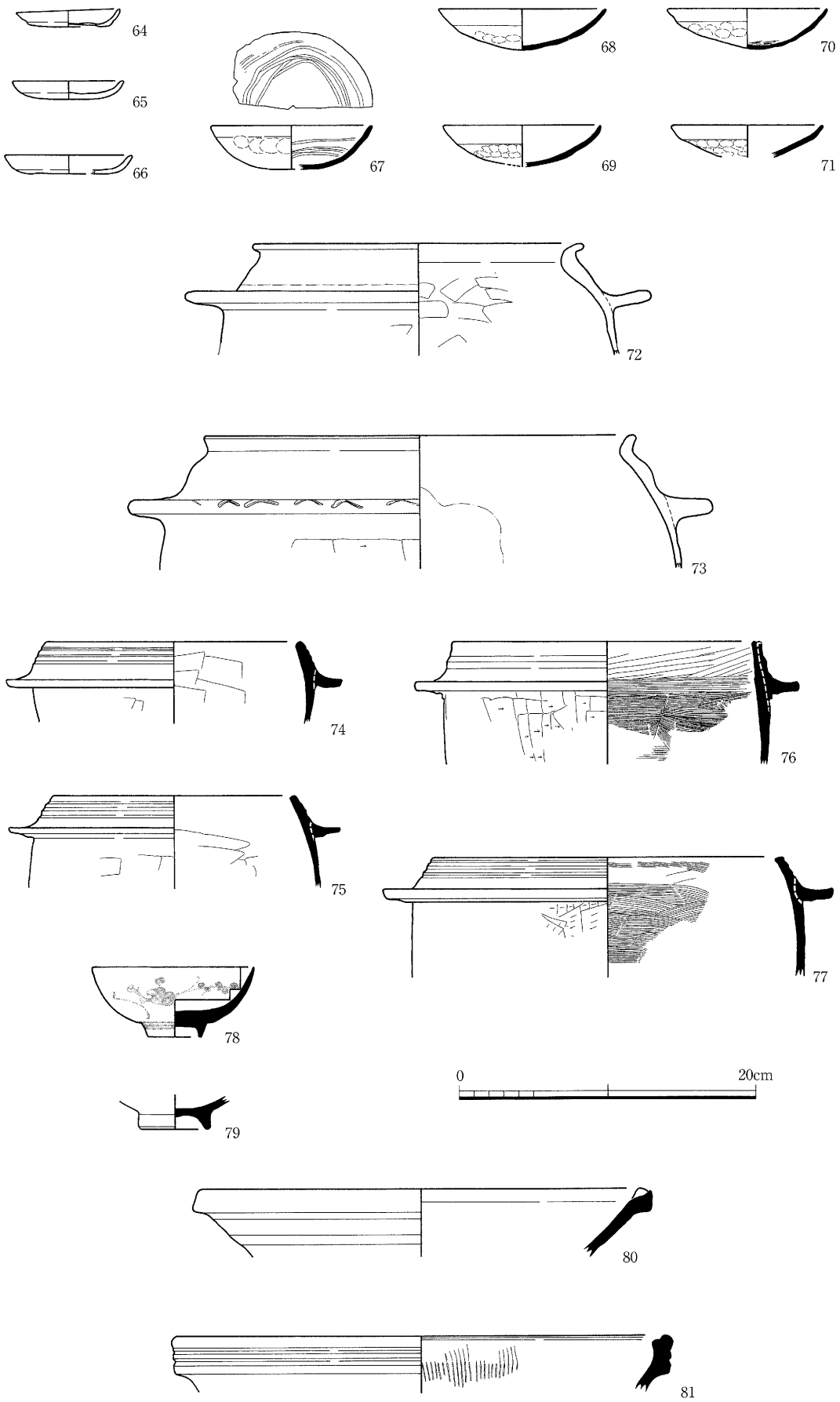
0.2m程で、埋土には炭や焼土が多く含まれていた。南北方向には、長軸0.8m、短軸0.3m程の比較的細長い石２つを用いて、長さ1.3m程の石列が設置されていた。これらの石組み・石列は、比較的偏平な石材を用いて構築していることから、全体として「L」字形になる溝と考えられる。しかし、検出した部分のみで機能するとは考えにくいため、本来は、これよりも溝が伸びていたと推測され、建物などに伴う排水溝だったと考えられる。

（５）落ち込み

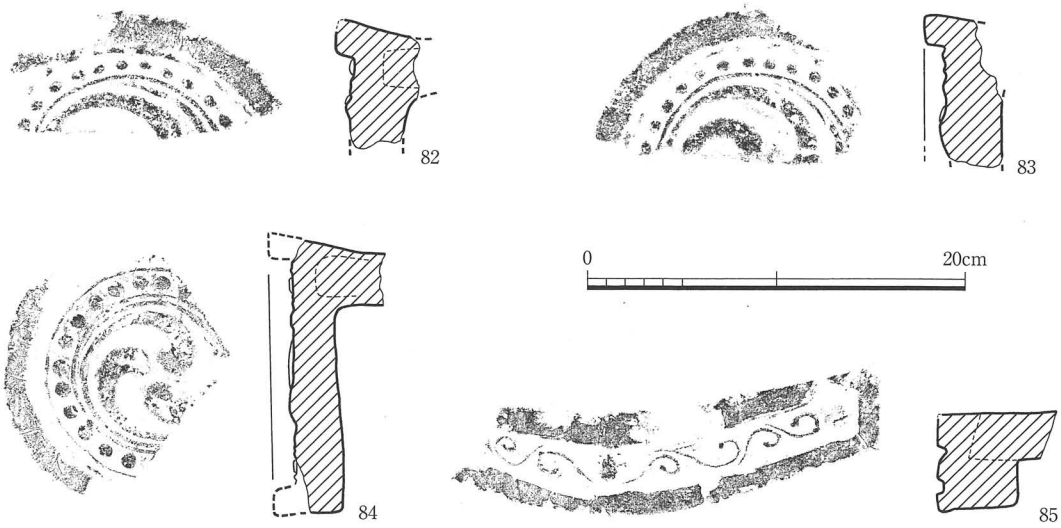
［ＳＸ10］(第29・30図、図版43・44)

調査区下段で検出した。第Ｉ－２調査区東側にある現代の石垣を設置する際に掘削された落ち込みである。

石垣の裏込め土である埋土から、須恵質練鉢(80)、土師質皿(64～66)・土釜(72・73)、



第29図　ＳＸ10出土遺物実測図（１）

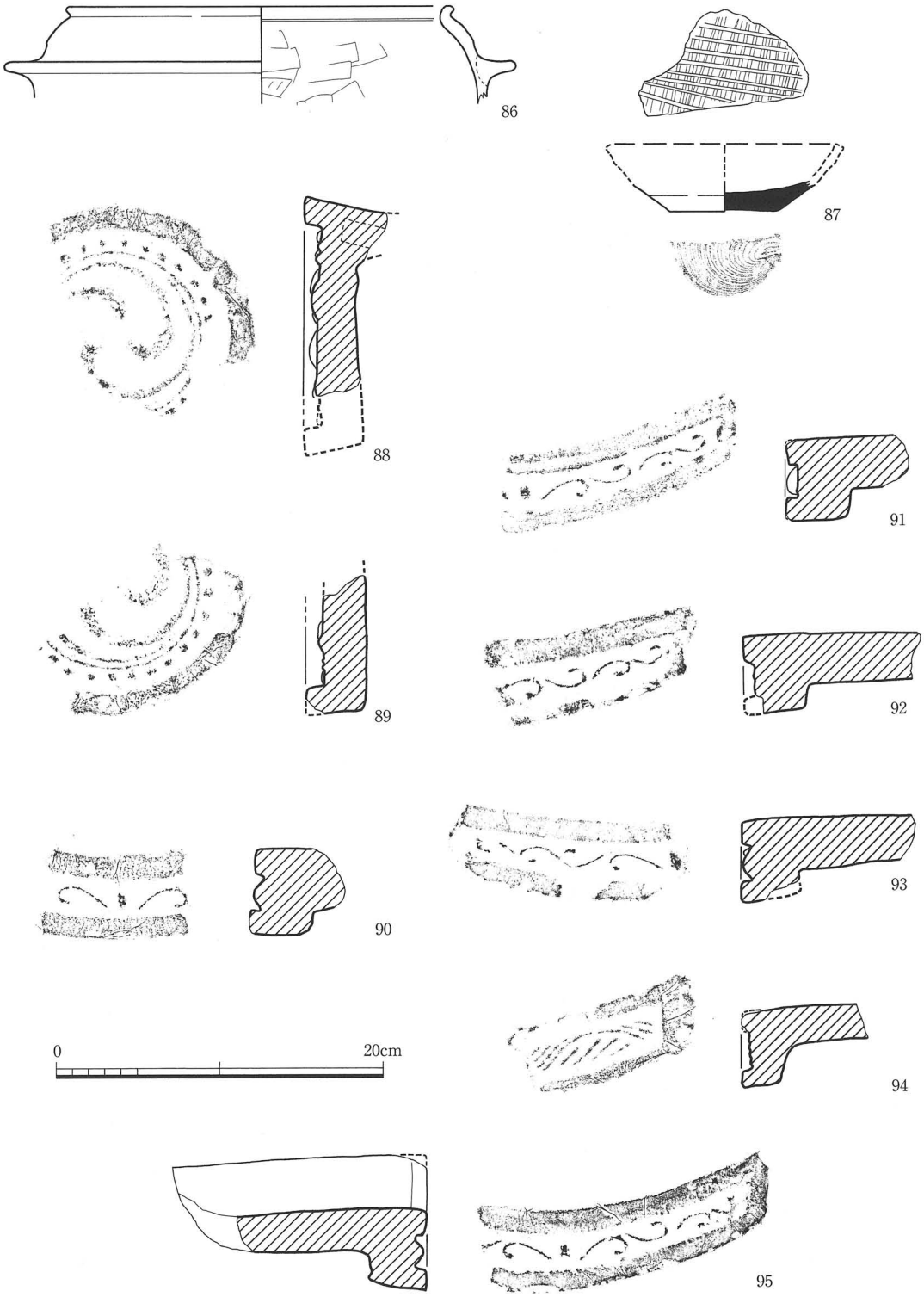


第30図　ＳＸ10出土遺物実測図（２）

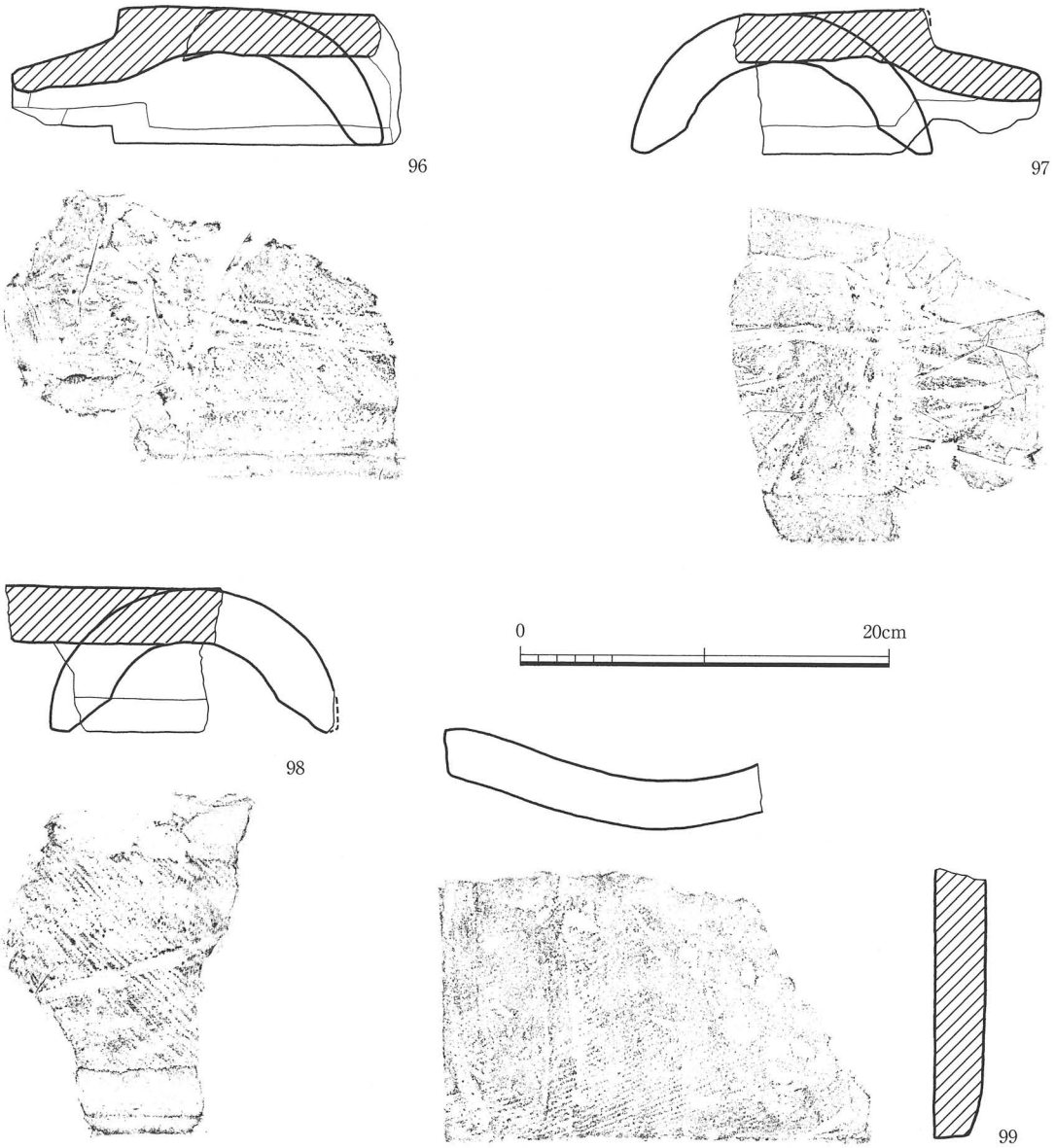
瓦器埦(67～71)、瓦質土釜(74～77)、肥前系磁器の染付碗(78)、磁器碗(79)、堺擂鉢(81)、軒丸瓦(82～84)、軒平瓦(85)など多くの遺物が出土した。遺物の多くが、13～15世紀にかけてのものだが、若干近世の遺物も見られることから、石垣が設置されたのは、近世以降と言える。

（６）第１包含層の遺物(第31・32図、図版44)

第１面検出時に掘削した現代耕土及び旧耕土層からは、土師質土釜(86)や瀬戸のおろし皿(87)、軒丸瓦(88・89)、軒平瓦(90～95)、丸瓦(96～98)、平瓦(99)などの遺物が出土した。土師質土釜は13世紀頃、瓦は鎌倉から室町時代のものであることから、これらの遺物は、第１面及び後述する第２面に関する遺物が上層に混ざったものと考えられる。



第31図　第Ⅰ－2調査区第1包含層出土遺物実測図（1）



第32図　第Ⅰ－２調査区第１包含層出土遺物実測図（２）

２．第２面(第22図)

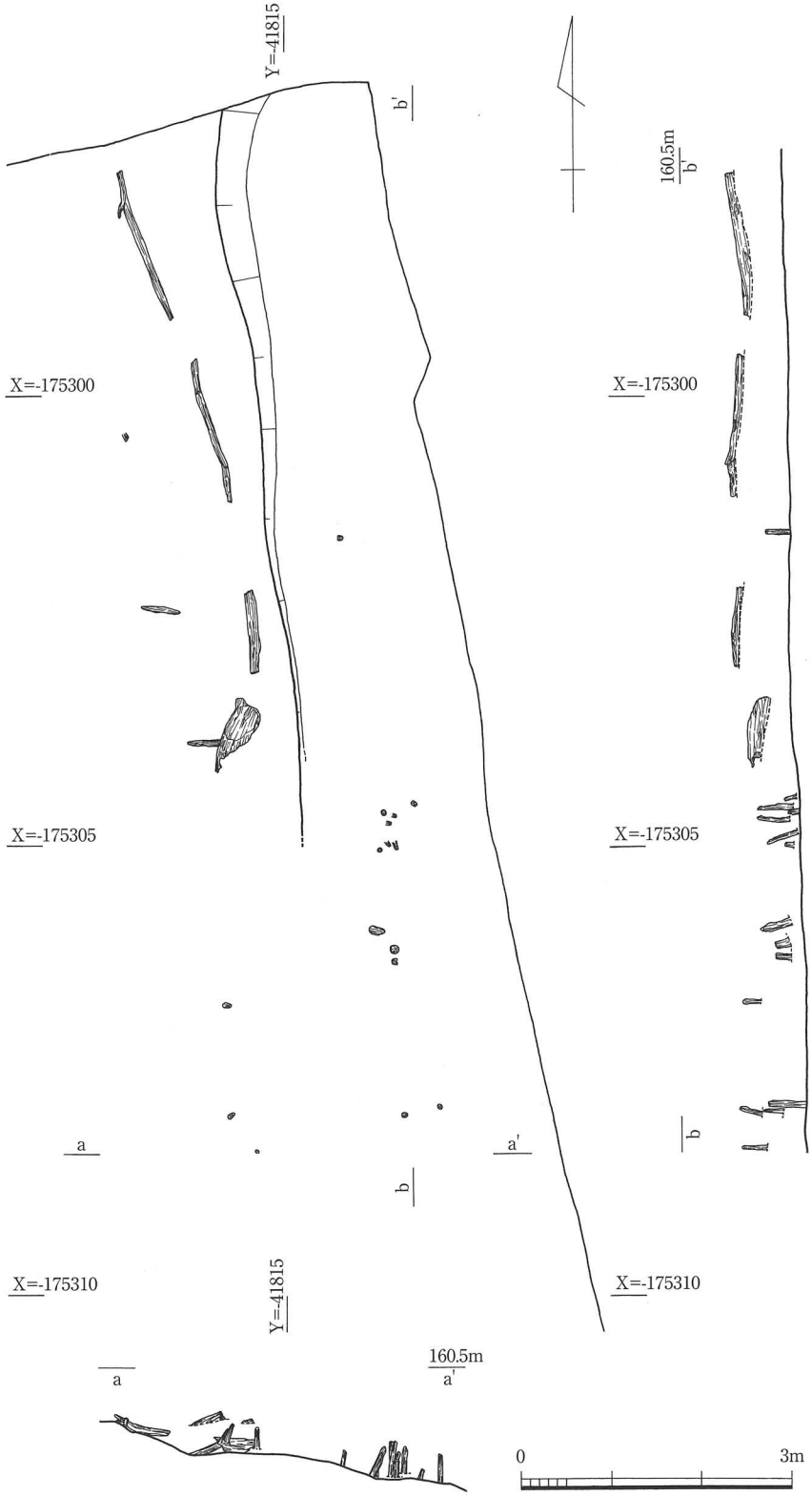
第２面は、前述しているように、調査区東側にのみ堆積している暗オリーブ褐色層を除去した面である。第Ⅰ－２調査区では、第１面において検出したＳＷ２やＳＫ９の中央付近から東側にかけて、暗オリーブ褐色層が見られた。そして、それらを除去すると、東に下がる急斜面が検出され、杭列が確認された。

遺物は、検出した遺構から出土しなかったが、暗オリーブ褐色層から多くの土器片が出土した。

（1）杭列

［ＳＡ１］(第33図、図版13)

調査区下段南側で検出した。南北11m、東西３mの範囲に、南北方向に打設された杭列である。径４～８cm程、長さ0.4m以上の杭を用いている。また杭列の主軸に並行して、



第33図　ＳＡ１遺構実測図（1/80）

長さ0.9～1.7m、幅５～30cm程の木材も設置されている。検出した杭は19本であるが、散漫な分布であり、等間隔にも打たれていない。これらのことから、本来は杭がさらに多く打たれていたと考えられ、構造は不明であるが、東に向って下がる急斜面を保護するために設置されたものと考えられる。

遺物は出土していないが、当遺構を含め第２面を覆う包含層から、多くの遺物が出土しており、それらの瓦器椀片が尾上編年のⅢ～Ⅳ－４期のものであることから、14世紀には埋められたと考えられる。

（２）土坑

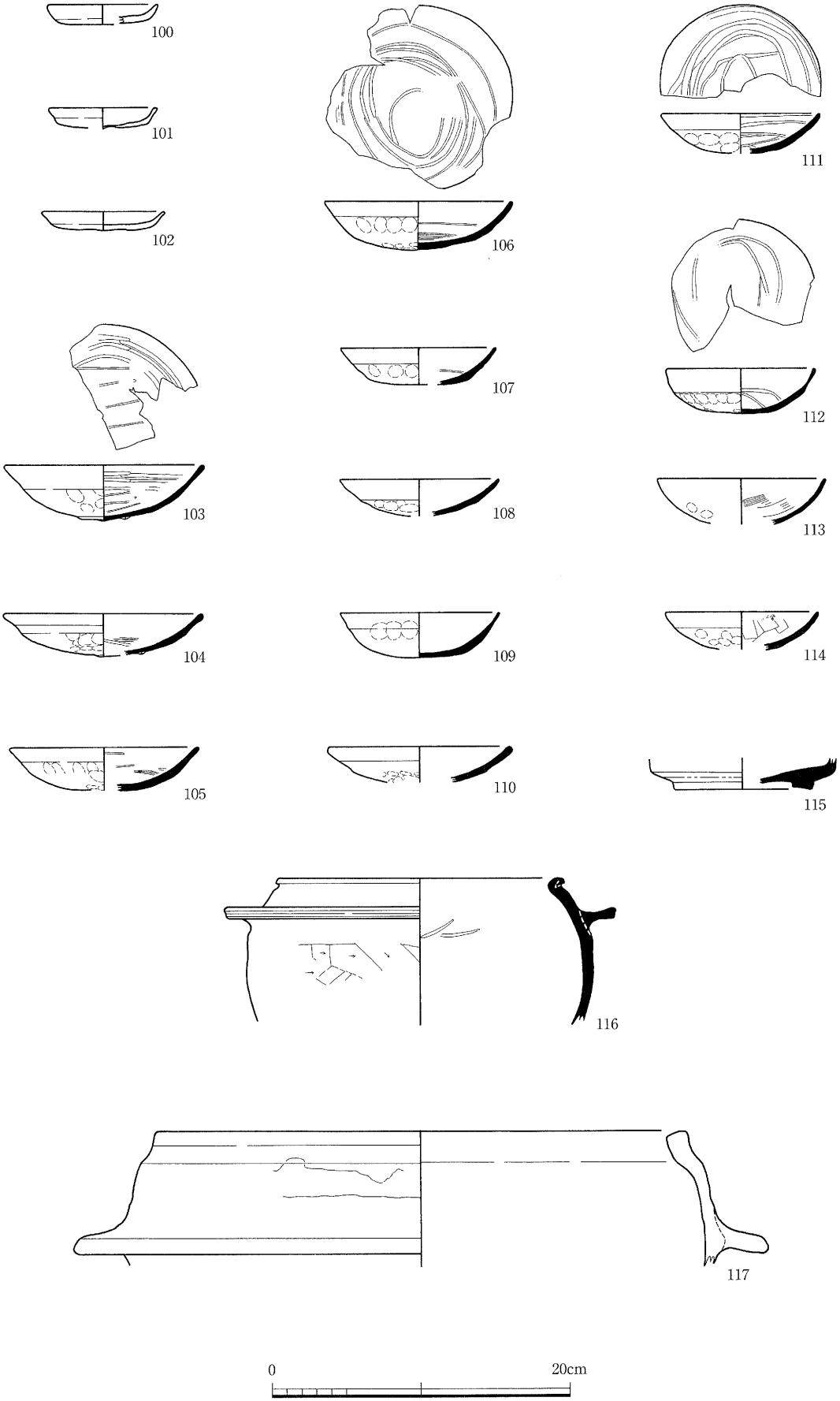
［ＳＫ12］

調査区下段中央で検出した。平面形は不定形で、長軸1.9m以上、短軸1.75m、深さ0.25mを測る。

遺物は出土しなかった。

（３）第２包含層の遺物（第34図、図版44・45）

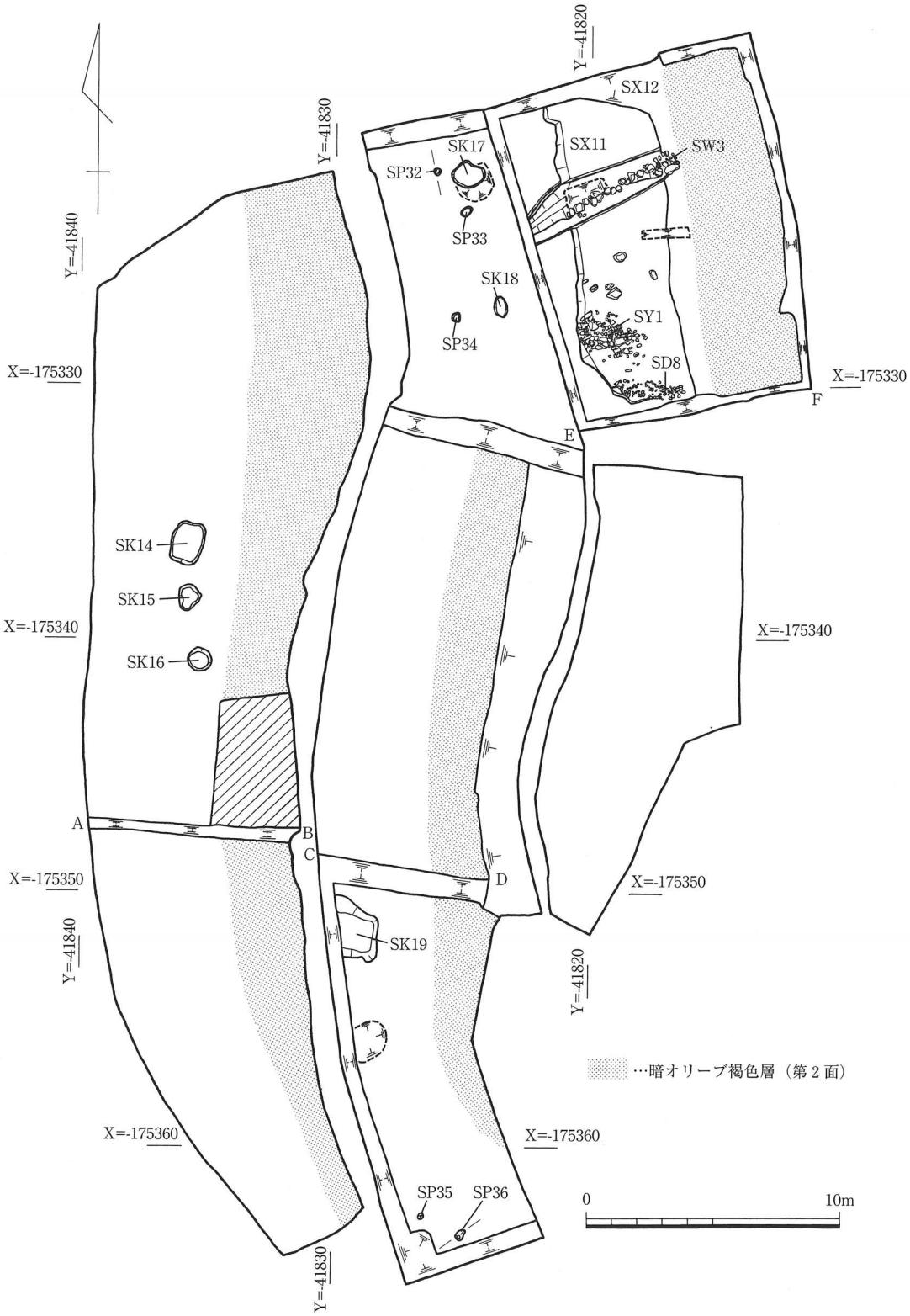
調査区下段東側、ＳＷ２周辺に堆積する暗オリーブ褐色層は、炭や焼土を含む層であり、人為的に埋められたものである。この層からは、土師質皿（100～102）・土釜（117）、瓦器椀（103～114）、磁器（115）、瓦質土釜（116）などが出土した。



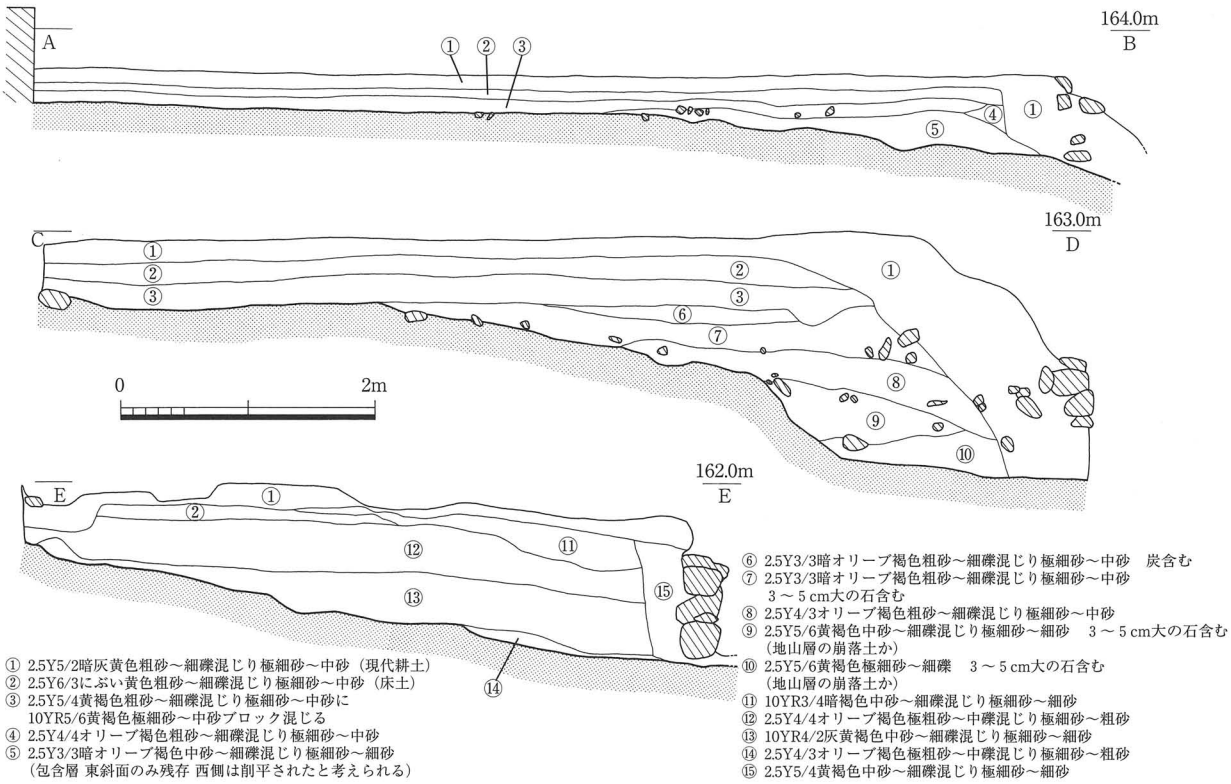
第34図　第Ⅰ－2調査区第2包含層出土遺物実測図

第４節　第Ⅰ－３調査区の成果

１．第１面（第35図）



第35図　第Ⅰ－３調査区第１面遺構配置図（1/250）



第36図　第Ⅰ－３調査区土層断面実測図（1/60）

第Ⅰ－３調査区の形状は、現在の棚田により南北に細長く、西側から上段・中段・下段の３つに分けられる。第１面は、現代耕土・床土層を除去した面であるが、各段とも似たような層序関係を示し、各段の西側には地山面、東側には暗オリーブ褐色層を検出する。

遺構は、土坑、ピット、石列、溝、瓦窯を検出した。

（１）溝

［ＳＤ８］(図版14)

調査区下段で検出した。東西方向に伸びる溝で、主軸はＮ－82°－Ｗである。北側と東端が削られているため正確な規模は不明だが、検出長2.9m、幅0.9mの範囲に２～15cmの礫が敷き詰められている。暗渠として機能していた可能性がある。

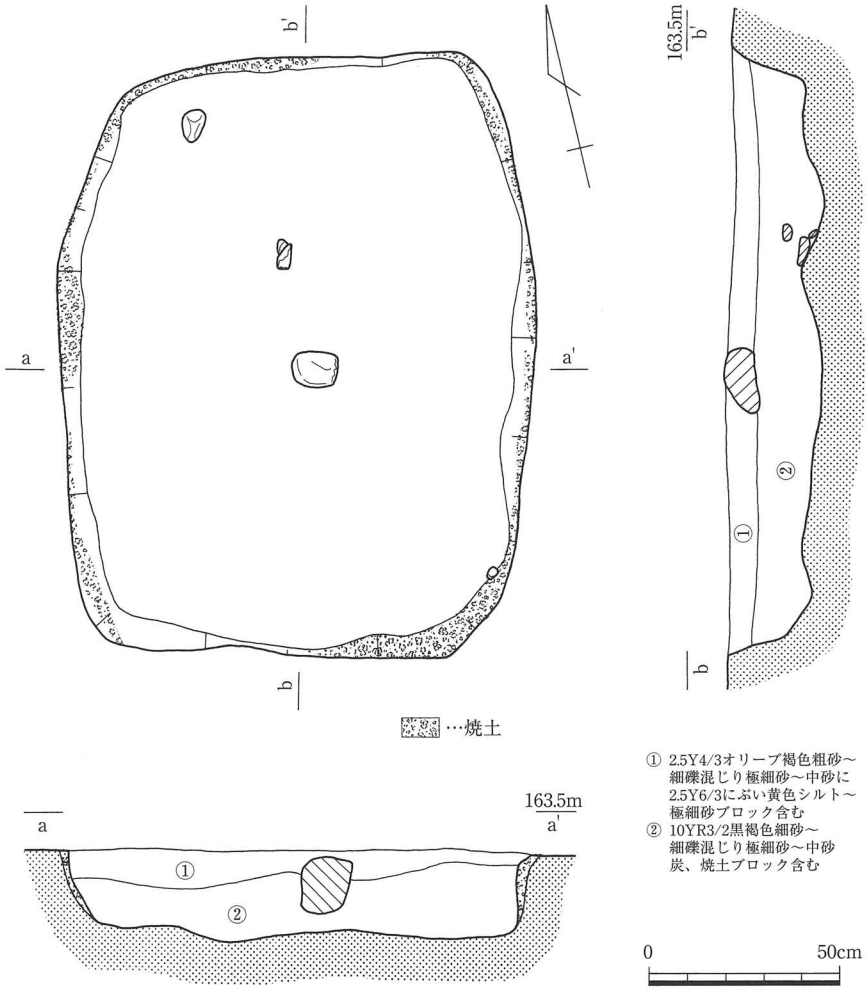
遺物は出土しなかった。

（２）土坑

［ＳＫ14］(第37・38図、図版16)

調査区上段で検出した。平面形は長方形で南北に長く、長軸1.6m、短軸1.23m、深さ0.25mを測る。土坑内部が焼けている焼土坑である。埋土に炭を含むが、他の焼土坑と違い底部に焼土層が見られず、側面全体のみ見られ、またその焼土も非常によく焼けているのが特徴である。

遺物は出土しなかった。また、後述の第５章の熱残留時期測定法による調査の結果、時期は７世紀中頃と推定された。



第37図　ＳＫ14遺構配置図（1/20）

［ＳＫ15］（第38・39図）

調査区上段で検出した。平面形は楕円形で、長軸0.97m、短軸0.79m、深さ0.1mを測る。平面形や規模的には周辺に位置している焼土坑と同じであるが、当遺構には焼土が見られず、埋土にも炭を含まないため、別の時期の遺構と考えられる。

［ＳＫ16］（第38・40図）

調査区上段で検出した。平面形はほぼ円形で、南北0.9m、東西0.95m、深さ0.12mを測る。焼土坑であり、土坑底部には炭層が堆積している。焼土が北西部と南東部を中心に見られるが、本来は全体が被熱を受けていると思われる。

遺物は出土しなかった。

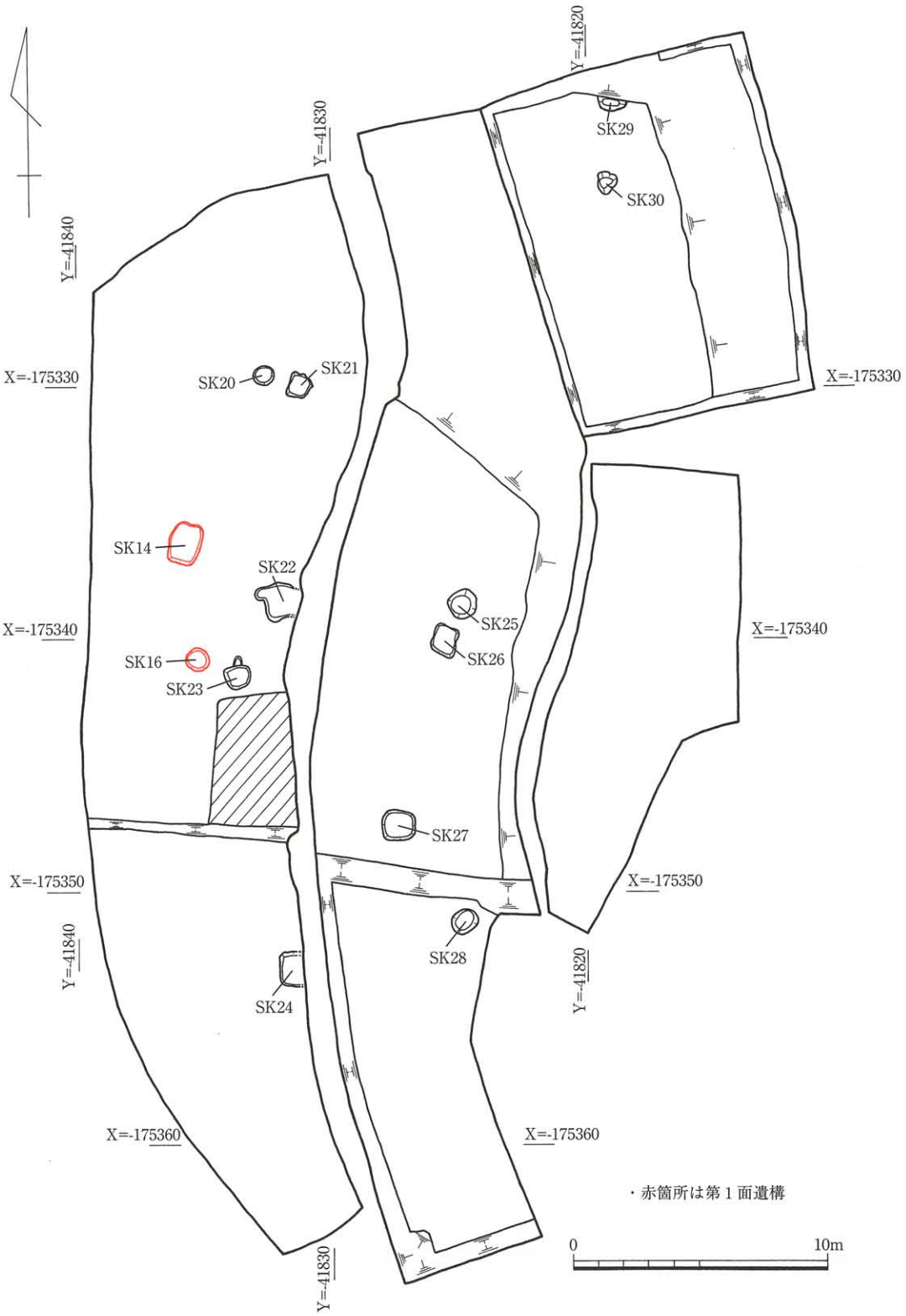
［ＳＫ17］（第38・41図）

調査区中段で検出した。平面形は不定形で、長軸1.22m、短軸1.1m、深さ0.13mを測る。埋土の観察から、炭・焼土を含むが周辺の焼土坑とは異なる時期の土坑である。

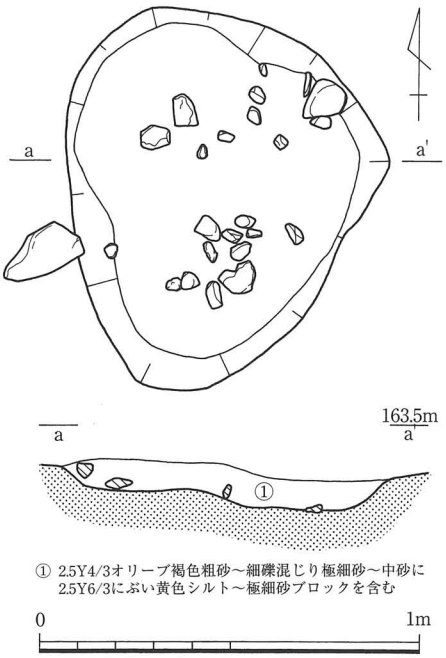
遺物は出土しなかった。

［ＳＫ19］（第38・41図）

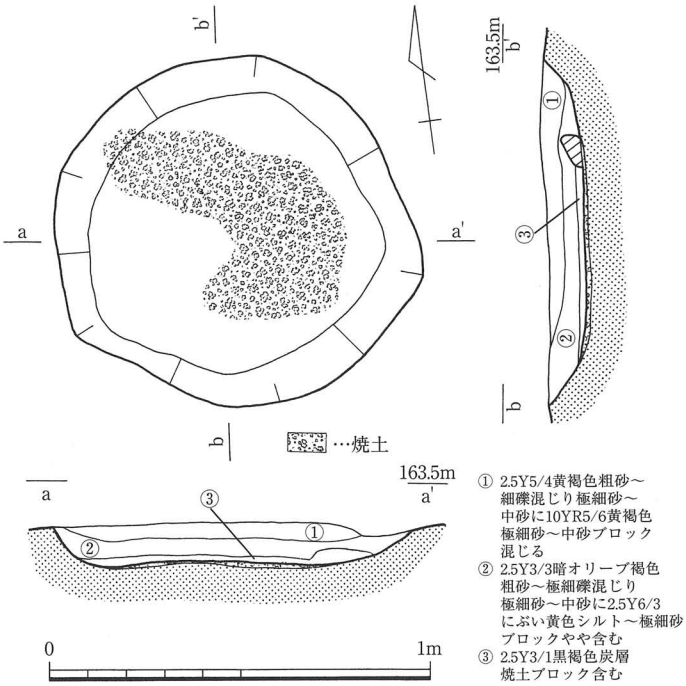
調査区中段で検出した。平面形は方形で、南北2.38m、東西2.2m、深さ0.56mを測るが、



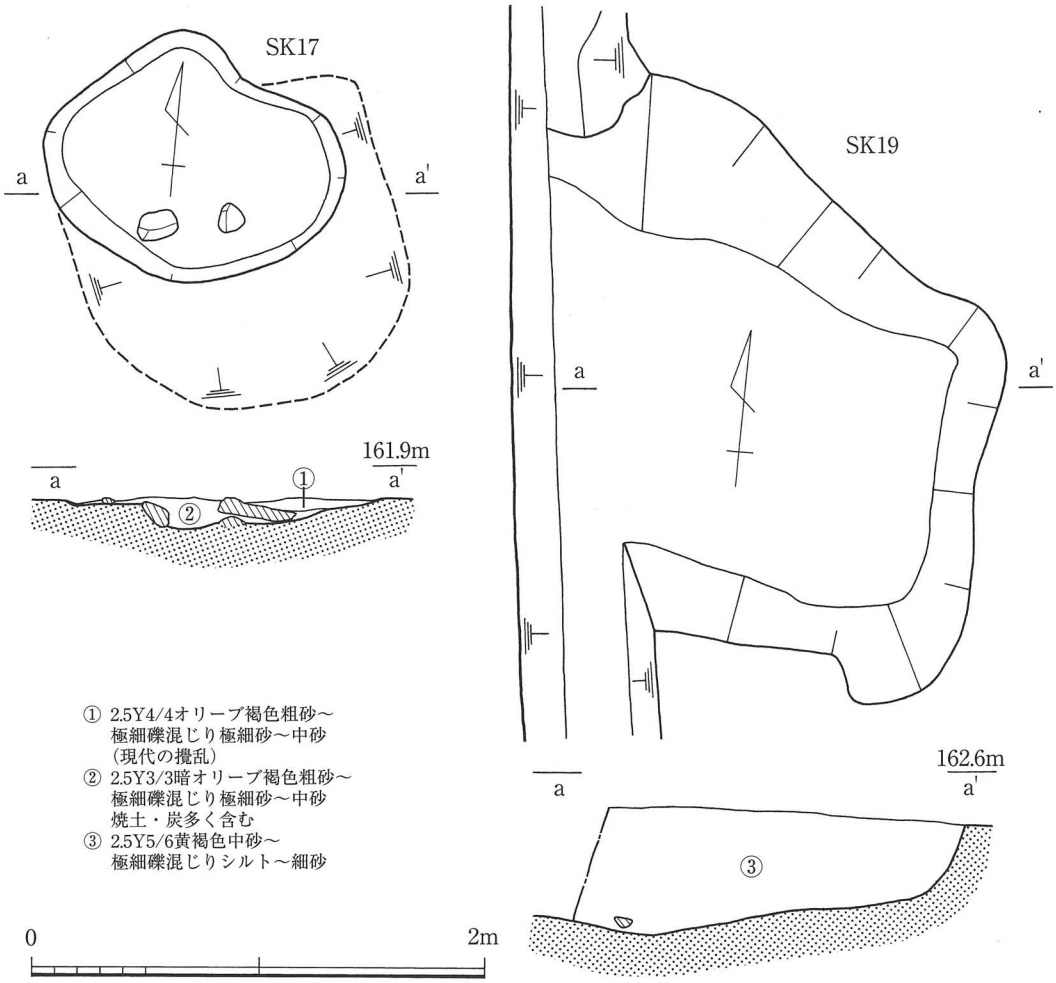
第38図　第Ⅰ－３調査区土坑配置図（1/250）



第39図　ＳＫ15遺構実測図（1/20）



第40図　ＳＫ16遺構実測図（1/20）



第41図　ＳＫ17・19遺構実測図（1/30）

東側が未調査地にあたるため、正確な規模は不明である。埋土は、地山層が中心であることから、何らかの理由で掘削されたが、すぐに埋められたものと考えられる。

遺物は出土しなかった。

（3）ピット

［ＳＰ32］（第42図）

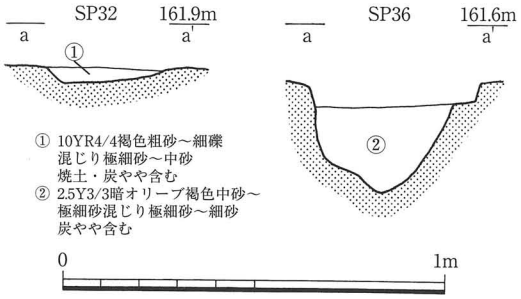
調査区中段北側で検出した。平面形は楕円形で、長軸0.34m、短軸0.26m、深さは0.04mを測る。

遺物は出土しなかった。

［ＳＰ33］

調査区中段北側で検出した。平面形は楕円形で、長軸0.47m、短軸0.31m、深さは0.04mを測る。

遺物は出土しなかった。



第42図　ＳＰ32・36遺構断面実測図（1/20）

［ＳＰ34］

調査区中段北側で検出した。平面形は楕円形で、長軸0.4m、短軸0.34m、深さは0.04mを測る。ＳＰ32～34の埋土はＳＫ17と同様であるため、焼土坑などとは異なる時期のものと考えられる。

遺物は出土しなかった。

［ＳＰ36］（第42図）

調査区中段南側で検出した。平面形は楕円形で、長軸0.44m、短軸0.32m、深さは0.23mを測る。埋土は暗オリーブ褐色極細砂～細砂である。

遺物は出土しなかった。

（4）石列

［ＳＷ3］

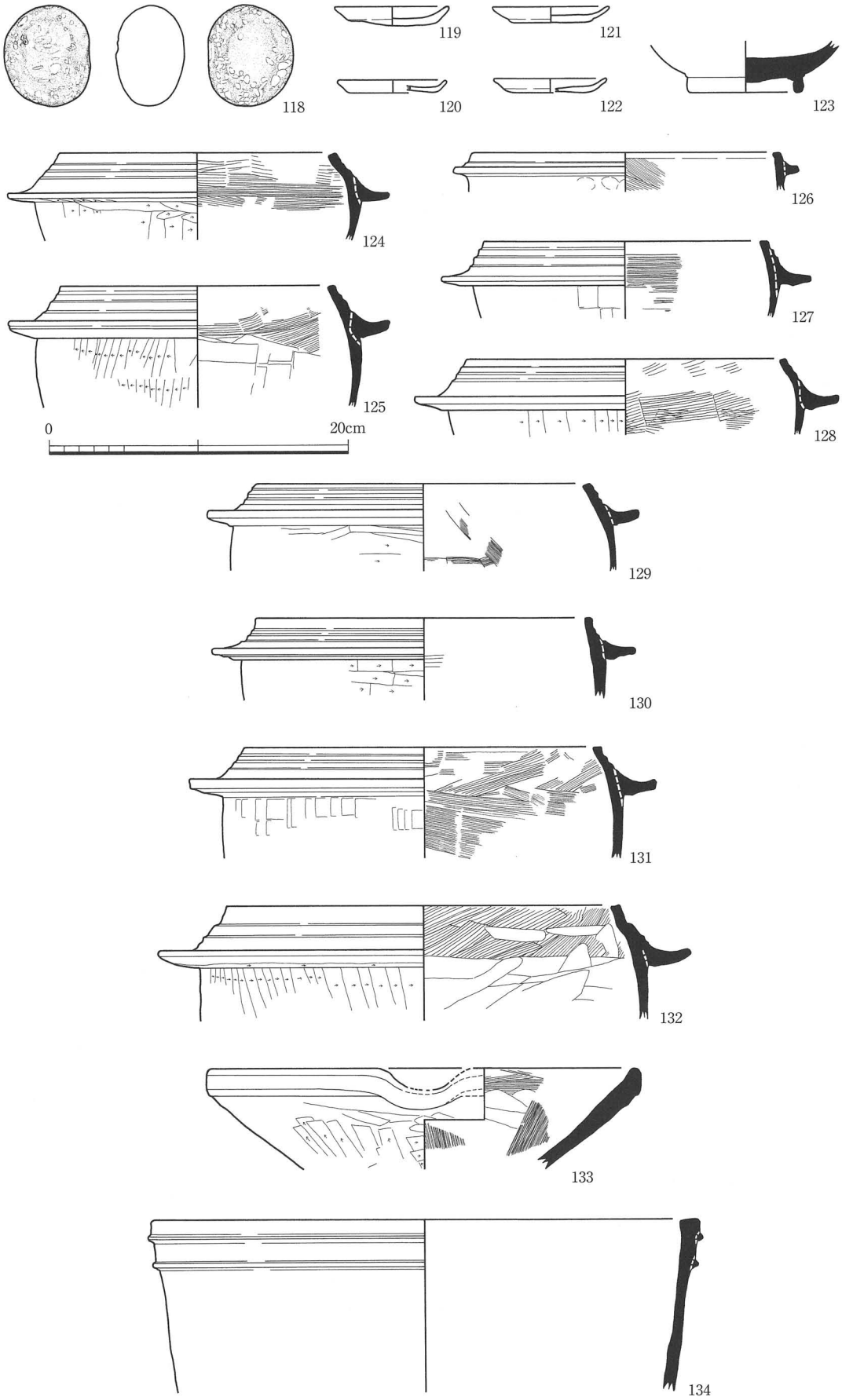
調査区下段で検出した。東西方向に伸びる石列で、主軸はＮ－60°－Ｅである。検出長4.87m、幅0.6mを測り、0.2～0.6mの石で構築されている。北側に面した石垣の一部が残っているものと考えられる。

遺物は出土しなかった。

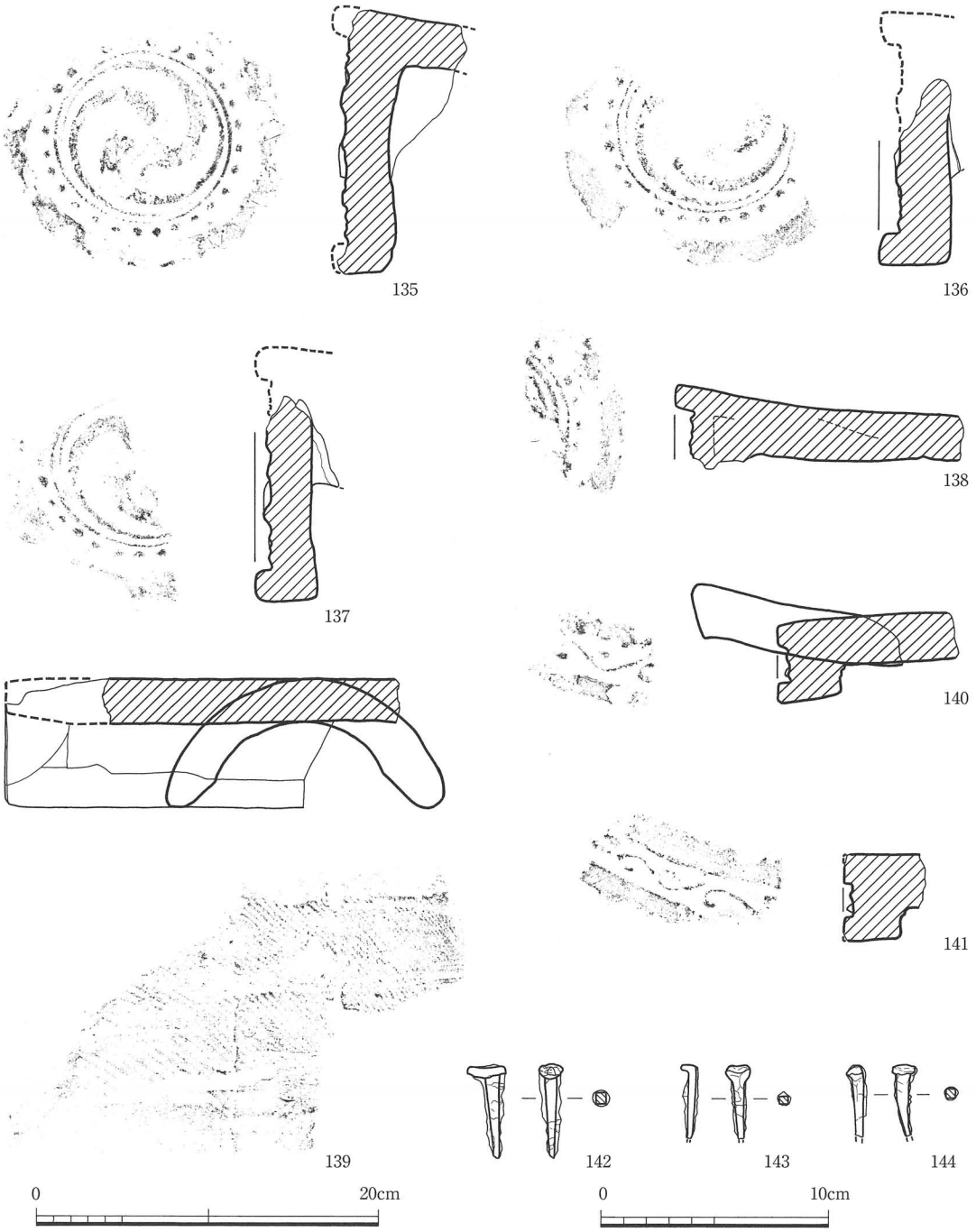
（5）落込み

［ＳＸ12］（第43・44図、図版45）

調査区下段北端で検出した。第Ｉ－２調査区とＩ－３区の間に位置している現代の石垣



第43図　ＳＸ12出土遺物実測図（１）



第44図　ＳＸ12出土遺物実測図（２）

を設置する際に掘削された落ち込みである。

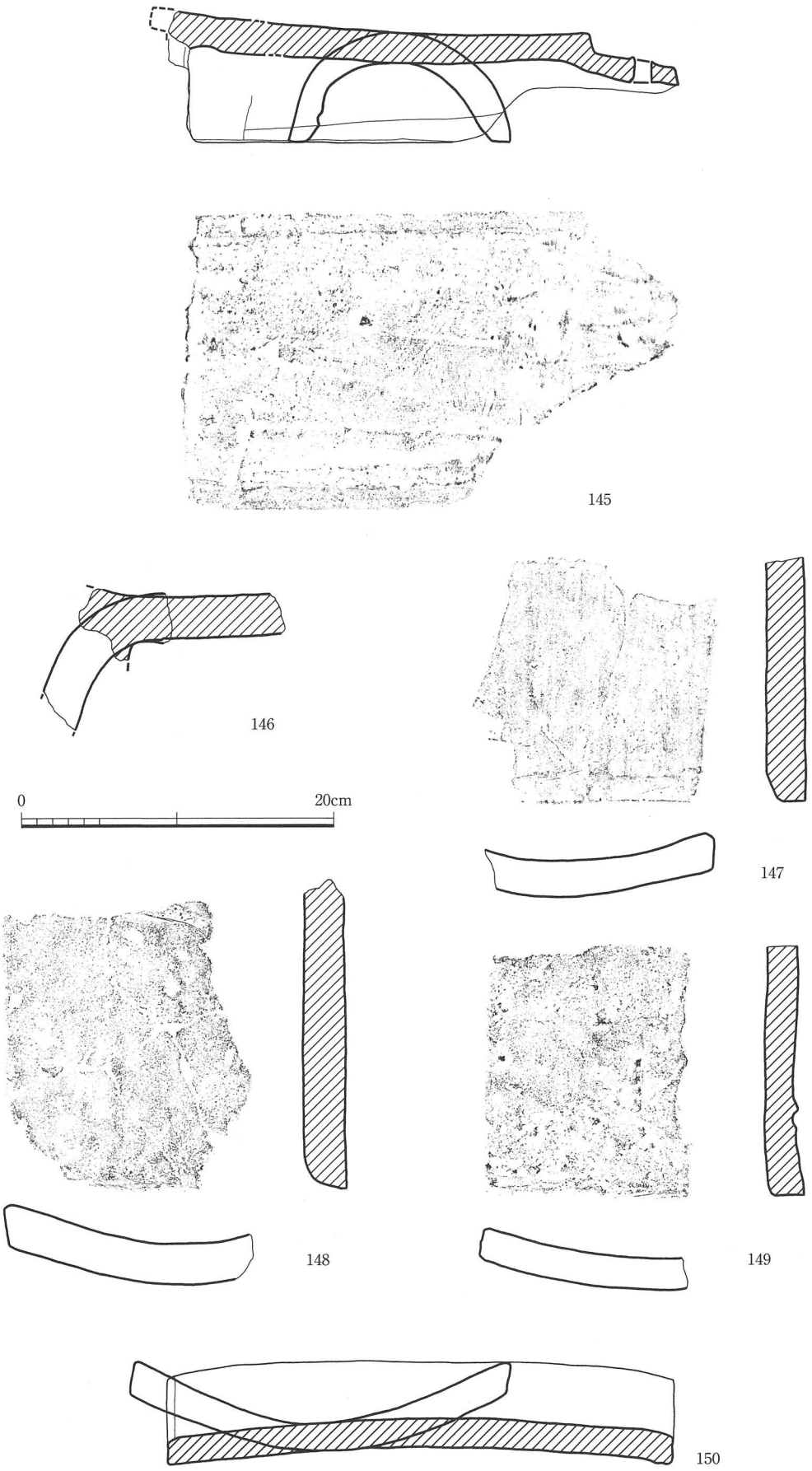
石垣の裏込め土である埋土から、叩き石(118)、土師質皿(119～122)、白磁碗(123)、瓦質土釜(124～132)・擂鉢(133)・火鉢(134)、軒丸瓦(135～138)、丸瓦(139)、軒平瓦(140・141)、鉄釘(142～144)など多くの遺物が出土した。

（６）窯

［ＳＹ１］(第45・46図、図版14)

調査区下段で検出した。検出長2.71m、幅1.49m、主軸Ｎ－82°－Ｗの範囲で、多くの瓦

第45図　ＳＹ１遺構実測図（1/30）

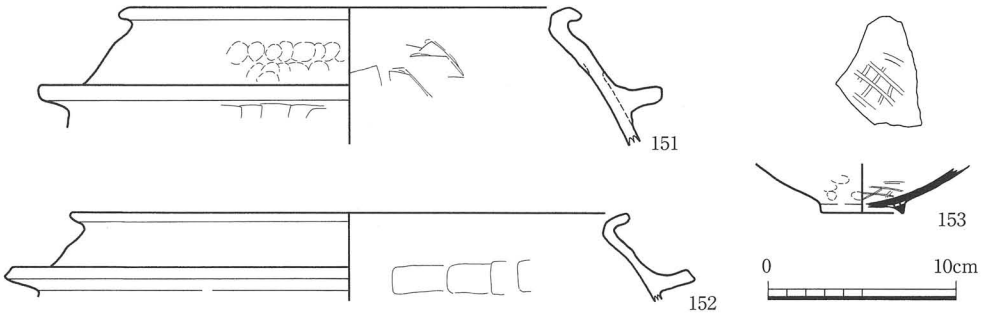


第46図　ＳＹ１出土遺物実測図

を検出した。その他にも0.1～0.4mの石や、窯壁と思われるスサ入り粘土塊なども多く見られた。出土した瓦は、丸瓦(145・146)や平瓦(147～150)であるが、その中にスサ入りの粘土ブロックと癒着しているものもあることから、当遺構は瓦窯と考えられる。窯の構造は、削平が著しく不明であるが、検出面の高さがほぼ水平であることから、平窯と考えられる。

（7）第1包含層(第47図)

須恵器、瓦器、土師質土器、土師質土釜、陶器などの遺物が出土したが、細片が多く図化できるものは少なかった。その中でも土師質土釜(151・152)、瓦器埦片(153)の出土が多く、他のものは極僅かである。



第47図　第Ⅰ－3調査区第1包含層出土遺物実測図

2．第2面(第49図)

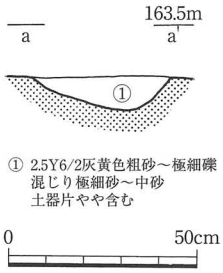
第2面は、調査区各段差の東側に堆積していた暗オリーブ褐色層を除去した面である。遺構は、土坑、ピット、溝を検出した。焼土坑が多く見られ、第1面の土坑との関係が問題になるが、層序関係を重視して、面を認識したため、遺構の同時性等に関しては後述する。

（1）溝

[ＳＤ９](第48図)

調査区上段北端で検出した。北東方向に伸びる溝で、主軸Ｎ－55°－Ｅ、長さ8.5m、幅0.5mを測る。耕作に関する溝と思われる。

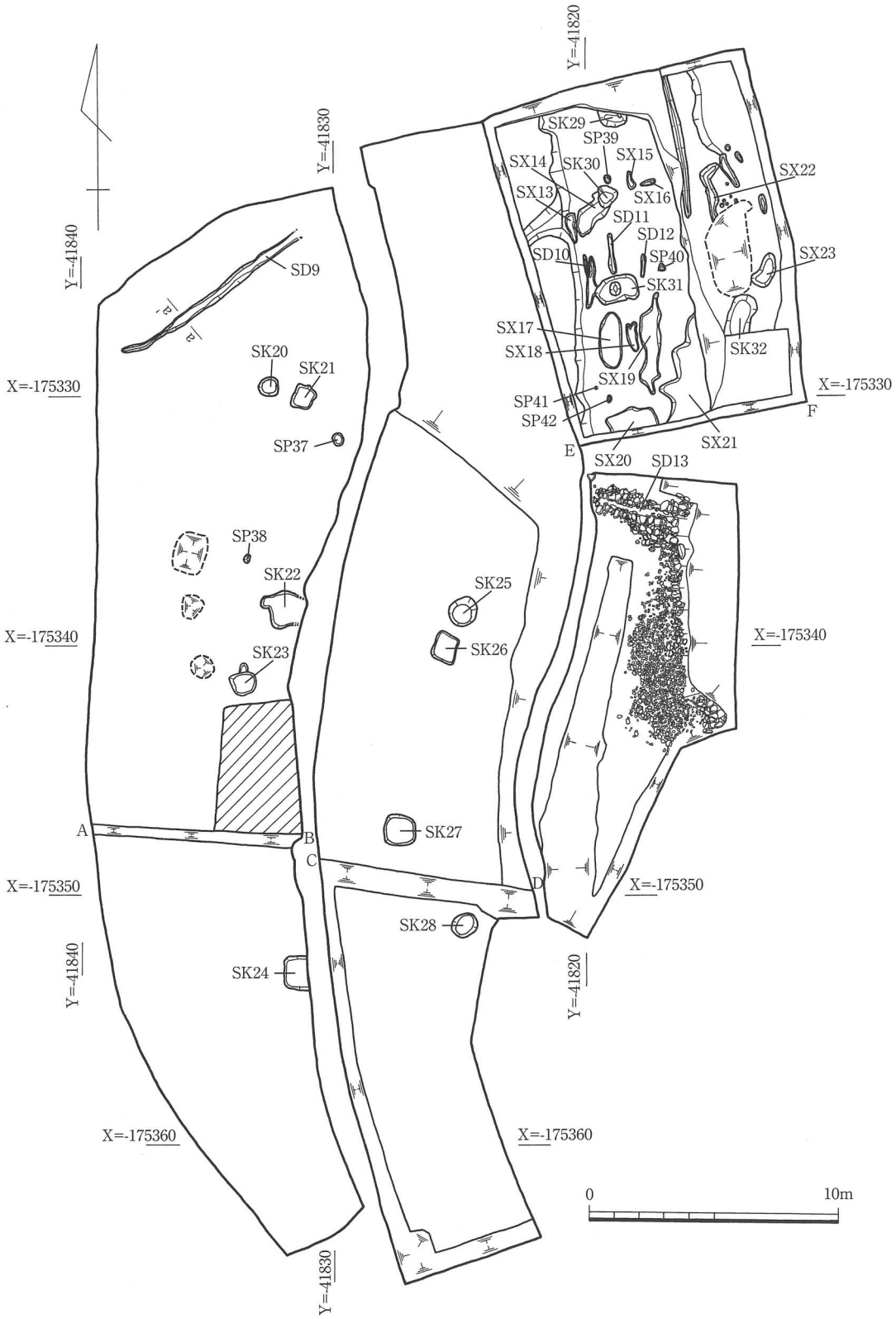
遺物は土師質土器や瓦質土器、瓦片が出土したが、細片のため実測できなかった。



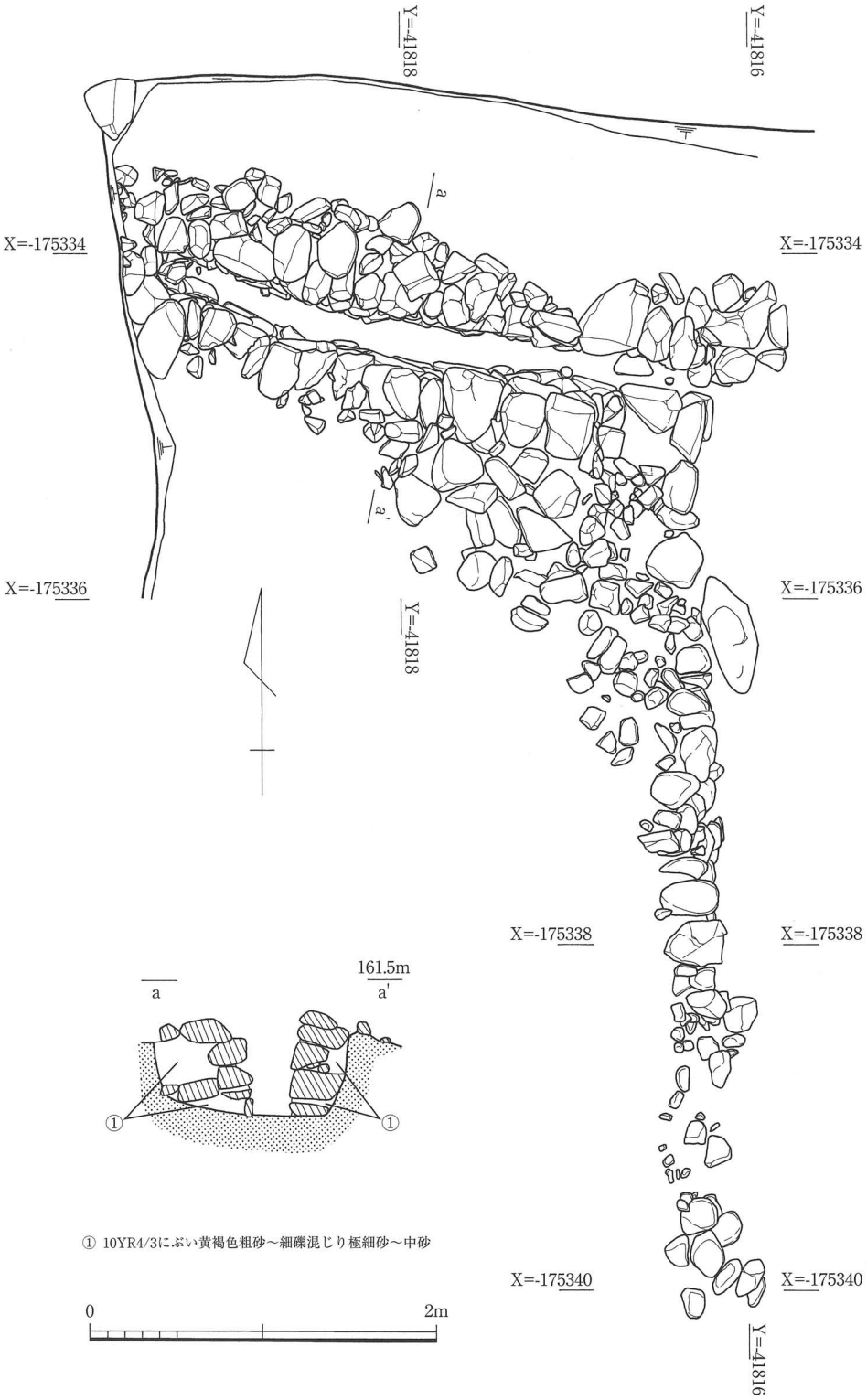
第48図　ＳＤ９遺構断面実測図（1/20）

[ＳＤ13](第50・51図、図版45)

調査区下段で検出した。東西方向に伸びる溝で、主軸Ｎ－81°－Ｗ、検出長3.35m、幅1.12mを測る。0.2～0.5mの石を4段ほど積み上げ、幅0.2～0.25m、深さ0.6m程の溝を構築している。この溝の南面の石組みは、東に伸びた後、主軸をＮ－3°－Ｗに変え、南に5.35m伸びる。また、東面をそろえて石組みが設置されている。遺構の東側は、現代の撹乱により削られているが、現在



第49図　第Ⅰ－3調査第2面遺構配置図（1/250）

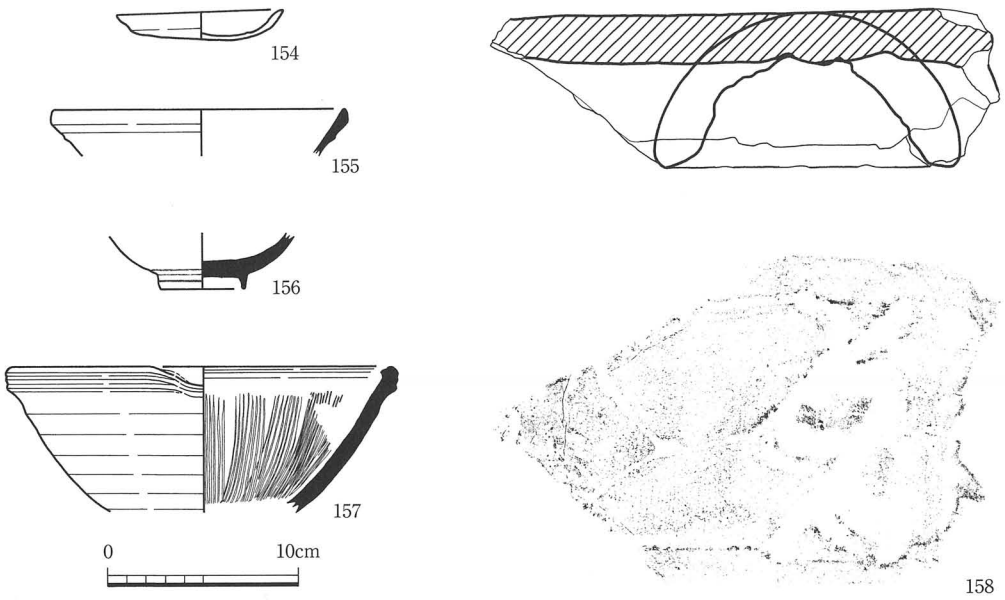


第50図　ＳＤ13遺構実測図（1/40）

の耕作地がこの地点以東、平坦になることから、この石組みは、近世以降の耕作地の段差を区画したものと思われる。

溝内より土師質皿(154)、白磁碗(155)、磁器染付碗(156)、陶器擂鉢(157)、丸瓦(158)などが出土した。

そして、さらに南側には拳大～人頭大の石が南北約6.5m、東西約2.5mの範囲で大量に



第51図　ＳＤ13出土遺物実測図

検出された。これに伴う遺物が出土しなかったので、この石群の構築された時期は不明だが、石組みとは使用されている石材の大きさが違うこと、平面的な分布で構造的に異なることから、ＳＤ13とは別の遺構と考えられる。第Ｉ－１調査区で検出したＳＷ１と同様の石敷きとも考えられるが、それに比べると石材も大きく、均一の石を使用していない。ＳＷ１の南側は、後世の撹乱により石敷きが大きく乱れていたが、この石群もそのようなものの可能性がある。

（２）土坑

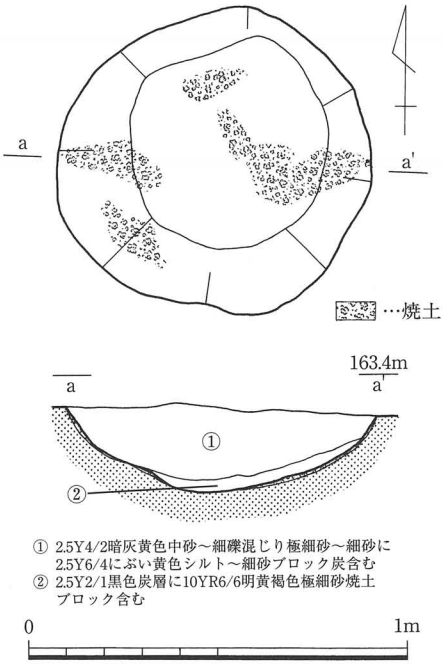
［ＳＫ20］（第52図、図版17）

調査区上段で検出した。平面形はほぼ円形で、長軸0.83ｍ、短軸0.75ｍ、深さ0.24ｍを測る。埋土下層に炭層があり、土坑底部には所々焼土が見られる。調査時の精査で削れるほどの焼土であるため、本来は全体に見られたと思われるが、強く焼けているものではない。

遺物は出土しなかった。

［ＳＫ21］（第53図、図版18）

調査区上段で検出した。平面形はほぼ方形で、長軸0.97ｍ、短軸0.87ｍ、深さ0.15ｍを測る。北側と東側辺に突出部を持つ。埋土下層に炭層があるが、北東側（突出部側）にかたよって堆積している。焼土は、側面に部分的に見られる程度である。



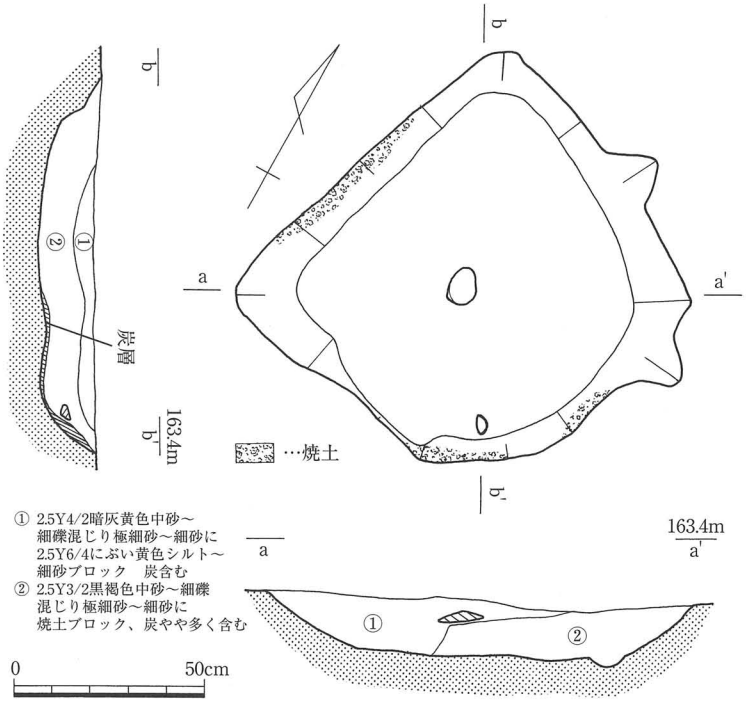
第52図　ＳＫ20遺構実測図（1/20）

遺物は出土しなかった。

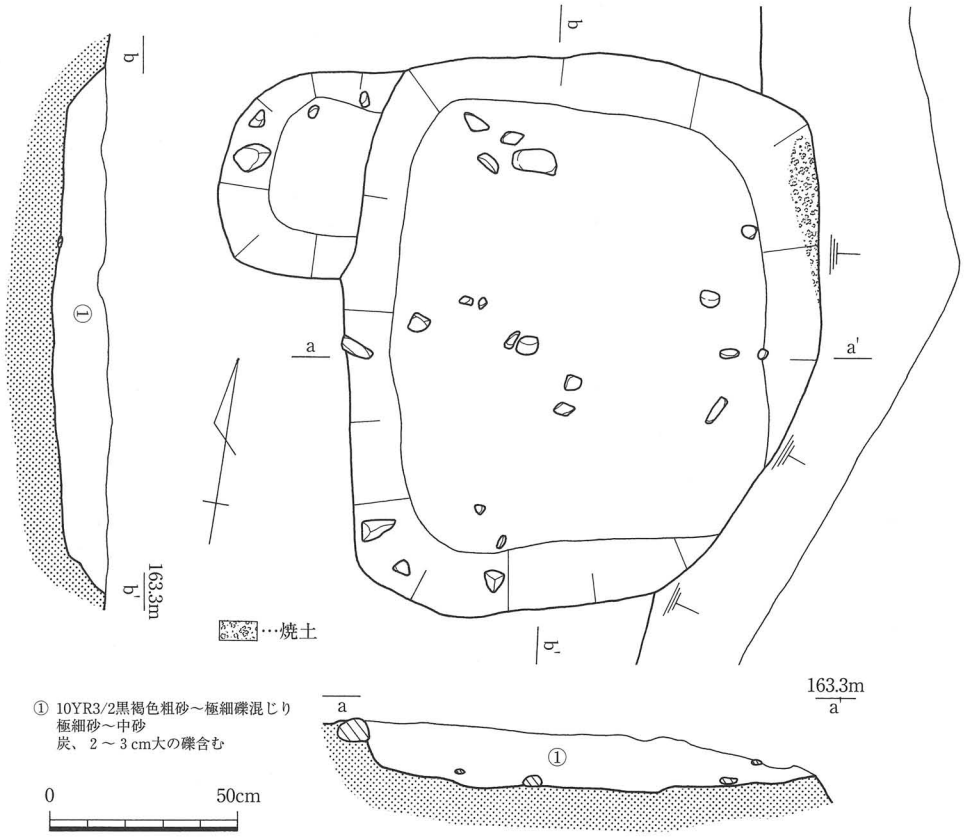
［ＳＫ22］（第54図）

調査区上段で検出した。平面形は方形で、南北1.47m、東西1.14～1.58m、深さ0.15mを測る。炭は底部に見られ、焼土は、北東部・南西部を中心に側面・底部に見られる。東側は若干削られ、西側に突出部を持つ。突出部は、炭層が見られないため、別の遺構である可能性がある。

遺物は出土しなかった。



第53図　ＳＫ21遺構実測図（1/20）



第54図　ＳＫ22遺構実測図（1/20）

［ＳＫ23］（第55図）

調査区上段で検出した。平面形は不定形で、南北1.22m、東西1.17m、深さ0.17mを測る。北側に突出部を持つ。炭は底部中央付近に見られ、焼土は、全体的に見られるが、側面上部がよく焼けている。

遺物は出土しなかった。

［ＳＫ24］（第56図）

調査区上段で検出した。平面形は方形で、東側が削られ正確な規模は不明だが、長軸1.36m、短軸0.8m以上、深さ0.2mを測る。炭層は北西部にかたよって見られる。焼土は全体的に見られるが、側面や北西部がよく焼けている。

遺物は須恵器片や瓦器片が出土したが、細片のため実測できなかった。

［ＳＫ25］（第57図）

調査区中段で検出した。平面形は円形で、長軸1.15m、短軸1.1m、深さ0.2mを測る。埋土に炭が多く含まれている。焼土は見られなかった。

遺物は出土しなかった。

［ＳＫ26］（第59図）

調査区中段で検出した。平面形は方形で、長軸1.05m、短軸0.9m、深さ0.07mを測る。南側にはやや円形の突出部を持つ。焼土は、突出部を含め全体に見られる。

遺物は出土しなかった。

［ＳＫ27］（第60図、図版19）

調査区中段で検出した。平面形は隅丸方形で、長軸1.25m、短軸1.2m、深さ0.16mを測る。炭は底部全体に見られる。焼土は、南西隅と中央部がよく焼けている。

遺物は出土しなかった。

［ＳＫ28］（第58図、図版17）

調査区中段で検出した。平面形は楕円形で、長軸1.06m、短軸0.9m、深さ0.28mを測る。炭は底部全体に多く見られる。焼土は土坑全体に見られ、非常によく焼けている。

遺物は瓦器片、瓦質土器片、土師質土器片が出土したが、細片のため実測できなかった。

［ＳＫ29］（第61図）

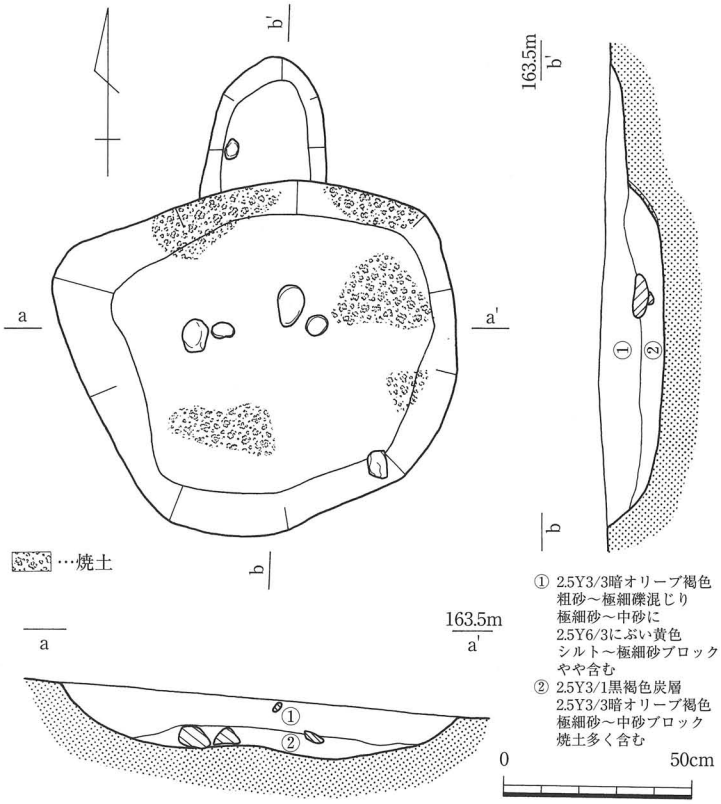
調査区下段で検出した。平面形は北側が削られているため不明であるが、検出長1.14m、幅0.56m、深さ0.35mを測る。炭が全体に見られる。

遺物は出土しなかった。

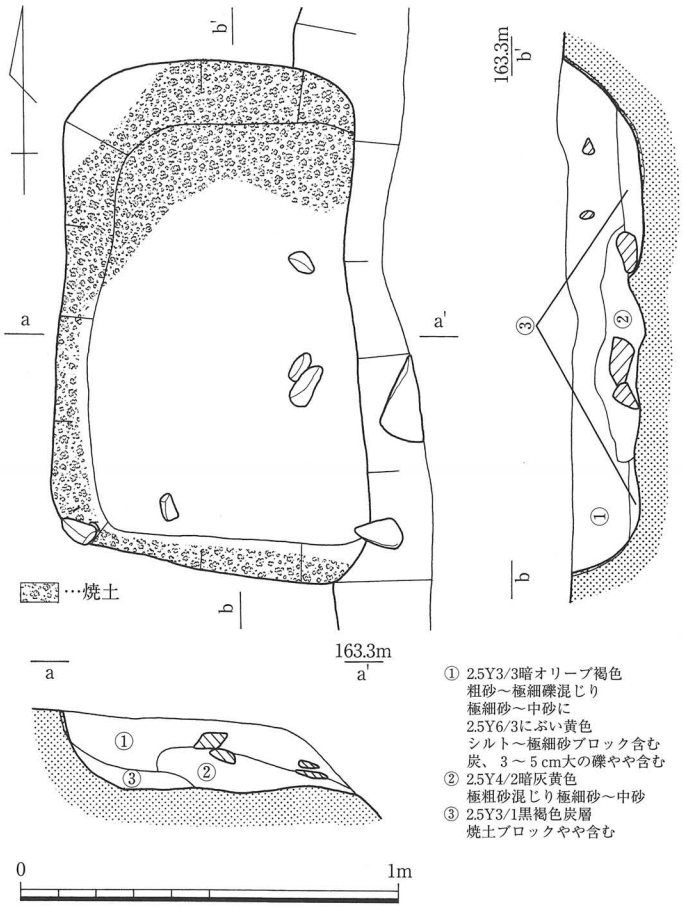
［ＳＫ30］（第61図）

調査区下段で検出した。平面形は不定形で、長軸0.85m、短軸0.63m、深さ0.17mを測る。炭は底部全体に見られるが、焼土は見られなかった。

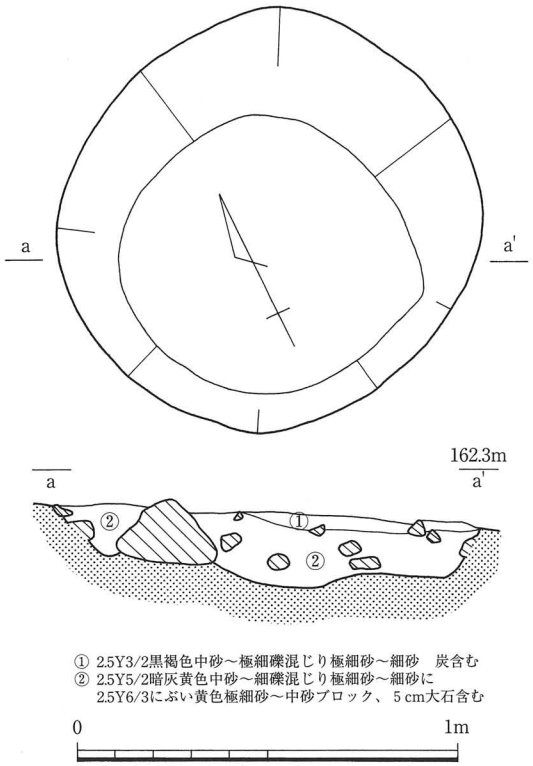
遺物は出土しなかった。



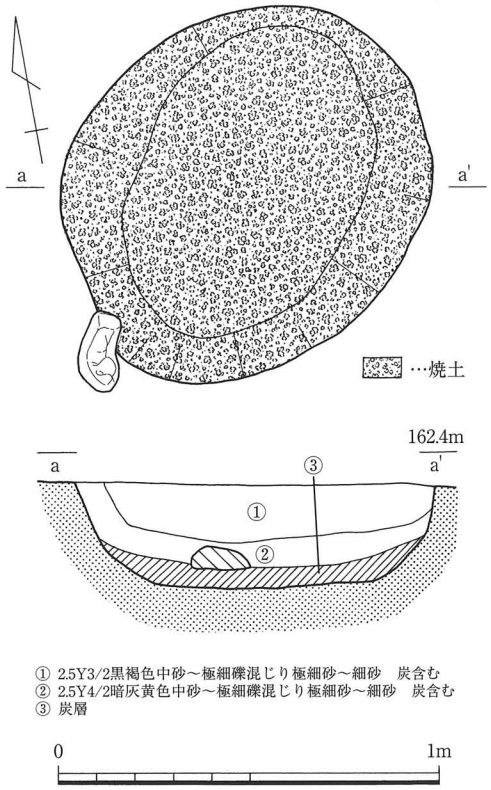
第55図　ＳＫ23遺構実測図（1/20）



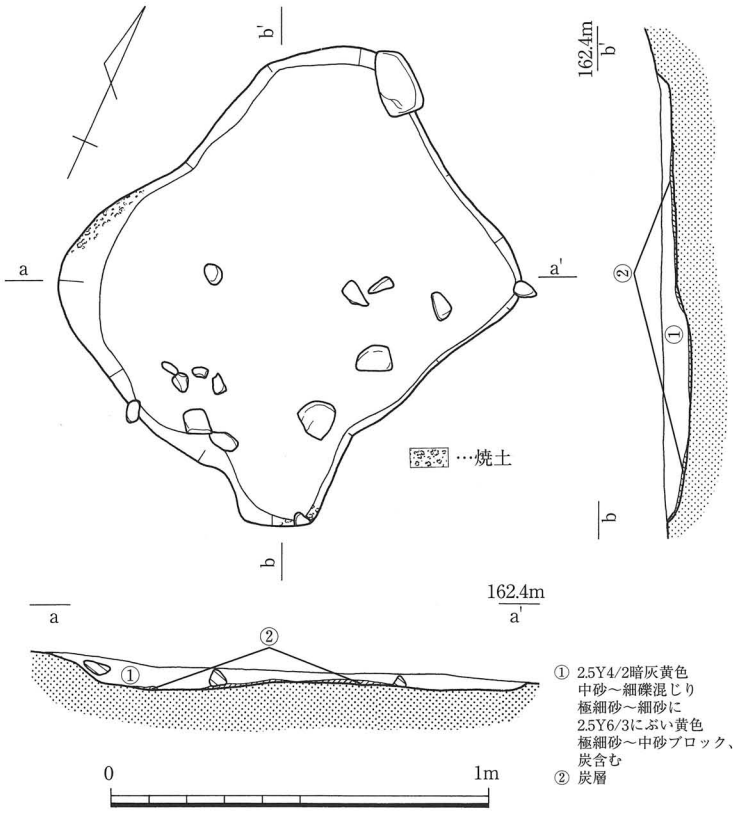
第56図　ＳＫ24遺構実測図（1/20）



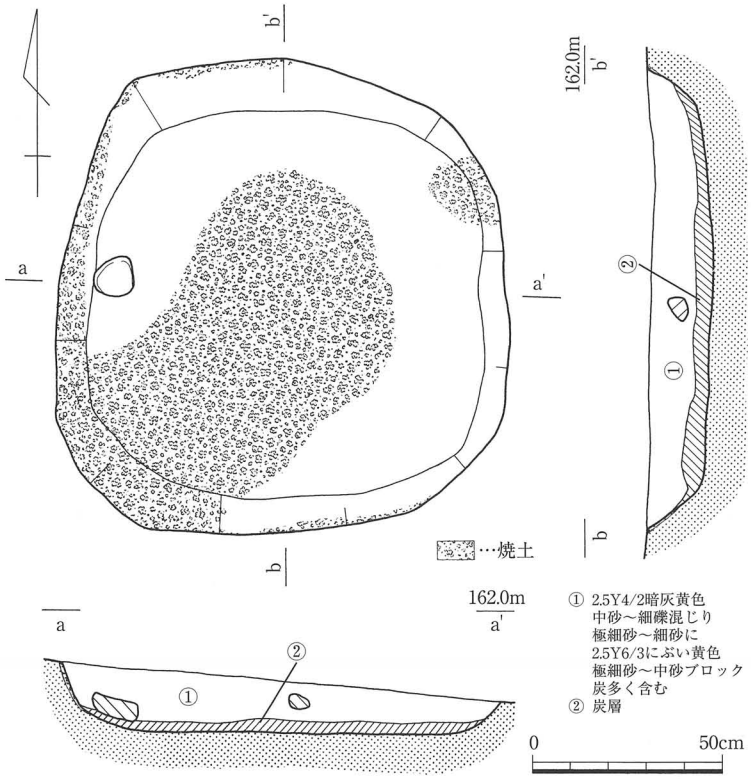
第57図　ＳＫ25遺構実測図（1/20）



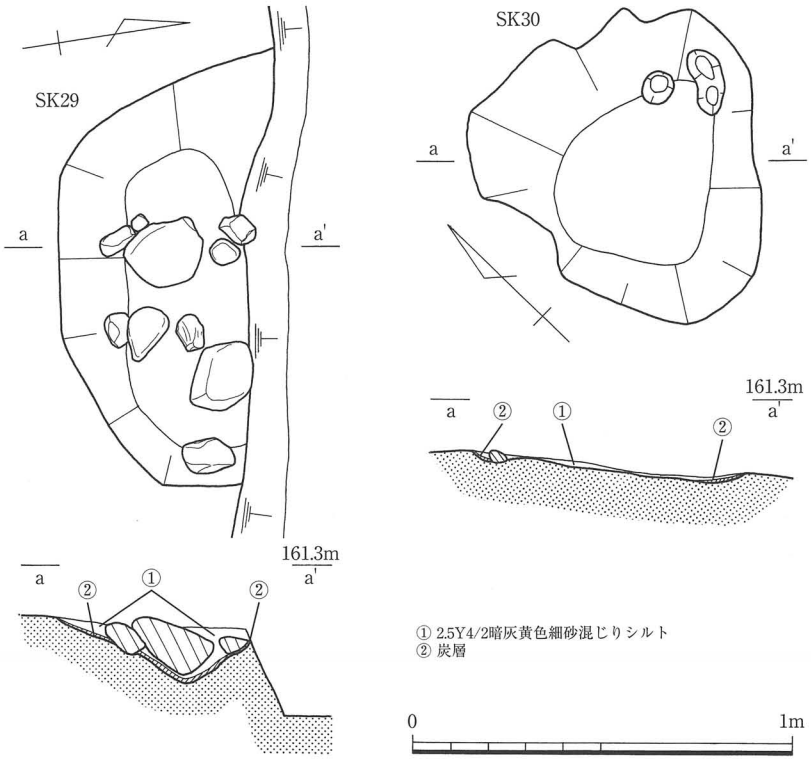
第58図　ＳＫ28遺構実測図（1/20）



第59図　ＳＫ26遺構実測図（1/20）



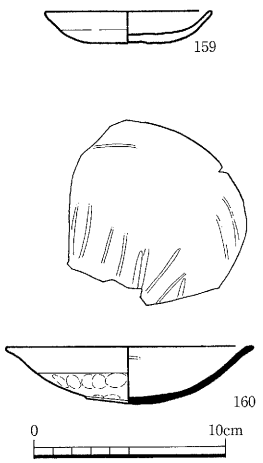
第60図　ＳＫ27遺構実測図（1/20）



第61図　ＳＫ29・30遺構実測図（1/20）

（3）第2包含層（第62図、図版45）

調査区各段差の東側に堆積していた暗オリーブ褐色層からの遺物で、出土量は多くないが、土師質皿（159）、瓦器椀（160）など図示できた。（160）は、口径12.7cm、全体が著しく歪んでいるが、器高3.1cmを測る。体部外面は指おさえ後ナデ調整され、内面はヘラミガキが若干見られる。高台は形骸化しており、高台のつく最終形態である。尾上編年のⅣ－2期に相当する。



第62図　第Ⅰ－3調査区
第2包含層出土遺物実測図

第５節　まとめ　～各調査区の遺構面の対応関係について～

各調査区の層序については前述したが、第Ⅰ－１調査区での第１・２面と第Ⅰ－２・３調査区の第１・２面の対応関係は、層序からは不明である。ここでは、検出した遺構や遺物からそれらを考える。また、遺構や遺跡の性格については、第４章でまとめているのでそちらをご覧いただきたい。

【第Ⅰ－１調査区】

第１面は、現代耕土・旧耕土を除去した面で、遺構も暗渠や耕作溝、土坑だけであった。つまり、この地域が耕作地として利用されて以降の遺構面と認識できる。また、ＳＫ１からは炭や焼土が確認されているが、埋土に旧耕土を含むため、掘削されたのは耕作溝と同時期かそれ以降となる。

次に第２面であるが、オリーブ黒色シルト層を除去した地山面であり、包含層から瓦器埦やサヌカイト、縄文土器片などが出土しているが、大半が瓦器埦であり、尾上編年のⅡ～Ⅳ期にかけてのものである。したがって、この面の廃絶は14世紀頃と考えられる。

【第Ⅰ－２調査区】

西側（上段）は、第１面で暗渠などを検出しており、耕作地に変わって以降のものと考えられる。第２面は遺構を検出しておらず、層序的にも対応しないため、不明である。それに対して東側（下段）の第１面は、耕作に関連すると思われるＳＤ５～７、上段と下段との境にある石垣の痕跡であるＳＸ９、調査区東側にある石垣の裏込めの落込みＳＸ10など、耕作地や現存の景観に続く遺構が検出されている。それに加え、ＳＷ２やその周辺のピットは、Ⅳ期の瓦器埦が出土しており、中世の遺構である。さらに詳しく見ると、ＳＷ２からはⅣ－４期の瓦器埦が多く出土しており、遺構の廃絶は14世紀後半頃と思われる。また、ピットからはⅣ－２期の瓦器埦が出土している。このことから東側の第１面は、耕作に関連する時期（近世以降）と、中世（Ⅳ－２期とⅣ－４期）の３時期の遺構が確認される面といえる。

次に第２面は、調査区東側に堆積していた暗オリーブ褐色層を除去した面で、杭列などを検出した。杭列が設置された時期は不明だが、この除去した層は、炭や焼土を含む人為的な堆積層でⅢ期～Ⅳ－４期の瓦器埦が出土するため、14世紀後半頃に埋められたと考えられる。そして、そのすぐ後にＳＷ２が構築され、さらに時間を置かずに再び埋没したもと推測される。

【第Ⅰ－３調査区】

第１面と第２面は、部分的に堆積している暗オリーブ褐色層上面と下面で検出した。中段北側のＳＰ32～34のピットやＳＫ17・18などは、近世以降の遺構と思われる。遺物が出土していないため詳細は不明だが、この地点の小字名が「鳥居前」であることから、当調査区西側周辺に位置する牛頭天王宮と関連する遺構と考えられる。また、上段西側の地山面で確認した焼土坑のＳＫ14～16などは、形状や埋土などから第２面の焼土坑群と同時期の可能性がある。

第２面は、ＳＫ24やＳＫ28などから瓦器片が出土しており、暗オリーブ褐色層からはⅣ－２期の瓦器椀も出土している。このことから第Ⅰ－２調査区の第２面と同一面と考えられるが、それぞれの焼土坑の時期を特定する材料が少ないため、すべての遺構が同時期とは決めがたい。熱残留時期測定の結果は、ＳＫ28が、1150年±50年とあり、多少のずれがあるものの土器の年代と近いが、ＳＫ24の測定時期は７世紀とある。土坑の詳細な検討については、後述するが、測定結果にもばらつきが見られるため、遺構の時期については検討を要する。

【遺構面の対応関係と時期】

以上のことから、各調査区の検出遺構と、層序関係、遺構面の対応を整理すると、第７図のようになる。第１面は、調査地周辺が耕作地となって以降と思われ、各調査区で対応する。それに対して、第Ⅰ－１調査区の第２面は、包含層よりⅡ～Ⅳ期の瓦器椀が出土しており、12～14世紀の堆積と考えられる。検出した石敷き遺構（ＳＷ１）は、14世紀には埋没していると考えられるが、埋没した詳細な時期が特定できないため、第Ⅰ－２調査区のどの中世遺構面と対応するかは不明である。つまり、第Ⅰ－２区の東側（下段）の認識が問題となる。つまり、第１面で検出したＳＷ２は、14世紀後半頃に埋められているが、同じ面で検出したピットは14世紀前半頃のものである。また、第２面は同じく14世紀後半頃に埋められている。つまり、14世紀代に複数回の土地利用の改変が行われたのである。

この改変については、埋土に焼土・炭を含むことから、14世紀代にこの地域で数多く行われた南北朝の戦乱の復旧によるものと考えられる。この時期の戦いについては第１章第２節を参照されたいが、延元２年・建武４年（1337）の東条合戦、正平４年（1349）の仁王山合戦、正平15年（1360）の天野合戦などが、その候補である。明確にどの戦いによる復旧かを指摘することは難しいが、1360年の天野合戦が最後の戦いとすると、この戦いによる復旧により、ＳＷ２が埋められたと考えることも可能である。また、短期間のうちの土地利用の改変も、戦乱の復旧によるものとすれば理解しやすい。

福田

調査区	検出面	遺構名	種類	地区名	平面形	規模（m）		出土遺物種類								
						平面	深さ	須	土質	瓦器	瓦質	須質	陶磁	瓦	石製	鉄製
Ⅰ－1	1面	ＳＤ１	溝	Ⅰ-Ｍ-ｊ5,6		15上×1.2	0.5									
Ⅰ－1		ＳＤ２	溝	Ⅰ-Ｍ-ｉ4,5		10上×1.1	0.15		○	○						
Ⅰ－1		ＳＤ３	溝	Ⅰ-Ｎ-ｂ7		2上×1.5	0.3									
Ⅰ－1		ＳＫ１	土坑	Ⅰ-Ｈ-ｆ9	方	1.3×1.2	0.2									
Ⅰ－1		ＳＫ２	土坑	Ⅰ-Ｈ-ｆ9	方	1.15×0.98	0.3									
Ⅰ－1		ＳＰ１	ピット	Ⅰ-Ｈ-ｅ8	円	径0.5	0.14									
Ⅰ－1		ＳＰ２	ピット	Ⅰ-Ｈ-ｅ8	楕円	0.47×0.32	0.04									
Ⅰ－1	2面	ＳＫ３	土坑	Ⅰ-Ｍ-ｈ1	隅丸方	1.28×1.15	0.14									
Ⅰ－1		ＳＫ４	土坑	Ⅰ-Ｍ-ｉ2	楕円	0.58×0.5	0.18		○	○						
Ⅰ－1		ＳＫ５	土坑	Ⅰ-Ｍ-ｉ3	隅丸方	0.79×0.7	0.32		○	○					○	
Ⅰ－1		ＳＫ６	土坑	Ⅰ-Ｍ-ｉ4	隅丸方	1.78×1.52	0.3									
Ⅰ－1		ＳＫ７	土坑	Ⅰ-Ｎ-ｂ9	隅丸方	1.0×0.9	0.07			○						
Ⅰ－1		ＳＫ８	土坑	Ⅰ-Ｎ-ｂ9	楕円	1.87×0.96	0.42									
Ⅰ－1		ＳＰ３	ピット	Ⅰ-Ｈ-ｆ10	円	0.34×0.3	0.09									
Ⅰ－1		ＳＰ４	ピット	Ⅰ-Ｈ-ｇ10	楕円	0.24×0.19	0.16									
Ⅰ－1		ＳＰ５	ピット	Ⅰ-Ｈ-ｇ10	楕円	0.40×0.25	0.04									
Ⅰ－1		ＳＰ６	ピット	Ⅰ-Ｈ-ｇ10	不定	0.22×0.17	0.05									
Ⅰ－1		ＳＰ７	ピット	Ⅰ-Ｍ-ｇ1	楕円	0.24×0.20	0.13									
Ⅰ－1		ＳＰ８	ピット	Ⅰ-Ｍ-ｇ1	楕円	0.22×0.16	0.04									
Ⅰ－1		ＳＰ９	ピット	Ⅰ-Ｍ-ｈ1	円	径0.4	0.05									
Ⅰ－1		ＳＰ10	ピット	Ⅰ-Ｍ-ｉ2	楕円	0.32×0.26	0.1									
Ⅰ－1		ＳＰ11	ピット	Ⅰ-Ｍ-ｈ2	楕円	0.34×0.27	0.14									
Ⅰ－1		ＳＰ12	ピット	Ⅰ-Ｍ-ｈ2	円	径0.32	0.09									
Ⅰ－1		ＳＰ13	ピット	Ⅰ-Ｍ-ｉ2	楕円	0.43×0.36	0.1									
Ⅰ－1		ＳＰ14	ピット	Ⅰ-Ｍ-ｉ2	楕円	0.32×0.27	0.05									
Ⅰ－1		ＳＰ15	ピット	Ⅰ-Ｍ-ｉ2	円	径0.22	0.04									
Ⅰ－1		ＳＰ16	ピット	Ⅰ-Ｍ-ｉ3	楕円	0.47×0.3	0.1									
Ⅰ－1		ＳＰ17	ピット	Ⅰ-Ｍ-ｉ4	円	径0.14	0.09									
Ⅰ－1		ＳＰ18	ピット	Ⅰ-Ｍ-ｉ4	円	径0.18	0.08									
Ⅰ－1		ＳＰ19	ピット	Ⅰ-Ｍ-ｉ4	円	径0.21	0.1									
Ⅰ－1		ＳＸ１	落込み	Ⅰ-Ｍ-ｈ1	不定											
Ⅰ－1		ＳＸ２	落込み	Ⅰ-Ｍ-ｉ3	不定	1.38×0.45	0.19									
Ⅰ－1		ＳＸ３	落込み	Ⅰ-Ｍ-ｊ3	楕円	0.3×0.18	0.08									
Ⅰ－1		ＳＸ４	落込み	Ⅰ-Ｍ-ｊ4	楕円	0.3×0.25	0.24									
Ⅰ－1		ＳＸ５	落込み	Ⅰ-Ｍ-ｊ4	不定	0.85×0.31	0.04									
Ⅰ－1		ＳＸ６	落込み	Ⅰ-Ｍ-ｊ4	不定	1.12×0.65	0.18									
Ⅰ－1		ＳＸ７	落込み	Ⅰ-Ｍ-ｊ4	不定	0.94×0.41	0.11									
Ⅰ－1		ＳＸ８	落込み	Ⅰ-Ｍ-ｉ5	方	0.68×0.46	0.09									
Ⅰ－1		ＳＷ１	石敷き	Ⅰ-Ｎ-ａ,ｂ7		12～13×10		○	○	○						
Ⅰ－2	1面	ＳＤ４	暗渠	Ⅰ-Ｎ-ｄ9,10	不定	8.4×1.2	0.17		○	○	○		○	○		
Ⅰ－2		ＳＤ５	溝	Ⅰ-Ｎ-ｃ10		7.2×0.4										
Ⅰ－2		ＳＤ６	溝	Ⅰ-Ｎ-ｂ10		7.7×0.3	0.25									
Ⅰ－2		ＳＤ７	溝	Ⅰ-Ｓ-ｂ,ｃ1		8.2×0.9	0.08			○						
Ⅰ－2		ＳＫ９	土坑	Ⅰ-Ｎ-ｃ9,10	不定	14.6×3.7	0.28									
Ⅰ－2		ＳＫ10	土坑	Ⅰ-Ｓ-ｄ1	隅丸長	6.2×1.4	0.3									
Ⅰ－2		ＳＫ11	土坑	Ⅰ-Ｓ-ｂ2	円？	0.95×0.42上	0.24									
Ⅰ－2	2面	ＳＫ12	土坑	Ⅰ-Ｎ-ｃ10	不定	1.9×1.75上	0.25									
Ⅰ－2		ＳＫ13	土坑	Ⅰ-Ｓ-ｃ1	不定	1.7×1.3	0.4									
Ⅰ－2	1面	ＳＰ20	ピット	Ⅰ-Ｓ-ｂ1	円	径0.6	0.09			○						
Ⅰ－2		ＳＰ21	ピット	Ⅰ-Ｓ-ｃ1	円	径0.15	0.04			○						
Ⅰ－2		ＳＰ22	ピット	Ⅰ-Ｓ-ｂ2	円	径0.22	0.07		○							
Ⅰ－2		ＳＰ23	ピット	Ⅰ-Ｓ-ｃ1	円	径0.65	0.32		○	○						
Ⅰ－2		ＳＰ24	ピット	Ⅰ-Ｓ-ｃ1	楕円	0.61×0.54	0.11									
Ⅰ－2		ＳＰ25	ピット	Ⅰ-Ｓ-ｃ2	不定	0.5×0.45	0.24			○						
Ⅰ－2		ＳＰ26	ピット	Ⅰ-Ｓ-ｃ2	不定	0.63×0.56	0.29									
Ⅰ－2		ＳＰ27	ピット	Ⅰ-Ｓ-ｂ2	円	0.4×0.32	0.22			○						
Ⅰ－2		ＳＰ28	ピット	Ⅰ-Ｓ-ｂ2	円	径0.69	0.05									
Ⅰ－2		ＳＰ29	ピット	Ⅰ-Ｓ-ｂ2	楕円	0.24×0.19	0.17									
Ⅰ－2		ＳＰ30	ピット	Ⅰ-Ｓ-ｂ2	円	径0.38	0.11									
Ⅰ－2		ＳＰ31	ピット	Ⅰ-Ｓ-ｂ2	円	径0.4	0.09			○						
Ⅰ－2		ＳＸ９	落込み	Ⅰ-Ｓ-ｃ1,2	不定	14.5×1.8	0.1		○	○						
Ⅰ－2		ＳＸ10	落込み	Ⅰ-Ｓ-ｂ1他	不定	47×2.5上			○	○	○	○	○	○		
Ⅰ－2		ＳＷ２	石組み	Ⅰ-Ｓ-ｂ1,2	不定	6.5上×4.5			○	○	○	○				
Ⅰ－2	2面	ＳＡ１	杭列	Ⅰ-Ｓ-ｂ1		11×3										
Ⅰ－3	1面	ＳＤ8	暗渠	Ⅰ-Ｓ-ｂ3		2.9×0.9								○		
Ⅰ－3		ＳＫ14	土坑	Ⅰ-Ｓ-ｄ4	長方	1.6×1.23	0.25									
Ⅰ－3		ＳＫ15	土坑	Ⅰ-Ｓ-ｄ4	不定	0.97×0.79	0.1									
Ⅰ－3		ＳＫ16	土坑	Ⅰ-Ｓ-ｄ5	円	0.95×0.9	0.12									
Ⅰ－3		ＳＫ17	土坑	Ⅰ-Ｓ-ｃ3	不定	1.22×1.10	0.13									
Ⅰ－3		ＳＫ18	土坑	Ⅰ-Ｓ-ｃ3	楕円	0.87×0.49	0.05									

第３表　第Ⅰ調査区遺構計測表

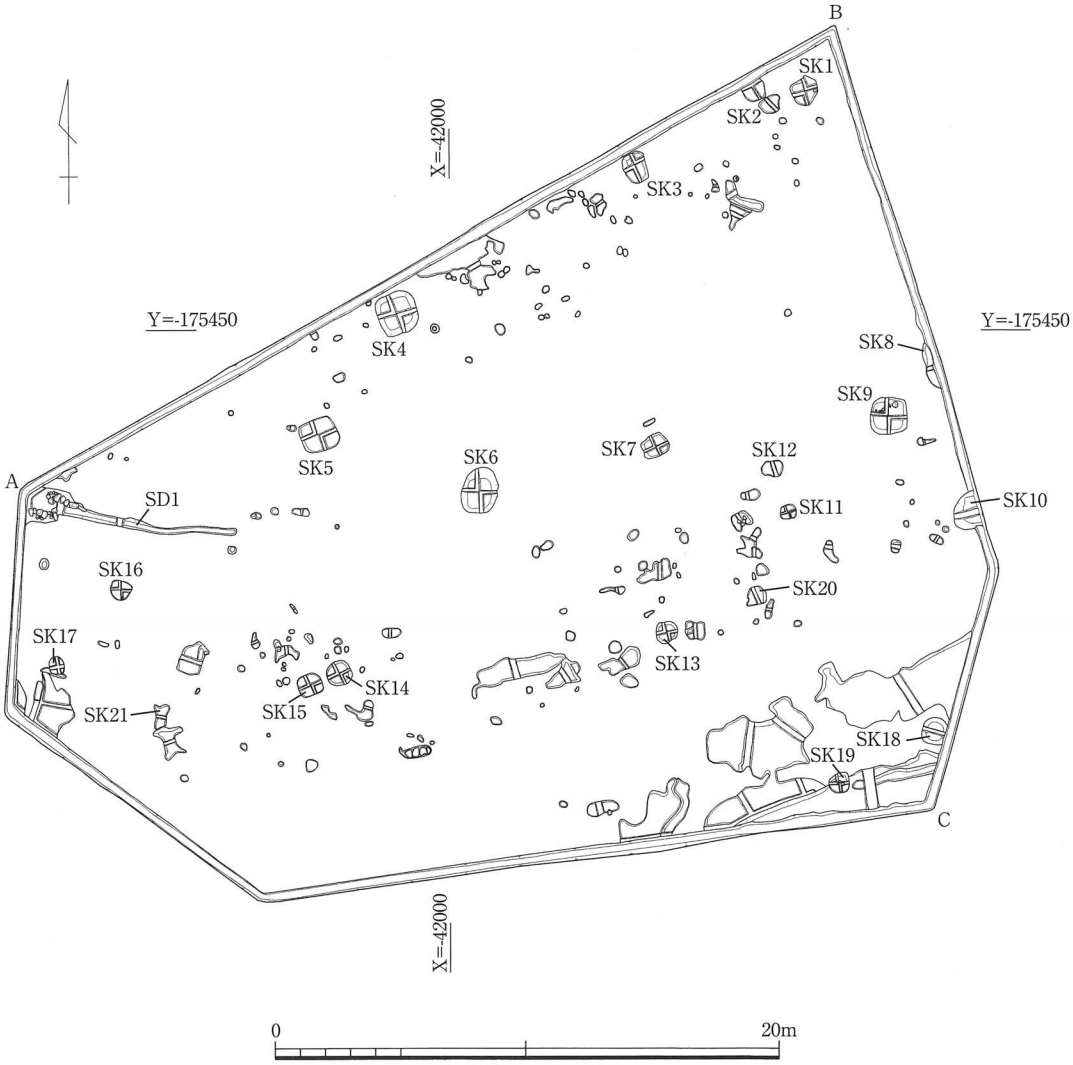
調査区	検出面	遺構名	種類	地区名	平面形	規模（m）										
						平面	深さ	須	土質	瓦器	瓦質	須質	陶磁	瓦	石	鉄
Ⅰ－3	1面	SK19	土坑	Ⅰ-S-c6	不定	2.38×2.2	0.56									
Ⅰ－3		SP32	ピット	Ⅰ-S-c3	楕円	0.34×0.26	0.04									
Ⅰ－3		SP33	ピット	Ⅰ-S-c3	楕円	0.47×0.31	0.04									
Ⅰ－3		SP34	ピット	Ⅰ-S-c3	楕円	0.4×0.34	0.04									
Ⅰ－3		SP35	ピット	Ⅰ-S-c7	円	径0.25	0.35									
Ⅰ－3		SP36	ピット	Ⅰ-S-c7	楕円	0.44×0.32	0.23									
Ⅰ－3		SW3	石列	Ⅰ-S-b3		4.87×0.6	0.54									
Ⅰ－3		SX11	落込み	Ⅰ-S-b3	不定	12.18×4.17	0.62				○	○		○		
Ⅰ－3		SX12	落込み	Ⅰ-S-b2	不定				○		○		○	○	○	○
Ⅰ－3		SY1	窯跡	Ⅰ-S-b3	不定	2.71×1.49			○					○	○	
Ⅰ－3	2面	SD9	溝	Ⅰ-S-d3		8.5×0.5	0.1		○		○			○		
Ⅰ－3		SD10	溝	Ⅰ-S-b3		2.0×0.28	0.08									
Ⅰ－3		SD11	溝	Ⅰ-S-b3		1.56×0.28	0.03									
Ⅰ－3		SD12	溝	Ⅰ-S-b3		0.9×0.18	0.03									
Ⅰ－3		SD13	溝	Ⅰ-S-b4		3.35×1.12	0.61		○				○	○		
Ⅰ－3		SK20	土坑	Ⅰ-S-d3	円	0.83×0.75	0.24									
Ⅰ－3		SK21	土坑	Ⅰ-S-d3,4	方	0.97×0.87	0.15									
Ⅰ－3		SK22	土坑	Ⅰ-S-d4	方	1.58×1.47	0.15									
Ⅰ－3		SK23	土坑	Ⅰ-S-d5	不定	1.22×1.17	0.17									
Ⅰ－3		SK24	土坑	Ⅰ-S-d6	方	1.36×0.8上	0.2	○		○						
Ⅰ－3		SK25	土坑	Ⅰ-S-c4	円	1.15×1.1	0.2									
Ⅰ－3		SK26	土坑	Ⅰ-S-c4	方	1.05×0.9	0.07									
Ⅰ－3		SK27	土坑	Ⅰ-S-c5	隅丸方	1.25×1.2	0.16									
Ⅰ－3		SK28	土坑	Ⅰ-S-c6	楕円	1.06×0.9	0.28		○	○	○					
Ⅰ－3		SK29	土坑	Ⅰ-S-b2	円？	1.14×0.56上	0.35									
Ⅰ－3		SK30	土坑	Ⅰ-S-b3	不定	0.85×0.63	0.17									
Ⅰ－3		SK31	土坑	Ⅰ-S-b3	不定	1.76×0.96	0.3									
Ⅰ－3		SK32	土坑	Ⅰ-S-b3	不定	1.41×1.12	0.23									
Ⅰ－3		SP37	ピット	Ⅰ-S-c4	円	径0.5	0.15									
Ⅰ－3		SP38	ピット	Ⅰ-S-d4	楕円	0.43×0.27	0.09									
Ⅰ－3		SP39	ピット	Ⅰ-S-b3	楕円	0.36×0.25	0.52									
Ⅰ－3		SP40	ピット	Ⅰ-S-b3	三角	辺0.36	0.05									
Ⅰ－3		SP41	ピット	Ⅰ-S-b3	円	径0.15	0.06									
Ⅰ－3		SP42	ピット	Ⅰ-S-b3	楕円	0.26×0.17	0.04									
Ⅰ－3		SX13	不明	Ⅰ-S-b3	不定	1.22×0.25	0.13									
Ⅰ－3		SX14	不明	Ⅰ-S-b3	不定	1.44×0.81	0.16									
Ⅰ－3		SX15	不明	Ⅰ-S-b3	不定	0.72×0.18	0.11									
Ⅰ－3		SX16	不明	Ⅰ-S-b3	不定	0.63×0.2	0.11									
Ⅰ－3		SX17	不明	Ⅰ-S-b3	楕円	2.18×0.9	0.13									
Ⅰ－3		SX18	不明	Ⅰ-S-b3	不定	1.11×0.42	0.09									
Ⅰ－3		SX19	不明	Ⅰ-S-b3	不定	3.98×0.85	0.18									
Ⅰ－3		SX20	不明	Ⅰ-S-b3	不定	2.1×0.87	0.28		○							
Ⅰ－3		SX21	不明	Ⅰ-S-b3	不定	4.18×1.98	0.3									
Ⅰ－3		SX22	不明	Ⅰ-S-b3	不定	1.63×0.73	0.07									
Ⅰ－3		SX23	不明	Ⅰ-S-b3	不定	1.31×0.65	0.08									

※出土遺物種類の土…土師器、須…須恵器、黒…黒色土器、土質…土師質土器、瓦質…瓦質土器、須質…須恵質土器、石…石製品、鉄…鉄製品を示す。

第３表　第Ⅰ調査区遺構計測表

第３章　調査の成果・第Ⅱ調査区

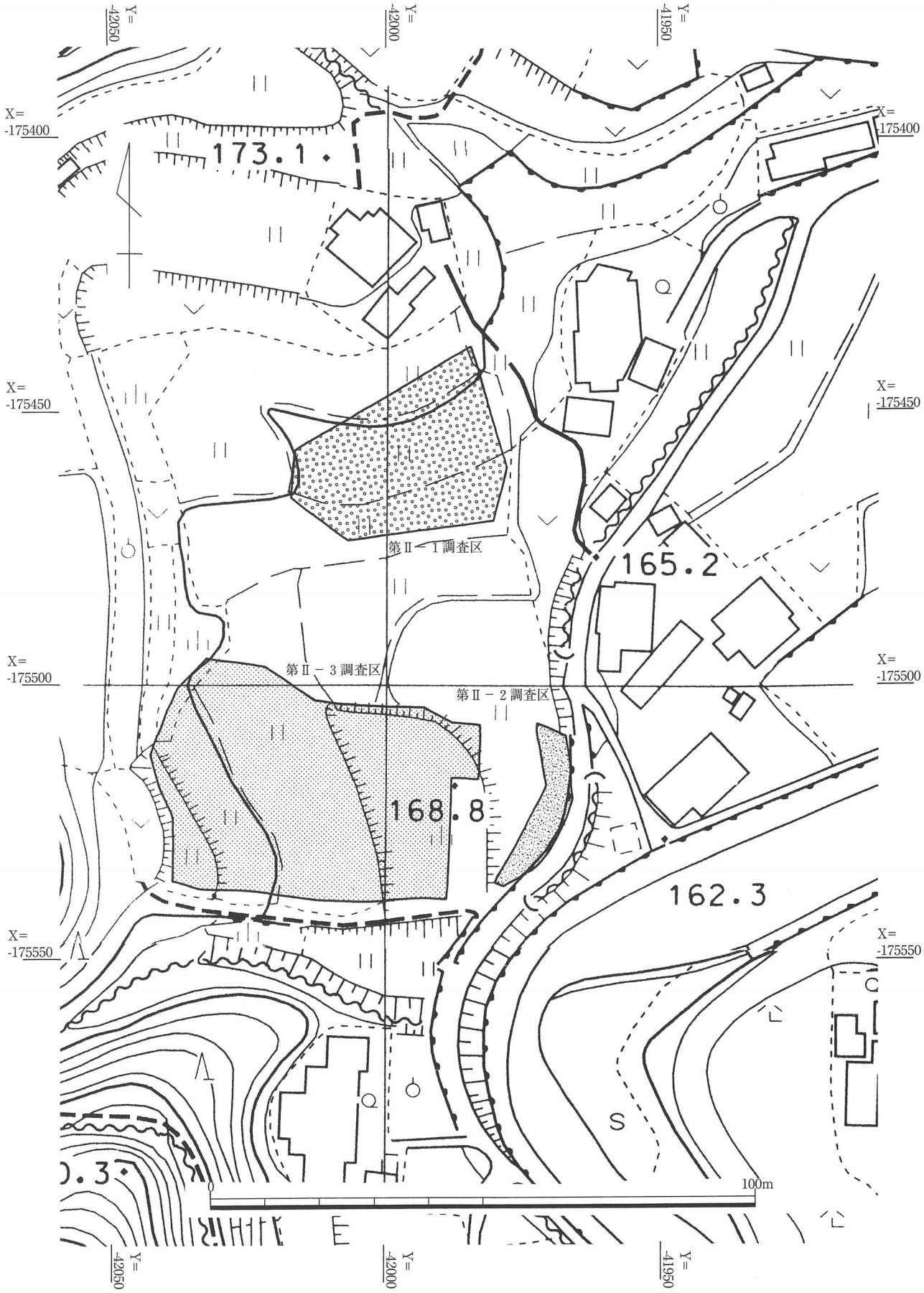
第１節　第Ⅱ－１調査区の成果



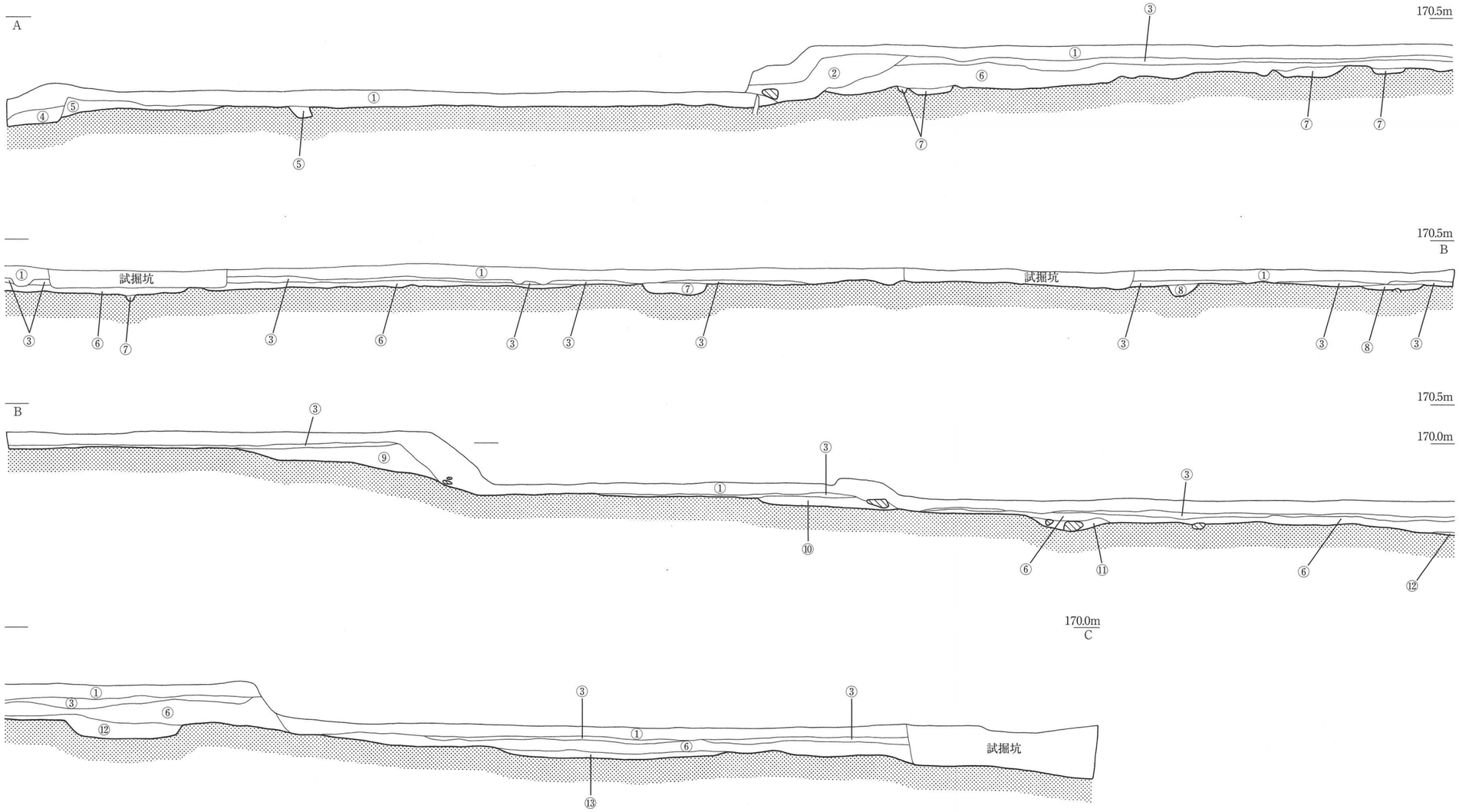
第63図　第Ⅱ－１調査区遺構配置図（1/300）

遺構は、溝、土坑、ピットを検出した。

基本層序は、現地表面から①耕土（層厚0.2m）、②床土（同0.05m）、⑤2.5YR5/2暗灰黄色礫混じり粗砂（地山ブロック含む）（同0.1m）の順で、地山は10YR2/3黒褐色礫混じり粗砂である。（第65図）



第64図　第Ⅱ調査区配置図（1/1000）



① 耕土
② 7.5YR6/1褐灰色礫混じり細砂（耕土）
③ 床土
④ 10YR5/1褐灰色礫混じり粗砂
⑤ 7.5YR4/1灰色礫混じり粗砂
⑥ 2.5Y5/2暗灰黄色礫混じり粗砂（地山ブロック多く含む）
⑦ 2.5Y4/2暗灰黄色礫混じり粗砂
⑧ 10YR5/6黄褐色礫混じり粗砂（地山ブロック含む）
⑨ 10YR3/4暗褐色礫混じり粗砂
⑩ 10YR4/4褐色礫混じり粗砂
⑪ 10YR2/3黒褐色礫混じり粗砂（地山ブロック多く含む）
⑫ 10YR2/3黒褐色礫混じり粗砂
⑬ 10YR3/3暗褐色礫混じり粗砂

0　5m

第65図　第Ⅱ－１調査区土層断面実測図（1/60）

（1）溝

［ＳＤ１］

ＳＤ１は調査区の西端に位置する。規模は長さ8.36m、幅1.4m、深さ0.2mを測る。主軸方向はＮ－81°－Ｗである。遺構の西側には部分的に石組が伴う。埋土は10YR5/1褐灰色礫混じり粗砂であった。

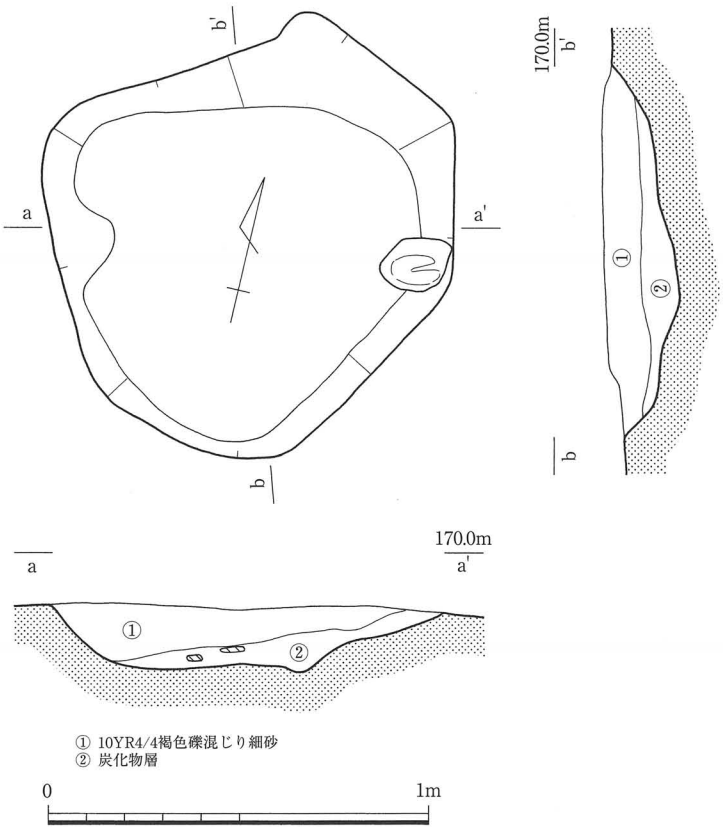
遺物は出土しなかった。

（2）土坑

［ＳＫ１］（第66図、図版23）

ＳＫ１は調査区の北端に位置する。平面形は不定形である。規模は長軸1.2m、短軸1.08m、深さ0.2mを測る。埋土は10YR4/4褐色礫混じり細砂で、遺構の底部には炭化物が堆積していた。

遺物は出土しなかった。



第66図　ＳＫ１遺構実測図（1/20）

［ＳＫ２］（図版23）

ＳＫ２は調査区の北端、ＳＫ１の西側１mに位置する。平面形は遺構の北側が調査区外に及ぶため不明である。検出した規模は長軸0.93m、短軸0.74m、深さ0.12mを測る。埋土は上層が10YR4/4褐色礫混じり細砂で、下層には炭化物が堆積していた。

遺物は出土しなかった。

［ＳＫ３］

ＳＫ３は調査区の北端、ＳＫ２の南西５mに位置する。平面形はやや歪な方形を呈する。規模は長軸1.2m、短軸0.9m、深さ0.16mを測る。主軸方向はＮ－23°－Ｗである。埋土は上層が10YR4/4褐色礫混じり細砂で、下層には炭化物が堆積していた。

遺物は出土しなかった。

［ＳＫ４］（第67・69図、図版24・46）

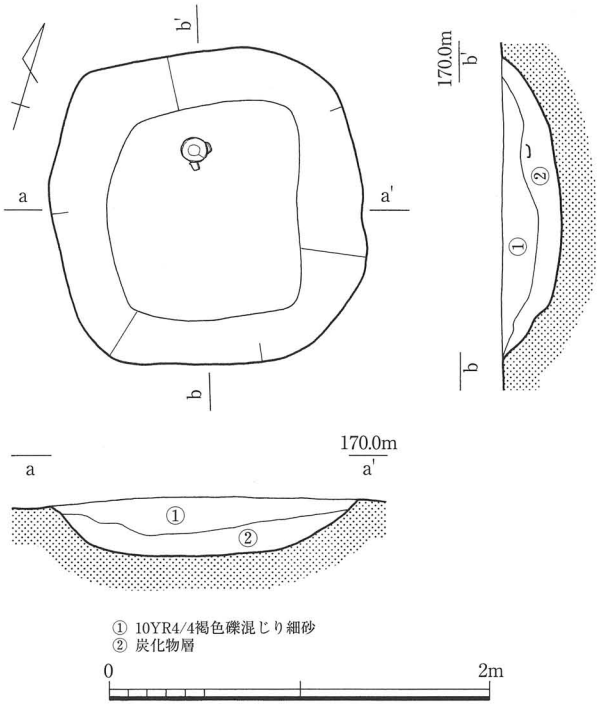
ＳＫ４は調査区の北側、ＳＫ３の南西10mに位置する。平面形はやや歪な方形を呈する。

規模は長軸1.69m、短軸1.66m、深さ0.31mを測る。主軸方向はN－15°－Wである。埋土は上層が10YR4/4褐色礫混じり細砂で、下層には炭化物が堆積していた。

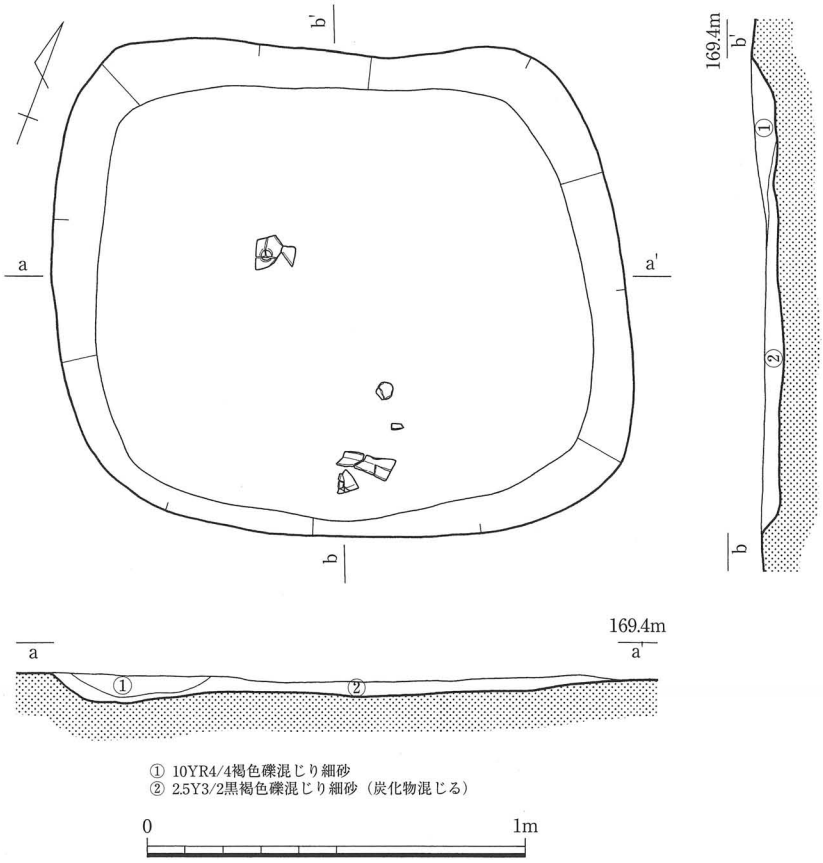
遺物はサヌカイトの削器(161)、土師質皿(162)、瓦器椀(166)、瓦質皿(164・165)が出土した。

[SK5](第68・69図、図版25・46)

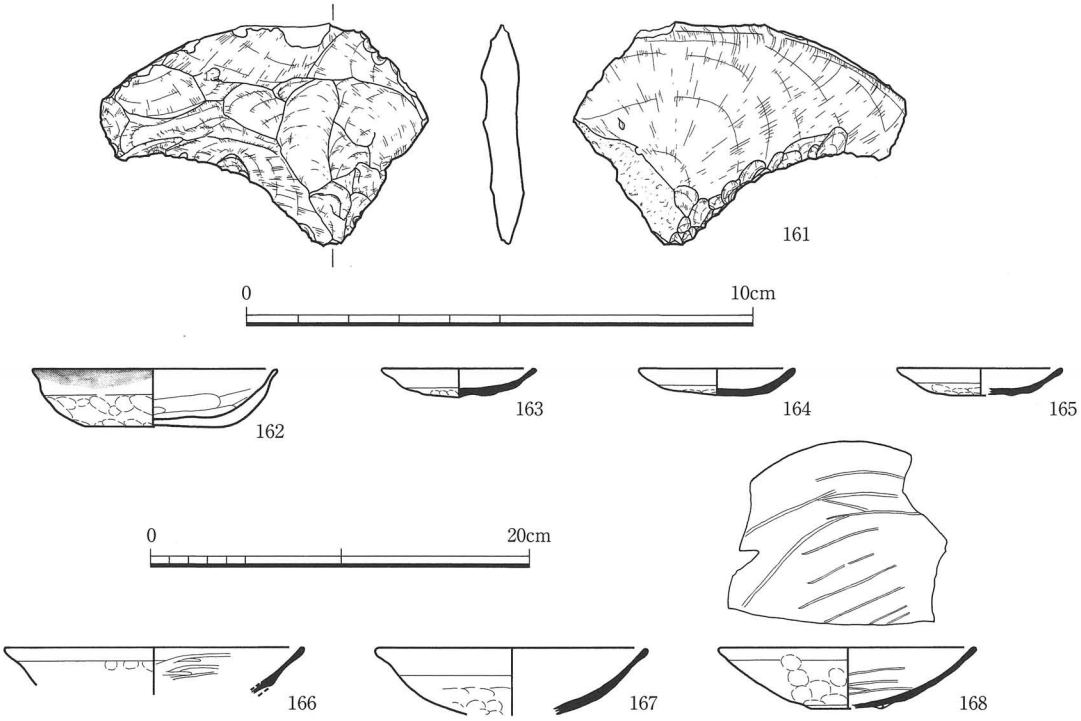
SK5は調査区の北側、SK4の南西4mに位置する。平面形は方形を呈する。規模は長軸1.53m、短軸1.3m、深さ0.08mを測る。主軸方向はN－70°－Eである。埋土は上層が10YR4/4褐色礫混じり細砂で、下層は2.5Y3/2黒褐色礫混じり細砂(炭化物混じり)であった。



第67図　SK4遺構実測図(1/40)



第68図　SK5遺構実測図(1/20)



第69図　ＳＫ４・５出土遺物実測図

遺物は瓦質皿(163)、瓦器椀(167・168)が出土した。

［ＳＫ６］(第70図、図版25)

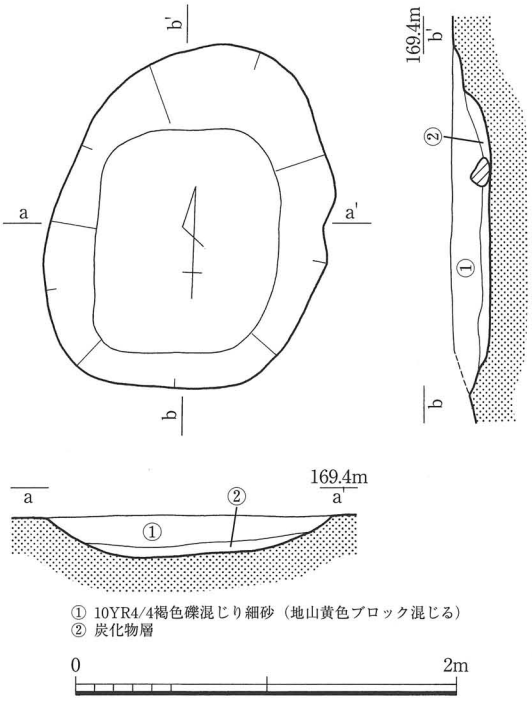
ＳＫ６は調査区の中央、ＳＫ５の南東５ｍに位置する。平面形はやや歪な楕円形を呈する。規模は長径1.94ｍ、短径1.44ｍ、深さ0.22ｍを測る。主軸方向はＮ－65°－Ｗである。埋土は上層が10YR4/4褐色礫混じり細砂で、下層には炭化物が堆積していた。

遺物はサヌカイト剥片が出土したが、細片のため実測できなかった。

［ＳＫ７］(第71図)

ＳＫ７は調査区の中央、ＳＫ６の東側６ｍに位置する。平面形は歪な方形を呈する。規模は長軸1.08ｍ、短軸0.88ｍ、深さ0.18ｍを測る。主軸方向はＮ－66°－Ｅである。埋土は上層が10YR4/4褐色礫混じり細砂で、下層は2.5YR3/2黒褐色礫混じり細砂(炭化物混じり)であった。

遺物は出土しなかった。



第70図　ＳＫ６遺構実測図（1/40）

［ＳＫ８］

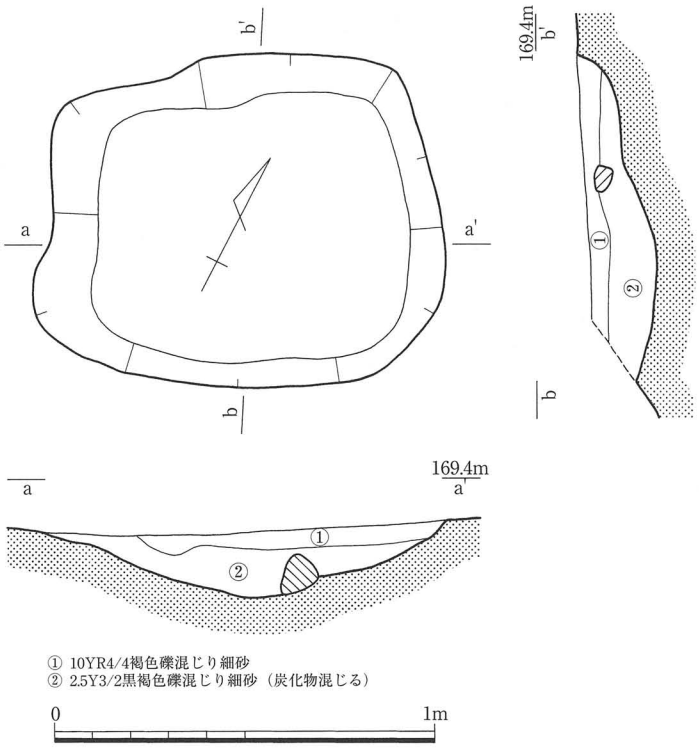
ＳＫ８は調査区の東端、ＳＫ７の東側10ｍに位置する。平面形は遺構の東側が調査区外

に及ぶため不明である。検出した規模は長軸1.96m、短軸0.4m、深さ0.14mを測る。埋土は10YR5/1褐灰色礫混じり粗砂であった。

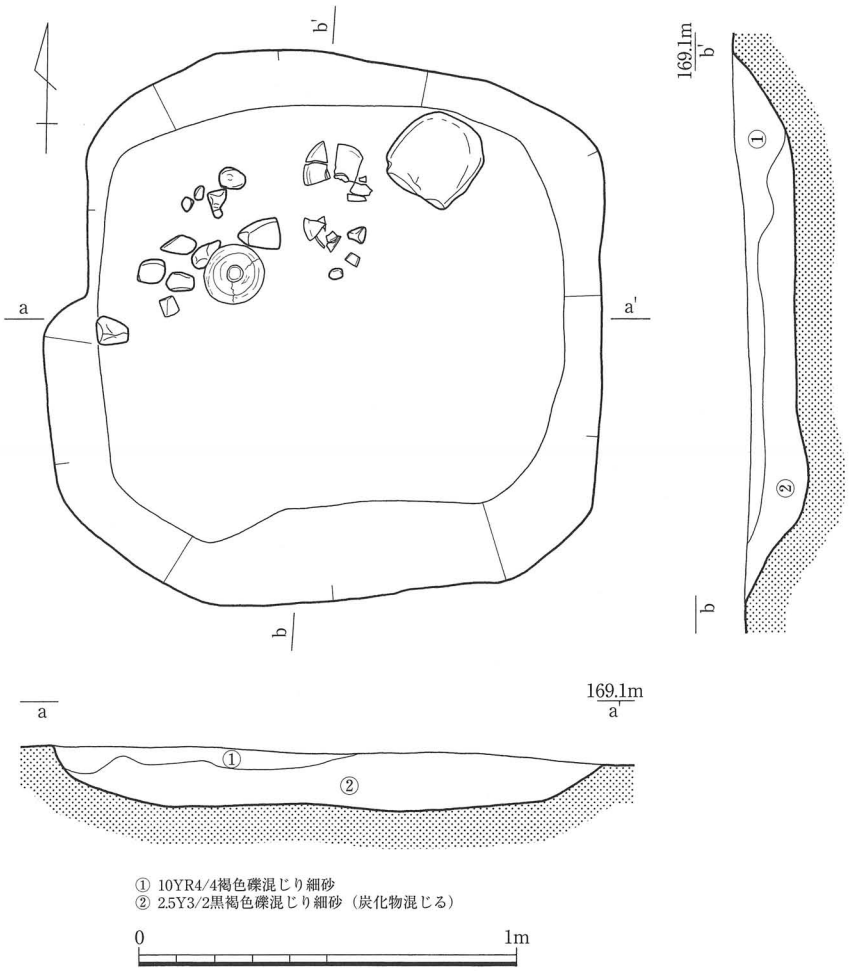
遺物は出土しなかった。

［ＳＫ９］（第72・73図、図版26・46）

ＳＫ９は調査区の東側、ＳＫ８の南西1.3mに位置する。平面形はやや歪な方形を呈する。規模は長軸1.5m、短軸1.49m、深さ0.18mを測る。埋土は上層が10YR4/4褐色礫混じり細砂で、下層は



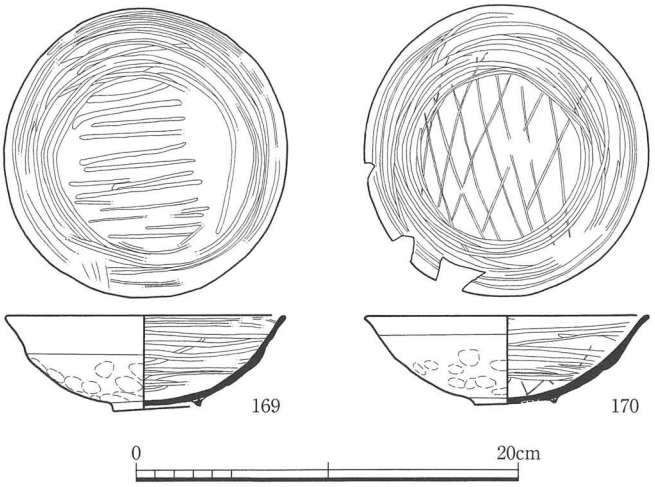
第71図　ＳＫ７遺構実測図（1/20）



第72図　ＳＫ９遺構実測図（1/20）

2.5YR3/2黒褐色礫混じり細砂（炭化物混じり）であった。

遺物は土師質土器、瓦器埦（169・170）が出土した。土師質土器は細片のため実測できなかった。



第73図　ＳＫ９出土遺物実測図

［ＳＫ10］（図版27）

ＳＫ10は調査区の東端、ＳＫ９の南東５ｍに位置する。平面形は遺構の東側が調査区外に及ぶため不明である。検出した規模は長軸1.42m、短軸1.08m、深さ0.22mを測る。主軸方向はＮ－75°－Ｅである。埋土は上層が10YR3/2黒褐色礫混じり粗砂（地山ブロック混じり）で、下層には炭化物が堆積していた。

遺物は出土しなかった。

［ＳＫ11］（図版27）

ＳＫ11は調査区の東側、ＳＫ10の西側７ｍに位置する。平面形は歪な方形を呈する。規模は長軸0.68m、短軸0.6m、深さ0.04mを測る。主軸方向はＮ－66°－Ｅである。埋土は2.5YR3/2黒褐色礫混じり細砂（炭化物混じり）であった。

遺物は出土しなかった。

［ＳＫ12］（図版28）

ＳＫ12は調査区の東側、ＳＫ11の北側1.2mに位置する。平面形は不定形である。規模は長軸0.88m、短軸0.66m、深さ0.05mを測る。主軸方向はＮ－84°－Ｅである。埋土は炭化層であった。

遺物は出土しなかった。

［ＳＫ13］（図版28）

ＳＫ13は調査区の中央、ＳＫ12の南西８ｍに位置する。平面形は不定形である。規模は長軸0.9m、短軸0.84m、深さ0.18mを測る。主軸方向はＮ－63°－Ｅである。埋土は上層が10YR4/4褐色礫混じり細砂で、下層には炭化物が堆積していた。

遺物は土師質土器が出土したが、細片のため実測できなかった。

［ＳＫ14］（第74図）

ＳＫ14は調査区の西側、ＳＫ13の西側13mに位置する。平面形は不定形である。規模は長軸1.14m、短軸1.12m、深さ0.14mを測る。埋土は上層が10YR4/4褐色礫混じり細砂で、下層には炭化物が堆積していた。

遺物は出土しなかった。

［ＳＫ15］（第75図、図版29）

ＳＫ15は調査区の西側、ＳＫ14の西側に近接して位置する。平面形はやや歪な方形を呈する。規模は長軸1.06m、短軸0.98m、深さ0.14mを測る。主軸方向はＮ－77°－Ｅである。埋土は上層が10YR4/4褐色礫混じり細砂で、下層には炭化物が堆積していた。

遺物は出土しなかった。

［ＳＫ16］（図版29）

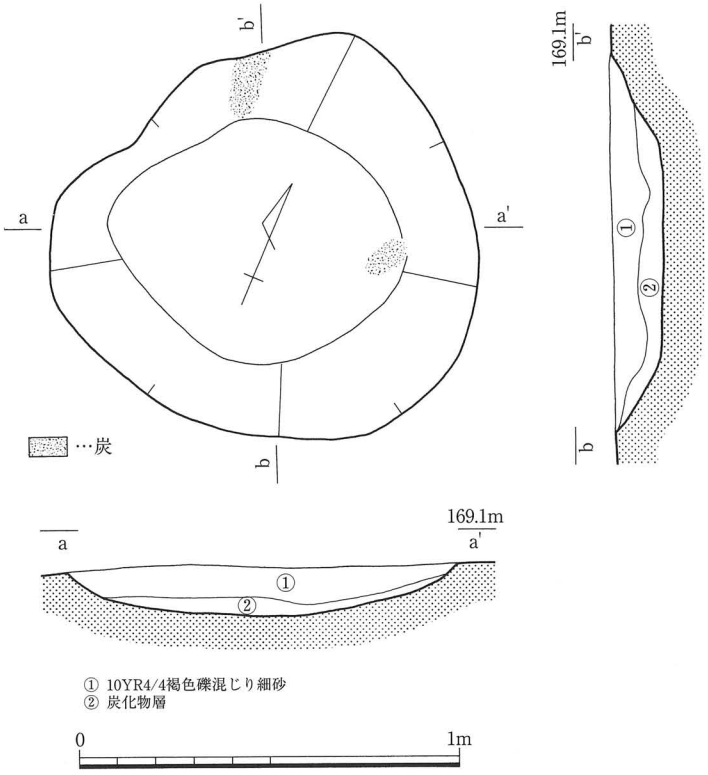
ＳＫ16は調査区の西側、ＳＤ１の南側２ｍに位置する。平面形は不定形である。規模は長軸0.88m、短軸0.86m、深さ0.05mを測る。主軸方向はＮ－56°－Ｅである。埋土は炭化層であった。

遺物は出土しなかった。

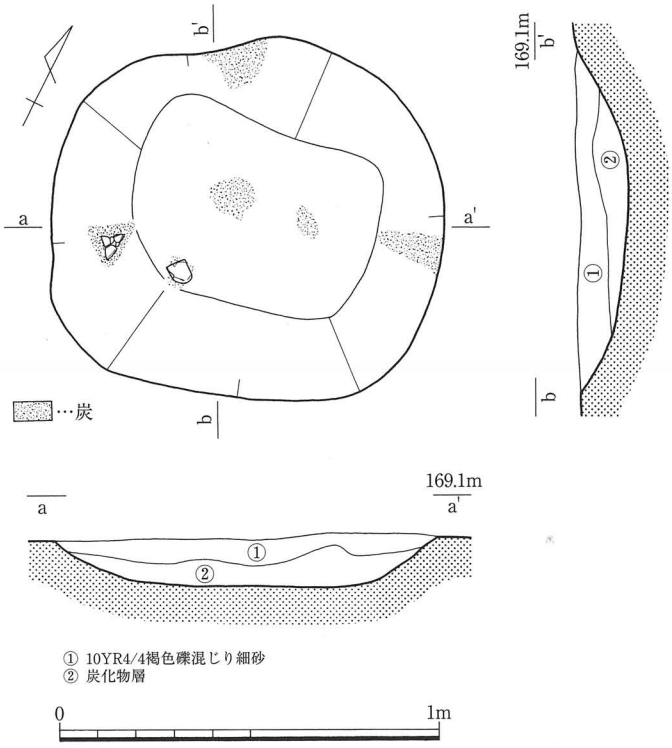
［ＳＫ17］

ＳＫ17は調査区の西側、ＳＫ16の南西３ｍに位置する。平面形は楕円形を呈する。規模は長径0.74m、短径0.62m、深さ0.04mを測る。主軸方向はＮ－22°－Ｗである。埋土は炭化層であった。

遺物は出土しなかった。



第74図　ＳＫ14遺構実測図（1/20）



第75図　ＳＫ15遺構実測図（1/20）

［ＳＫ18］（第76図、図版30）

ＳＫ18は調査区の南東端側、ＳＫ10の南８ｍに位置する。平面形は調査区の東側が側溝に切られているが円形を呈することがわかる。検出した規模は長径1.08m、短径0.95m、

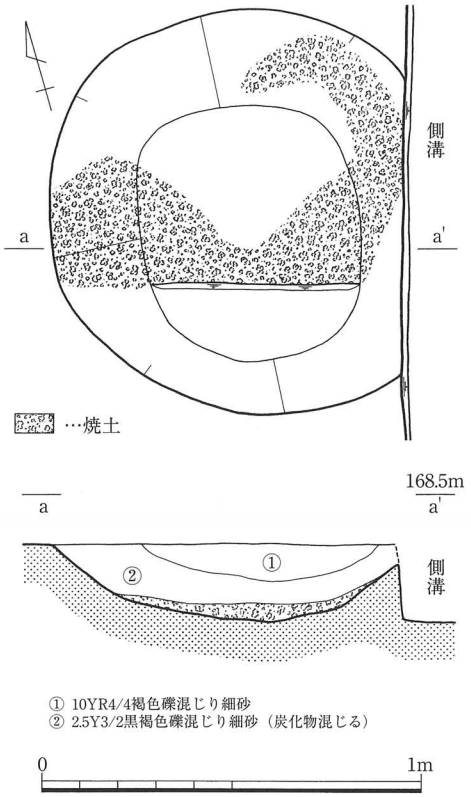
深さ0.21mを測る。埋土は上層が10YR4/4褐色礫混じり細砂で、下層は2.5YR3/2黒褐色礫混じり細砂(炭化物混じり)であった。また、遺構の内部には酸化焔焼成により赤変した箇所が確認できた。

遺物は出土しなかった。

[ＳＫ19]（図版30）

ＳＫ19は調査区の南東端、ＳＫ18の南西３mに位置する。平面形は不定形である。規模は長軸0.92m、短軸0.82m、深さ0.15mを測る。主軸方向はＮ－38°－Ｅである。埋土は2.5YR3/2黒褐色礫混じり細砂(炭化物混じり)であった。

遺物は土師質土器、瓦質土器が出土したが、細片のため実測できなかった。



第76図　ＳＫ18遺構実測図（1/20）

[ＳＫ20]

ＳＫ20は調査区の東側、ＳＫ13の東側３mに位置する。平面形は不定形である。規模は長軸0.92m、短軸0.78m、深さ0.1mを測る。主軸方向はＮ－55°－Ｅである。埋土は10YR5/6黄褐色礫混じり粗砂(地山ブロック混じり)であった。

遺物は土師質土器が出土したが、細片のため実測できなかった。

[ＳＫ21]

ＳＫ21は調査区の西側、ＳＫ15の西側５mに位置する。平面形は不定形である。規模は長軸0.92m、短軸0.64m、深さ0.06mを測る。主軸方向はＮ－７°－Ｅである。埋土は10YR5/6黄褐色礫混じり粗砂(地山ブロック混じり)であった。

遺物は瓦器埦が出土したが、細片のため実測できなかった。

（３）包含層

遺物は土師器、土師質土器、瓦器、須恵質土器、サヌカイト剥片が出土した。

第２節　第Ⅱ－２調査区の成果

遺構は、土坑を検出した。

基本層序は、現地表面から①耕土（層厚0.25m）、②床土（同0.05m）、④2.5YR5/3黄褐色礫混じり細砂（同0.15m）、⑤10YR4/3オリーブ褐色礫混じり細砂（同0.12m）の順で、地山は2.5YR3/3暗オリーブ褐色礫混じり細砂である。（第79図）

（１）土坑

［ＳＫ22］（第78図、図版33）

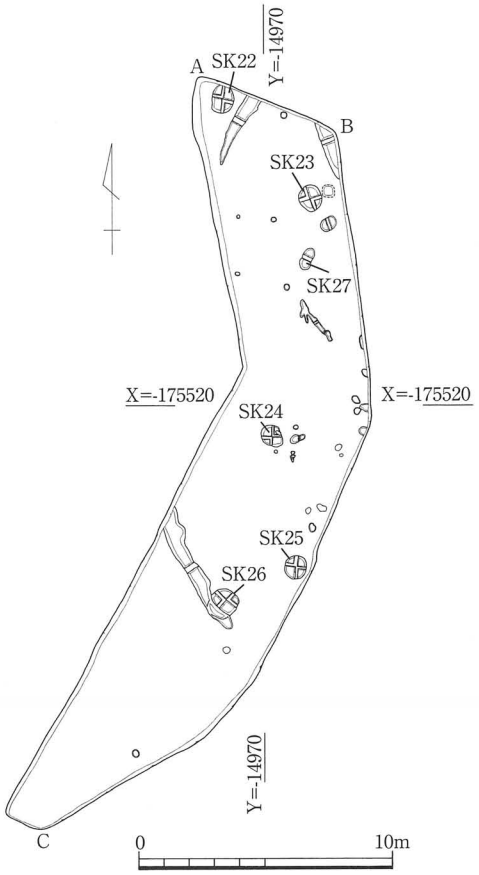
ＳＫ22は調査区の北端に位置する。平面形は遺構の北側が調査区外に及ぶが、残存状況から楕円形とみられる。検出した規模は長軸1.08m、短軸0.85m、深さ0.12mを測る。主軸方向はＮ－12°－Ｅである。埋土は上層が2.5Y3/3暗オリーブ褐色礫混じり細砂で、下層には炭化物が堆積していた。また、遺構の内部には酸化焔焼成により赤変した箇所が確認できた。

遺物は出土しなかった。

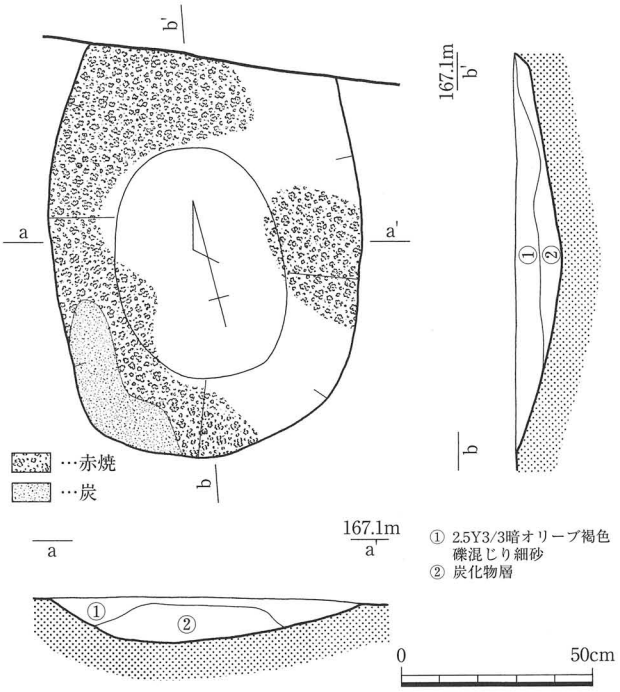
［ＳＫ23］（第80図、図版33）

ＳＫ23は調査区の北側、ＳＫ22の南東４ｍに位置する。平面形は楕円形を呈する。規模は長径1.04m、短径0.88m、深さ0.12mを測る。主軸方向はＮ－21°－Ｗである。埋土は上層が2.5Y3/3暗オリーブ褐色礫混じり細砂で、下層には炭化物が堆積していた。

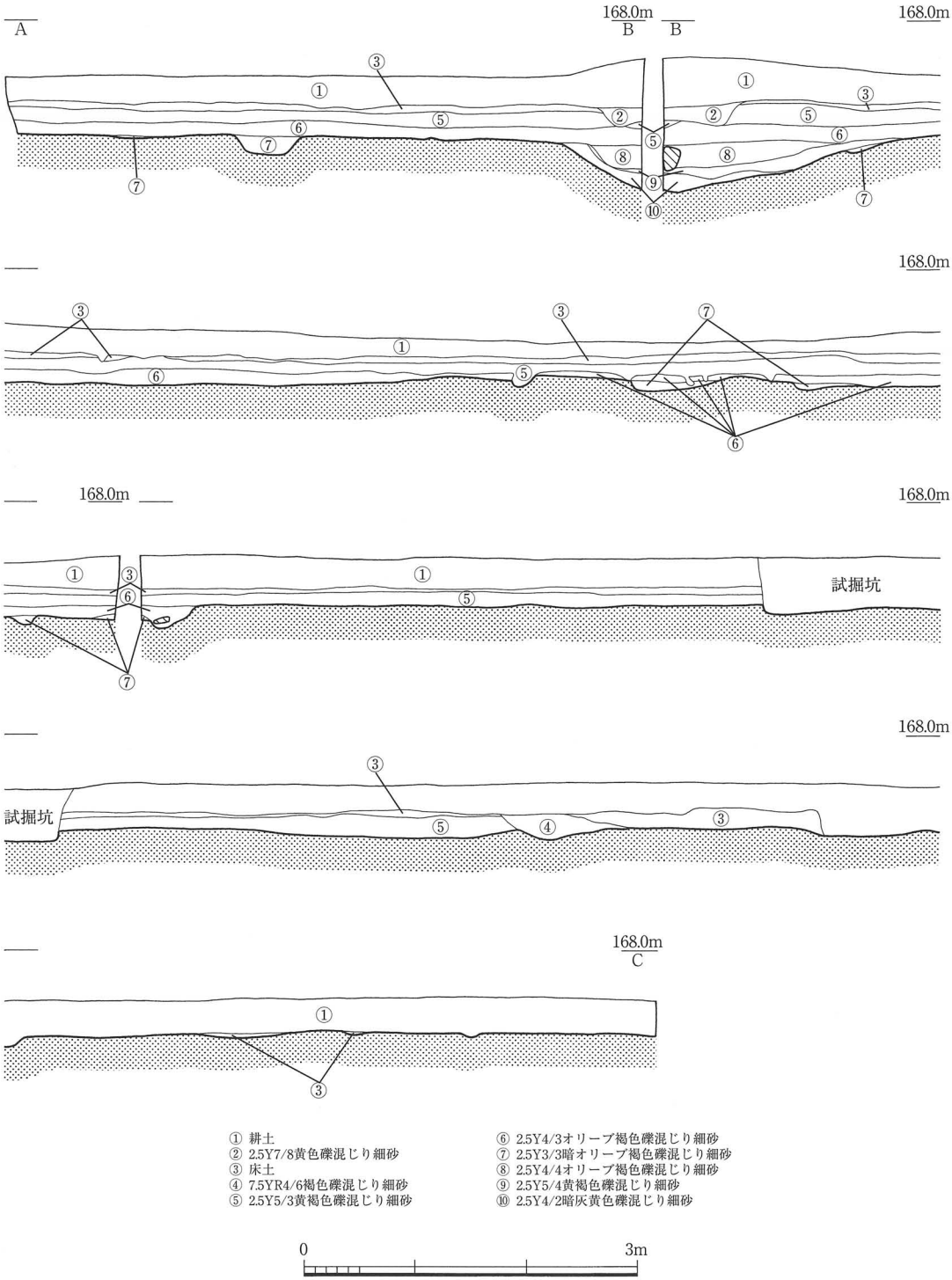
遺物は土師質土器が出土したが、細片のため実測できなかった。



第77図　第Ⅱ－２調査区遺構配置図（1/300）



第78図　ＳＫ22遺構実測図（1/20）



第79図　第Ⅱ－2調査区土層断面実測図（1/60）

［ＳＫ24］（第81図、図版34）

ＳＫ24は調査区の中央、ＳＫ23の南側９ｍに位置する。平面形は楕円形を呈する。規模は長径0.96ｍ、短径0.78ｍ、深さ0.16ｍを測る。主軸方向はＮ－52°－Ｗである。埋土は上層が2.5Y3/3暗オリーブ褐色礫混じり細砂で、下層には炭化物が堆積していた。

遺物は土師質土器が出土したが、細片のため実測できなかった。

［ＳＫ25］（第82図、図版34）

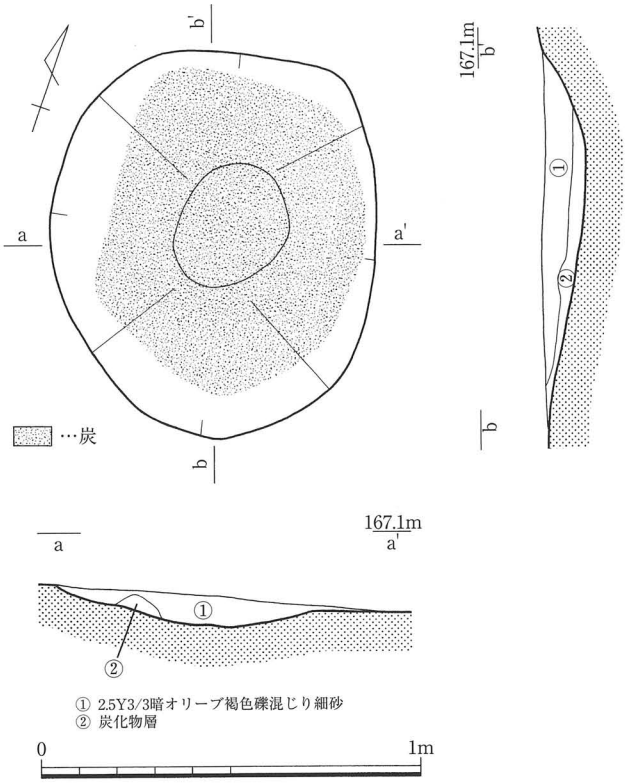
ＳＫ25は調査区の東側、ＳＫ24の南側４ｍに位置する。平面形はやや歪な楕円形を呈する。規模は長径0.92ｍ、短径0.88ｍ、深さ0.18ｍを測る。主軸方向はＮ－10°－Ｅである。埋土は2.5Y3/3暗オリーブ褐色礫混じり細砂であった。

遺物は土師質土器が出土したが、細片のため実測できなかった。

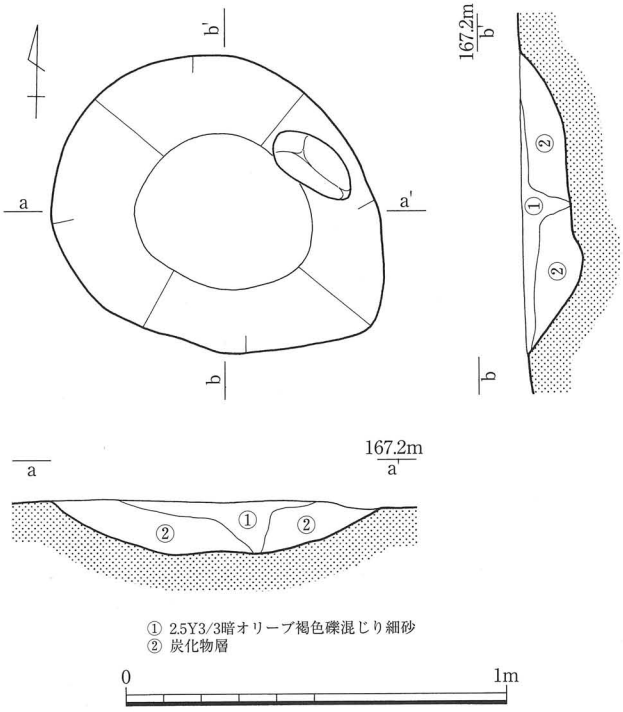
［ＳＫ26］

ＳＫ26は調査区の南側、ＳＫ25の南西２ｍに位置する。平面形は楕円形である。規模は長径1.28ｍ、短径1.14ｍ、深さｍを測る。主軸方向はＮ－39°－Ｅである。埋土は2.5Y3/3暗オリーブ褐色礫混じり細砂であった。また、遺構の内部には酸化焔焼成により赤変した箇所が確認できた。

遺物は土師質土器が出土したが、細片のため実測できなかった。



第80図　ＳＫ23遺構実測図（1/20）



第81図　ＳＫ24遺構実測図（1/20）

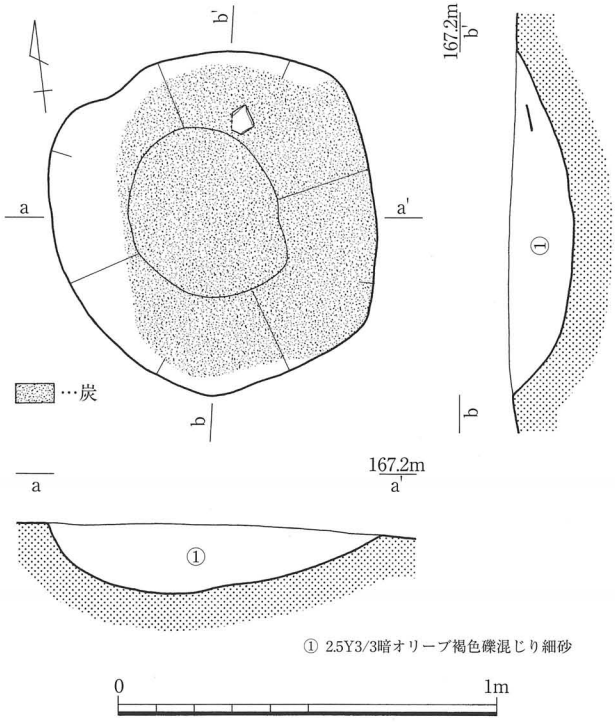
［ＳＫ27］

ＳＫ27は調査区の北側、ＳＫ23の南側約１ｍに位置する。平面形は不定形である。規模は長軸0.9ｍ、短軸0.46ｍ、深さ0.16ｍを測る。主軸方向はＮ－25°－Ｗである。埋土は2.5Ｙ3/3オリーブ褐色礫混じり細砂であった。

遺物は縄文土器の深鉢が出土したが、細片のため実測できなかった。

（２）包含層

遺物はサヌカイトの剥片、縄文土器、土師質土器、瓦器が出土したが、細片のため実測できなかった。



第82図　ＳＫ25遺構実測図（1/20）

第３節　第Ⅱ－３調査区の成果

第83図　第Ⅱ－３調査区遺構配置図（1/500）

遺構は、掘立柱建物、溝、土坑、ピットを検出した。

基本層序は、現地表面から①耕土（層厚0.15m）、②床土（同0.05m）、④10Y6/4にぶい黄橙色礫混じり細砂（旧耕土）（層厚0.05m）、⑨10YR6/8明黄褐色礫混じり粗砂（同0.18m）の順で、地山は2.5YR3/3暗オリーブ褐色礫混じり細砂である。（第96図）

（１）掘立柱建物

［ＳＢ１］（第84図、図版36）

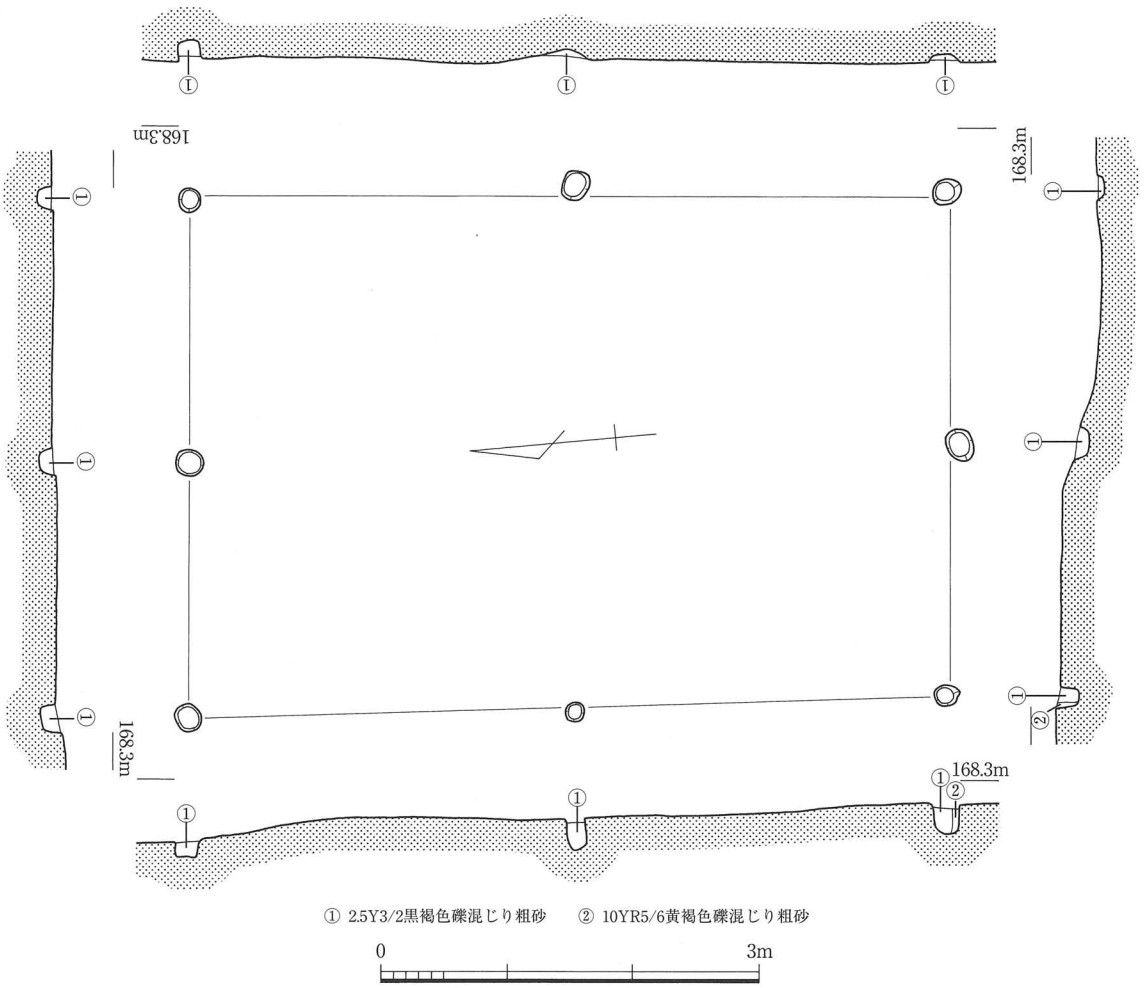
ＳＢ１は調査区の北東部に位置する。遺構の規模は桁行２間（5.9m）×梁行２間（4.2m）である。柱穴の規模は直径0.15～0.26m、深さ0.08～0.25mを測る。主軸方向はＮ－４°－Ｅである。

遺物は柱穴から瓦器が出土したが、細片のため実測できなかった。

［ＳＢ２］（第85図、図版36・37）

ＳＢ２は調査区の北側、ＳＢ１の西側11mに位置する。遺構の規模は桁行５間（8.4m）×梁行３間（5.4m）で、北側と西側にそれぞれ庇がつくものと考えられる。柱穴の規模は直径0.13～0.23m、深さ0.08～0.4mを測る。主軸方向はＮ－２°－Ｗである。

遺物は柱穴からサヌカイトの剥片が出土した。



第84図　ＳＢ１遺構実測図（1/60）

［ＳＢ３］（第86・87図、図版37・38・46）

ＳＢ３は調査区の西側、ＳＢ２の西側５ｍに位置する。遺構の規模は桁行３間（7.5ｍ）×梁行４間（7.55ｍ）で、北側、東側、南側の３面、もしくは南側の１面に庇がつくものと考えられる。柱穴の規模は直径0.18～0.49ｍ、深さ0.23～0.58ｍを測る。主軸方向はＮ－38°－Ｅである。

遺物はＰ１から土師質皿（171）、瓦器椀（173・174）、Ｐ２から瓦器椀（172）が出土した。

（２）溝

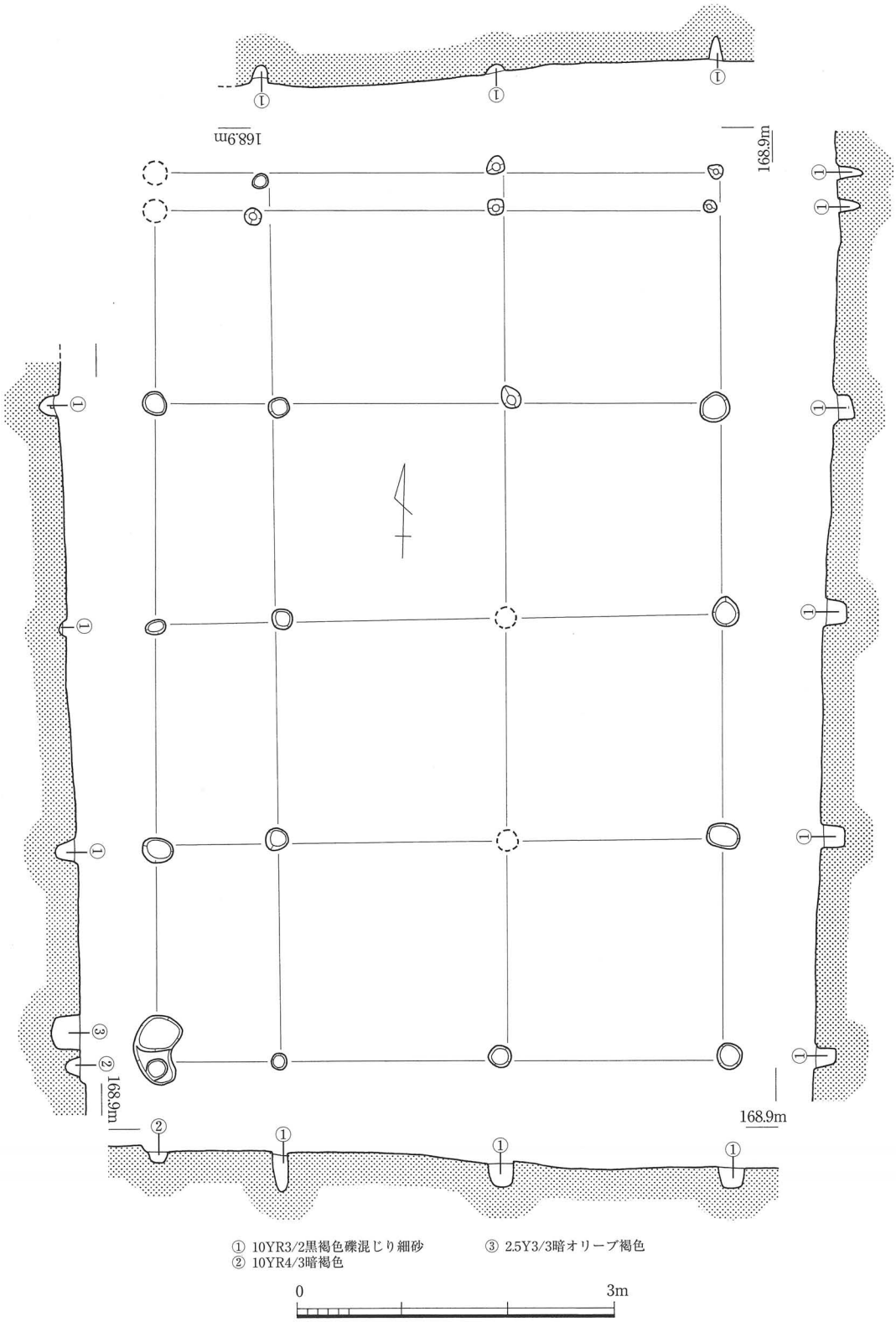
［ＳＤ２］

ＳＤ２は調査区の北西、ＳＢ３の北側1.5ｍに位置する。平面形は不定形である。規模は北東の長さ7.1ｍ、南西の長さ８ｍ、深さｍ0.11を測る。主軸方向はＮ－57°－Ｅである。埋土は2.5Y4/3オリーブ褐色礫混じり粗砂であった。

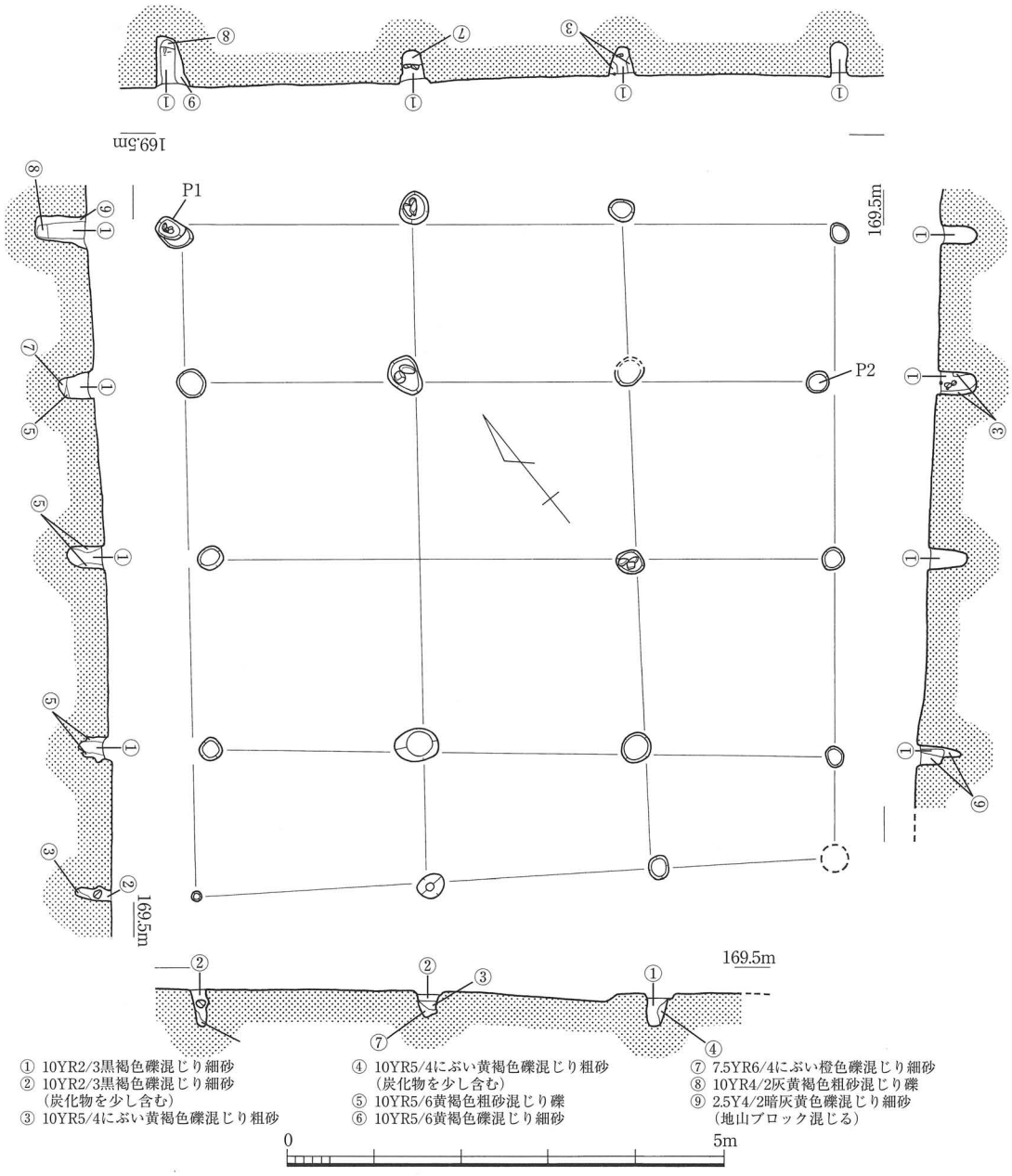
遺物は土師質土器、瓦器が出土したが、細片のため実測できなかった。

［ＳＤ３］

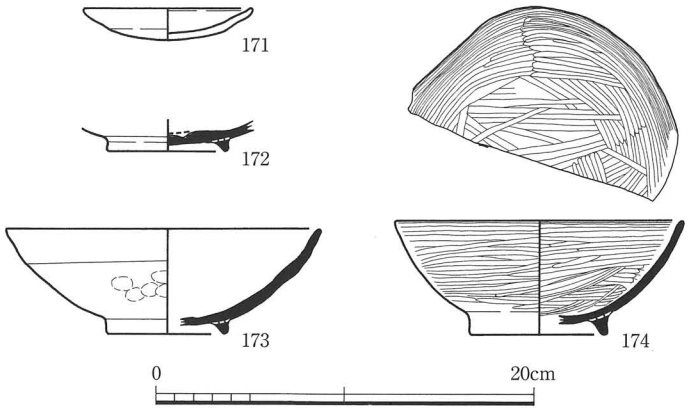
ＳＤ３は調査区の北西、ＳＤ２の北側１ｍに位置する。規模は長さ2.54ｍ、幅0.34ｍ、



第85図　ＳＢ２遺構実測図（1/60）



第86図　ＳＢ３遺構実測図（1/80）



第87図　ＳＢ３出土遺物実測図

深さ0.06mを測る。主軸方向はN－76°－Eである。埋土は2.5Y4/3オリーブ褐色礫混じり粗砂であった。

遺物は瓦器が出土したが、細片のため実測できなかった。

［ＳＤ４］

ＳＤ４は調査区の北西、ＳＤ３の西側に近接して位置する。規模は長さ6.74m、幅0.56m、深さ0.05mを測る。主軸方向はN－17°－Eである。埋土は2.5Y5/2暗灰黄色礫混じり粗砂であった。

遺物は土師質土器が出土したが、細片のため実測できなかった。

［ＳＤ５］

ＳＤ５は調査区の北西、ＳＤ４の西側に近接して位置する。平面形は北端が調査区外に及ぶが不定形である。検出した規模は北東の長さ4.2m、北西の長さ4.1m、幅0.29m、深さ0.05mを測る。埋土は2.5Y4/3オリーブ褐色礫混じり粗砂であった。

遺物は土師質土器、瓦器が出土したが、細片のため実測できなかった。

［ＳＤ６］

ＳＤ６は調査区の西側、ＳＤ２の南側2.5mに位置する。平面形は不定形である。規模は長さ6.94m、幅0.77m、深さ0.06mを測る。主軸方向はN－23°－Wである。埋土は2.5Y4/3オリーブ褐色礫混じり粗砂であった。

遺物は土師質土器、瓦器が出土したが、細片のため実測できなかった。

［ＳＤ７］

ＳＤ７は調査区の南側、ＳＤ６の南東17.8mに位置する。平面形は南東端が調査区外に及ぶため詳細は不明である。検出した規模は長さ4.46m、幅1.82m、深さ0.05mを測る。主軸方向はN－44°－Wである。埋土は2.5Y4/4オリーブ褐色礫混じり粗砂であった。

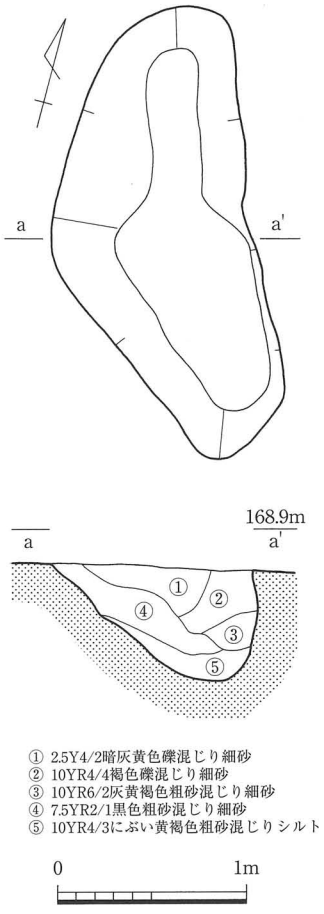
遺物はサヌカイトの剥片が出土した。

（３）土坑

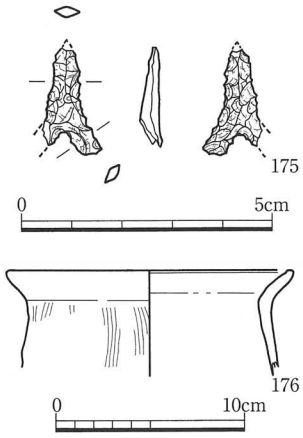
［ＳＫ28］（第88・89図、図版46）

ＳＫ28は調査区の南側、ＳＤ７の北東12mに位置する。平面形は不定形である。規模は長軸2.4m、短軸1.04m、深さ0.58mを測る。主軸方向はN－20°－Wである。

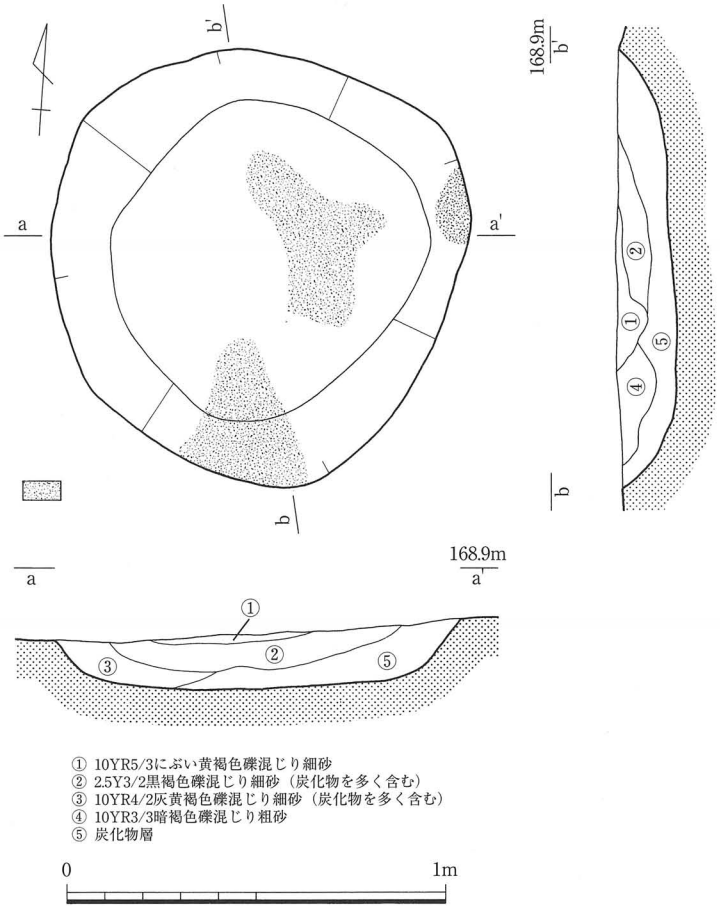
遺物はサヌカイトの石鏃（175）剥片、土師器甕（176）、瓦器が出土した。



第88図　ＳＫ28遺構実測図
（1/40）



第89図　ＳＫ28
出土遺物実測図



第90図　ＳＫ30遺構実測図（1/20）

［ＳＫ29］（図版38）

ＳＫ29は調査区の南側、ＳＤ７の北側に接して位置する。平面形は北東部を確認調査時に断割ったため、円形であることが判明している。検出した規模は径0.84ｍ、深さ0.07ｍを測る。埋土には炭化物が堆積していた。

遺物はサヌカイトの剥片が出土した。

［ＳＫ30］（第90図、図版39）

ＳＫ30は調査区の南側、ＳＫ28の南側約2.5ｍに位置する。平面形は円形である。規模は長軸1.15ｍ、短軸1.13ｍ、深さ0.16ｍを測る。主軸方向はＮ－51°－Ｗである。埋土には炭化物が堆積していた。

遺物は出土しなかった。

［ＳＫ31］（図版39）

ＳＫ31は調査区の南側、ＳＫ30の北西約2.2ｍに位置する。平面形は不定形である。規模は長軸0.86ｍ、短軸0.73ｍ、深さ0.05ｍを測る。主軸方向はＮ－15°－Ｗである。埋土は上層が10YR5/4にぶい黄褐色礫混じり細砂で、下層は炭化物が堆積していた。

遺物は出土しなかった。

（４）ピット

［ＳＰ１］

ＳＰ１は調査区の北側、ＳＢ１の北西側２ｍに位置する。平面形は北端が調査区外に及

ぶため詳細は不明である。検出した規模は長軸0.47m、短軸0.34m、深さ0.14mを測る。埋土は10YR2 /3黒褐色礫混じり細砂であった。

遺物は瓦器が出土したが、細片のため実測できなかった。

［ＳＰ２］(第91図、図版47)

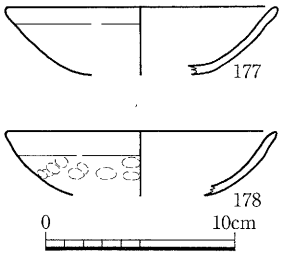
ＳＰ２は調査区の北側、ＳＢ２の東側２mに位置する。平面形は楕円形を呈する。規模は長径0.3m、短径0.18m、深さ0.2mを測る。主軸方向はＮ－86°－Ｅである。埋土は10YR2/3黒褐色礫混じり細砂であった。

遺物は土師質埦(177)、瓦器が出土した。

［ＳＰ３］(第91図、図版47)

ＳＰ３は調査区の中央、ＳＢ２の東側２mに位置する。平面形は不定形である。規模は長軸0.38m、短軸0.27m、深さ0.21mを測る。主軸方向はＮ－62°－Ｅである。埋土は10YR5/4にぶい黄褐色礫混じり細砂であった。

遺物は土師器坏(178)が出土した。



第91図　ＳＰ２・３
出土遺物実測図

［ＳＰ４］

ＳＰ４は調査区の中央、ＳＢ３の南東４mに位置する。平面形は円形を呈する。規模は直径0.26m、深さ0.09mを測る。埋土は10YR3/4暗褐色礫混じり細砂であった。

遺物は土師質土器が出土したが、細片のため実測できなかった。

［ＳＰ５］

ＳＰ５は調査区の西側、ＳＢ３の南側２mに位置する。平面形は方形を呈する。規模は長軸0.44m、短軸0.42m、深さ0.16mを測る。主軸方向はＮ－40°－Ｗである。埋土は10YR3/4暗褐色礫混じり細砂であった。

遺物は瓦器が出土したが、細片のため実測できなかった。

（５）石組み

［ＳＷ１］(第92・93図、図版40・47)

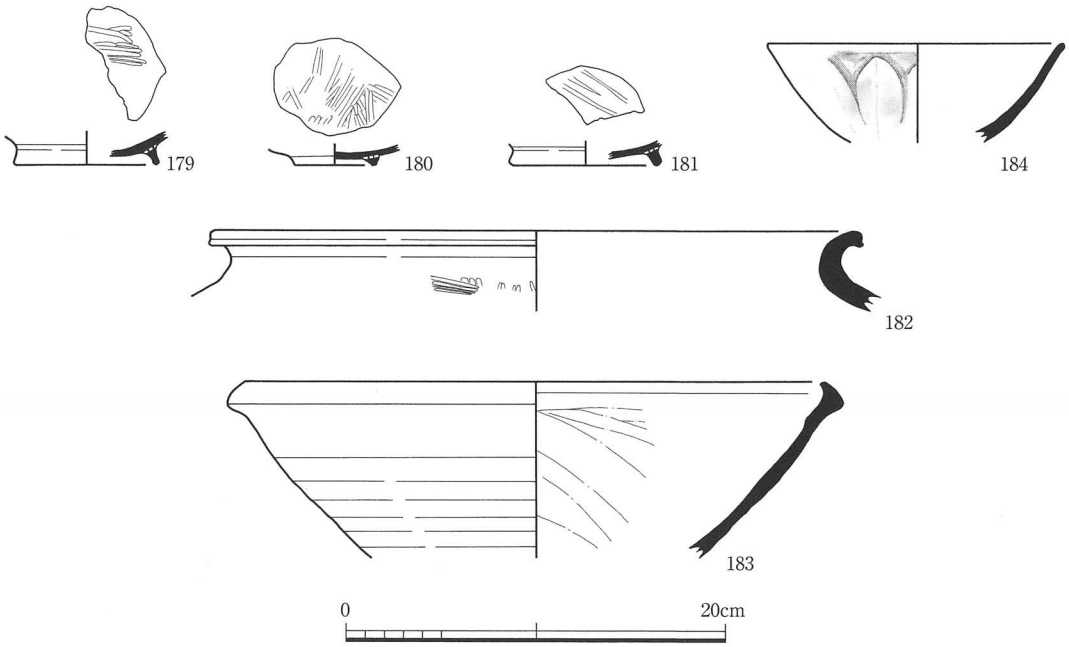
ＳＷ１は調査区北端に位置する。遺構に伴う石組みの両端は調査区外に及ぶため詳細は不明であるが、第Ⅱ－１調査区と第Ⅱ－３調査区の間を東西に谷状地形があるため、この谷状地形の南側の護岸と考えられる。検出した遺構の規模は南西側12m、南側５m、高さ0.5mを測る。石組みの石はこぶし大から人頭大程度の大きさのものを用いている。

遺物は裏込めから須恵器、土師質土器、瓦器埦(179～181)、瓦質甕(182)、須恵質練鉢(183)、磁器碗(184)、木片が出土した。

（６）包含層(第94図、図版47)

遺物は縄文土器(192～195)、土師器、土師質甕(197)、瓦器、瓦質土器、須恵器蓋（196)、

第92図　ＳＷ１遺構実測図（1/60）



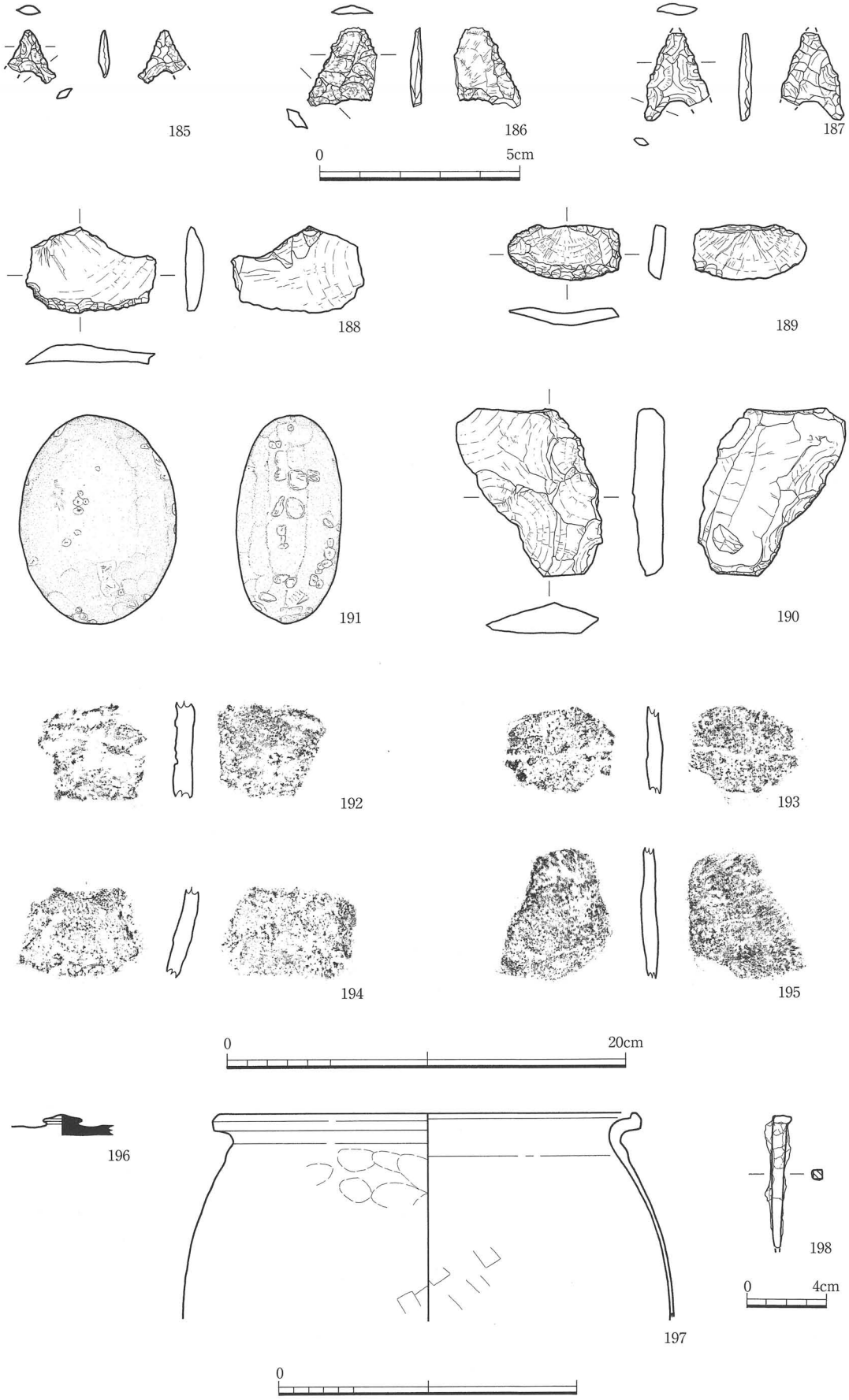
第93図　ＳＷ１出土遺物実測図

須恵質土器、陶磁器、サヌカイト剥片・石鏃(185～187)・削器(188～190)、叩き石(191)、鉄釘(198)が出土した。付番のないものは細片のため実測できなかった。

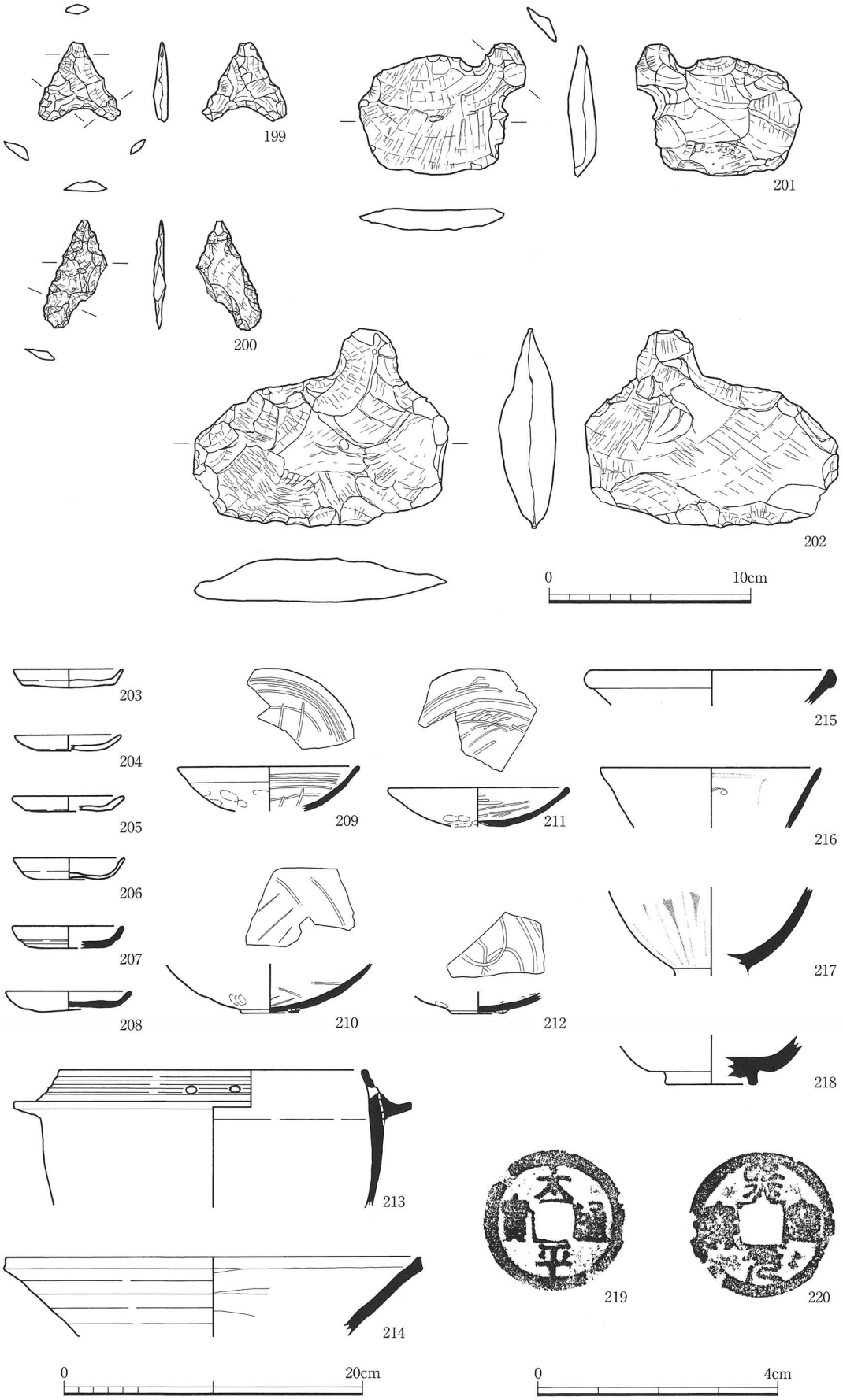
（７）第Ⅱ調査区確認調査坑出土遺物(第95図)

本次調査を着手する前に確認調査を実施した際にも遺物が出土した。詳細については以下のとおりである。

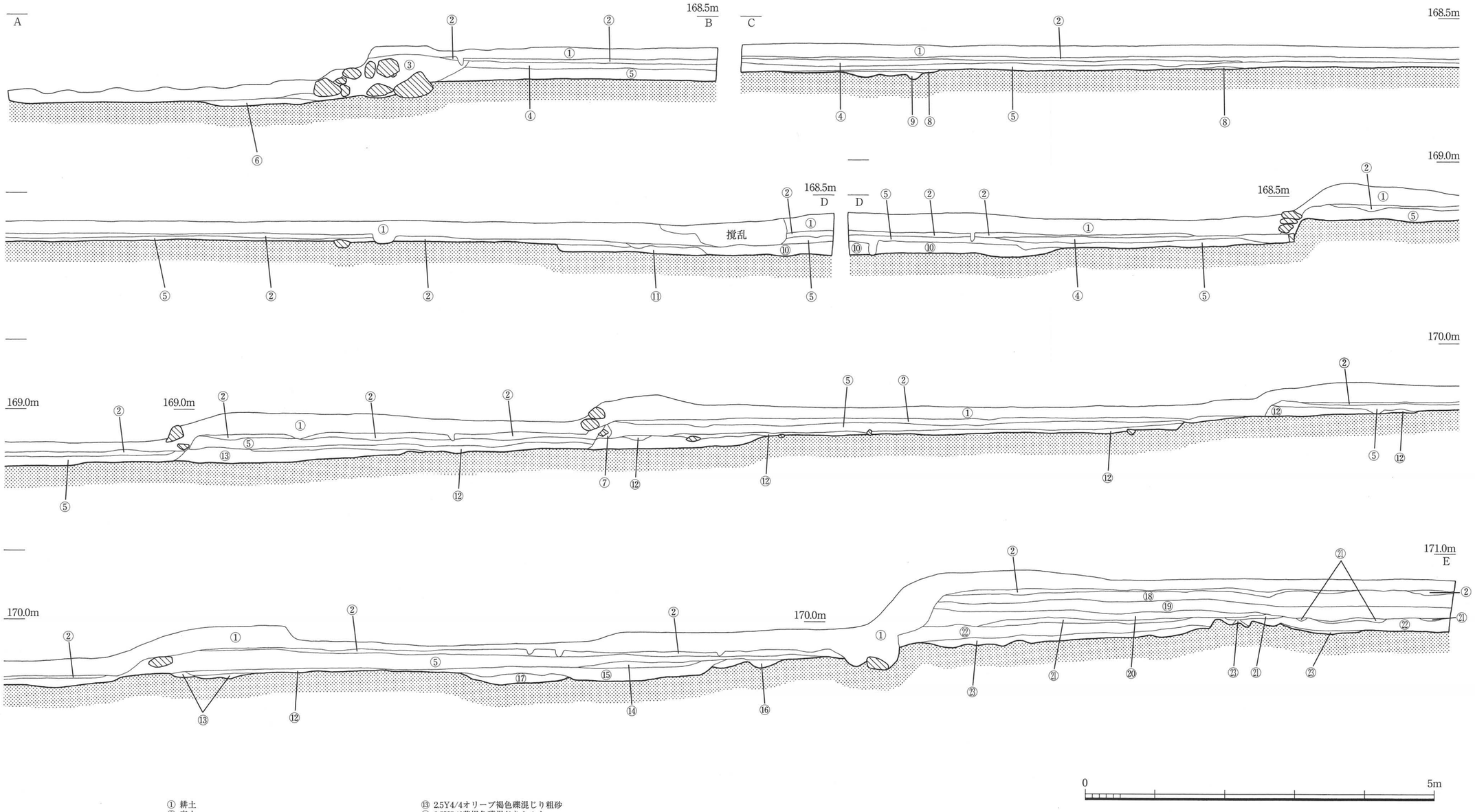
遺物は石鏃(199・200)、石匙(201・202)、土師質皿(203～206)、瓦器埦(209～212)、瓦質皿(207・208)・土釜(213)・甕、須恵質鉢(214)、青磁碗(216～218)、白磁碗(215)、軒丸瓦、軒平瓦、丸瓦、銅銭(219・220)が出土した。付番のないものは細片のため実測できなかった。



第94図　第Ⅱ－３調査区包含層出土遺物実測図



第95図　第Ⅱ調査区確認調査出土遺物実測図



① 耕土
② 床土
③ 10YR6/4にぶい黄橙色礫混じり細砂
④ 10YR5/6黄褐色礫混じり細砂
⑤ 10YR6/3にぶい黄橙色礫混じり細砂（旧耕土）
⑥ 10YR6/1褐灰色礫混じり細砂（地山ブロック含む）
⑦ 7.5YR6/1褐灰色礫混じり細砂
⑧ 10YR5/8黄褐色礫混じり細砂
⑨ 10YR5/3にぶい黄褐色礫混じりシルト
⑩ 10YR6/8明黄褐色礫混じり粗砂
⑪ 10YR8/8黄橙色礫混じり粗砂
⑫ 10YR5/8黄褐色礫混じり粗砂（旧床土）
⑬ 2.5Y4/4オリーブ褐色礫混じり粗砂
⑭ 2.5Y5/6黄褐色礫混じりシルト
⑮ 2.5Y5/3黄褐色礫混じり粗砂
⑯ 2.5Y4/2暗灰黄色礫混じり粗砂
⑰ 2.5Y6/4にぶい黄色礫混じり粗砂
⑱ 10YR6/3にぶい黄橙色礫混じり粗砂
⑲ 10YR5/4にぶい黄褐色礫混じり粗砂
⑳ 10YR5/3にぶい黄褐色礫混じり細砂
㉑ 10YR7/8黄橙色礫混じり粗砂
㉒ 10YR6/3にぶい黄橙色細砂
㉓ 10YR6/6明黄褐色礫混じりシルト

第96図　第Ⅱ－３調査区土層断面実測図（1/60）

第4節　まとめ

調査の結果、第Ⅱ調査区からは27ヶ所、また第Ⅰ調査区からは17ヶ所の、内部が酸化焔焼成されたり、また埋土に炭化物を含む遺構が検出された。これらの遺構のほとんどは出土遺物を伴わないが、ＳＫ15、ＳＫ18では瓦器埦が出土したことや、和泉市の平井遺跡[註1]などで検出されている瓦器埦焼成窯の形状や規模などが類似していることから、仮説としてこれらの遺構は瓦器埦焼成窯であることが考えられる[註2]。

これら生産物の主な供給先としては、日野観音寺遺跡から北西800mに位置し、地理的にも近い天野山金剛寺が考えられる。天野山金剛寺は中世には多数の子院を擁しており、そこでは大量に生活雑器を消費したことが用意に想像できるし、既往調査での出土量がそのことを証明している。しかし、現在のところ天野山金剛寺遺跡の発掘調査において、このような遺構の発掘例がない。

以上が、上記の遺構が瓦器埦焼成窯と考えられる理由である。

このことは今後の資料の増加、詳細な分析を経て慎重に検討していく必要がある。

鳥羽

註１　橋本久和氏(高槻市教育委員会)のご教示による。

註２　『(財)大阪府埋蔵文化財協会調査報告書第21輯　平井遺跡　発掘調査報告書』　1988年3月　大阪府教育委員会・財団法人大阪府埋蔵文化財協会

第４章　まとめ

第１節　日野観音寺遺跡の景観復元

１．はじめに

今回の調査では、数多くの遺構・遺物を検出したが、そのほとんどが中世のものであった。当遺跡はその名の通り、日野観音寺(正式には、天日山観音寺)を中心とするものであり、当寺が遅くとも14世紀(南北朝時代)には存在していることから、中世の遺物が多いのも当然といえば当然である。

しかし、これまで当遺跡での調査はあまり行われておらず、考古学的には不明な点が多かった。そこで、今回の調査成果を整理し、当遺跡の景観復元を行うことで、当調査のまとめとしたい。

２．第Ⅰ調査区の成果

当調査区では、ピットや溝などと共に、石敷や石組み、焼土坑、瓦窯などを検出した。各遺構からの出土遺物が少ないことや、検出面の対応関係のため、すべてが同時期のものとは言えないが、大きくは13～15世紀頃(鎌倉時代～室町時代)にかけてのもので、その中でも14世紀(南北朝時代)のものが多い。

各遺構の詳細については、前述しているので詳しくは触れないが、特徴的な遺構について概略する。

石敷き・石組み

［ＳＷ１］　第Ⅰ－１調査区。南北12～13m、東西10mの幅で検出した人頭大の石から２～３cmの礫を敷き詰めた遺構である。東西方向については、調査区外にのびるため、さらに広がるものと考えられる。当遺構の北側は湿地帯になっており、遺構は見られないため、護岸施設と推測される。当遺構を覆うオリーブ黒色シルト層からは、瓦器椀片が多く入っており、それらから14世紀頃には埋没したと考えられる。

［ＳＷ２］　第Ⅰ－２調査区。南北6.5m以上、東西4.5m以上の落ち込みの中に、10～80cm大の石で作られた石組みが２基検出された。落ち込みの北側には東側に開いた「コ」の字状の石組み(北側石組み)と「Ｌ」字状に配置された石組み(南側石組み)があった。

北側石組みは、10～70cm大の石で構築され、長さは5.4m、深さ0.2～0.3mを測り、東側に伸びる溝になっている。遺構内からは、土師質皿、瓦器椀、瓦質土器など多くの遺物が出土した。瓦器椀は、尾上編年のⅣ－２～４期のものであり、14世紀頃に埋められたと考えられる。

南側石組みは、10～80cm大の比較的細長い石で、溝になるように構築され、検出長は、2.4mを測る。埋土には炭や焼土が多く含まれていた。本来は、これよりも溝が伸びていたと推測され、建物などに伴う排水溝だったと考えられる。

焼土坑

今回の調査では、「焼土坑」と呼ばれる遺構が数多く見つかっている。詳細については後述するが、規模１m前後の円形や方形のプランで、埋土底に炭が堆積していたり、土坑側面や底面に赤く被熱が見られるものを「焼土坑」としている。遺物は極わずかに出土するものの、細片が大半で時期決定が難しく、検討の余地はあるが、熱残留時期測定や若干の遺物から12世紀頃に構築されたものと推測される。焼成したものについても推測の域を出ないが、ここでは瓦器や土師質土器などの土器焼成に利用されたものと考えたい。

瓦窯

［ＳＹ１］　第Ⅰ－３調査区。長さ2.71m、幅1.49mの範囲で、瓦や石、窯壁と思われるスサ入り粘土塊、粘土ブロックと癒着している瓦などが見られた。窯の構造は、削平が著しく不明である。

３．第Ⅱ調査区の成果

当調査区では、掘立柱建物や石組、焼土坑、溝などを検出した。各遺構からの出土遺物が少ないため、すべてが同時期のものとは言えないが、ほとんどが中世の遺構である。

以下、特徴的な遺構について概略する。

掘立柱建物

［ＳＢ１］　第Ⅱ－３調査区。おおよそ南北に主軸を持つ。桁行２間(5.9m)×梁行２間(4.2m)で、柱間は桁行が約３m、梁行が約２m。柱穴径が0.15～0.25mを測る。

遺物は出土しなかった。

［ＳＢ２］　第Ⅱ－３調査区。おおよそ南北に主軸を持つ。桁行５間(8.4m)×梁行３間(5.4m)を測る。柱間は桁行、梁行とも2.1m程であるが、桁行の北端が0.35m、梁行の西端が1.2mを測る。柱穴径は0.2～0.3mのものが多いが、北側の柱穴は径0.1m程である。これらのことから、ＳＢ２は、４間×２間の建物に、北側と西側に庇をもつと考えられる。

遺物は出土しなかった。

［ＳＢ３］　第Ⅱ－３調査区。主軸はＮ－38°－Ｅで、桁行３間(7.5m)×梁行４間(7.55m)である。北西以外の３面に庇をもつ２間×２間の建物とここでは捉え、柱間は２～2.5m、庇部分は1.7～２m程ある。

遺物は柱穴から瓦器埦が出土しており、尾上編年のⅡ～Ⅲ期前半のものである。このことから13世紀には埋められたと考えられる。

石組み

［ＳＷ１］　第Ⅱ－３調査区。ＳＢ２・３の北側に位置し、全長約17m、高さ0.5m程を測

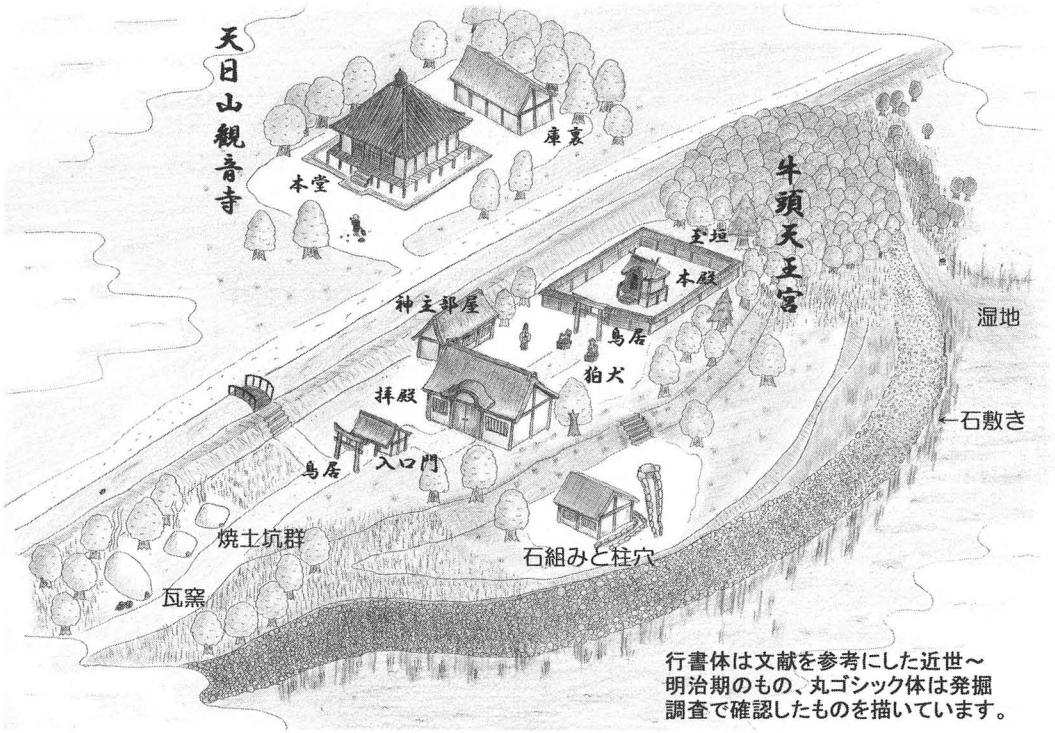
る。第Ⅱ－１調査区と第Ⅱ－３調査区の間には谷状の地形があり、その谷に沿って構築された石組みと考えられる。谷の堆積土は粘土からシルト質で、瓦器埦や青磁碗などが多くの遺物が出土した。瓦器埦は、尾上編年のⅡ～Ⅲ期のものが見られることから、この谷は13～14世紀頃には埋没したと考えられる。また、石組みの主軸がＳＢ３と同じであることから、同時期に存在したものと推測される。

焼土坑

第Ⅱ調査区でも、第Ⅰ調査区同様、焼土坑が確認された。規模や炭層、焼土層の有無など基本的には変わらないが、第Ⅱ－１調査区のＳＫ４、ＳＫ９からは、完形の土師質の皿や瓦器埦が出土している。瓦器埦は２個体出土し、尾上編年のⅢ期後半頃のものと思われる。

４．第Ⅰ調査区の景観復元

調査成果を加味して復元したのが第97図である。このイメージの主要な部分を占めるのは、中央上に位置する「寺」と中央にある「神社」である。寺とは現存する日野観音寺のことで、神社とは明治41年に高向神社に合祀されるまでこの地にあった牛頭天王宮のことである。これらを、第３表の近世文書と『日野の口碑』[註1]という日野地区の聞き取り調査を行った文献のデータを元に描いたものである。したがって、近世から明治期までの状況が合わさっている訳である。今回の調査が、これらの寺社に隣接するものであり、また検出した遺構の時期に、寺社が存在した可能性があるため、寺社の構造など不明な点は多いものの、当遺跡を理解する上で必要であると考え、描くことにした。



第97図　第Ⅰ調査区景観復元図

文献名		観音寺		牛頭天王宮		
日野村絵図						
	境内	長17間(30.94m)	横9間(16.38m)	境内 長36間(65.52m)	横17間(30.94m)	
	本堂	5間(9.1m)	5間(9.1m)	本殿 長6尺(1.82m)	横4尺(1.21m)	
	庫裏	□間半	2間半(4.55m)	拝殿 長5間(9.1m)	横2間半(4.55m)	
錦部郡之内本多伊予守領分寺社吟味帳(吉年祐一家文書)						
元禄5年	境内	南北17間(30.94m)	東西9間(16.38m)	境内 南北36間(65.52m)	東西17間(30.94m)	
	右堂	5間(9.1m)4面	瓦葺	右社 桁行6尺(1.82m)	梁行4尺(1.21m)	唐破風桧皮葺
				拝殿 桁行5間(9.1m)	梁行2間半(4.55m)	
				玉垣 長6間(10.92m)	横5間半(10.01m)	板葺
				木鳥井 高さ1丈(3.03m)	廻り2尺8寸(0.85m)	
元禄五年寺社御改帳 日野村(久保多一夫家文書)						
	敷地	南北17間(30.94m)	東西9間(16.38m)	境内 南北36間(65.52m)	東西17間(30.94m)	内敷地南北17間、東西7間(12.74m)
	本堂	5間(9.1m)4面	瓦葺	本殿 長6尺(1.82m)	横4尺(1.21m)	唐破風桧皮葺
	庫裏	梁行2間半(4.55m)	桁行4間半(8.19m)	拝殿 長5間(9.1m)	横2間半(4.55m)	
		あらふき		井垣 長6間(10.92m)	横5間半(10.01m)	
				奥鳥居 高さ8尺(2.42m)		
	本堂	但し、丸柱四方にれんたい柱あり、4尺5寸のえんあり		口鳥居 高さ1丈(3.03m)		
		屋根は、小(採)作しころなし瓦葺、内しかう天井、小こうし物		門家 桁行3間半(6.37m)	梁行2間半(4.55m)	

『日野の口碑』に記載された牛頭天王宮の記述

本殿2間×2間半、南向き妻入母屋
社殿の後ろの社山は塚のようになった饅頭形
寺との境は、高向井路
山の高さは観音寺より少し高いが、社殿の所は、井路と框は同じくらい
社は南向き妻入母屋で、2間に2間半、
1間の出妻、正面は階段付、三方濡椽(たるき)
その突き当たりは衛士の絵が画いてあった。
椽巾は1m余り、正面母屋に鳥居型の彫り物
真ん中に鰐口をかけ、布紐でつるしてある。

社殿の周り…玉垣、狛犬1対、灯篭3対、石彫の大きな手洗鉢、横に大石
社殿の前は相当広い、種々の神事するのに余裕
この広場を離れて対峙する拝殿、
絵馬堂を兼ねて西寄りに入口門、井路の岸寄りに神主部屋。
神主部屋の総棟長15m余り→明治30年頃～春日にあった小学校をここに移す。
拝殿の外側に石の鳥居。
合祀の際、拝殿だけ残して皆高向に。絵馬も

社の中には、様々な古木が
塚の下方には十三塔の崩れ落ちたものがあって、子ども達が腰掛がわりに
昔は、観音寺から境内にかけて、堂ノ上田の辺りから出っ張った山之尾のような格好→地均らしをして境内を広げ
お宮の東方は山裾を引いて低くなっていたが、社殿より拝殿鳥居まで高い高い石垣で広場を造成してあった。

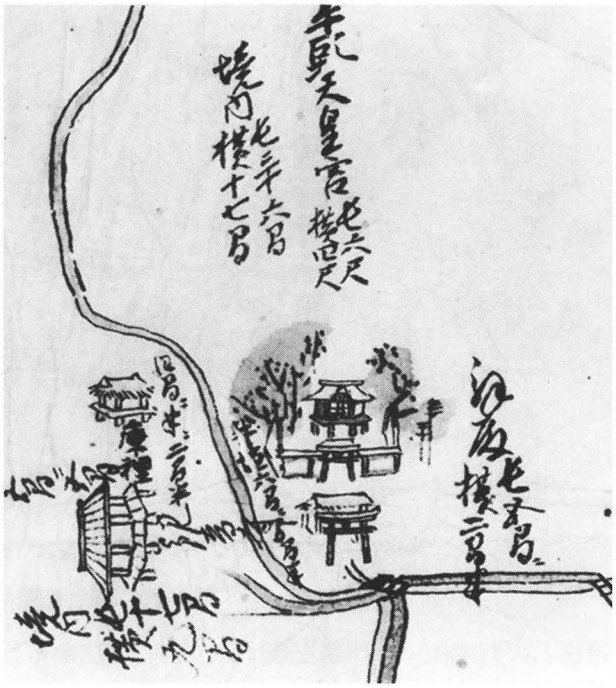
八坂神社は、観音寺よりも建てたのが先。
お宮の境内に寺を。
この宮を一名大堂の宮と言っていた。
大堂は観音寺より南で阿弥陀仏を祭ってあった。

※上記の数値は、河内長野市市史編集室 道端麻依子氏がこれらの近世文書を整理したものから抽出した。

第4表　日野観音寺と牛頭天王宮の規模データ

したがって、今回の調査で確認したものは、復元図の中央下から右側の箇所になる。まず、神社より一段下がった所には、石組み(ＳＷ２)とその周辺のピットがある。図のように正確には建物を復元できなかったが、掘立柱建物とそれに伴う排水溝があったと考えられ、それに加えて用途不明の石組みも描いた。

ここで問題になるのが、神社境内の範囲である。日野村絵図などには、境内の範囲が「長36間、横17間」となっている。元禄五年寺社御改帳には南北36間、東西17間となっているため、復元図では南北に長い境内を想定した。その場合、検出の遺構は神社外の施設となる。もしくは中世の段階では存在したが、近世以降は廃絶された施設と考えることもできる。ただ、この文献以外に方角を記述しているものがないため、仮に東西に長い境内だと、第Ｉ－１調査区南側並びに第Ｉ－２調査区が神社の境内に入ってくる。第Ｉ－２調査区の西側はどちらの場合にも境内に入るが、明確な遺構がなく、景観は不明である。ここでポイントになるのが、第Ｉ－１調査区で検出された石敷き(ＳＷ１)である。もし東西に長い境内だと、ちょうど北東隅の場所が石敷きとなる。神社境内中心部が未調査のため明確ではないが、周辺の南北に長い地形を考えると、南北主軸の境内の可能性が高く、遺構を重視すると東西主軸の境内となる。これらについては検討の余地を残す(第99図)。



第98図　日野村絵図

また、当調査区では鎌倉～室町時代の瓦が出土しているが、それらは現代の石垣・耕作地を造成するときに混入したものである。量的にも調査区内や調査区に隣接して瓦葺の建物があったとは考えられず、西側にあった観音寺に葺かれていたものが、混ざったと推測される。

次に、復元図の右側から下にかけては、石敷き(ＳＷ１)と湿地帯が続いている。実際に検出したのは、図右側の部分だけであるが、図左側の地点でも石敷きと推測される箇所があるため、神社を中心に囲むような遺構として描いた。前述のように、これらが神社の境内を示すものか検討の余地はあるが、少なくとも石敷きよりも南側と湿地帯を区画するものであることは間違いない。

次に図左端には、焼土坑群と瓦窯がある。瓦窯は観音寺で葺くものを焼成したと考えられる。焼土坑群は、時期を特定できる遺物が出土していないため、それぞれの土坑や他の

第99図　神社範囲推定図

遺構との同時性には問題を残すが、寺社が広がる景観の中で、土器や瓦が焼成されていたと思われる。

また、図には描かれていないが、右外側の部分は、第Ⅰ－１調査区にあたる。この場所には、湿地帯を挟んで若干の遺構が見られる。明確な建物跡などは見つかっていないため、どのような景観であったかは不明である。しかし、本調査の前に行われた確認調査では、中世の遺物と共に平安時代の遺物が若干出土しているため、寺社が建築される前後にこの辺りでも人々の営みがあったことが推測される。

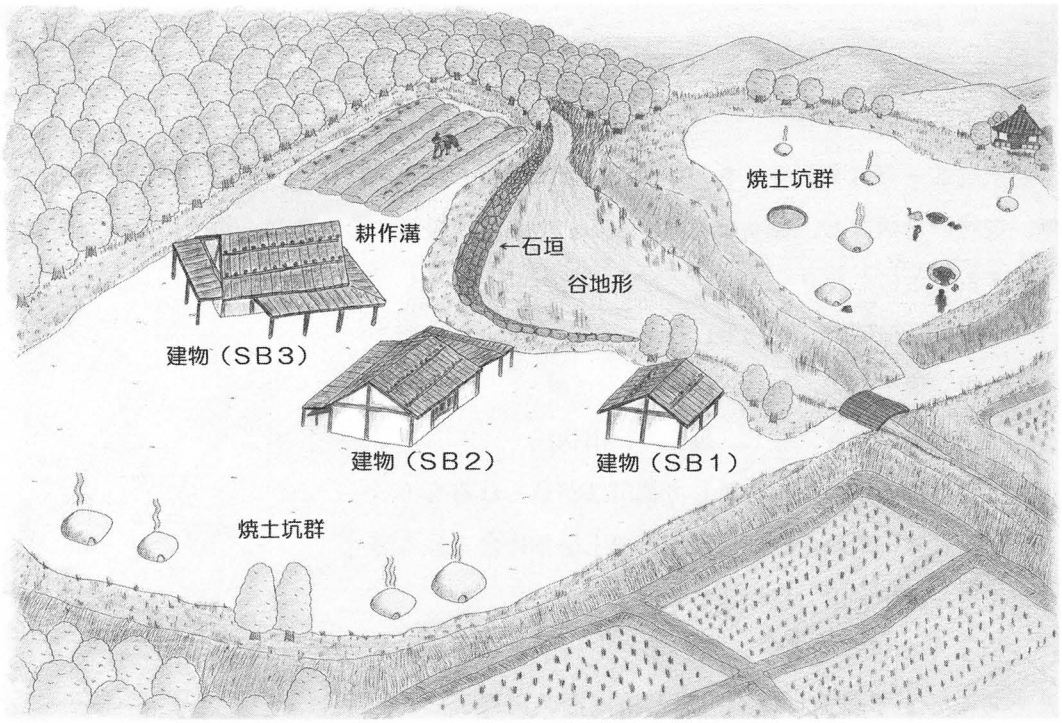
５．第Ⅱ調査区の景観復元

前述の調査成果から景観を復元したイメージが第100図である。まず、掘立柱建物が３棟ある。ＳＢ３については、出土遺物から13世紀頃には廃絶していたと推測されるが、ＳＢ１・２に関しては、遺物が出土していないため、同時期に存在したかは不明である。また、建物の主軸がＳＢ３とは違うことからも、異なる時期にあった可能性が高いと考えられる。

図面中央には、西側の山からの谷地形があり、建物北側に石垣を巡らし護岸していたと考えられる。この谷地形は、出土遺物よりＳＢ３と同じ頃には埋没しているようである。ただ、発掘調査時においてもこの谷地形の辺りは湿地状態であったため、埋没後も耕作地としては利用されたかもしれないが、居住域としては利用されなかったと思われる。

図面右上と左下には、焼土坑群がある。第Ⅰ調査区同様、土器の焼成土坑として描いた。前述のように、焼土坑から遺物の出土が少ないため、同時期に構築されたかは不明だが、埋土の明確な違いは見られないため、比較的短期間の内に使用され廃絶されたものと思われる。

その他、詳しくは触れなかったが、ＳＢ３の北側に溝群が広がっている。これらの溝は、ＳＢ３よりも南に広がらないことや、同じ主軸で掘削されていることから、建物と同時期の耕作溝と思われる。



第100図　第Ⅱ調査区景観復元図

6．最後に

以上のように、今回の調査で確認された遺構をイメージとして整理した。細かく検討すると同時期に存在したか不明なもの、前後するものなどがある。したがって、このイメージが実際の姿ではないことは間違いない。また、考古学的手法と、文献資料から確認したものが混在するなど、かえって不要な誤解を与えるとの指摘もあるだろう。だが、発掘調査の無機質な図面の中に、過去の歴史を垣間見ることができる人がどれだけ存在するのだろうか。多少、強引な点もあるかもしれないが、調査成果を少しでも多くの人に理解してもらい、消化する一助になればと思い作成した。また、同時期の他の遺跡との比較を行うことにより、このイメージの変更もあるはずだが、今回は筆者の力不足でそのような比較検討ができなかった。しかし、当遺跡のデータが、中世の村の景観復元にとって貴重な資料になれば幸いである。

註１　『日野の口碑』沖田南峯　昭和47年

第２節　焼土を伴う土坑について

１．はじめに

当遺跡では、各調査区において１ｍ前後の土坑を多数検出した。これらの土坑には埋土に炭を多く含み、底面や側面が赤く焼けているものもあった。そして、このような土坑を今回の調査では、44基も確認した。これらを総称して「焼土坑」と呼び、若干の整理をしたいと思う。

２．焼土坑とは～分類～

焼土坑と一概にまとめても、今回の調査で確認した土坑には、平面形や規模、焼土の有無、炭層の堆積など、様々な違いがある。それらを整理するために、以下のような要素で分類することにした。

平面形…円形、楕円形、方形、隅丸方形、不定形

規　模…長軸、短軸、深さ

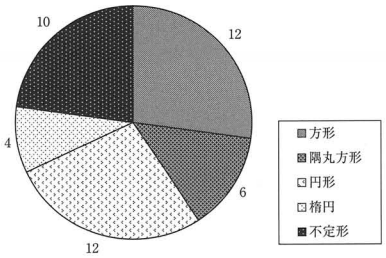
焼　土…あり、なし、焼土の検出状況

突出部…平面形に付属して突出部が見られるもの

炭　…炭層が底部に堆積、埋土全体に含まれる等

遺　物…完形、破片、なし

このような視点をもとに、整理したのが第５表である。まず平面形は、円形と楕円形の円形系と方形と隅丸方形の方形系、不定形の大きく３つに分けることができる。それらの数を比べると、円形系が16基、方形系が18基、不定形が10基であり、形による偏りは見られず、どの平面形も構築されていることが分かる(第101図)。



第101図　焼土坑の平面形の割合

また当遺跡内で過去の調査で検出され、河内長野市内でも多数検出されている炭焼窯に見られるような逆三角形の平面形は確認されなかった。

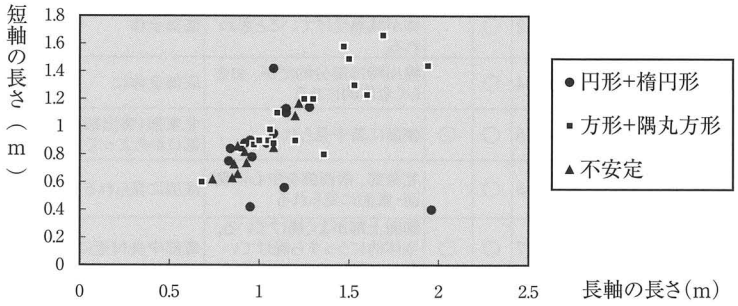
次に平面規模についてであるが、一辺が0.6～２ｍ弱までの土坑が確認され、特に0.8～1.2mのものが多いようである。平面規模と平面形の関係については(第102図)、方形系は一辺１ｍ前後のものから２ｍ弱のものまであるのに対して、円形系は１ｍ前後に比較的集中していることがわかる。深さについては、検出時に遺構が削られているため、比較の数値としては今回除外した。このことは平面形についても同じであるが、方形系の規模の大きいものでも、深さの浅いものが多いことから、比較の対象とした。

焼土についてであるが、今回の検出したものは、第５表の◎印の土坑を除いて、被熱が

第５表　第Ⅰ・Ⅱ調査区焼土坑

	調査区名	遺構番号	平面形	規模(m)			焼土	突出部	焼土の状況	炭の状況	遺物	残留磁気測定
				長軸	短軸	深さ						
1	Ⅰ-1	SK1	方形	1.3	1.2	0.2	○		北西部側面が強く。北東部も全体的に若干。	炭を含む埋土	なし	
2	Ⅰ-1	SK3	隅丸方形	1.1	1.1		○	○	北東部の突出部に若干。底部にもほんの少し	底部全体	なし	
3	Ⅰ-1	SK7	方形	1	0.9	0.07	×			底部全体	瓦器片	
4	Ⅰ-2	SK11	円？	0.95	0.42	0.24	○		北西部上部に若干見られる。	底部に多く堆積	なし	
5	Ⅰ-3	SK14	方形	1.6	1.23	0.25	◎		側面のみ。かなり焼けている。底部には全く見られない。	底部に。炭単一層ではなく炭を多く含む層が堆積	なし	7世紀中頃
6	Ⅰ-3	SK16	円形	0.95	0.9	0.12	○		北西と南東部を中心に。全体が被熱受けていると思われる。	底部全体	なし	
7	Ⅰ-3	SK20	円形	0.83	0.75	0.24	○		検出時は部分的だが、おそらく全体的にある	底部全体に	なし	
8	Ⅰ-3	SK21	方形	0.97	0.87	0.15	○	○	側面に若干見られる	北東部(突出部)方向の底部にかたよって見られる。	なし	
9	Ⅰ-3	SK22	方形	1.47	1.58	0.15	○		北東部、南西部を中心に側面・底面に見られる	底部に見られる	なし	
10	Ⅰ-3	SK23	不定形	1.22	1.17	0.17	○	○	側面上部がよく焼けている。全体的にうっすら焼けている。	底部中央付近に堆積	なし	
11	Ⅰ-3	SK24	隅丸方形	1.36	0.8	0.2	◎		側面がよく焼けている。全体的に北西部がよく焼けている。	北西部にかたよって見られる。	須恵片、瓦器片	7世紀又は8世紀
12	Ⅰ-3	SK25	円形	1.15	1.1	0.2	×			埋土全体に	なし	
13	Ⅰ-3	SK26	方形	1.05	0.9	0.07	○	○	突出部にあり。底部にも若干。	底に炭層	なし	
14	Ⅰ-3	SK27	方形	1.25	1.2	0.16	○		南西隅。中央底部がよく焼けている。	底部全体	なし	
15	Ⅰ-3	SK28	楕円形	1.06	0.9	0.28	◎		全体に。焼け方が強い。	底部全体	瓦器、瓦質片等	1120±50
16	Ⅰ-3	SK29	円？	1.14	0.56	0.35	×			底部全体	なし	
17	Ⅰ-3	SK30	不定	0.85	0.63	0.17	×			底部全体	なし	
18	Ⅱ-1	SK1	不定形	1.2	1.08	0.2	×			埋土全体に含む	なし	
19	Ⅱ-1	SK10	楕円形	1.08	1.42	0.22	×			埋土全体に		
20	Ⅱ-1	SK11	隅丸方形	0.68	0.6	0.04	×			埋土全体に	なし	
21	Ⅱ-1	SK12	不定形	0.88	0.66	0.05	×			埋土全体に	なし	
22	Ⅱ-1	SK13	隅丸方形	0.9	0.84	0.18	×			底部全体にまとまって		
23	Ⅱ-1	SK14	円形	1.14	1.12	0.14	○		セクション内で確認。薄く全体的に。他の部分は掘削時に削平か？	底部にまとまって	なし	
24	Ⅱ-1	SK15	方形	1.06	0.98	0.14	○		セクション内で確認。薄く全体的に。他の部分は掘削時に削平か？	底部にややまとまって	瓦器片	
25	Ⅱ-1	SK16	不定形	0.88	0.86	0.05	×			埋土に多く含む	なし	
26	Ⅱ-1	SK17	不定形	0.74	0.62	0.04	×			埋土に多く含む	なし	
27	Ⅱ-1	SK18	円形	1.08	0.95	0.21	○		全体に若干	埋土全体に薄く	なし	1075±50又は1400±50
28	Ⅱ-1	SK19	不定形	0.92	0.82	0.15	×			埋土全体に薄く含む	なし	
29	Ⅱ-1	SK2	不定形	0.93	0.74	0.12	×			埋土に含む	なし	
30	Ⅱ-1	SK3	隅丸方形	1.2	0.9	0.16	×			北側部分にまとまって。実際は方形。南側が一段高くなっている。	なし	
31	Ⅱ-1	SK4	方形	1.69	1.66	0.31	×			下層に多く堆積、その中から土師皿など遺物	土師皿	
32	Ⅱ-1	SK5	方形	1.08	0.88	0.18	×			埋土全体に	なし	
33	Ⅱ-1	SK6	隅丸方形	1.94	1.44	0.22	×			底部にまとまって		
34	Ⅱ-1	SK7	方形	1.53	1.3	0.08	×			底部にまとまっている部分もある	なし	
35	Ⅱ-1	SK8	円形？	1.96	0.4	0.14	？					
36	Ⅱ-1	SK9	方形	1.5	1.49	0.18	×			埋土全体に	瓦器椀	

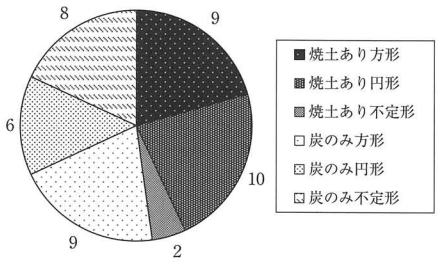
	調査区名	遺構番号	平面形	規模(m)			焼土	突出部	焼土の状況	炭の状況	遺物	残留磁気測定
				長軸	短軸	深さ						
37	Ⅱ-2	SK22	不定	1.08	0.85	0.12	○		焼土は全体に広がる。底部に無いのは、調査時に削平しているかもしれない。	薄い炭層	なし	1150±50
38	Ⅱ-2	SK23	楕円形	1.04	0.88	0.12	○		若干見られる	多く厚く堆積		
39	Ⅱ-2	SK24	円形	0.96	0.78	0.16	○		側面にやや見られる。	炭少なく、薄い		
40	Ⅱ-2	SK25	円形	0.92	0.88	0.18	○		弱く全体的に	炭層ほとんどない		
41	Ⅱ-2	SK26	楕円形	1.28	1.14		○		全体に。	底部に見られる		1250±25
42	Ⅱ-3	SK29	円形	0.84	0.84	0.07	×				石器片	
43	Ⅱ-3	SK30	円形	1.15	1.13	0.16				全体	なし	
44	Ⅱ-3	SK31	不定	0.86	0.73	0.05				底部に見られる	なし	



第102図　焼土坑の規模散布図

見られると言っても、非常に弱いものであった。検出時の精査で、削り取ってしまうくらいであることから、焼土が部分的に検出されたものでも、実際は全体に焼土があった可能性もある。また、◎印の土坑でも、還元焔で焼かれたような硬質状態ではなく、酸化焔で焼かれた明褐色の焼土が多い。また、焼土の有無と平面形との関係であるが、第103図を見て分かるように、焼土の有無と平面形には全く関係が見られない。

次に突出部に関しては、すべての焼土坑で見られるものでないが、方形系の土坑に付属している。方形のどれか一方の角に凸部を作っており、炭や焼土も他の角よりも多い傾向がある。第Ⅰ調査区のＳＫ21(図版18)のように突出部を持たなくても、一方の角に炭が集中している様子が確認できるため、突出部を持つ土坑と同様の焼成の結果生じたものと推測される。



第103図
焼土坑の平面形と焼土の有無の割合

炭層については、今回「焼土坑」を認識した基本的要素であり、焼土が見られなくても、埋土に炭が非常に多く含まれるものを、すべて焼土坑とした。ただ、炭層の堆積に違いが見られ、炭のみの層が底部に堆積しているものや、炭層と埋土が混ざっているもの２種類が見られた。

遺物に関しては、ほとんどの焼土坑で出土しておらず、土坑の時期決定を難しくしている。その中で細片が出土しているものについては、瓦器片など中世の遺物がほとんどであった。また、第Ⅱ調査区のＳＫ９からは、瓦器埦が２個体完形で出土し、尾上編年のⅢ期後半頃のものであった。

その他に、焼土坑の一部について熱残留時期分析を行った。詳しくは第５章を参照して頂きたいが、７世紀頃のものと、11～13世紀のものが見られる。

３．焼土坑って何？～分析～

分類の結果、今回の調査で検出した焼土坑を整理すると、

１）平面形は、円形系と方形系がある。

２）円形系は１ｍ前後の規模が多く、方形系は１～２ｍの規模と様々である。

３）焼土の有無と平面形は、関係が見られない。

４）炭層が底部に堆積しているものと、埋土全体に見られるものがある。

５）遺物はほとんど出土しない。出土するものは中世の遺物。

以上のような特徴がみられる。しかし、それぞれの組み合わせには決まったパターンがなく、類型を提示するのは難しい。そのことは逆に、これらの遺構には何かを焼く行為が実行できれば十分で、ある程度の傾向はあっても、必須ではないということになる。

それらを踏まえて、焼土坑の特徴を考えていきたい。まず、円形系と方形系の違いについてであるが、同じ面積ならば方形系の燃焼室が広く、円形系の面積が狭くなる。平面形と規模の関係を見ても、円形系は１ｍ前後が多く、方形は２ｍ弱のものまである。つまり必要に応じて、平面形を選択していると考えられる。さらに、両平面形の土坑数は拮抗していることから、燃焼室の広さが重要ではないことが分かる。少量のものを状況に応じて焼いていたのであろう。

次に焼土と炭層の関係についてであるが、これらは焼成方法を示す重要な手がかりである。つまり、焼土が確認されるということは、直接火を受けた証拠であり、埋土に炭層のみがあり、焼土が見られないということは、直接火を受けていないということになる。焼成の方法が大きく異なってくる。

古代の土師器生産と焼成遺構について検討した成果に当てはめると、当遺跡の焼土坑は総体的に被熱度が弱い定型化されていないＣ類に該当する[註1]。また焼土の状況による焼成方法の検討も行われているが、様々な焼成方法が復元可能であり、明確にはなっていない。この分類は古代を中心としたものであり、そのまま当遺跡に採用するのは難しいと考えられるが、同じ軟質系の土器焼成遺構と捉えるならば、同系統の焼成技術の結果生じたものと考えることができる。さらに、わずかながら瓦器埦の完形品が出土していることからも、当遺跡の焼土坑がこれらの焼成遺構として捉えることも可能であろう。

しかし、前掲書でも検討されているが、土器焼成遺構と同じように焼土坑を残すと考えられるものに、炭焼窯がある。河内長野市域は中世以降、白炭など炭焼の産地として著名であり、炭焼窯の検出例も多い。しかし、白炭の炭焼窯として近年調査された宮山遺跡などの調査例[註2]と比べると構造が大きく異なり、白炭用の窯ではないことが分かる。また黒炭の炭焼窯の可能性も残るが、現段階では明確でないため言及できない。

大阪府堺市に所在する平井遺跡で検出された瓦器の焼成遺構のように[註3]、破損品が大量に出土している状況ではないため、決定的な証拠は示せないが、今回の調査で検出された焼土坑は、前述のように瓦器や土師器などの軟質系土器の焼成に用いた蓋然性が高いと思われる。

しかし、今回の調査では、それぞれの土坑の時期が不明であり、形態の差異が時期差による可能性もある。また、近接して検出された瓦窯や以前の調査で検出された炭焼窯との関係、それらを含めた生産体制の問題などには言及できなかった。中世の在地土器の流通範囲が狭小であるならば[註4]、天野山金剛寺遺跡を含め、日野観音寺遺跡から出土した遺物との比較など、検討課題も多い。その他にも大阪府茨木市に所在する栗栖山南墳墓群でも同様の焼土坑が検出されており[註5]、他遺跡の焼土坑との検討も必要である。また今回は、焼土坑を土器焼成や炭焼のような生産に伴う遺構として考えたが、「焼く」行為自体に意味のあるドンド焼きなどの民俗行事や火葬など、違う用途も十分に検討すべきであろう。しかし、筆者の実力不足でこれらの問題について十分に検討できなかった。今後の課題としたい。

福田

註1　望月精司「土師器焼成坑の分類」『古代の土師器生産と焼成遺構』1997年窯跡研究会

註2　『河内長野市遺跡調査報告XXX　天野山金剛寺遺跡・宮山遺跡・塩谷遺跡』2004年8月河内長野市教育委員会・河内長野市遺跡調査会

註3　渋谷高秀・小谷正樹「和泉のおける瓦器埦焼成窯」『中近世土器の基礎研究Ⅴ』1989年

註4　森　隆「中世の土師器・瓦器の焼成窯」『古代の土師器生産と焼成遺構』1997年窯跡研究会

註5　市本芳三ほか『栗栖山南墳墓群』2000年（財）大阪府文化財調査研究センター

第５章　日野観音寺遺跡における考古地磁気年代推定

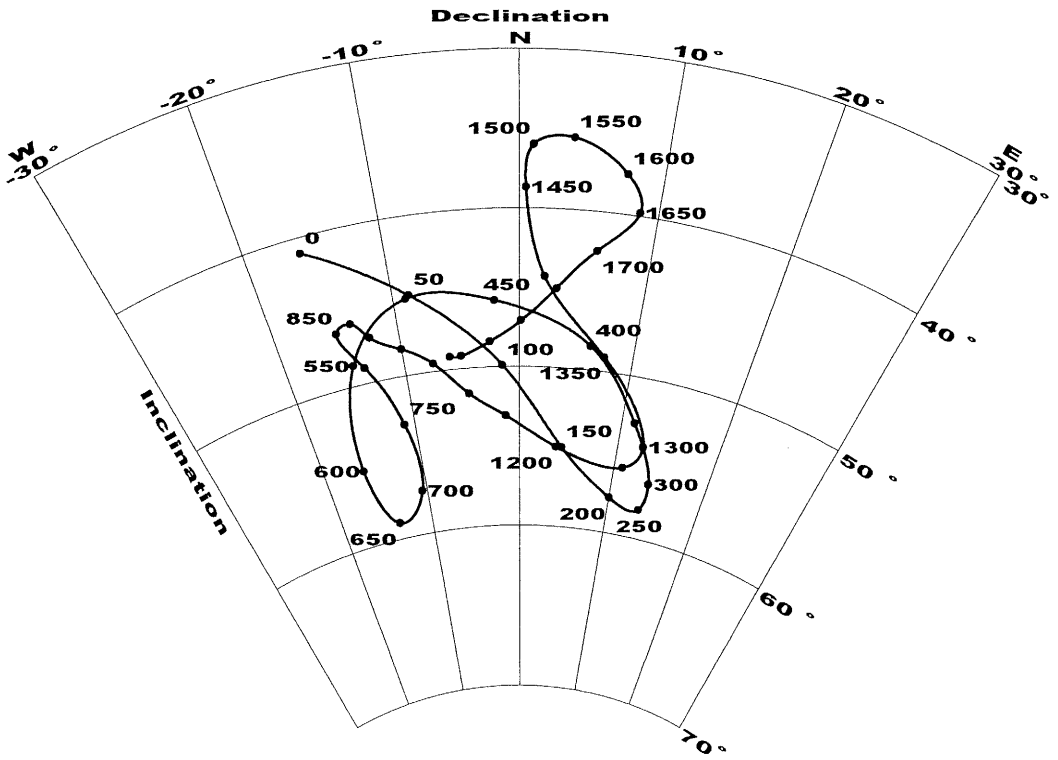
第１節　日野観音寺遺跡における考古地磁気年代推定（二次磁化除去前）

１　考古地磁気年代推定の基礎

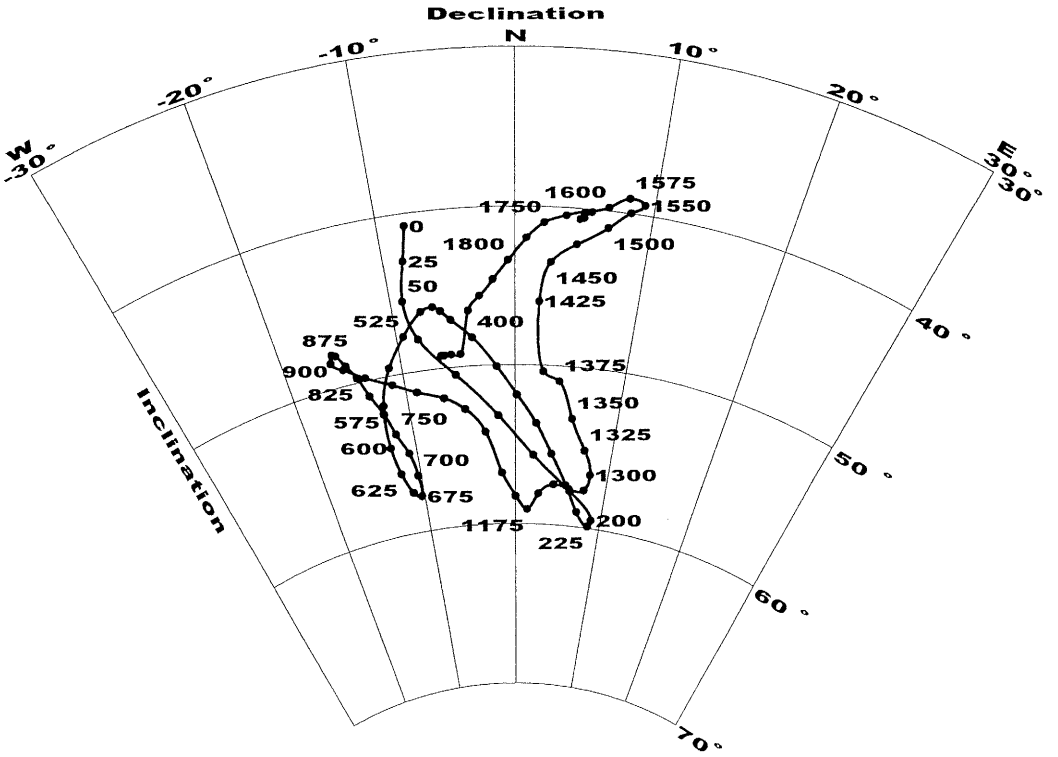
磁石は北を指す。地球には地磁気が存在するためである。地磁気はベクトル量であり、ある地点における地磁気を記述するために、方向(偏角と伏角)と大きさ(全磁力)が必要である。一般に、磁気コンパスの磁針が指す北(磁北)は、真北(地図の経線方向)からずれている。この磁北と真北の間の角度が偏角である。磁針をその重心で支え、磁南北と平行な鉛直面内で自由に回転できるようにすると、北半球では磁針のＮ極が水平面の下になるように傾く。この傾斜角が伏角である。河内長野市の現在の偏角は約6.7°Ｗで、伏角は約48°である。また、全磁力は、約0.45エルステッドである。これら地磁気の三要素(偏角・伏角・全磁力)は観測する地点によって異なる値になる。全世界の地磁気三要素の観測データの解析から、現在の地磁気分布は、地球の中心に棒磁石を置いたときにできる磁場の分布に近似される。この棒磁石の軸方向は、自転軸から約11.5度傾いている。この磁軸と地表との交点が地磁気北(南)極である。

地磁気は絶えず変動し、時代と共にその地磁気北極の位置を変える。従って、ある地点で観測される偏角・伏角の値も時代と共に変化する。方向だけではなく、大きさ(全磁力)も変化する。この変動を地磁気永年変化と呼んでいる。

歴史時代の地磁気永年変化は、岩石や焼土の残留磁化の測定を基礎とする考古地磁気測定によって明らかにすることができる。どんな物質でも、ある(強)磁場中に置かれると磁化を帯び、そして磁場が取り除かれると、普通の物質からは磁化が消える。しかし、強磁性物質(磁石になれる物質)では、外部磁場が消えても磁化が残る。これが残留磁化である。残留磁化の強さや安定性は、磁化を獲得する時の条件によって異なる。残留磁化はその獲得方法の違いによっていろいろな名前で呼ばれる。考古地磁気学で地磁気の化石として最もよく利用するのが熱残留磁化である。岩石には小量の強磁性粒子(赤鉄鉱や磁鉄鉱などの鉄の酸化物)が含まれている。火成岩では、高温のマグマの状態から冷えて岩石になる過程で、強磁性粒子がその時の地磁気によって磁化を帯び、冷えてからはその残留磁化を保持し続ける。これが熱残留磁化である。土も焼かれると、冷却の過程で同様の熱残留磁化を獲得する。熱残留磁化の性質を簡単にまとめると、次のようになる。岩石の誕生時または土が焼かれた時の地磁気方向を記録していて、その大きさは地磁気の大きさに比例し、何億年もの長い期間でも変質しない。これらの性質によって、地磁気の化石として利用が可能なのである。Hirooka(1971)やShibuya(1980)により遺跡の焼土の熱残留磁化測定か



第104図　広岡（1977）により西南日本の考古遺跡焼土の測定から求められた過去2000年間の地磁気永年変化曲線



第105図　Shibuya（1980）により西南日本の考古遺跡焼土の測定から求められた過去2000年間の地磁気永年変化曲線

ら求められた過去 2000年間の西南日本における偏角-伏角の変化を第104・105図に示す。偏角は20°Wから15°E、伏角は35°から60°の間で変化している。第104・105図のような地磁気永年変化の標準曲線が得られると、逆に、年代の確かでない遺跡の焼土の残留磁化を測定し、永年変化曲線と比較することで、その年代の推定を行うことができる。これが考古地磁気による年代推定である。この方法は、C^{14}法やフィッション・トラック法のような放射(絶対)年代測定法とは異なり、それだけで独立して年代を決定できない。普通、偏角と伏角の組合せで永年変化曲線から2つか3つの候補年代が出てくる。そのうちの何れを採用するかは、考古学的推定に頼ることになる。

2　試料の採取と測定

(1) 試料採取方法

遺構の焼土から次の様な手順で試料を採取する。

1．焼土面に先の尖ったハンマーで、1辺が数cm程度の立方体試料を取り出すための溝を、試料が床面から外れないように、手で押さえながら丁寧に掘る。
2．溝を掘り終わった後、掘り込み作業中に試料表面についた砂や石を刷毛で丹念に取り除く。
3．薄く溶いた石膏をビニール袋に入れ、試料全体にかけて表面を補強する。
4．乾燥後、やや固めの石膏を試料上面にかけ、1辺5cmの正方形のアルミ板をすばやく押しつける。石膏が固まるのを待ち、アルミ板を外す。
5．アルミ板を用いて作った平面の最大傾斜の方位と傾斜角を、考古地磁気用磁気コンパス(Hirooka, 1971)で測定し、平面上に方位測定位置を示すマーク(平面を定義する3つの点)と試料番号を記入する。
6．ハンマーで試料を掘り起こし、試料の底面を石膏で補強し、新聞紙等に包み持ち帰る。

(2) 試料整形・測定方法

遺構で採取した試料はそのままでは測定できないので、試料整形を以下のように行う。

1．試料を1辺3.5cmの立方体に切断するために、プラスチックの型板(34×34mmの正方形)を利用し枠取りの線を引く。この時、型板のマークと試料表面の方位測定位置を示すマーク(3点)を合わせる。
2．試料温度が上がるのを防ぐために冷却水をかけながら、ダイヤモンド・カッターで1面ずつ切断する。切断面が崩れないように石膏で補強し、次の面の切断を行う前に試料を充分乾燥させる。この作業を5回繰り返すと立方体試料が得られる。
3．試料表面についた余分な石膏をカッターで削り落とす。
4．残留磁化は、当社製のリング・コア型スピナー磁力計(SMD-88型)を用いて測定する。

（3）データ整理

測定結果として得られるデータは、試料に設定した座標に対するものなので、試料を遺構のもとの位置に戻した時の真北を基準方向とする座標に対するものに変換しなければならない。そのためには、試料が残留磁気を獲得した時の位置（地理的緯度・経度）、および方位（試料の一つの基準面の走向・傾斜）が必要である。位置については、２万５千分の１程度の縮尺の地形図から、その遺構の緯度・経度を読み取ればいい。方位は、試料採取の作業で磁気コンパスを使って測定している。磁気コンパスの方位は、磁北に対するものなので、真北に対する方位に直すために、試料採取地点の現在の偏角分を補正する必要がある。現在の地磁気偏角は、国土地理院の偏角分布の実験式から求めることができる。

測定にはいろいろな要因での誤差がつきものであるため、一つの遺構から８個程度の試料を採取している。これらの試料の個々の測定で得られた偏角（Di）・伏角（Ii）から平均値（Dm, Im）を求める。ここで用いる統計学的方法はFisherによって確立されたものである。各試料の測定値を、方向（Di, Ii）の単位ベクトルとして取り扱う。

まず、n組の（Di, Ii）より

$N = \Sigma \cos Ii \cdot \cos Di$　（北向きの成分）

$E = \Sigma \cos Ii \cdot \sin Di$　（東向きの成分）

$Z = \Sigma \sin Ii$　（鉛直の成分）

を求めると、合ベクトルの大きさR, およびDm, Imは、

$R = (Z^2 + N^2 + E^2)^{1/2}$

$Dm = \tan^{-1} E / N$

$Im = \sin^{-1} Z / R$

で与えられる。　このとき、信頼度係数kは、k ＝（n-1）／（n-R）となる。kが大きいほど、方向の集中はよい。よく焼けた窯跡では数百の値になる。

誤差角α_{95}は、危険率5%として

$\alpha_{95} = \cos^{-1} [1-(n-R)/R \{(1/0.05)^{1/(n-1)}-1\}]$ で与えられる。α_{95}が小さいほど、方向の集中はよい。よく焼けた窯跡では数度以内になる。

これよりＤm，Ｉmのそれぞれの誤差の幅として、

$\delta D = \alpha_{95}/\mathrm{COS}\ Im$　（偏角誤差）

$\delta I = \alpha_{95}$　（伏角誤差）

が求められる。

以上のようにして得られた計算結果を、一つの遺構を代表する考古地磁気データとしている。

なお、考古地磁気年代推定の原理や測定方法については、中島・夏原（1981）に詳しく解説されている。

3　残留磁化測定結果と推定年代

発掘調査された日野観音寺遺跡の６ケ所の窯状遺構より57個の考古地磁気用の定方位試料を採取し、その熱残留磁気を測定した。

熱残留磁気測定結果を第６・７表、第106図にまとめた。現在の地磁気偏角の補正は、国土地理院の2000年の磁気偏角図から読み取った6.7°Ｗを使用した。第６・７表、第106図の偏角は補正後の値である。

(1) 第Ⅰ－３調査区ＳＫ28

交流消磁前			
試料名	偏角 °E	伏角 °	強度 ×10⁻³emu
KA-71	7.7	56.3	0.69
KA-72	-8.4	51.9	5.08
KA-73	-0.2	56.2	4.04
KA-74	-1.7	49.9	1.65
KA-75	-6.1	50.4	2.27
KA-76	-10.3	54.8	2.85
KA-77	-19.2	49.5	1.20
KA-78	-21.4	58.5	1.56
KA-79	-16.1	46.8	2.17
KA-80	-23.2	48.5	4.80

(2) 第Ⅱ－２調査区ＳＫ22

交流消磁前			
試料名	偏角 °E	伏角 °	強度 ×10⁻⁴emu
KA-81	-8.2	57.3	3.00
KA-82	-11.4	56.8	4.33
KA-83	19.0	38.0	1.89
KA-84	19.3	9.0	1.00
KA-85	-7.4	68.1	1.19
KA-86	-33.0	61.6	1.62
KA-87	-22.4	61.6	2.34
KA-88	-26.9	63.2	2.58
KA-89	65.3	34.7	1.05
KA-90	8.2	54.8	1.35

(3) 第Ⅱ－２調査区ＳＫ26

交流消磁前			
試料名	偏角 °E	伏角 °	強度 ×10⁻⁴emu
KA-91	10.2	62.1	4.69
KA-92	20.0	57.5	6.69
KA-93	1.6	55.4	4.16
KA-94	-1.9	45.3	4.02
KA-95	5.6	61.3	3.34
KA-96	-16.4	43.8	1.71
KA-97	12.6	59.6	1.97
KA-98	-22.7	51.1	1.01

(4) 第Ⅱ－１調査区ＳＫ18

交流消磁前			
試料名	偏角 °E	伏角 °	強度 ×10⁻⁴emu
KA-101	15.6	50.0	11.07
KA-102	-0.8	51.7	13.1
KA-103	25.8	68.1	2.43
KA-104	-117.5	73.9	6.97
KA-105	15.2	50.3	4.77
KA-106	-7.6	68.7	4.38
KA-107	14.7	54.5	7.72
KA-108	-3.1	57.5	8.13
KA-109	-12.4	55.2	4.47

(5) 第Ⅰ－３調査区ＳＫ14

交流消磁前			
試料名	偏角 °E	伏角 °	強度 ×10⁻³emu
KA-200	-20.8	57.5	6.71
KA-201	-25.9	58.8	5.10
KA-202	-18.6	54.5	7.04
KA-203	-18.7	60.8	4.18
KA204	-29.7	59.8	9.89
KA-205	-12.3	55.1	6.85
KA-206	-21.7	53.3	6.77
KA-207	-17.5	61.9	3.11
KA-208	-16.7	55.6	2.11
KA-209	-22.3	62.4	5.33
KA-210	-17.7	51.9	3.12

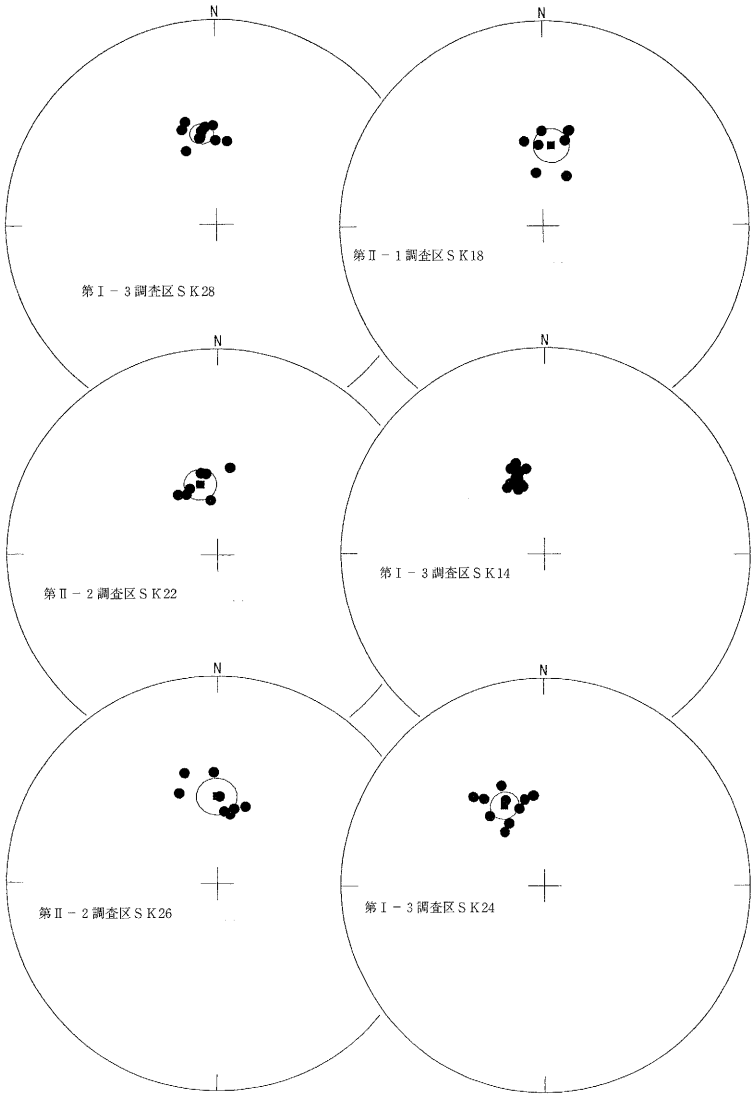
(6) 第Ⅰ－３調査区ＳＫ24

交流消磁前			
試料名	偏角 °E	伏角 °	強度 ×10⁻⁴emu
KA-211	-39.0	44.1	3.51
KA-212	-24.5	52.6	12.2
KA-213	-29.7	61.6	12.9
KA-214	-36.7	63.6	5.38
KA-215	-38.3	54.7	12.3
KA-216	-23.5	46.3	8.46
KA-217	-12.8	54.8	6.73
KA-218	-6.9	53.9	7.99
KA-219	-35.1	47.5	1.36
KA-220	-18.2	57.8	11.7

第６表　熱残留磁気測定結果

遺構名	試料数 n	Dm (° E)	Im (°)	α_{95} (°)	k	平均磁化強度 emu
第Ⅰ－3調査区SK28	9	-8.6	53.0	4.4	140.2	2.92×10^{-3}
第Ⅱ－2調査区SK22	7(10)	-13.7	61.1	6.2	95.0	2.04×10^{-4}
第Ⅱ－2調査区SK26	8	-0.4	55.3	7.6	54.0	3.45×10^{-4}
第Ⅱ－1調査区SK18	8(9)	6.7	57.6	7.0.	62.7	7.00×10^{-4}
第Ⅰ－3調査区SK14	11	-20.0	57.5	2.5	342.1	5.47×10^{-3}
第Ⅰ－3調査区SK24	10	-26.6	54.2	5.5	77.8	8.25×10^{-4}

第7表　考古地磁気測定結果（平均磁化方向）



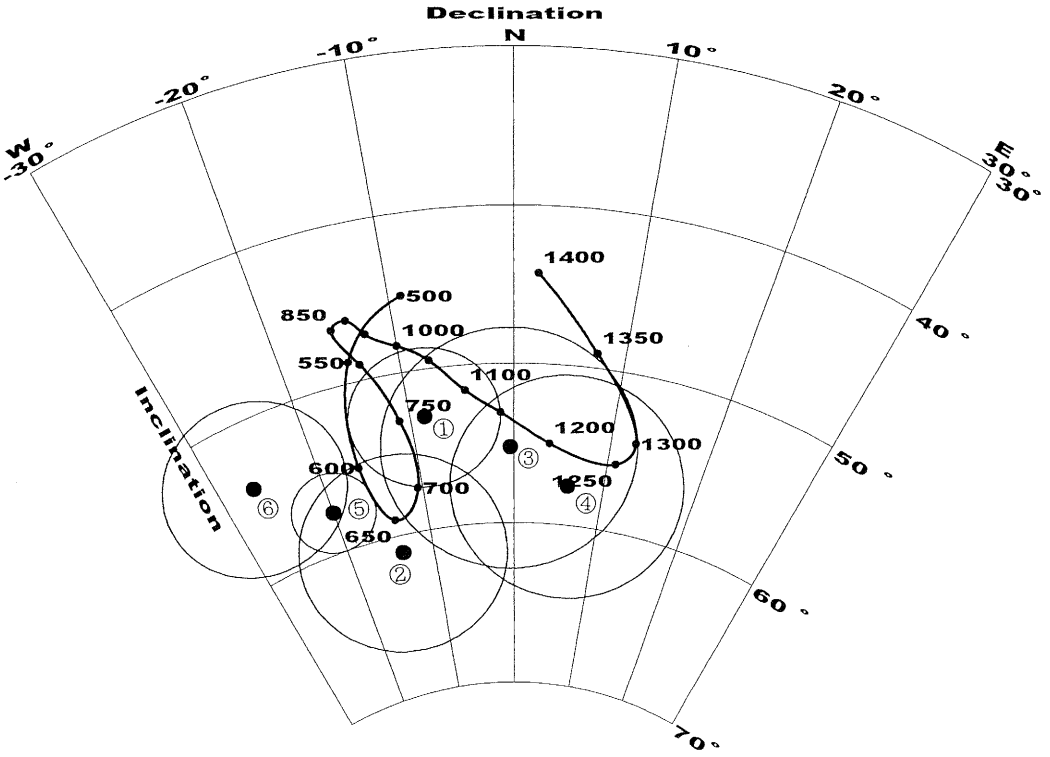
第106図　各試料の残留磁化方向の等面積投影図

第6表は、個々の試料の熱残留磁気測定結果(Di, Ii)と磁化強度である。第7表に、各遺構についての磁化方向の平均値(Dm, Im)・誤差角(α_{95})と信頼度係数(k), および平均磁化強度を示した。

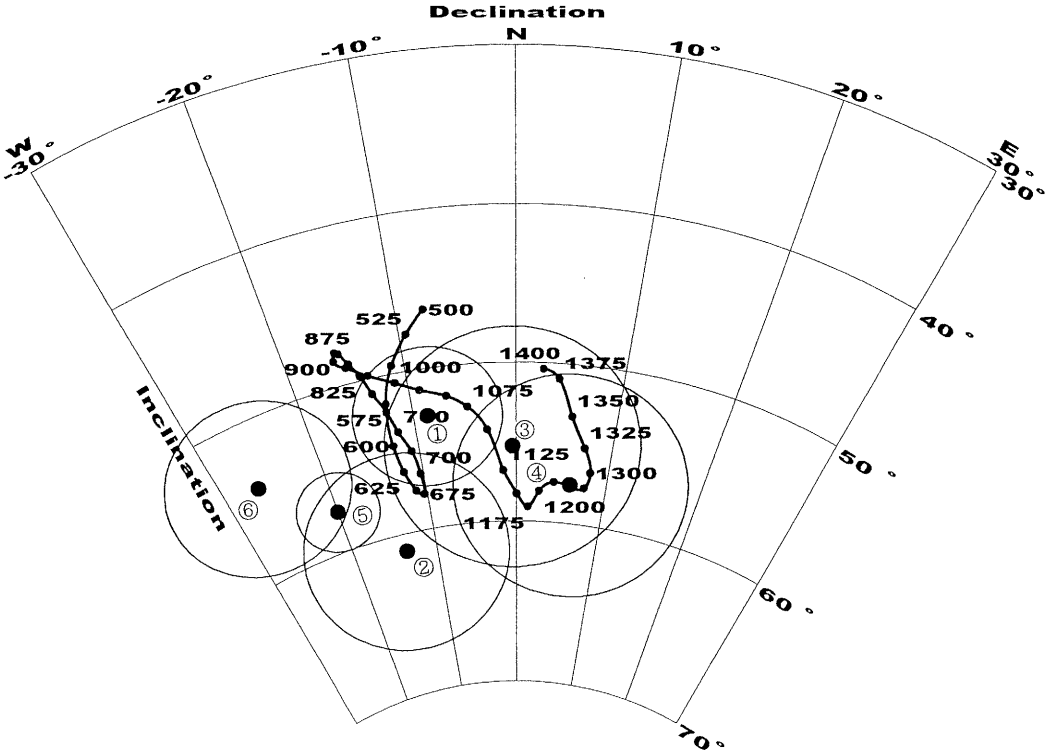
測定した試料の残留磁化強度は、約10^{-3}～10^{-4} emuであり、ある程度の高温で焼成された事は間違いない様である。また、各遺構の偏角と伏角の平均値の誤差角(α_{95})は、2.5°～7.6°であり、信頼度係数は⑤第Ⅰ－3調査区ＳＫ14を除くと150以下であり、今回の測定結果はやや信頼度に乏しいデータと言える。

各遺構の測定結果と広岡(1977)とShibuya(1980)の永年変化曲線と比較して年代の推定を行った。第105・106図は永年変化曲線に測定結果のDm・Imをプロットしたものである。黒丸は、平均磁化方向を示し、それを囲む実線の楕円が誤差角α_{95}の範囲である。この誤差角の範囲の中あるいは、これに一番近い永年変化曲線の部分が考古地磁気学的に推定される年代である。

考古学からは、13～14世紀が妥当との事である。第107・108図から明らかな様に、①第Ⅰ－3調査区ＳＫ28・③第Ⅱ－2調査区ＳＫ26・④第Ⅱ－1調査区ＳＫ18は、12～14世紀の曲線に近く、①1100±100・③1200±100・④1250±100の推定年代となり、考古学年代と矛盾しない。⑤第Ⅰ－3調査区ＳＫ14・⑥第Ⅰ－3調査区ＳＫ24については、曲線から西にズレ⑤は7世紀前半, ⑥は7世紀、②第Ⅱ－2調査区ＳＫ22は伏角が深く7世紀中～後半の曲線に近く、考古学年代より古い時代が得られる。



第107図　広岡（1977）により西南日本の考古遺跡焼土の測定から求められた500～1400年の地磁気永年変化曲線と測定結果（黒丸は平均磁化方向、楕円は誤差角α_{95}の範囲を示す。）



第108図　Shibuya（1980）により西南日本の考古遺跡焼土の測定から求められた500～1400年の地磁気永年変化曲線と測定結果（黒丸は平均磁化方向、楕円は誤差角α_{95}の範囲を示す。）

遺 構 名	考古学年代	考古地磁気推定年代 (AD)
① 第Ⅰ－3調査区SK28	13～14世紀	1100±100
② 第Ⅱ－2調査区SK22	13～14世紀	7世紀中～後半
③ 第Ⅱ－2調査区SK26	13～14世紀	1200±100
④ 第Ⅱ－1調査区SK18	13～14世紀	1250±100
⑤ 第Ⅰ－3調査区SK14	13～14世紀	7世紀前半
⑥ 第Ⅰ－3調査区SK24	13～14世紀	7世紀

第8表　考古地磁気年代推定年代

推定年代を第8表に示した。ここに出ている推定年代の±の年代幅は、推定年代がこの幅の中に必ず入るのではなく、この年代幅の中であればどの年代を取ってもおかしくない範囲を示しており、この時代をこえる可能性も充分にあることに注意して頂きたい。

最後に今回の測定結果は、誤差角が大きい結果となった。焼成の不良又は二次磁化の影響による事が考えられる。

4　引用文献

＊ Hirooka, K., 1971：Archaeomagnetic study for the past 2,000 years in Southwest Japan. Mem. Fac. Sci, Kyoto Univ., Ser. Geol. Mineral, 38,167-207.

＊ 広岡公夫, 1977：考古地磁気および第四紀古地磁気研究の最近の動向. 第四紀研究, 15, 200-203.

＊ 中島正志・夏原信義, 1980：考古地磁気年代推定法. 考古学ライブラリー9. ニュー・サイエンス社。

＊ 中島正志・谷崎有里, 1990：考古地磁気試料の交流消磁実験. 福井大教育紀要.

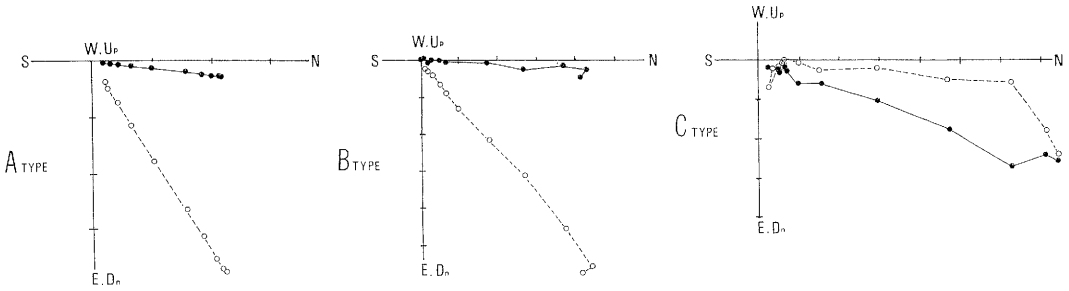
＊ Shibuya, H., 1980：Geomagnetic secular variation in Southwest Japan for the past 2,000 years by means of archaeomagnetism. 大阪大基礎工修論, 54p.

＊ Zijderveld, J. D. A., 1967：A. C. demagnetization of rocks：analysis of results. In Methods in paleomagnetism, Collinson et al. (eds.), 254-295, Elsevier Pub. Com.

第２節　日野観音寺遺跡における考古地磁気年代推定（二次磁化除去後）

１　序

従来、考古地磁気年代推定では、二次磁化を除去するための消磁実験は行われていなかった。考古地磁気試料として用いられる焼土は、焼成温度がキューリー温度以上の高温に達していれば、その熱残留磁化は非常に安定なものであると考えられること。さらに、せいぜい2000年前までの歴史時代のものを測定の対象としているため、二次磁化の主成分である粘性残留磁化(VRM)は少量しか付いていないと推定されたためである。しかし、近年、測定機器の性能の飛躍的な向上により測定精度が高くなり、わずかな二次磁化の影響も識別できるようになってきた。そこで、中島・谷崎(1990)は、考古地磁気試料について段階交流消磁実験を実施して、考古地磁気試料にも消磁実験が必要であることを明らかにし、Ａ・Ｂ・Ｃ３つのタイプに分類している。第109図にＡ・Ｂ・Ｃの消磁ベクトル図(Zijderveld, 1967)を示す。同図の黒丸は水平成分、白丸は鉛直成分を表わしている。Ａタイプは方向変化がなく、原点に向かう直線上にプロットできる１つの成分(一次磁化)しか存在しない試料である。Ｂタイプは方向変化があり、一次磁化と二次磁化の２成分が存在し、二次磁化が消えた(消磁)後に原点に向う直線(一次磁化成分)が得られる試料である。Ｃタイプは、原点に向う直線が引けず、安定な磁化成分が得られない試料であるとしている。本報告でもパイロット･サンプルを選び段階交流消磁を行い、その結果より最適消磁磁場を求め、全試料について最適消磁磁場強度で交流消磁を実施し、残留磁化の測定をした。その結果を第104・105図の偏角-伏角図上にプロットし、誤差角(α_{95})を考慮した上で再度年代推定を行った。



第109図　中島・谷崎(1990)により３タイプに分類された消磁ベクトル図

２　測定と消磁

残留磁化測定には、スピナー磁力計(ASPIN)を用いた。本器は宇宙空間での磁場の測定に用いられるリングコアー型のフラックスゲートセンサーを使って、焼土をその中で回転して発生してくる起電力の大きさ検知して残留磁化の方向と強さを知る事ができる。

交流消磁には、改良型の定置型DEM-95を使った。消磁器は、地球磁場を遮蔽できる特

殊な金属でできた三重の筒の中にソレノイドコイルを置き、その中に焼土を挿入し、徐々に交流電流を流し、徐々に電流を減衰して消磁する装置です。今回の消磁方法は、X・Y・Zと3回置換えることで均一に消磁させる方法で行った。以下に今回実施して残留磁化測定と交流消磁の方法について述べる。

1．各遺構の自然残留磁化(NRM)の測定結果から、段階消磁を行うパイロットサンプルを選ぶ。

2．パイロットサンプルをNRM, 2.5, 5.0, 7.5, 10, 15, 20, 30, 40, 50, 60mTの各磁場強度で消磁→測定を繰り返す。各消磁段階の測定結果を消磁ベクトル図に表し、同図の直線上に乗る最適消磁強度を決定する。

3．残りの試料を全て最適消磁強度で消磁し、その残留磁化を測定する。そして、その平均値(パイロットサンプルを含む)を考古地磁気のデータにする。

3　測定結果

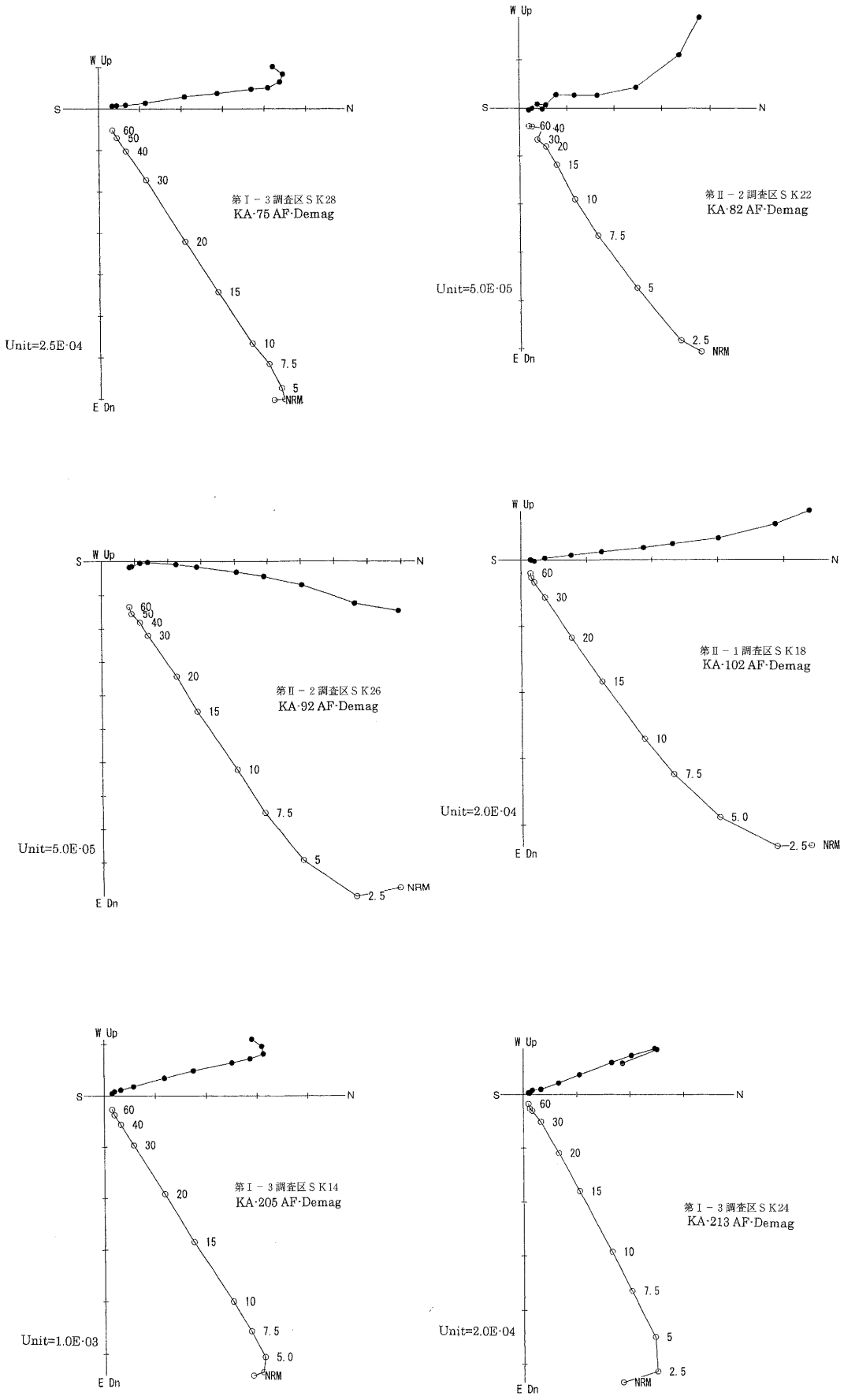
残留磁化の安定性を確かめるために行った各遺構のパイロットサンプルの消磁ベクトル図を第110図に示す。同図の黒丸は水平, 白丸は鉛直成分を表している。S(南)・N(北)・E(東)・W(西)は水平成分の方向、Up(上向き)・Dn(下向き)は鉛直の方向である。白丸印の横に記した数字は消磁強度で、単位はmT(ミリテスラ)である。この図の丸印の間を結んだ直線が、その段階消磁で消された磁化ベクトルになる。

磁化の水平・鉛直成分は、図上では直線上に並ぶ点の列で表される。特に考古地磁気試料のような単純な熱を受けた試料では問題とする初期残留磁化は、原点に向かう直線で表される。第110図を見るとKA-82試料だけは少し不安定ではあるが5～7.5mTまでに二次磁化の影響が見られ10mTを越えると原点に向かう直線となる。第Ⅰ－3調査区SK28の最適消磁強度を15mT、他の遺構全ての最適消磁強度を10mTと判断して消磁を行い、残留磁気を測定した。その結果を第111図の消磁前(NRM)と消磁後の等面積投影図(シュミットネット)に示した。第111図から消磁後の測定結果のまとまりが良くなっていることがわかる。NRM(消磁前)は、二次磁化の影響を受けていることが明らかである。第10表に消磁前と消磁後の計算結果をまとめた。

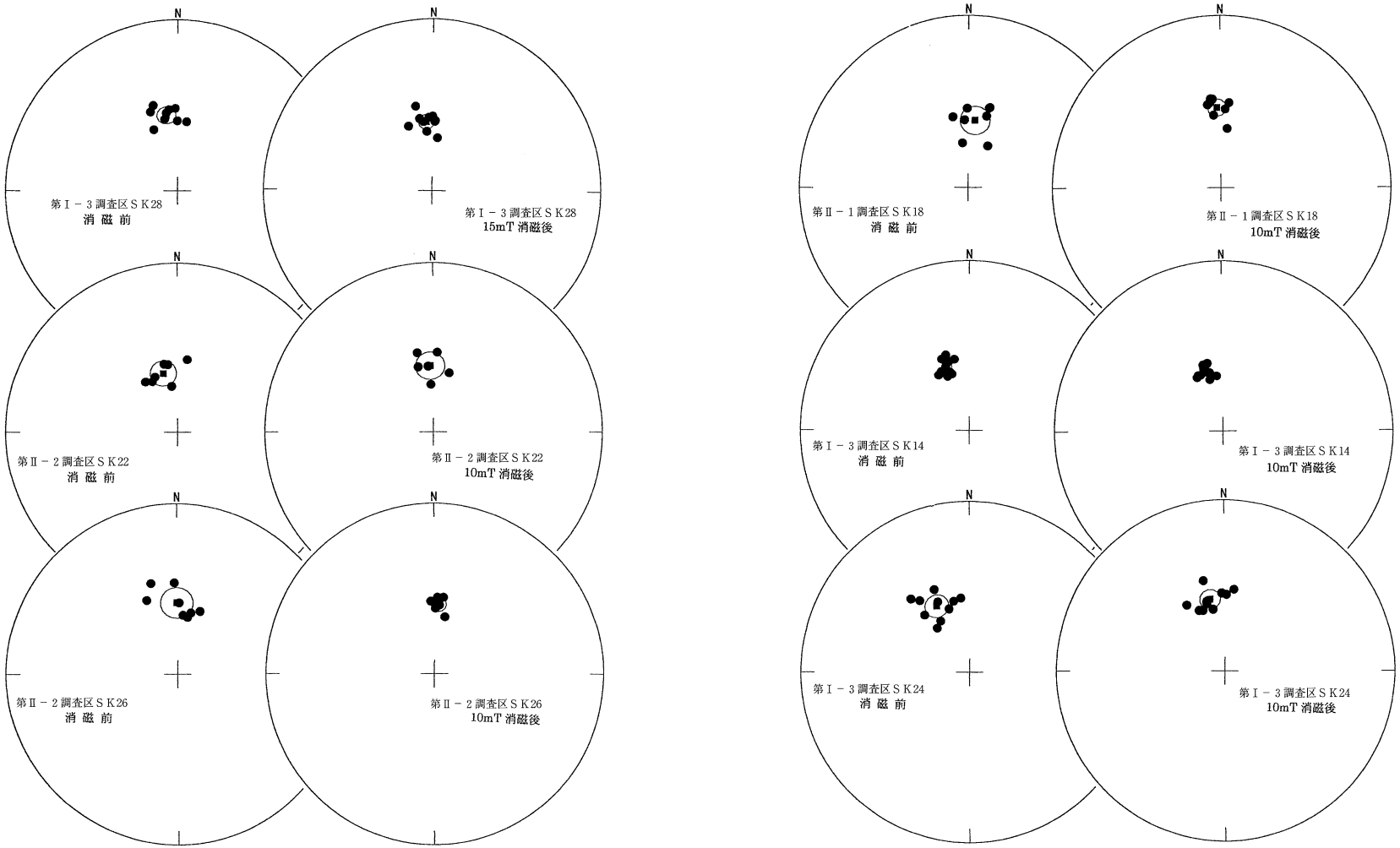
4　測定結果

第112・113図に交流消磁後の測定結果Dm, Im, α_{95} (第10表)を広岡曲線とShibuya曲線にプロットした。両曲線からの年代推定結果には大きな差は見られないが、今回の測定結果は、どちらかと言えばShibuya曲線に近いため、第11表の考古地磁気推定年代にはShibuya曲線から求めたものを載せた。

①第Ⅰ－3調査区SK28(1120±50)・②第Ⅱ－2調査区SK22(1150±50)はほぼ同時代で、③第Ⅱ－2調査区SK26(1250±25)は考古学年代(13C～14C)と矛盾しない。④



第110図　パイロット・サンプルについての消磁ベクトル図



第111図　消磁前（ＮＲＭ）と消磁後の残留磁化方向の等面積投影図

(1) 第Ⅰ－3調査区ＳＫ28

交流消磁後 消磁強度＝15 mT			
試料名	偏角 ° E	伏角 °	強度 $\times 10^{-4}$ emu
KA-71	5.7	64.7	2.77
KA-72	0.3	54.1	25.4
KA-73	2.6	56.4	23.1
KA-74	2.1	56.7	7.34
KA-75	-7.5	56.7	13.2
KA-76	-3.0	54.7	12.6
KA-77	-11.6	48.3	3.40
KA-78	-5.3	61.6	3.61
KA-79	-10.4	54.8	8.52
KA-80	-20.8	57.0	24.5

(2) 第Ⅱ－2調査区ＳＫ22

交流消磁後 消磁強度＝10 mT			
試料名	偏角 ° E	伏角 °	強度 $\times 10^{-5}$ emu
KA-81	-11.5	51.1	11.6
KA-82	-13.1	58.0	11.2
KA-83	52.9	39.5	5.92
KA-84	13.6	19.5	4.01
KA-85	15.4	60.7	6.42
KA-86	3.2	51.5	5.89
KA-87	-4.5	58.5	7.16
KA-88	-2.9	67.5	10.4
KA-89	51.3	14.3	7.29
KA-90	14.0	35.6	8.07

(3) 第Ⅱ－2調査区ＳＫ26

交流消磁後 消磁強度＝10 mT			
試料名	偏角 ° E	伏角 °	強度 $\times 10^{-4}$ emu
KA-91	10.6	62.1	2.77
KA-92	4.5	56.8	3.72
KA-93	1.0	58.3	2.53
KA-94	2.4	53.0	1.65
KA-95	-2.9	54.9	1.45
KA-96	-23.2	41.6	0.81
KA-97	7.1	52.7	1.20
KA-98	-15.4	38.5	0.53

(4) 第Ⅱ－1調査区ＳＫ18

交流消磁後 消磁強度＝10 mT			
試料名	偏角 ° E	伏角 °	強度 $\times 10^{-4}$ emu
KA-101	-9.1	49.6	4.79
KA-102	-5.5	55.1	6.59
KA-103	6.8	61.6	1.08
KA-104	-113.2	68.4	2.27
KA-105	-5.2	47.2	1.11
KA-106	-7.6	49.0	1.42
KA-107	-6.5	47.0	2.44
KA-108	3.8	52.1	2.17
KA-109	6.1	48.9	1.92

(5) 第Ⅰ－3調査区ＳＫ14

交流消磁後 消磁強度＝10 mT			
試料名	偏角 ° E	伏角 °	強度 $\times 10^{-3}$ emu
KA-200	-12.6	61.4	4.74
KA-201	-25.8	61.8	3.77
KA-202	-17.1	59.0	5.28
KA-203	-15.4	60.8	3.27
KA-204	-23.8	61.0	7.09
KA-205	-14.3	57.0	4.74
KA-206	-16.6	57.0	4.44
KA-207	-14.3	64.9	2.45
KA-208	-6.2	63.6	1.48
KA-209	-21.8	61.4	4.18
KA-210	-12.9	56.8	1.95

(6) 第Ⅰ－3調査区ＳＫ24

交流消磁後 消磁強度＝10 mT			
試料名	偏角 ° E	伏角 °	強度 $\times 10^{-4}$ emu
KA-211	-15.1	56.4	1.53
KA-212	-14.7	55.4	7.05
KA-213	-19.8	59.0	6.81
KA-214	-23.1	58.3	2.88
KA-215	-30.2	53.2	5.55
KA-216	-2.3	52.4	3.41
KA-217	1.4	53.1	3.11
KA-218	6.7	50.3	4.72
KA-219	-13.4	45.0	0.52
KA-220	-10.7	59.8	6.42

第９表　熱残留磁気測定結果

(1) 交流消磁前(ＮＲＭ)の測定結果

遺構名	試料数 n	Dm (° E)	Im (°)	α_{95} (°)	k
第Ⅰ－３調査区ＳＫ28	9	-8.6	53.0	4.4	140.2
第Ⅱ－２調査区ＳＫ22	7(10)	-13.7	61.1	6.2	95.0
第Ⅱ－２調査区ＳＫ26	8	-0.4	55.3	7.6	54.0
第Ⅱ－１調査区ＳＫ18	8(9)	6.7	57.6	7.0.	62.7
第Ⅰ－３調査区ＳＫ14	11	-20.0	57.5	2.5	342.1
第Ⅰ－３調査区ＳＫ24	10	-26.6	54.2	5.5	77.8

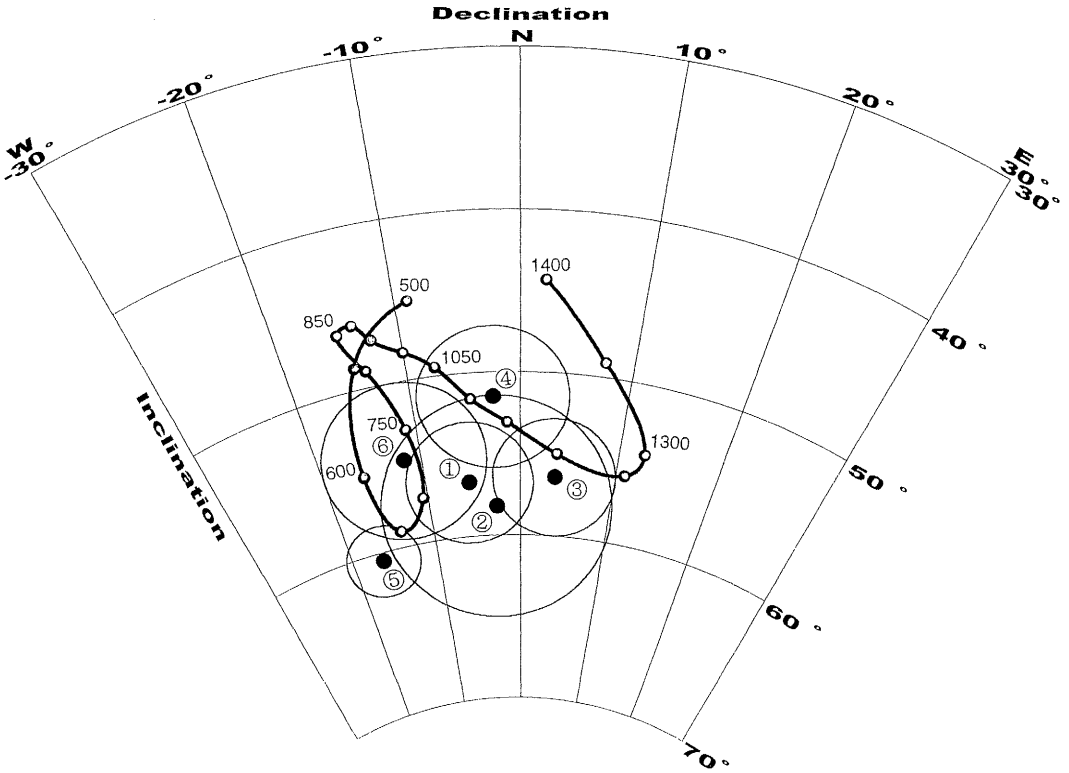
(2) 交流消磁後の測定結果

遺構名	試料数 n	Dm (° E)	Im (°)	α_{95} (°)	k
第Ⅰ－３調査区ＳＫ28	10	-5.1	56.7	3.7	171.9
第Ⅱ－２調査区ＳＫ22	6(10)	-2.6	58.2	6.8	96.7
第Ⅱ－２調査区ＳＫ26	6(8)	3.6	56.4	3.6	339.8
第Ⅱ－１調査区ＳＫ18	8(9)	-2.5	51.5	4.4	162.7
第Ⅰ－３調査区ＳＫ14	11	-16.5	60.5	2.2	451.7
第Ⅰ－３調査区ＳＫ24	10	-11.7	54.8	4.8	101.4

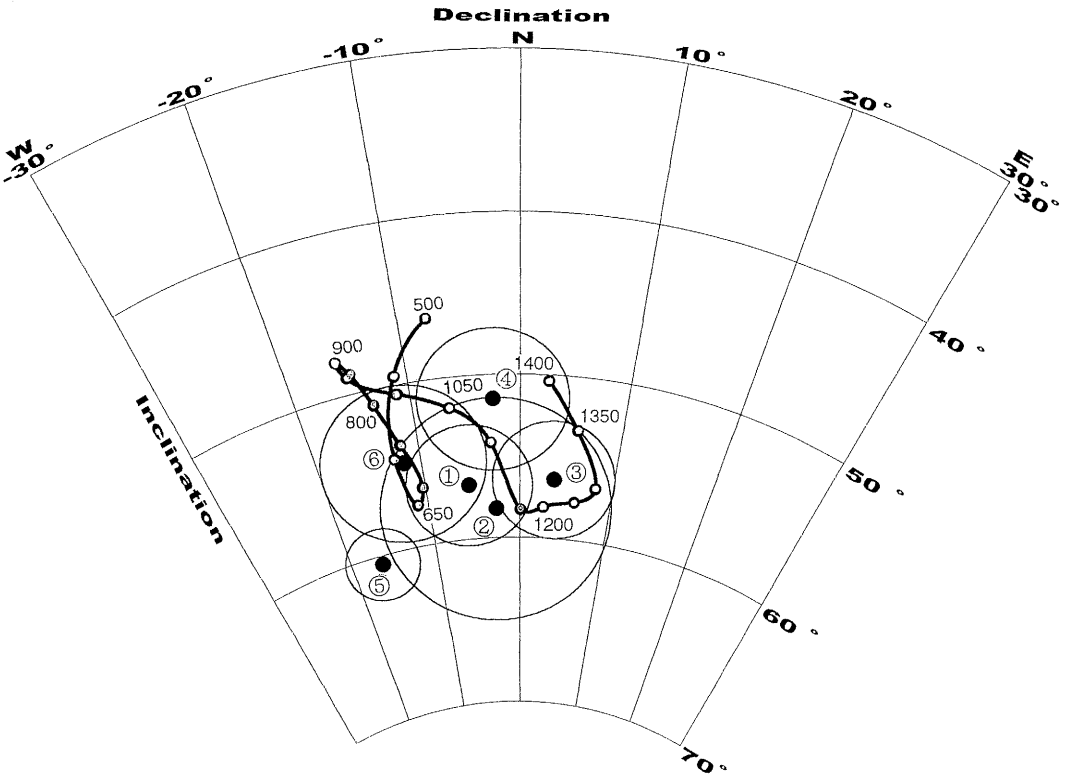
第10表　考古地磁気測定結果（平均磁化方向）

第Ⅱ－１調査区ＳＫ18は、11Ｃと15Ｃの曲線に近く(1075±50と1400±50)の２つ年代が得られる。

⑤第Ⅰ－３調査区ＳＫ14の測定結果は非常に良くまとまり信頼度の高いデータであるが、偏角が西で伏角が深く７Ｃ中頃の曲線に最も近い。⑥第Ⅰ－３調査区ＳＫ24は、誤差角(α_{95})は大きいが７Ｃ～８Ｃの曲線上にある。この２遺構の考古学年代よりは、かなり古い時代となった。磁化に問題があるのか、受熱後に動いたか、他の問題であるのか、現在の所、原因については不明である。



第112図　500～1400年間の広岡（1977）の偏角一伏角図と消磁後の測定結果



第113図　500～1400年間のShibuya（1980）の偏角一伏角図と消磁後の測定結果

遺 構 名	考古学年代	考古地磁気推定年代(AD)	
		消磁前	消磁後
① 第Ⅰ－3調査区SK28	13～14世紀	1100±100	1120±50
② 第Ⅱ－2調査区SK22	13～14世紀	7世紀中～後半	1150±50
③ 第Ⅱ－2調査区SK26	13～14世紀	1200±100	1250±25
④ 第Ⅱ－1調査区SK18	13～14世紀	1250±100	1075±50又は 1400±50
⑤ 第Ⅰ－3調査区SK14	13～14世紀	7世紀前半	7世紀中頃
⑥ 第Ⅰ－3調査区SK24	13～14世紀	7世紀	7世紀又は8世紀

第11表　考古地磁気年代推定年代

5　引用文献

＊ Hirooka, K., 1971：Archaeomagnetic study for the past 2,000 years in Southwest Japan. Mem. Fac. Sci, Kyoto Univ., Ser. Geol. Mineral, 38,167-207.

＊ 広岡公夫, 1977：考古地磁気および第四紀古地磁気研究の最近の動向. 第四紀研究, 15, 200-203.

＊ Shibuya, H., 1980：Geomagnetic secular variation in Southwest Japan for the past 2,000 years by means of archaeomagnetism. 大阪大基礎工修論, 54p.

＊ Zijderveld, J. D. A., 1967：A. C. demagnetization of rocks：analysis of results. In Methods in paleomagnetism, Collinson et al. (eds.), 254-295, Elsevier Pub. Com.

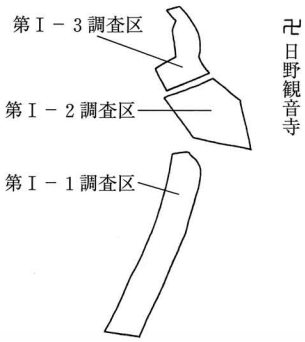
＊ 中島正志・夏原信義, 1980：考古地磁気年代推定法. 考古学ライブラリー9. ニュー・サイエンス社。

＊ 中島正志・谷崎有里, 1990：考古地磁気試料の交流消磁実験. 福井大教育紀要

図　　版

図版1　第Ⅰ調査区

調査地遠景（北より）



第Ⅰ調査区全景（北より）

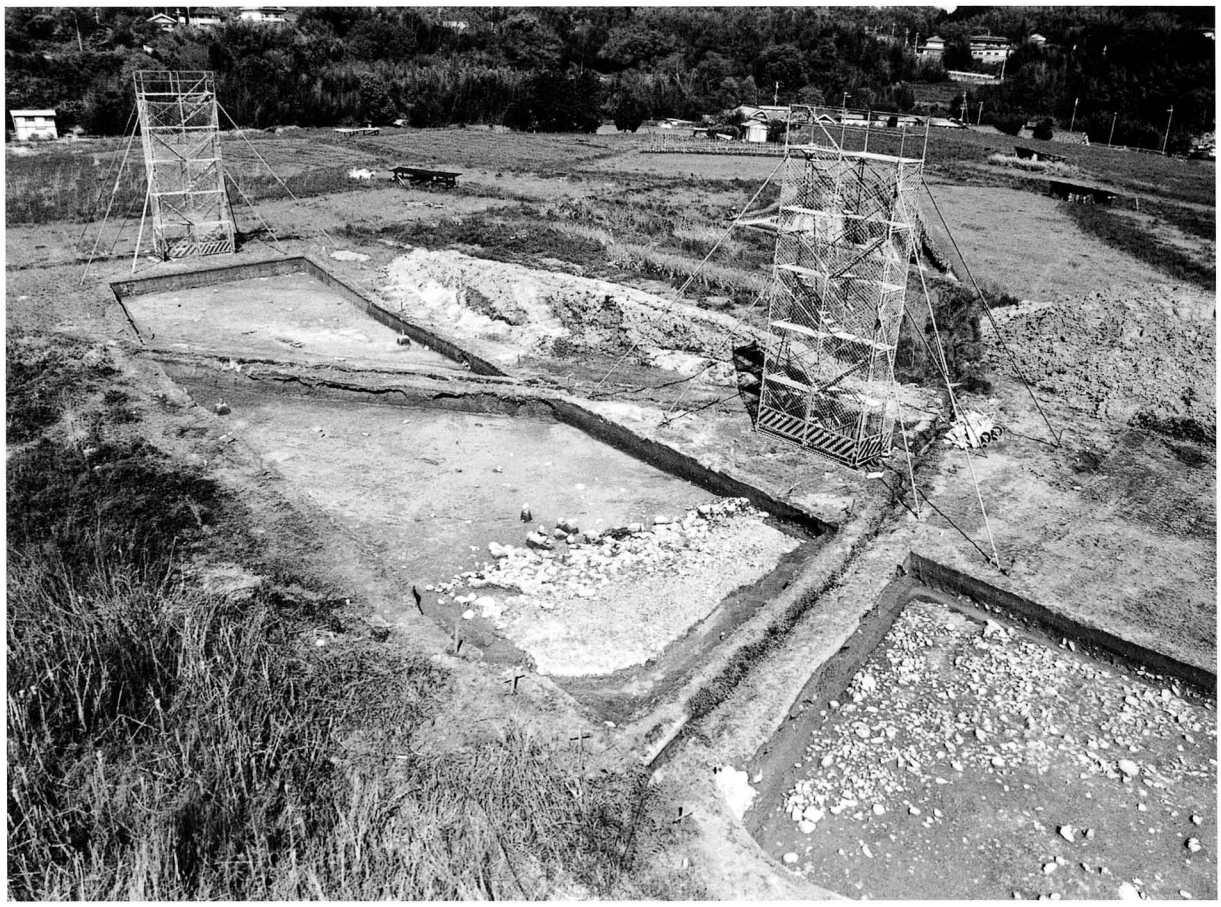
全景（南より）

ＳＤ２　完掘状況（南より）

図版3　第Ⅰ—1調査区　第2面

全景（南より）

全景（東より）



全景（西より）

ＳＷ１　全景（東より）

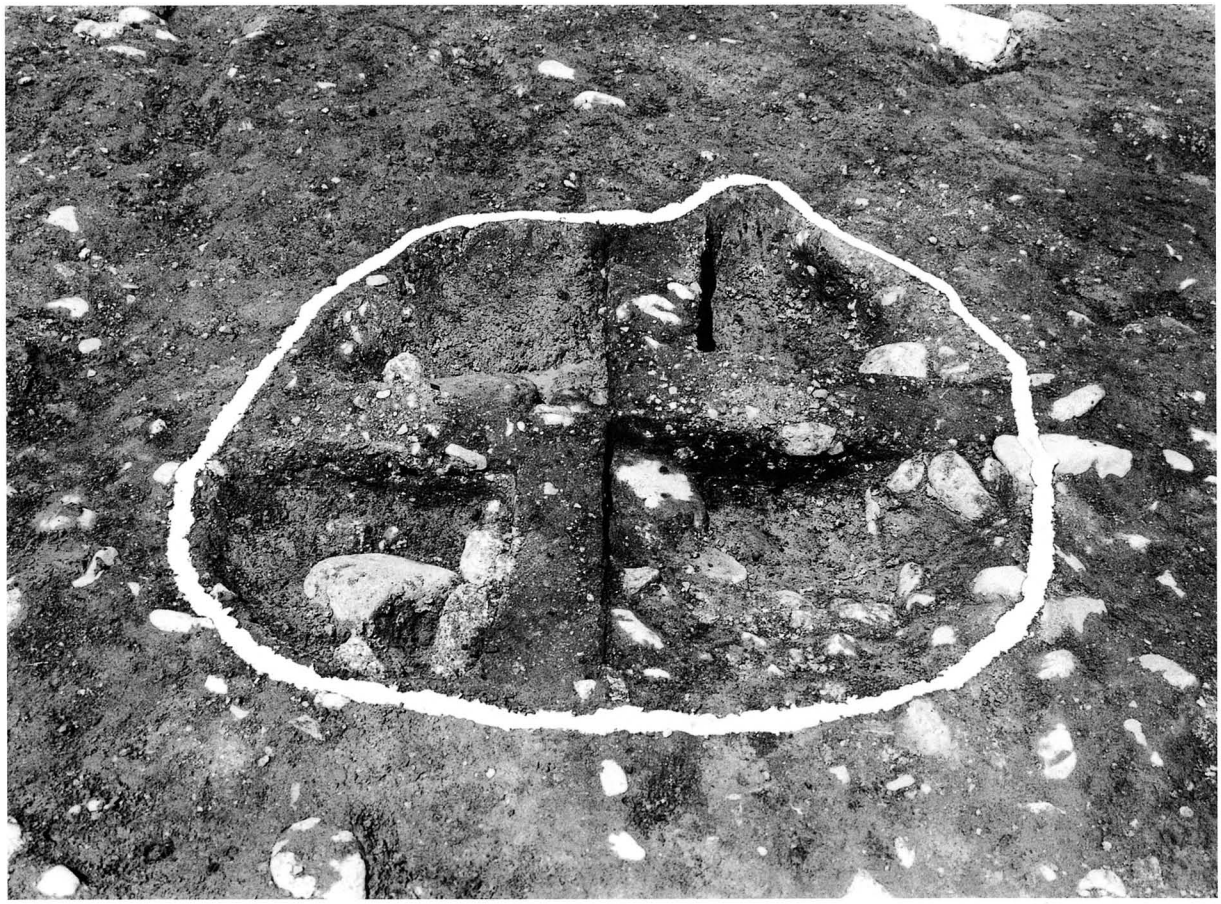
図版5　第Ⅰ—1調査区　第2面

ＳＷ１（東より）

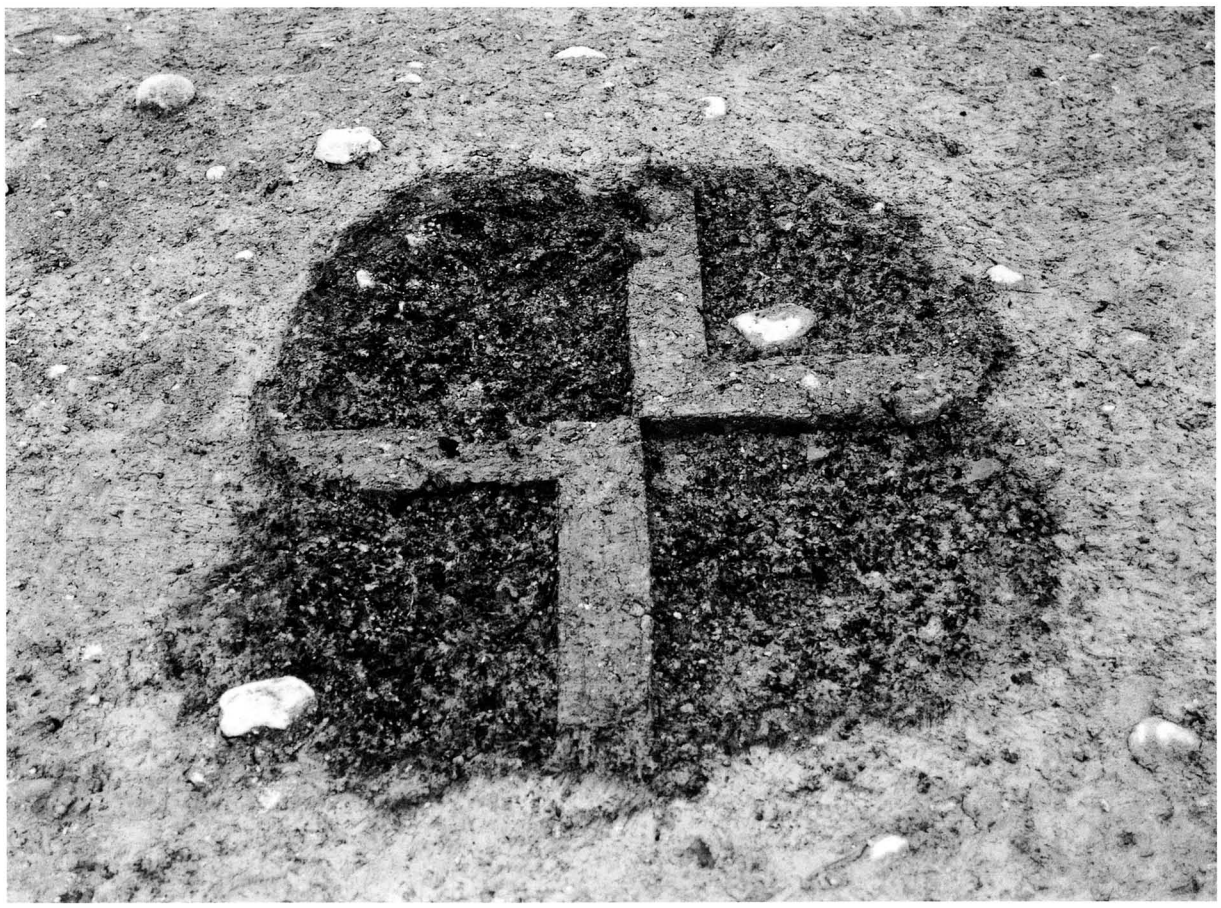
ＳＷ１（北より）

ＳＷ１　調査風景（東より）

ＳＷ１　杭検出状況（南より）

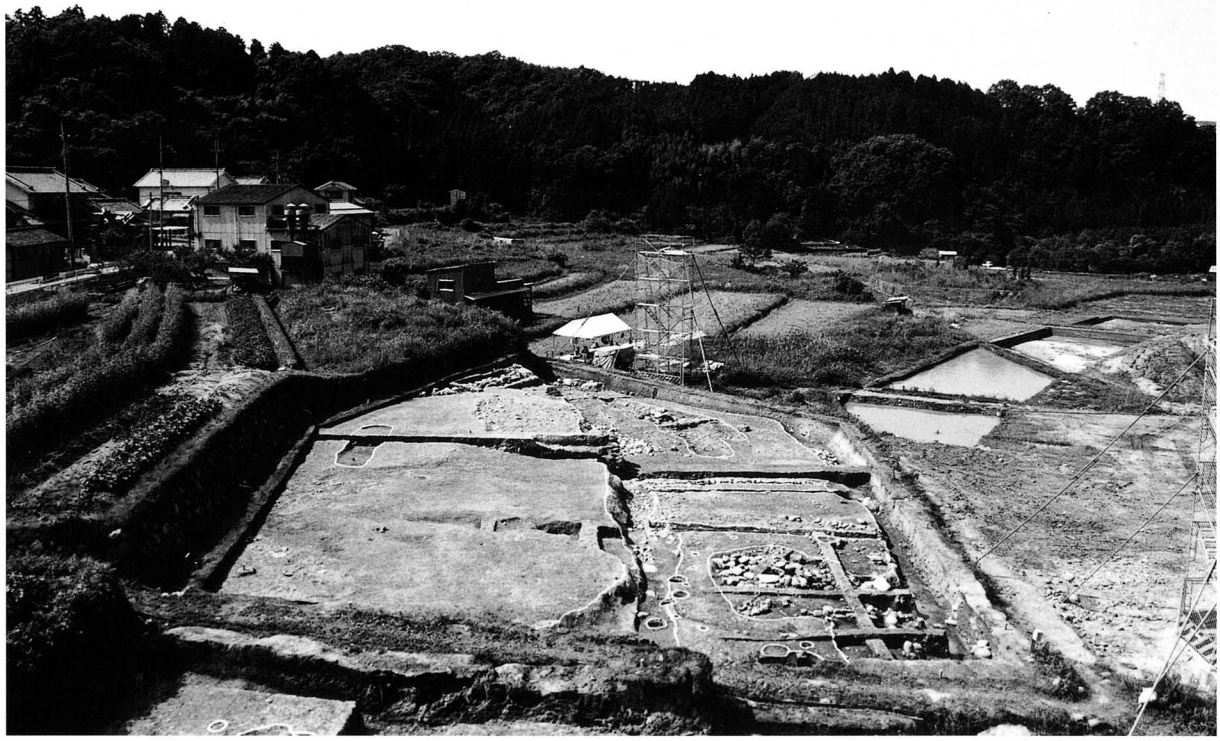


ＳＫ３（南東より）



ＳＫ７　炭検出状況（西より）

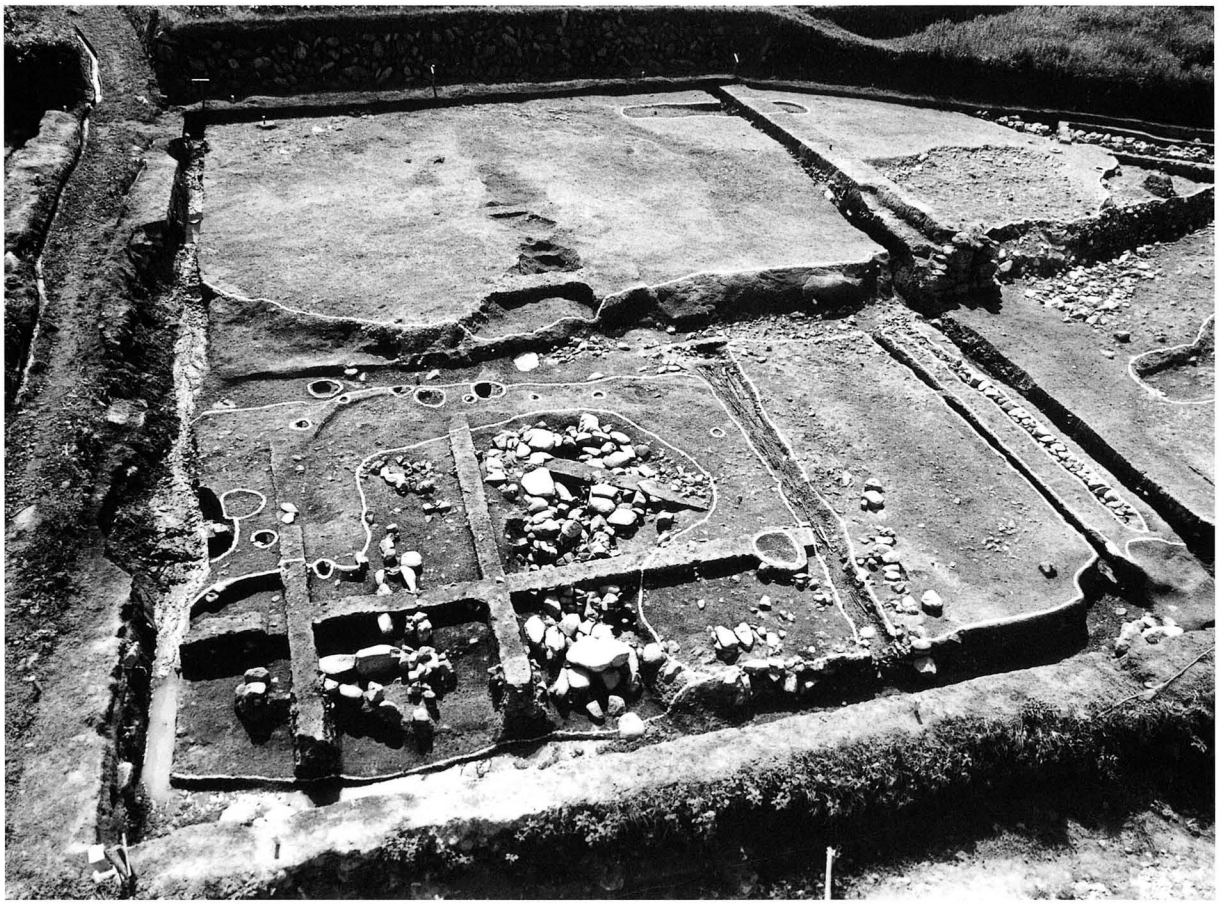
図版8　第Ⅰ—2調査区　第1面



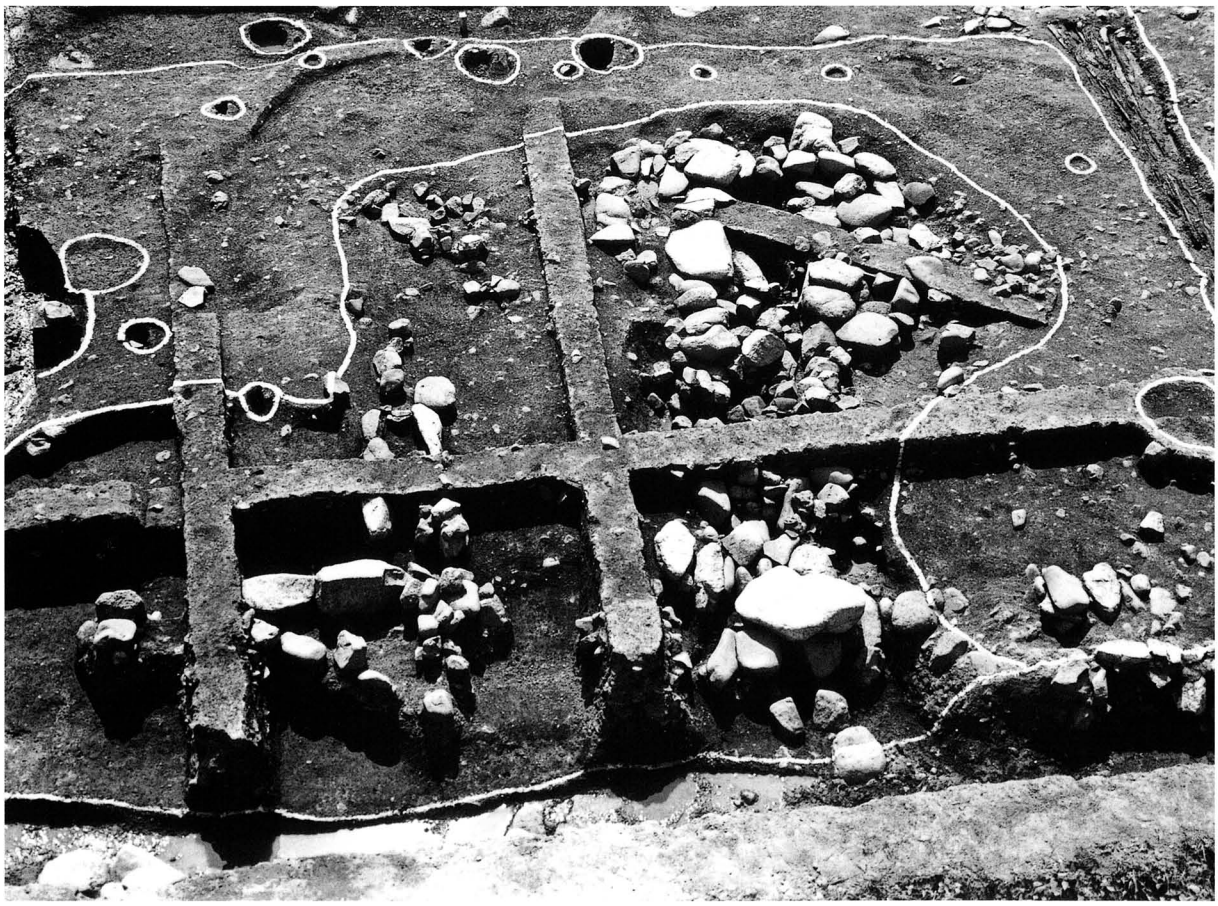
全景（南より）

全景（北より）

図版9　第Ⅰ—2調査区　第1面



全景（東より）



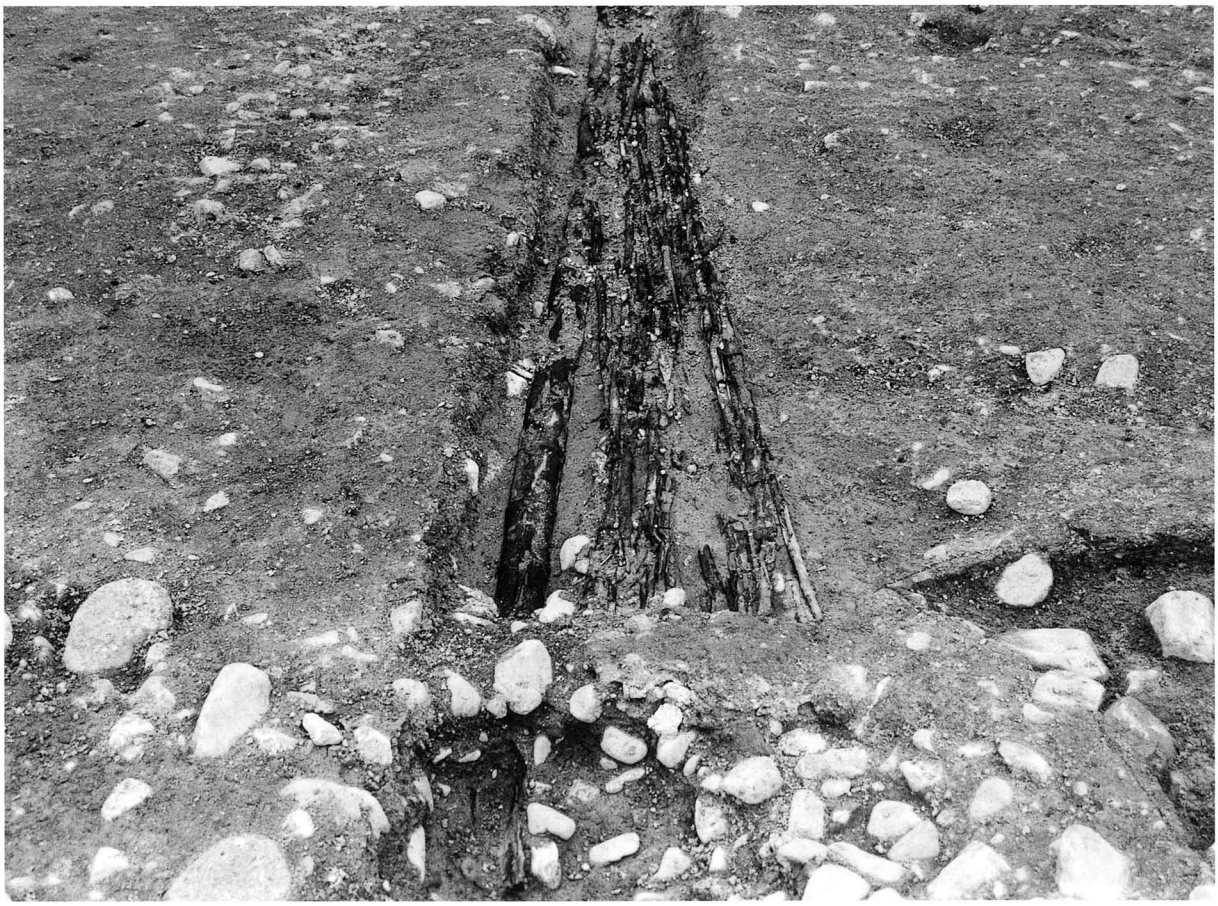
ＳＷ２　全景（東より）

図版10　第Ⅰ—2調査区　第1面

ＳＷ２（北側石組）
（東より）
→

ＳＷ２（南側石組）
（東より）↓

ＳＰ23　断面



ＳＤ７（西より）

全景（北より）

全景（東より）

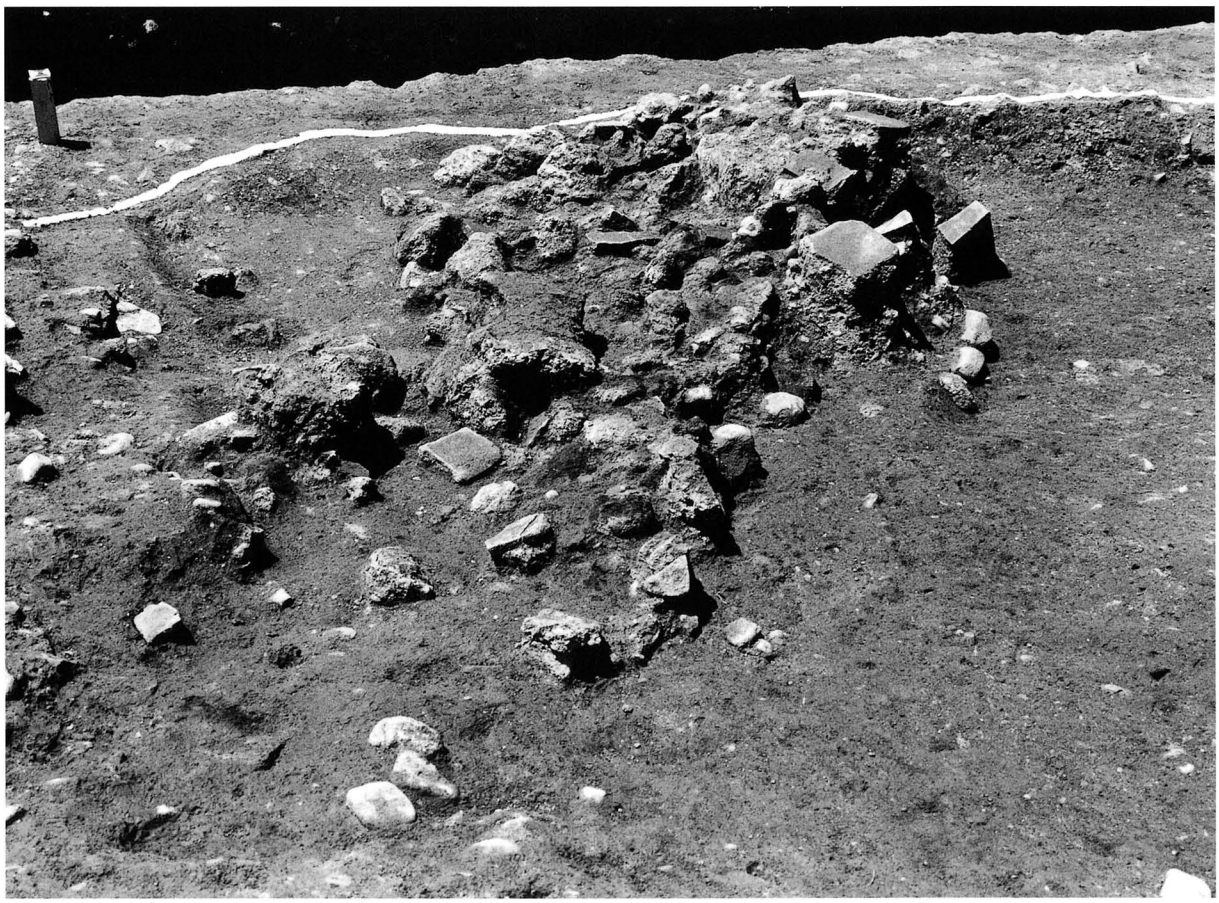
図版13　第Ⅰ－2調査区　第2面・第Ⅰ－3調査区　第1面

第Ⅰ－2調査区　第2面　ＳＡ１（南より）

第Ⅰ－3調査区　第1面　全景（東より）

図版14　第Ⅰ—3調査区　第1面

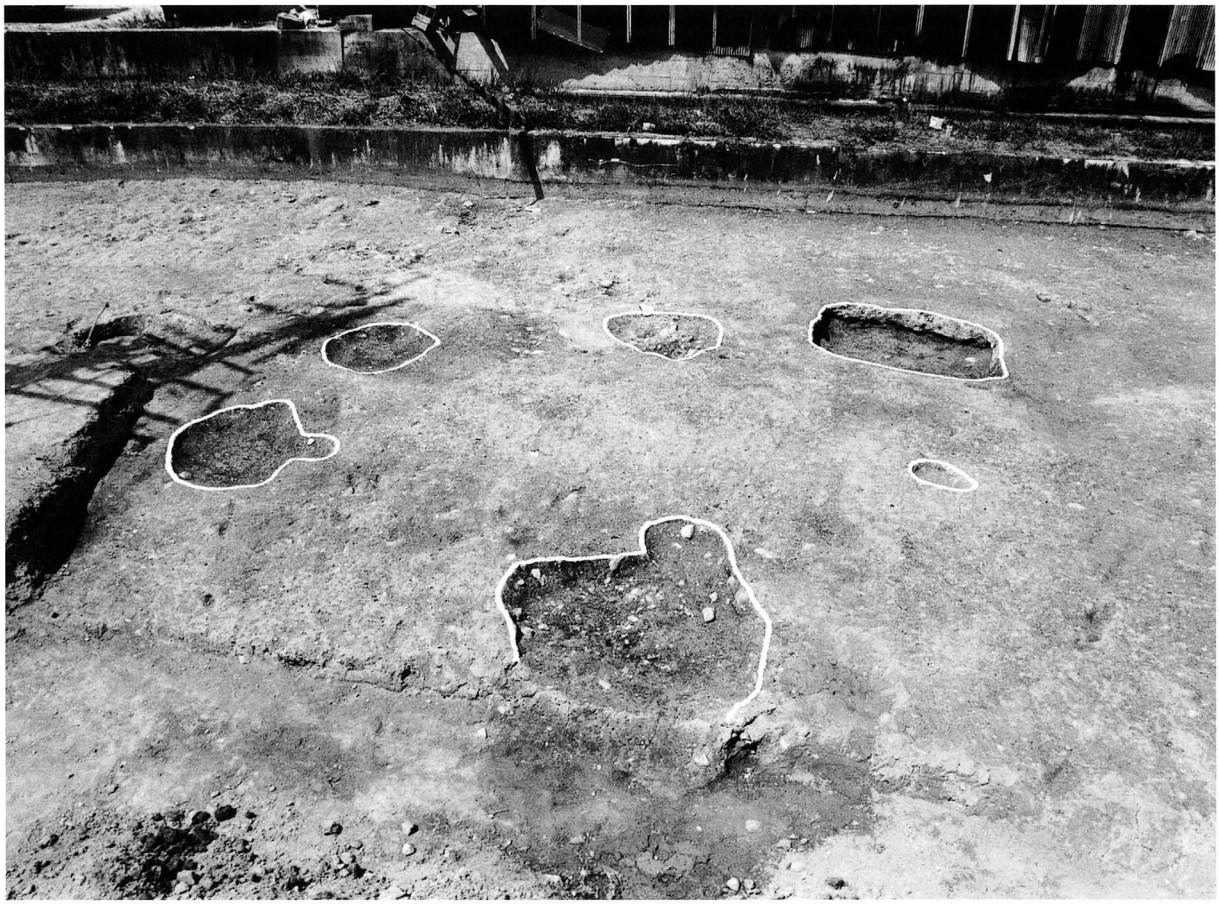
ＳＤ８（東より）



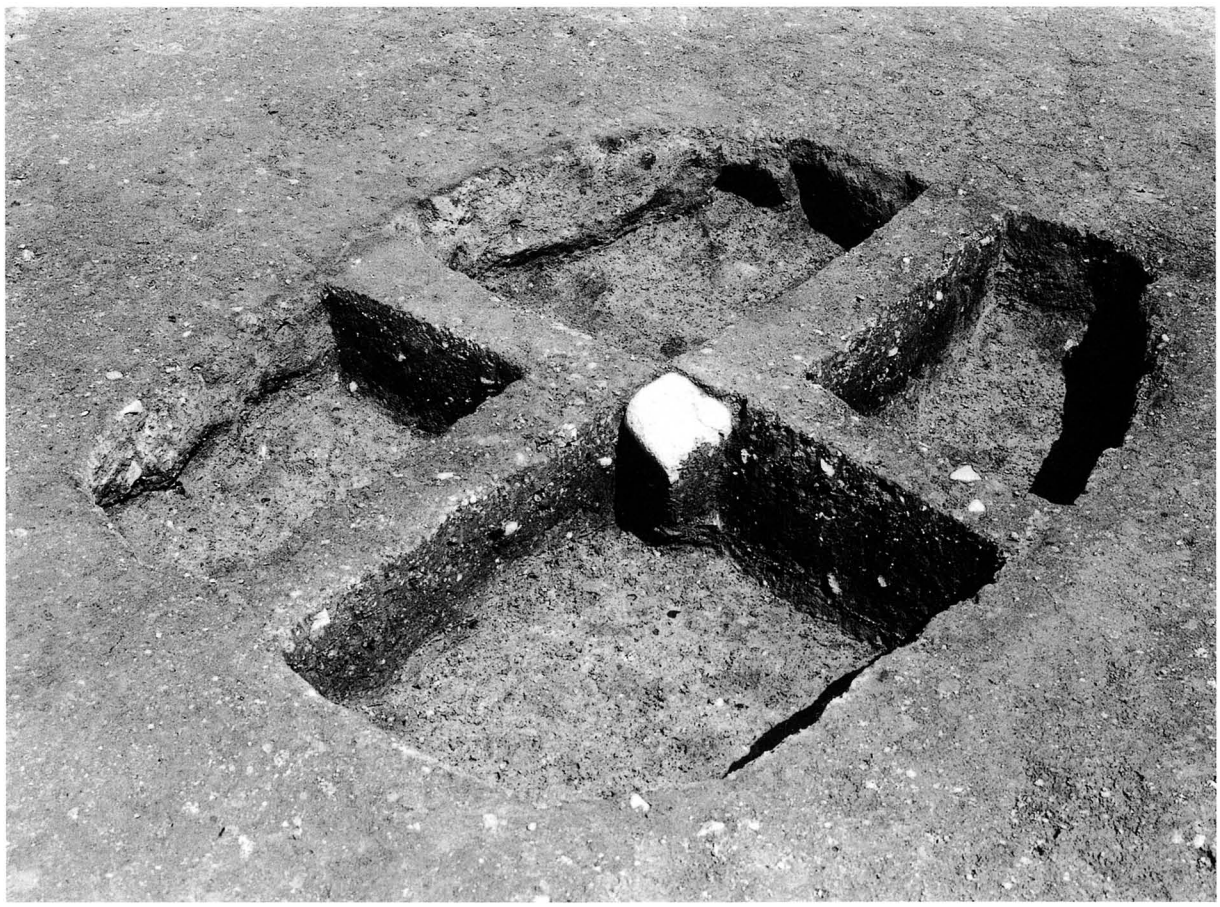
ＳＹ１（東より）

（上段）全景（北より）

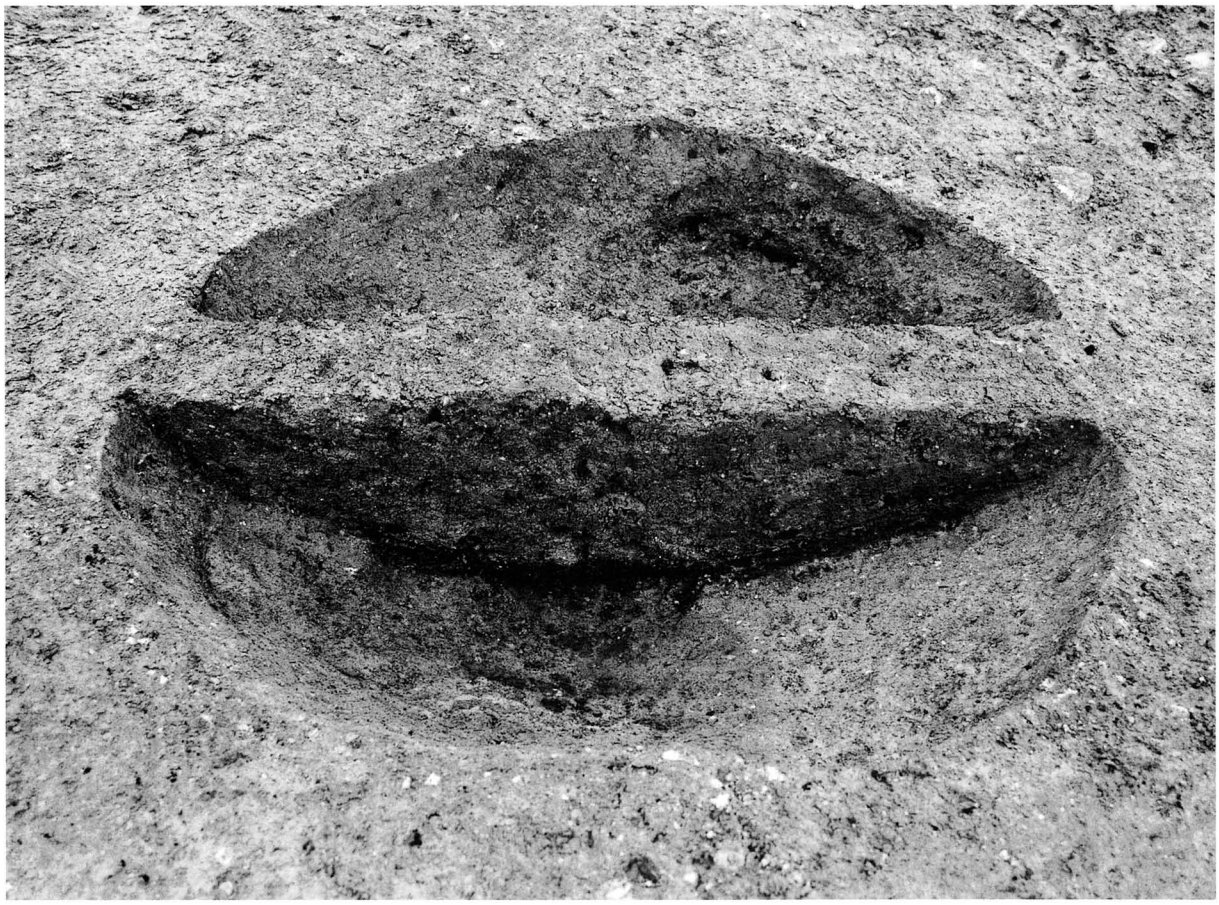
（中段）全景（北より）



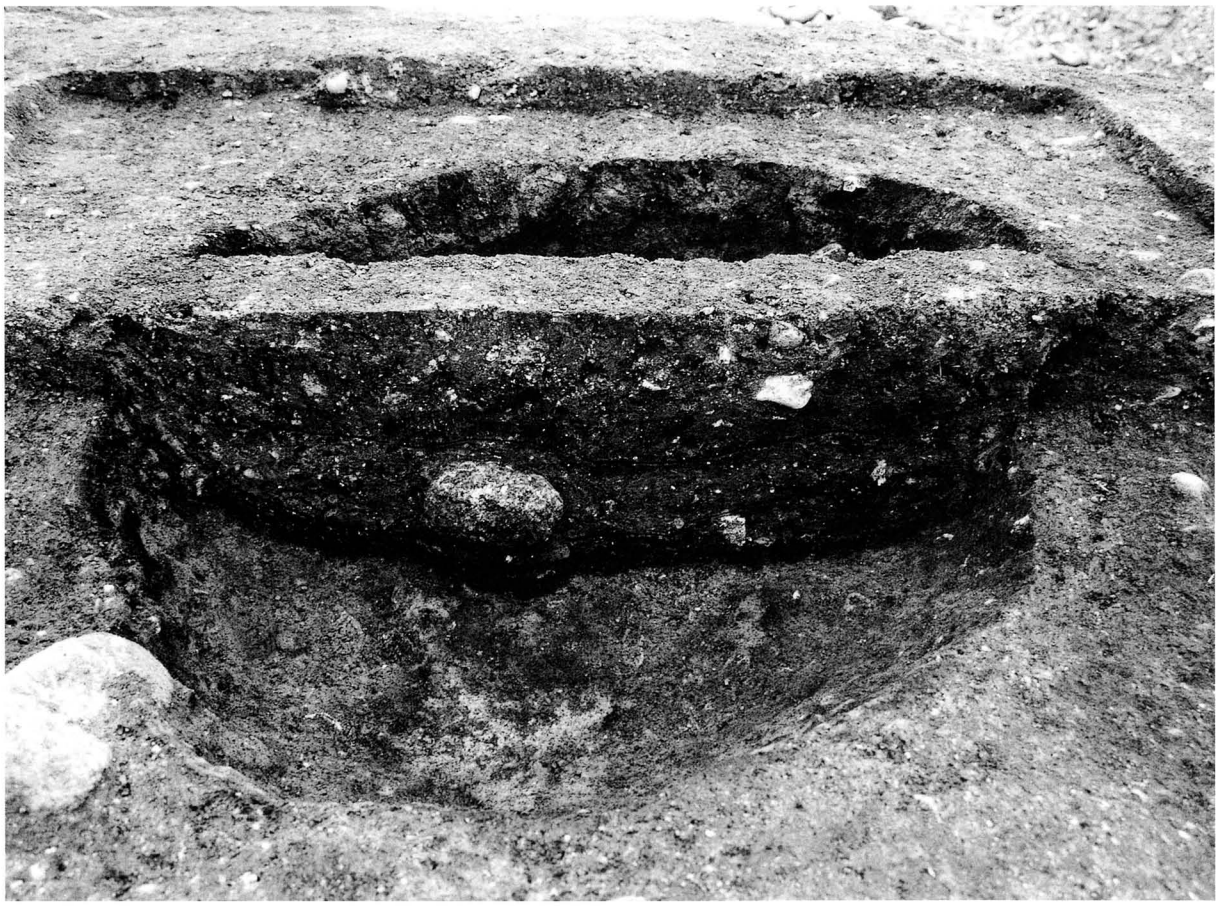
（上段）第2面　焼土坑群（東より）



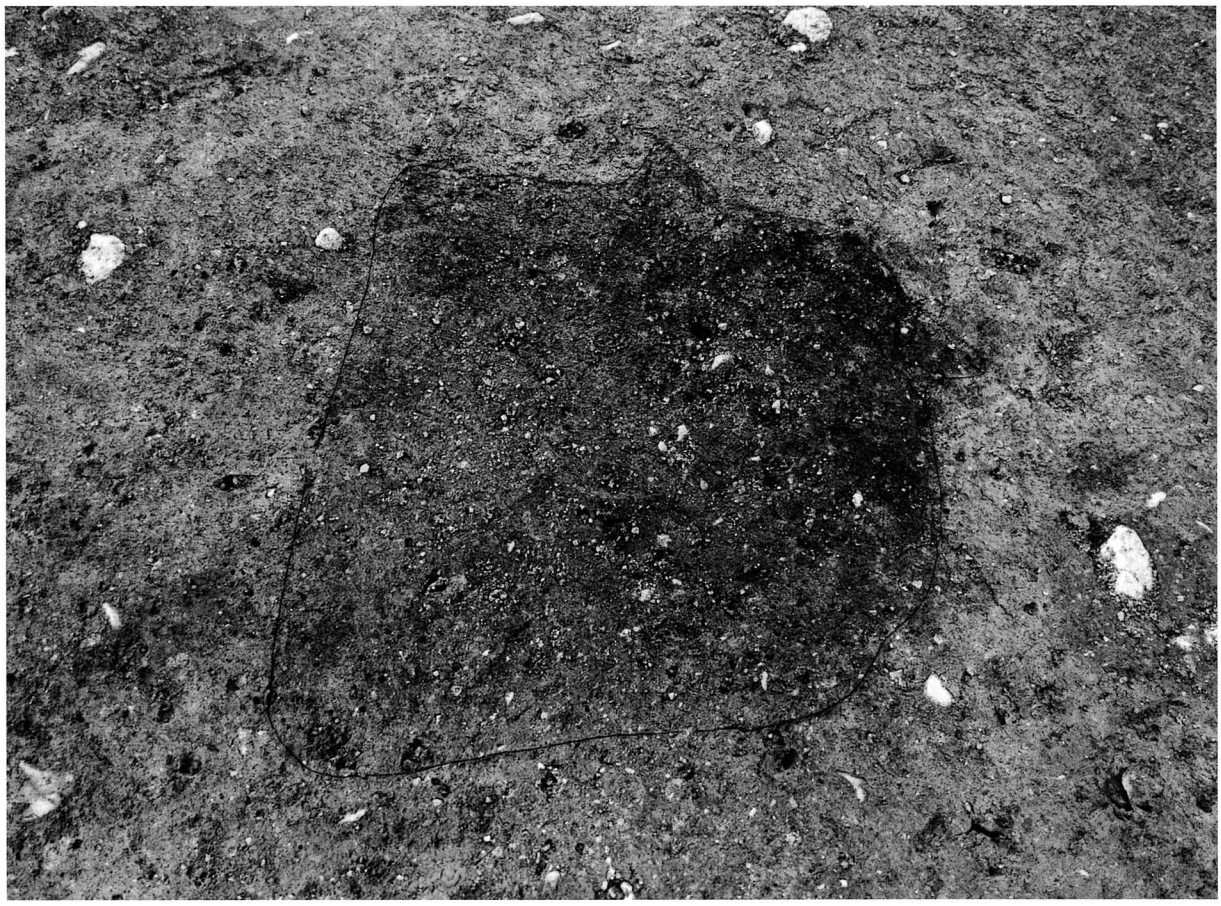
SK14



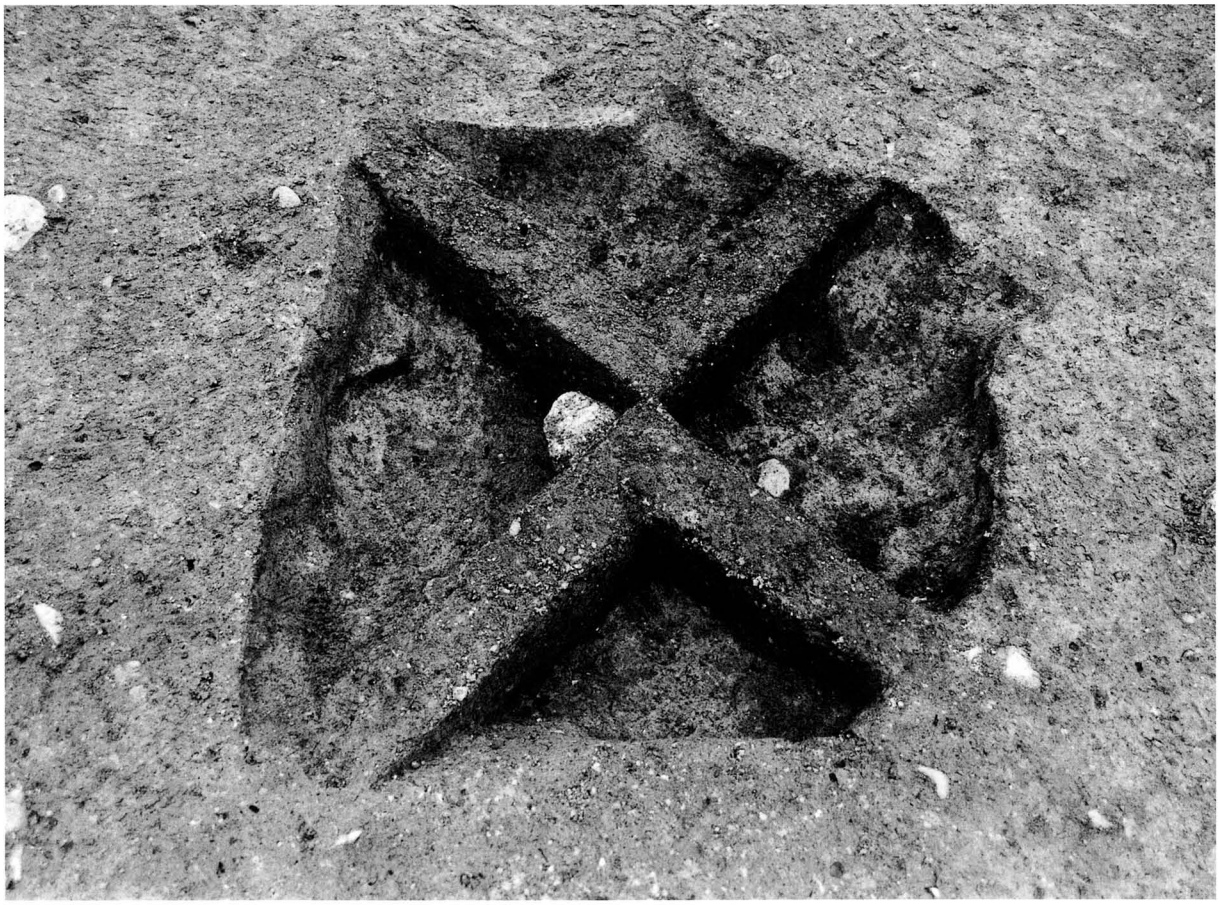
ＳＫ20（南より）



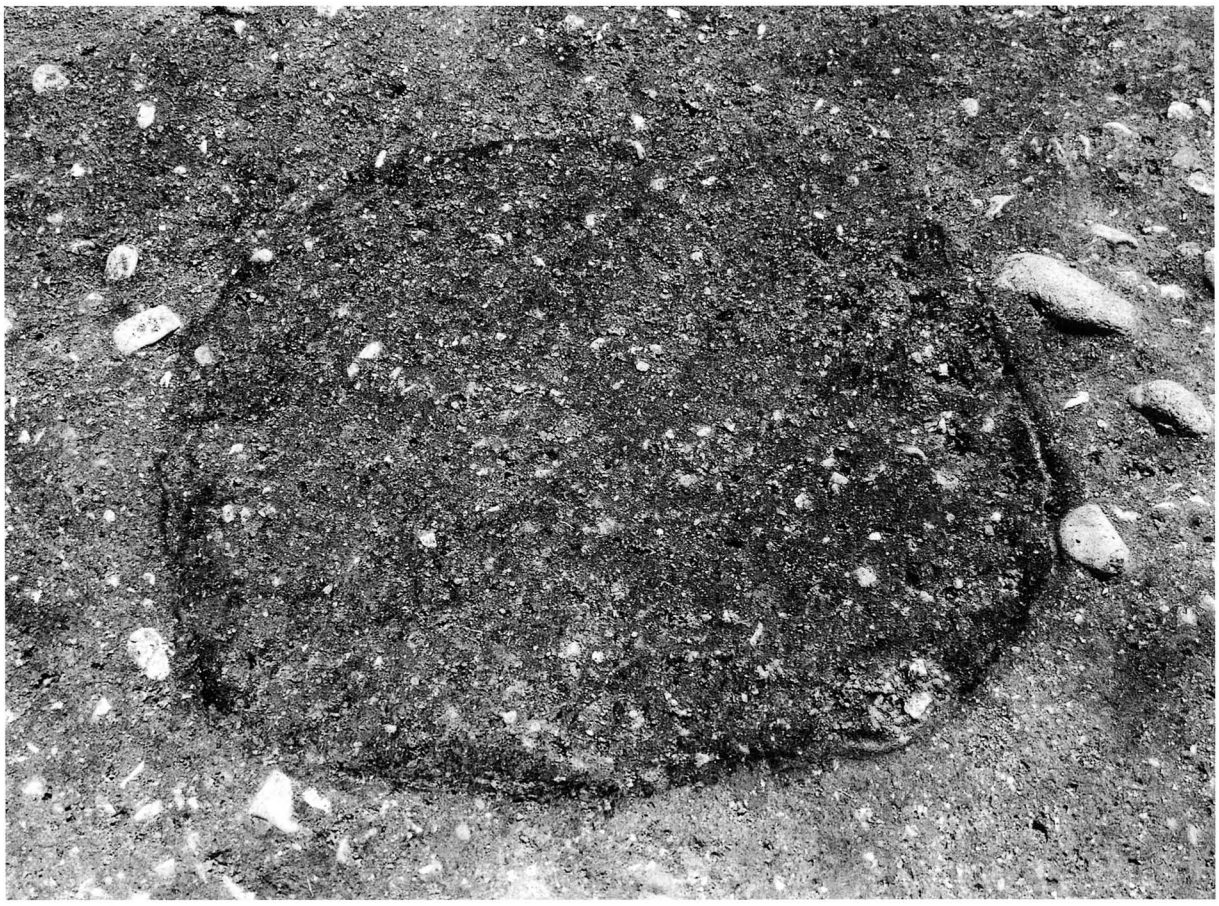
ＳＫ28（南より）



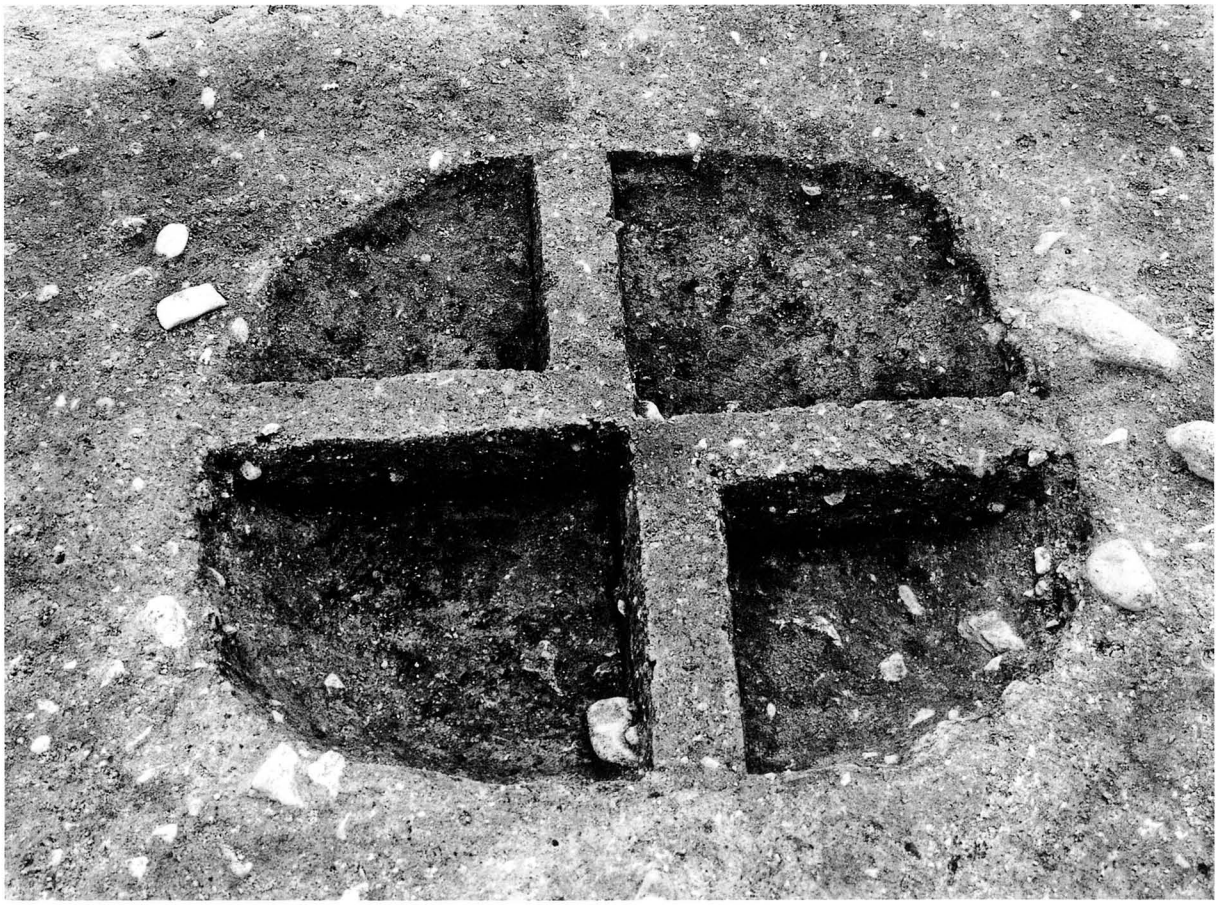
ＳＫ21　検出状況



ＳＫ21　完掘状況



ＳＫ27　検出状況（西より）



ＳＫ27　完掘状況（西より）

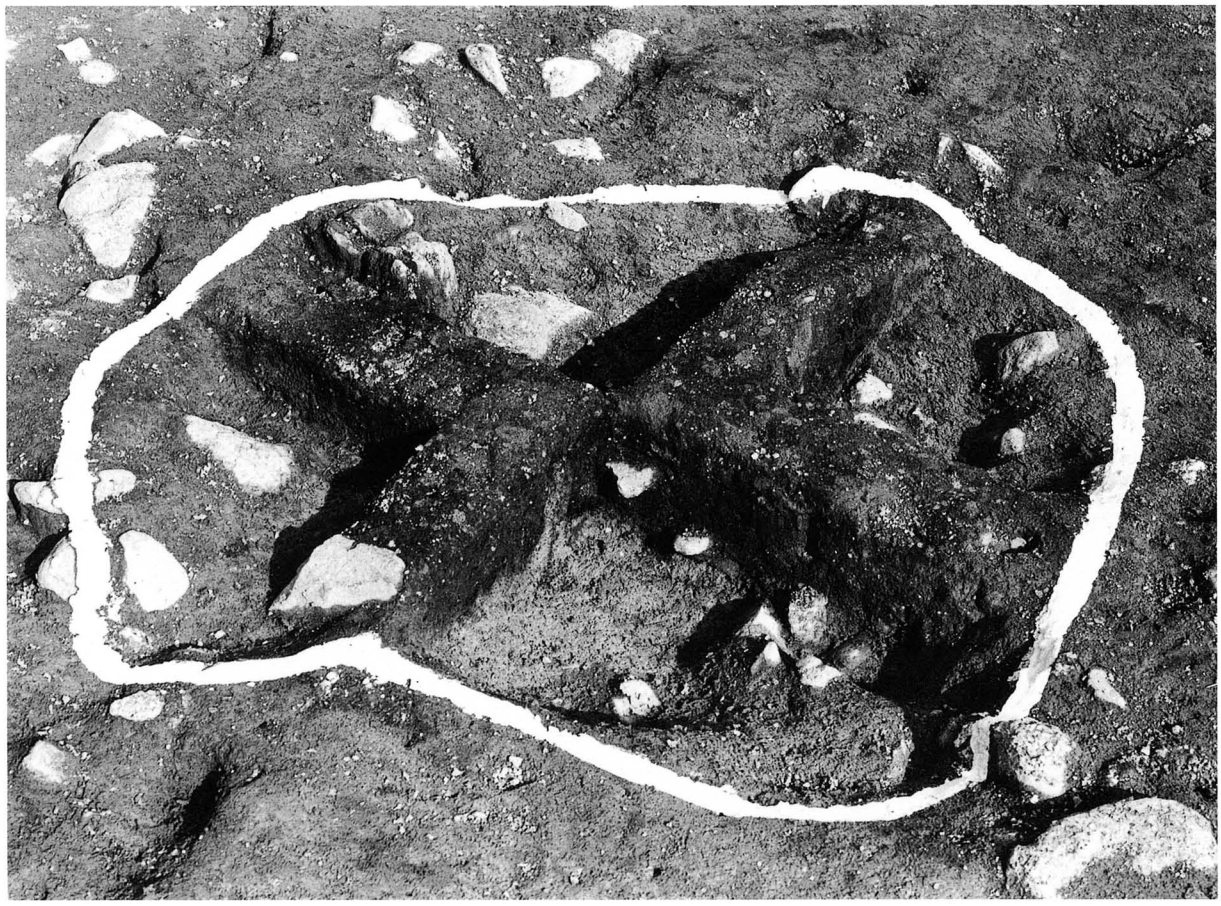
調査地遠景（南より）

第Ⅱ調査区全景

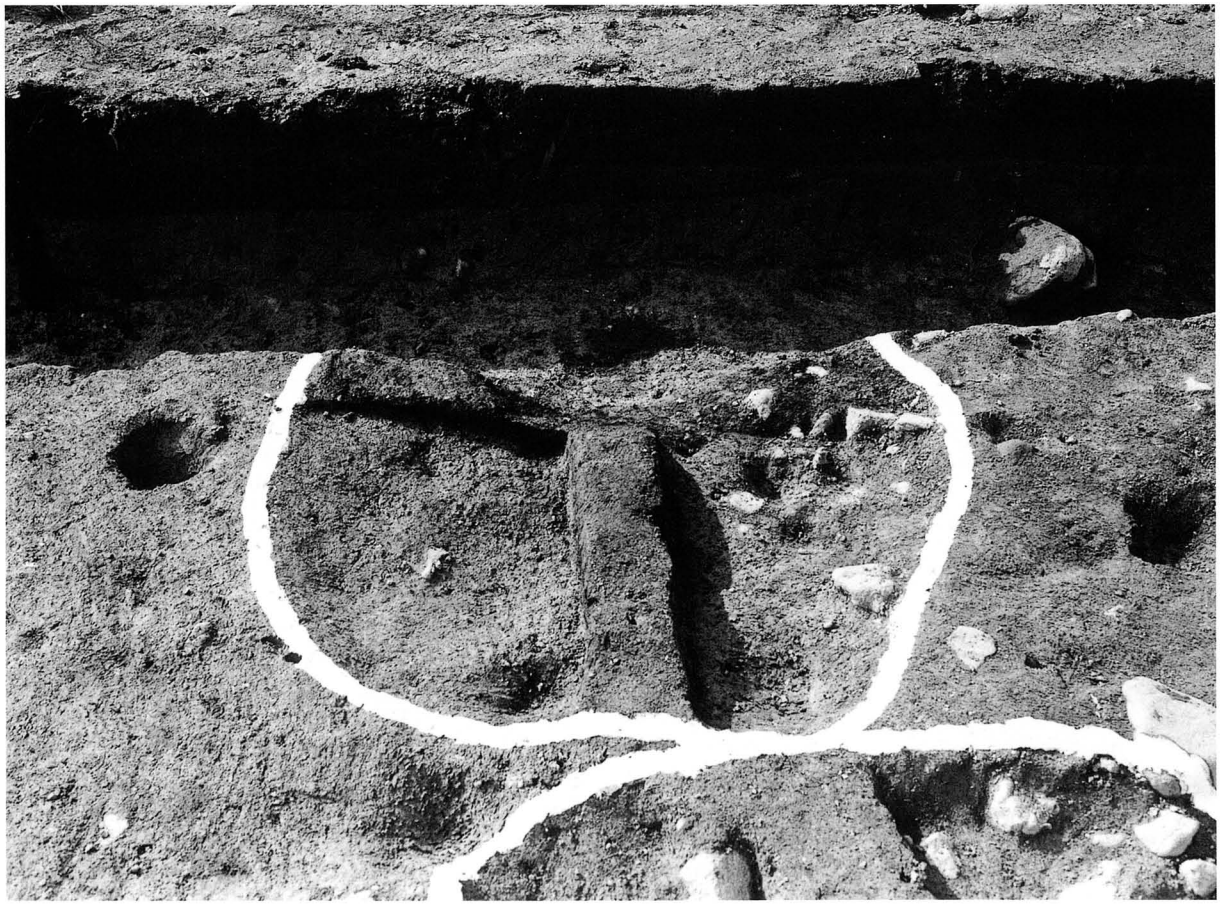
調査区全景（東より）

第Ⅱ－１調査区（東より）

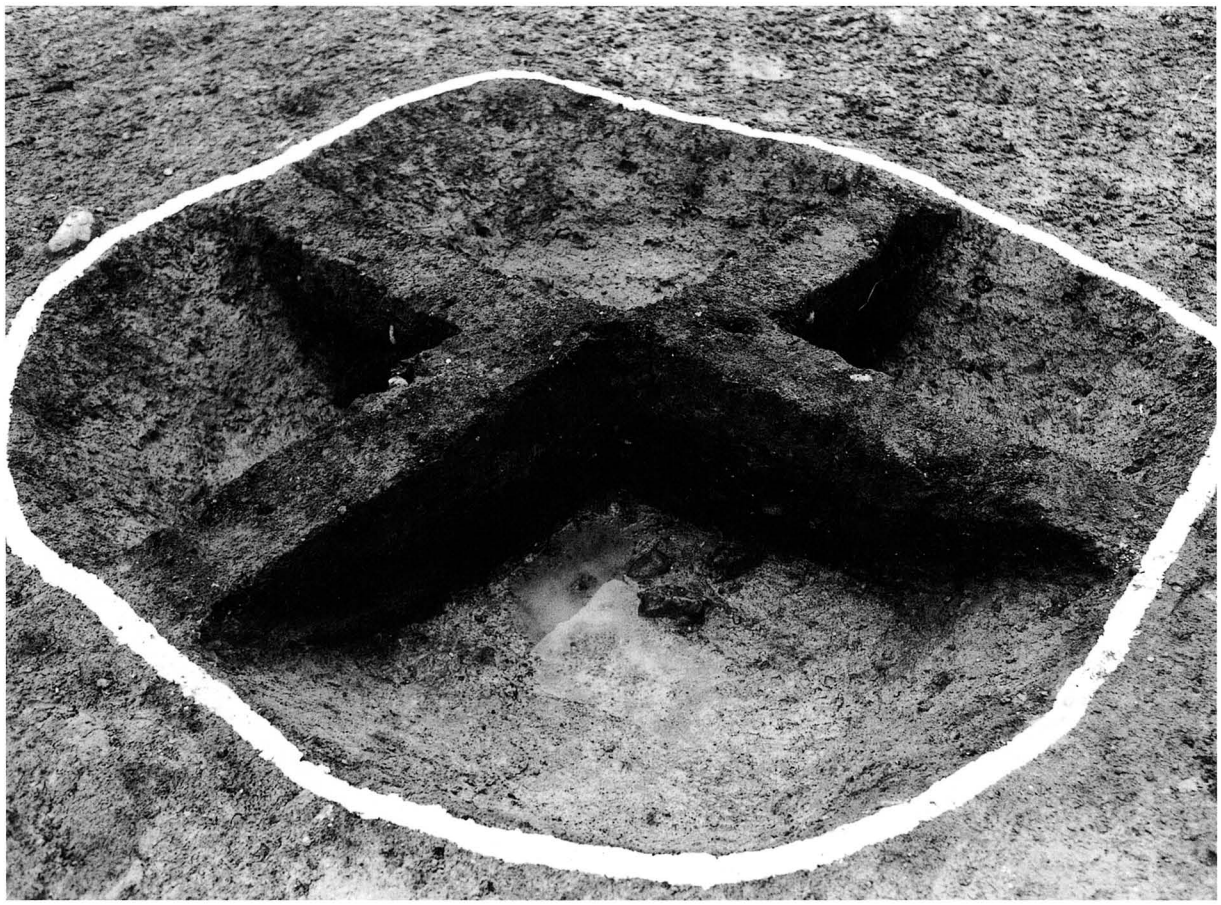
第Ⅱ－１調査区（東より）



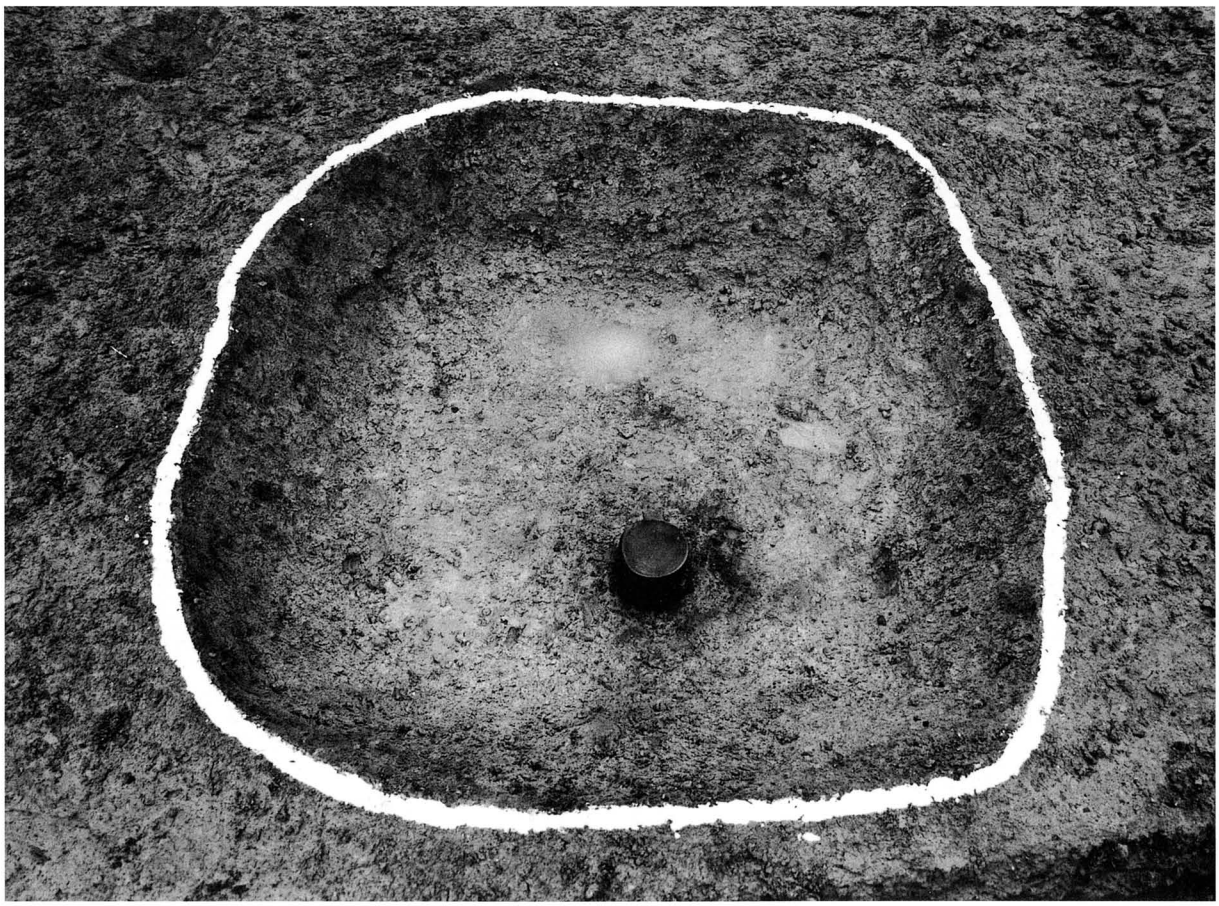
ＳＫ１（北より）



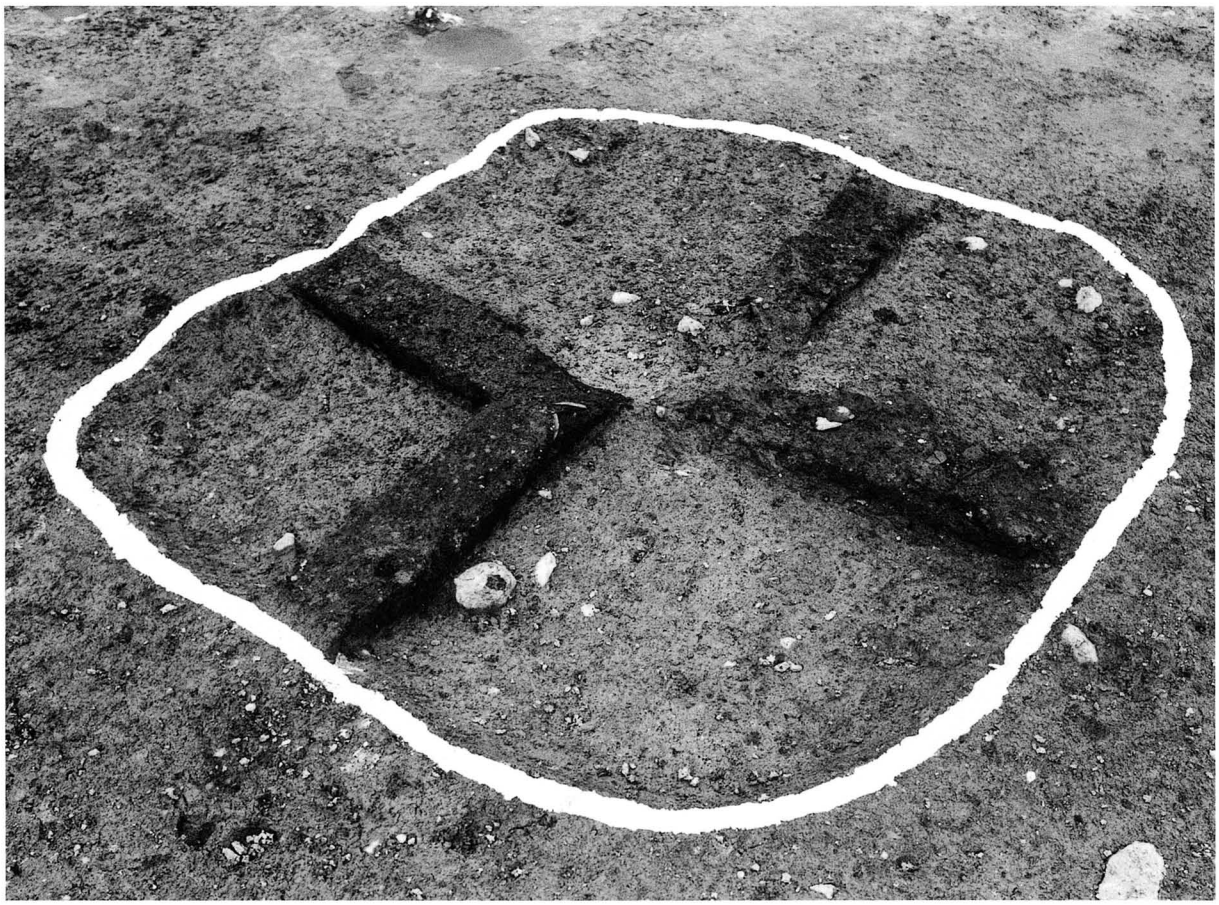
ＳＫ２（南より）



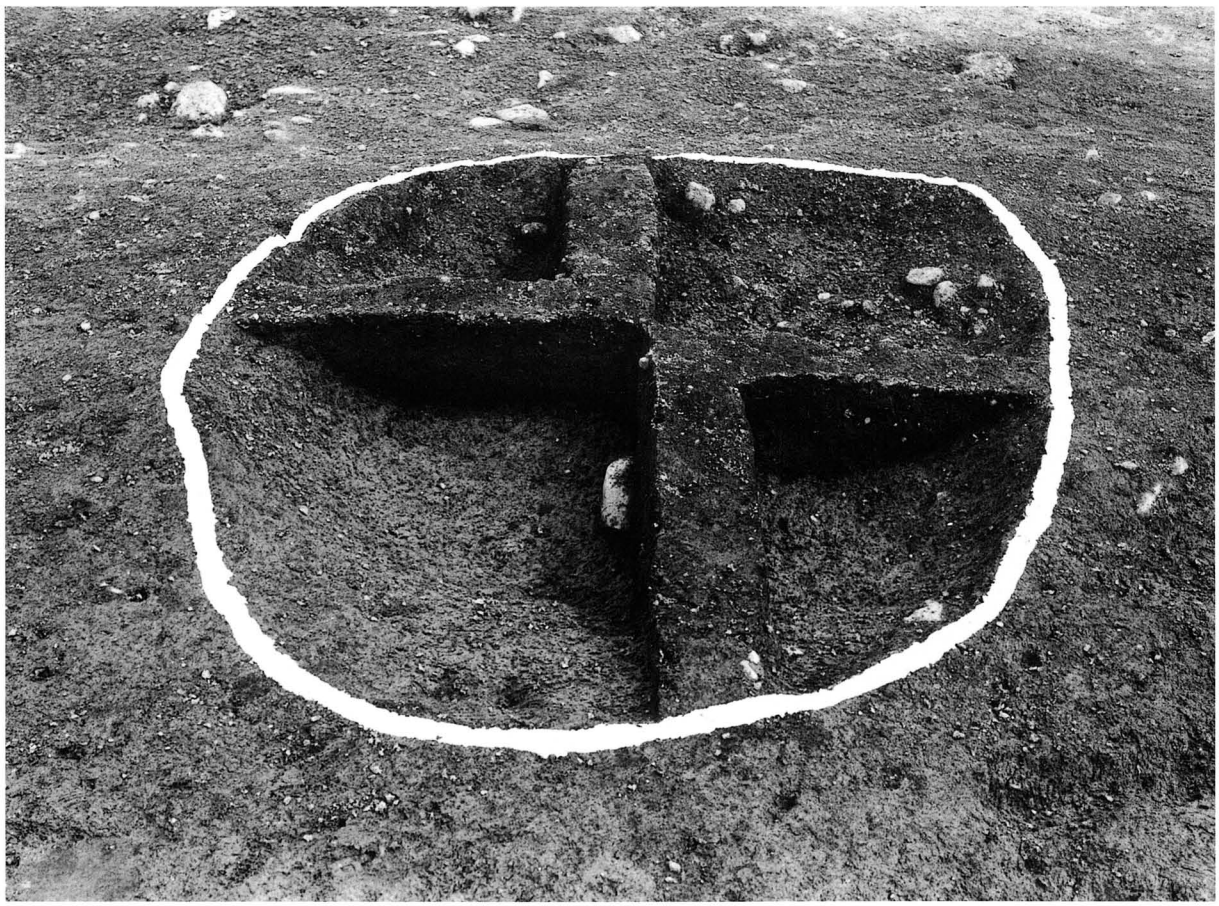
ＳＫ４（東より）



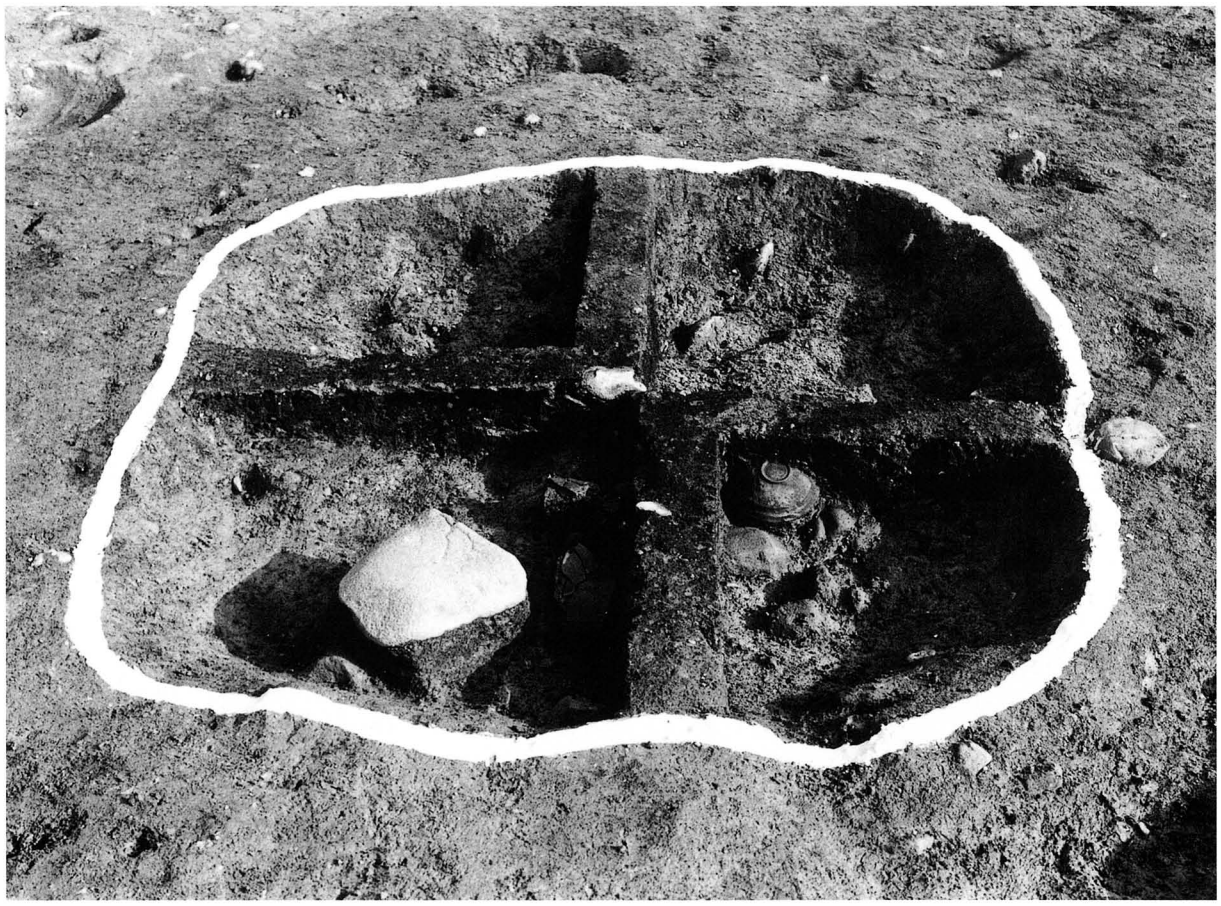
ＳＫ４（北より）



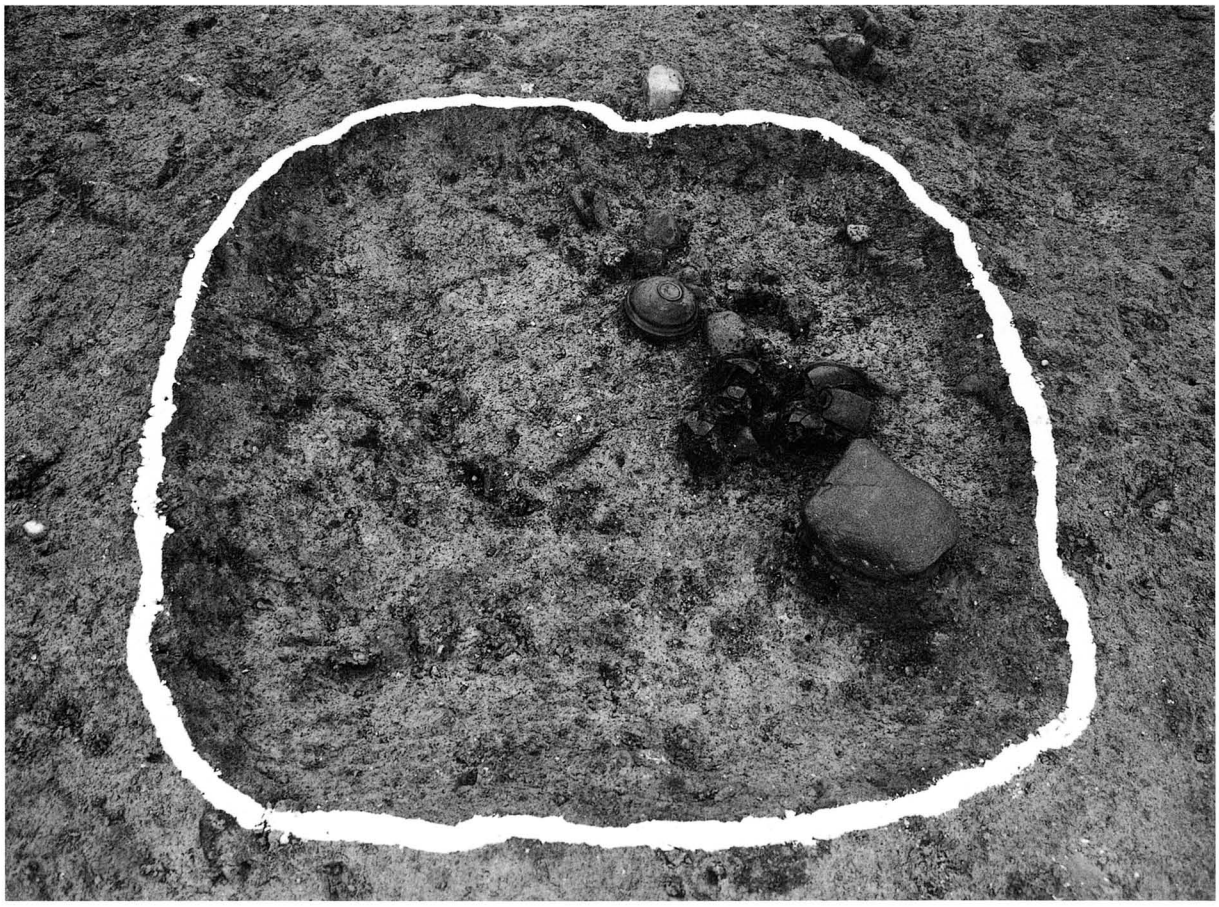
ＳＫ５（西より）



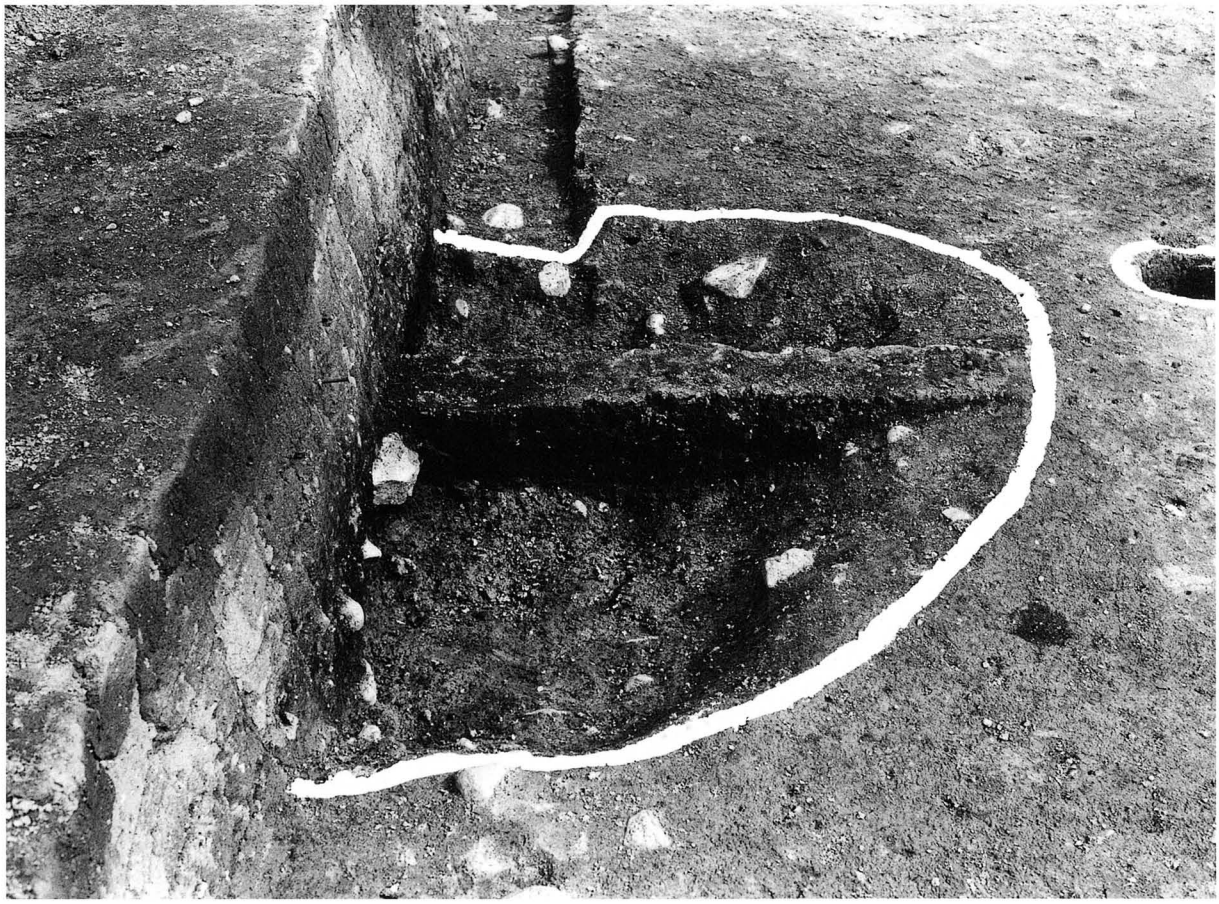
ＳＫ６（北より）



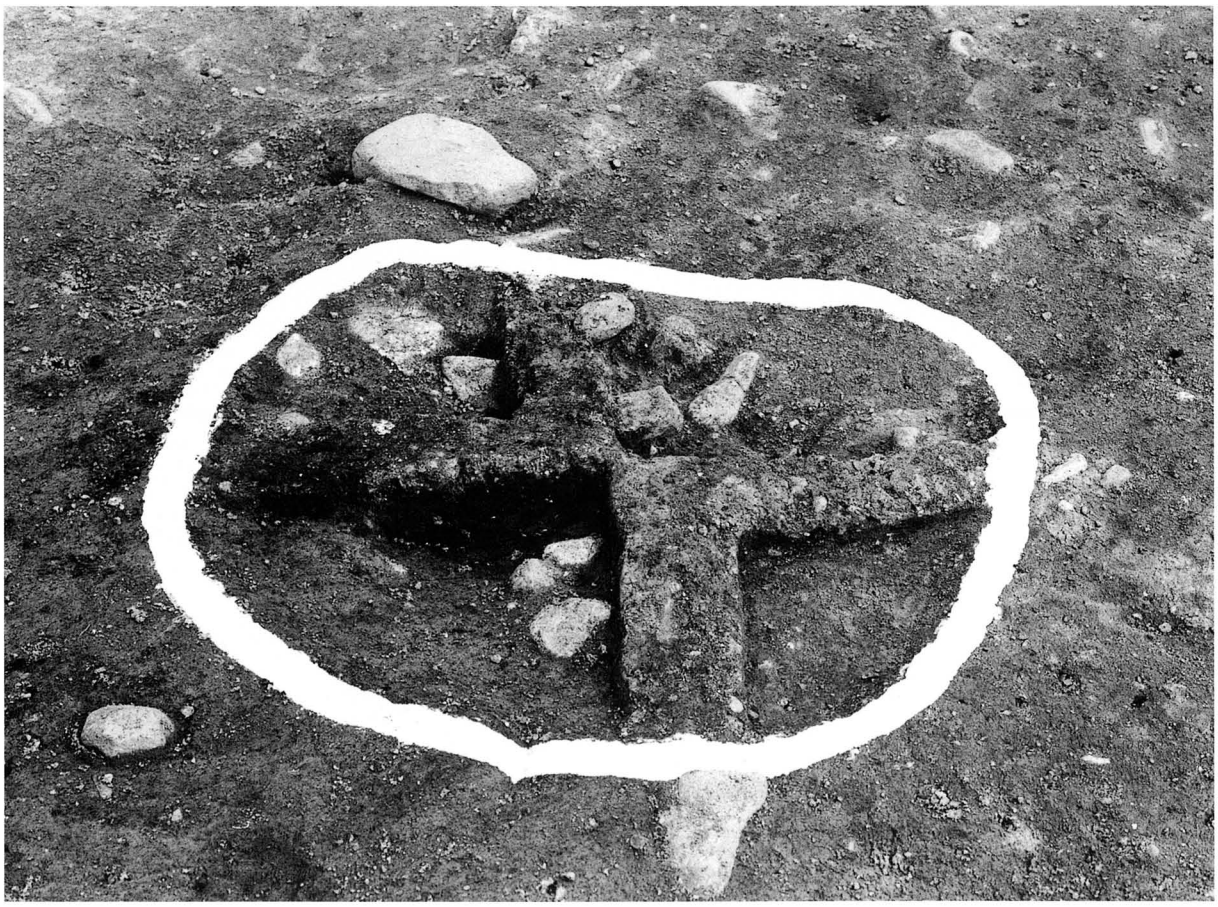
ＳＫ９（北より）



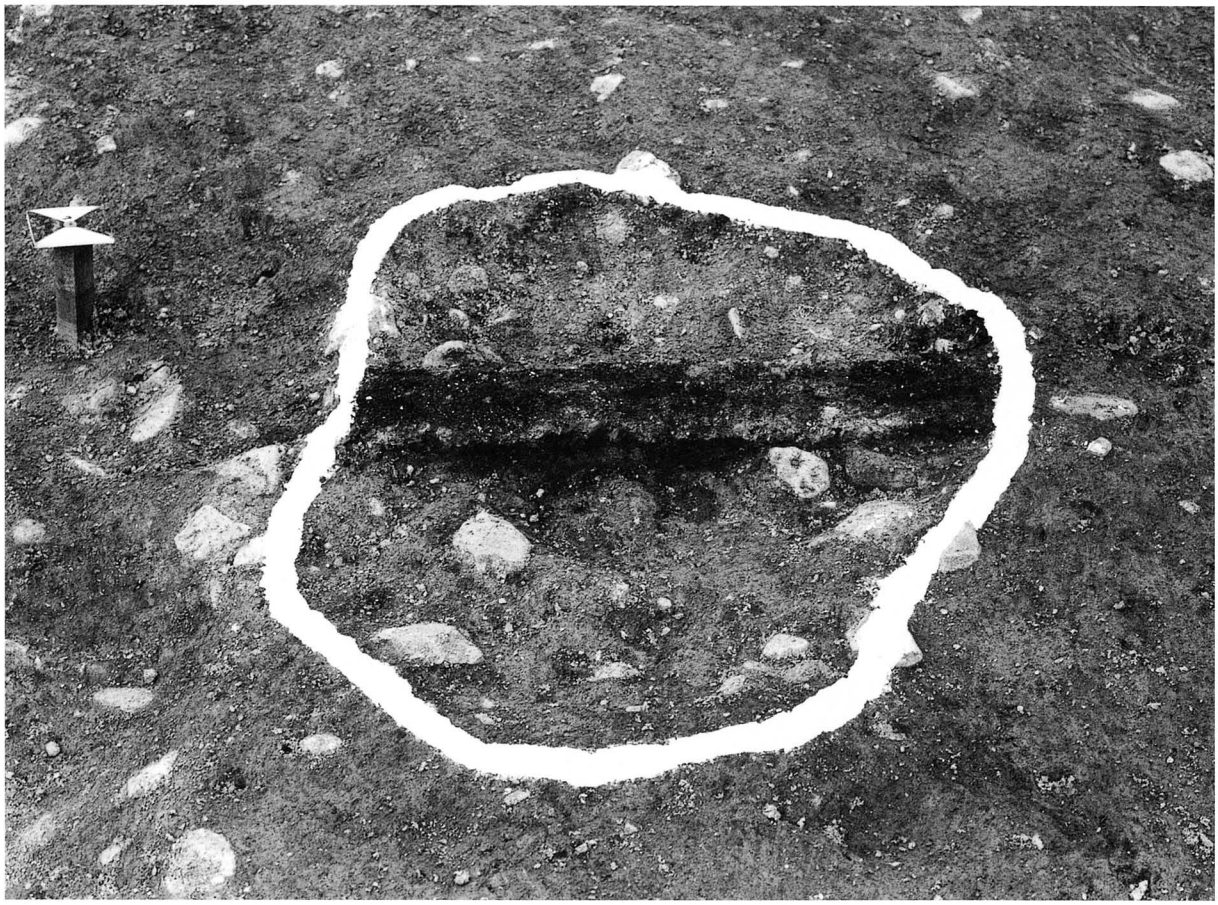
ＳＫ９（東より）



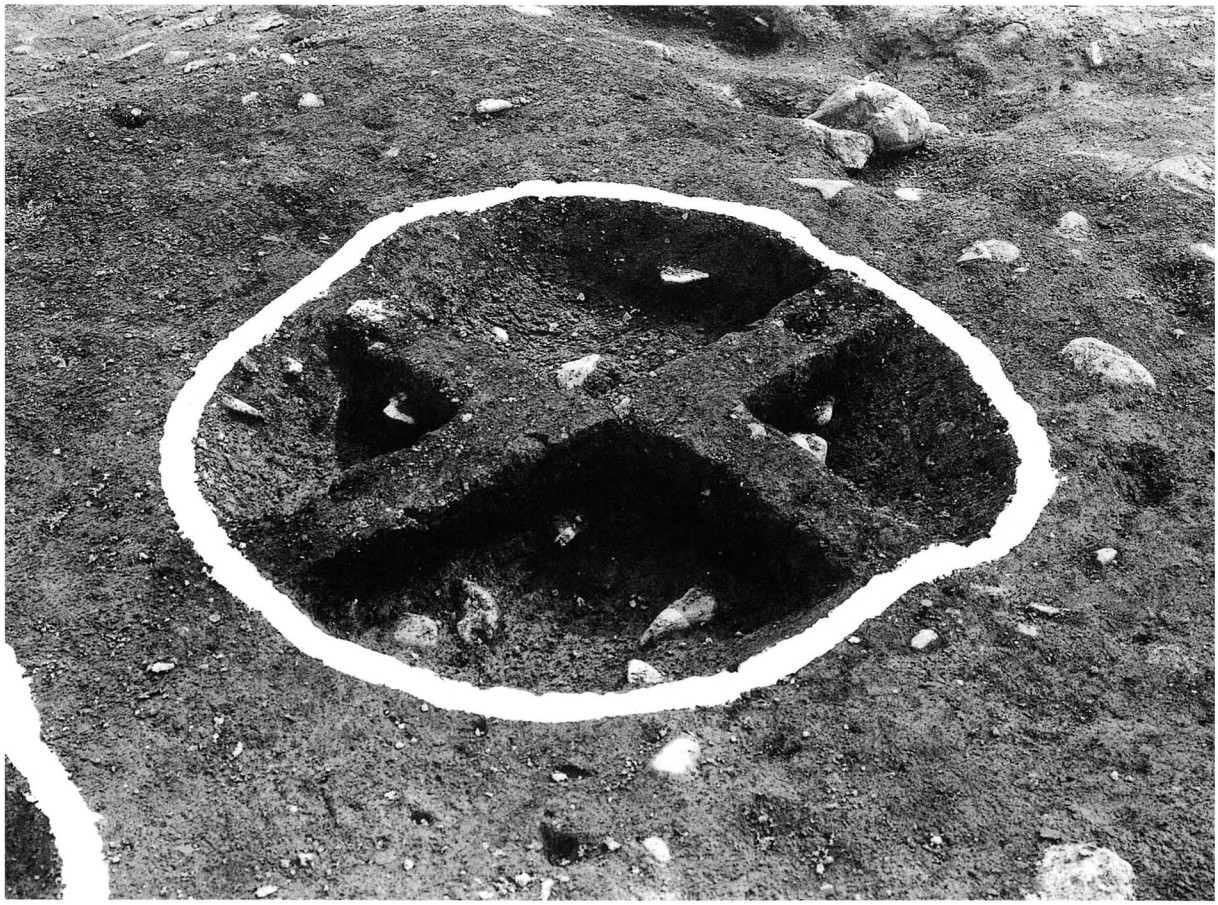
ＳＫ10（北より）



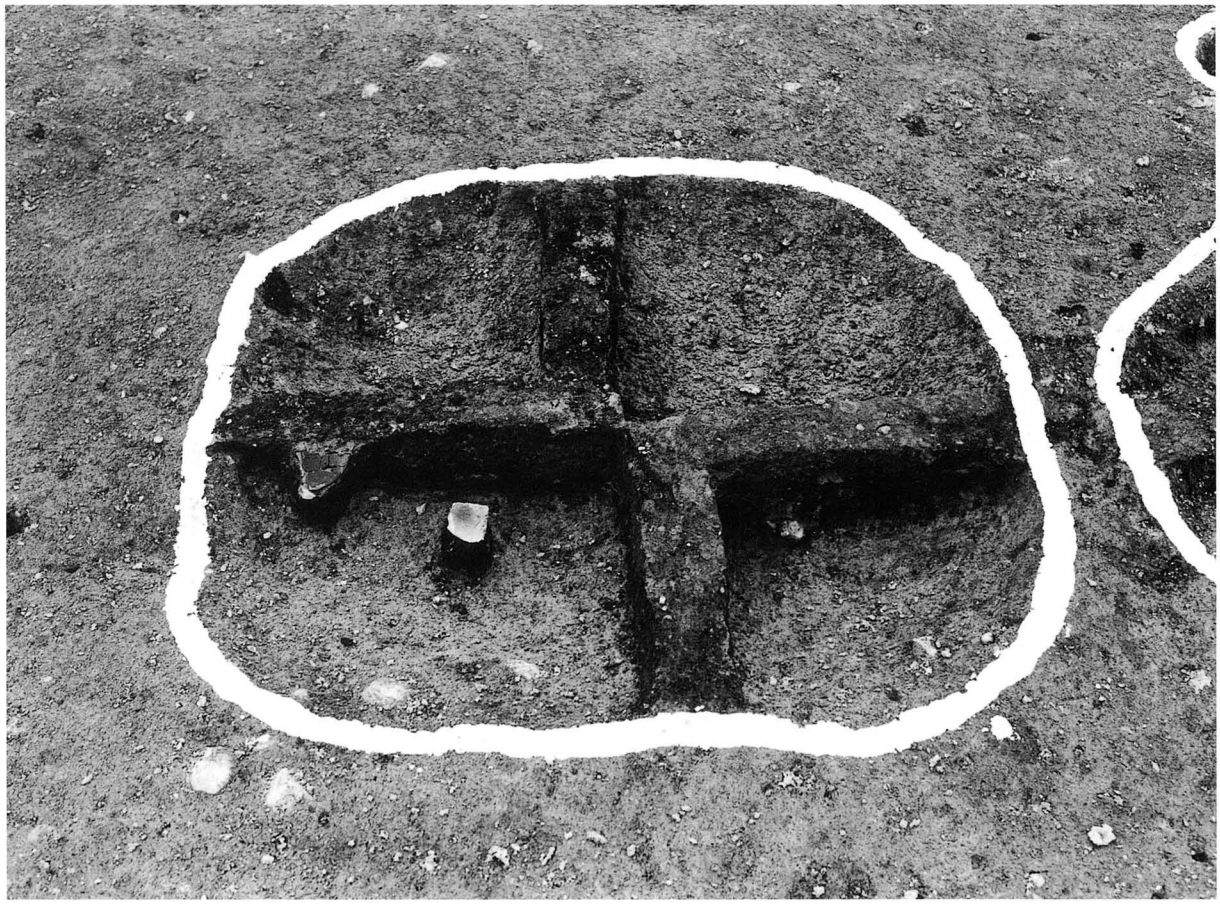
ＳＫ11（北より）



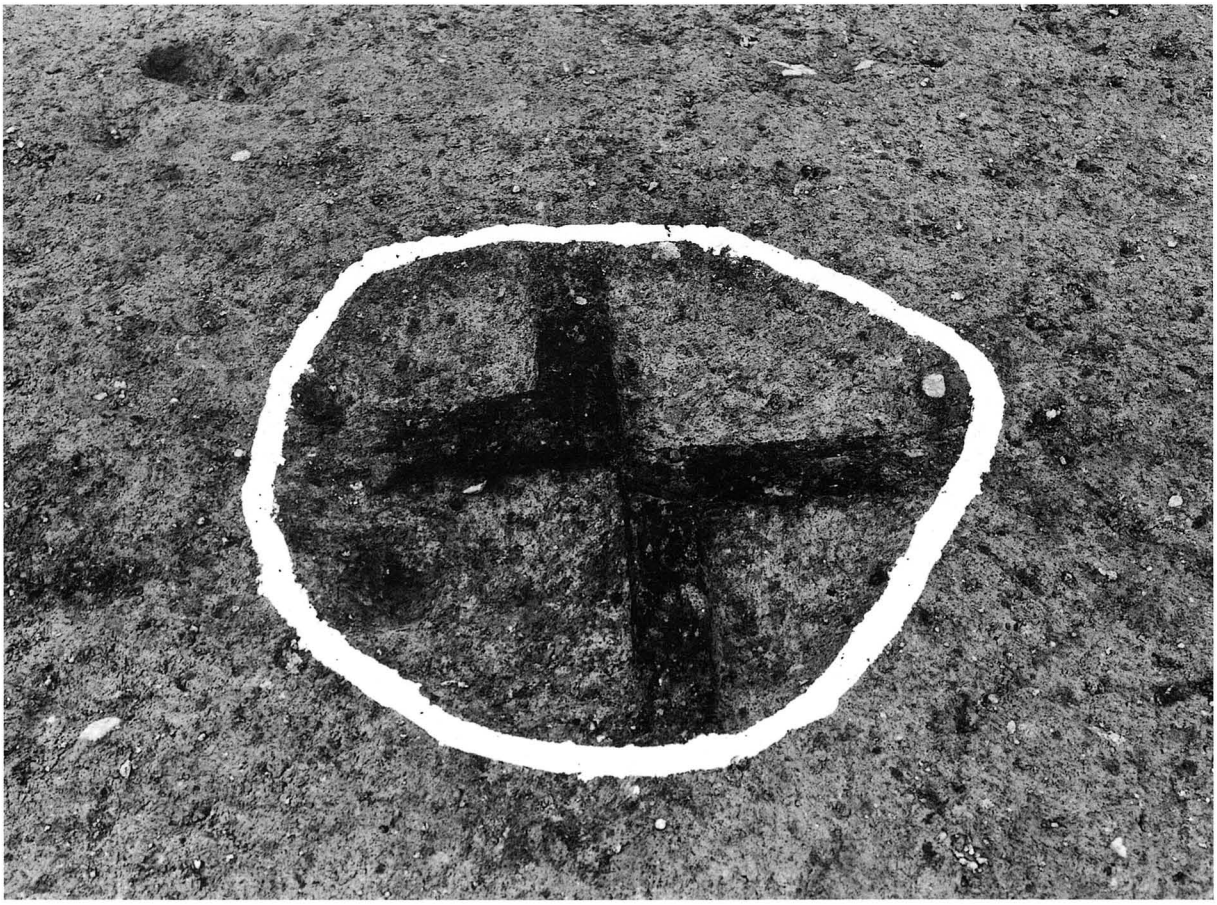
ＳＫ12（西より）



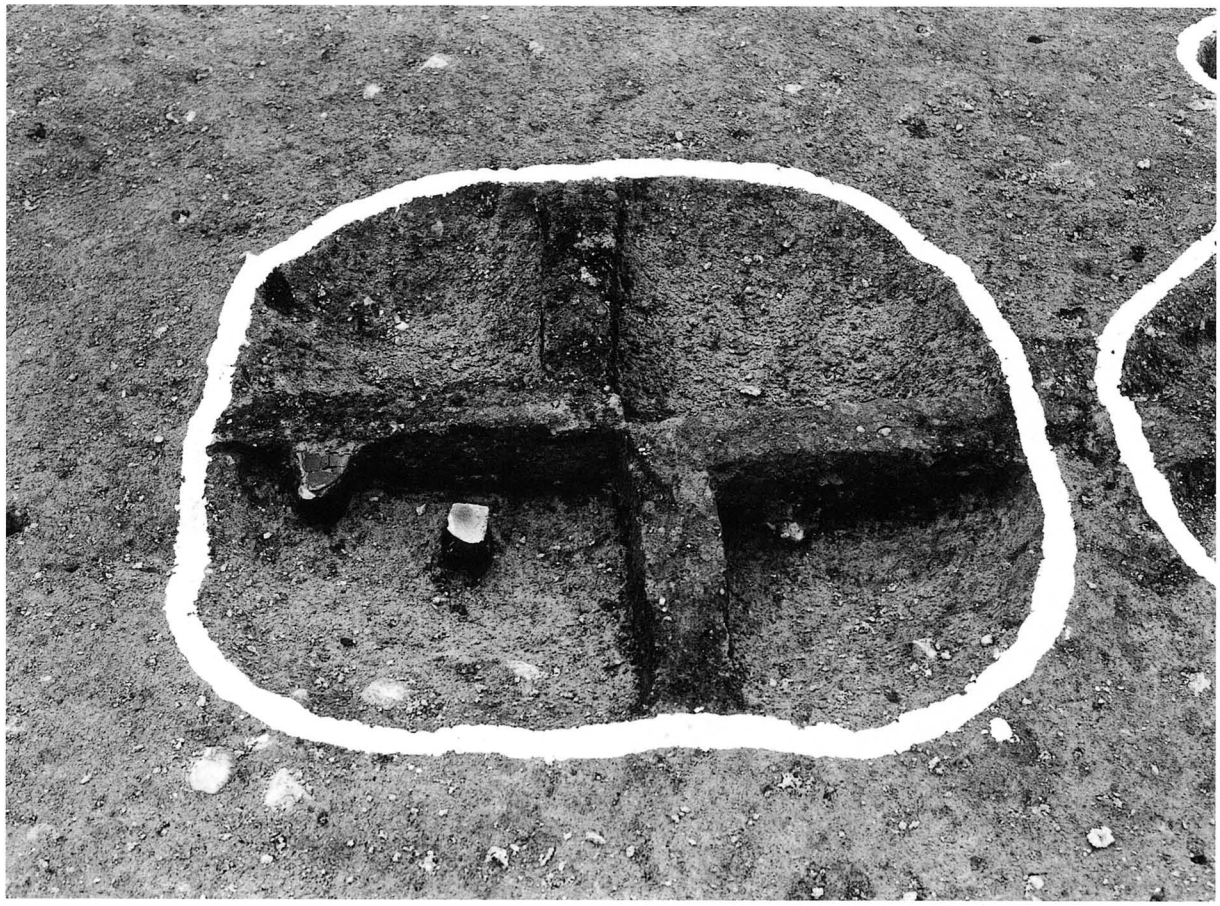
ＳＫ13（北より）



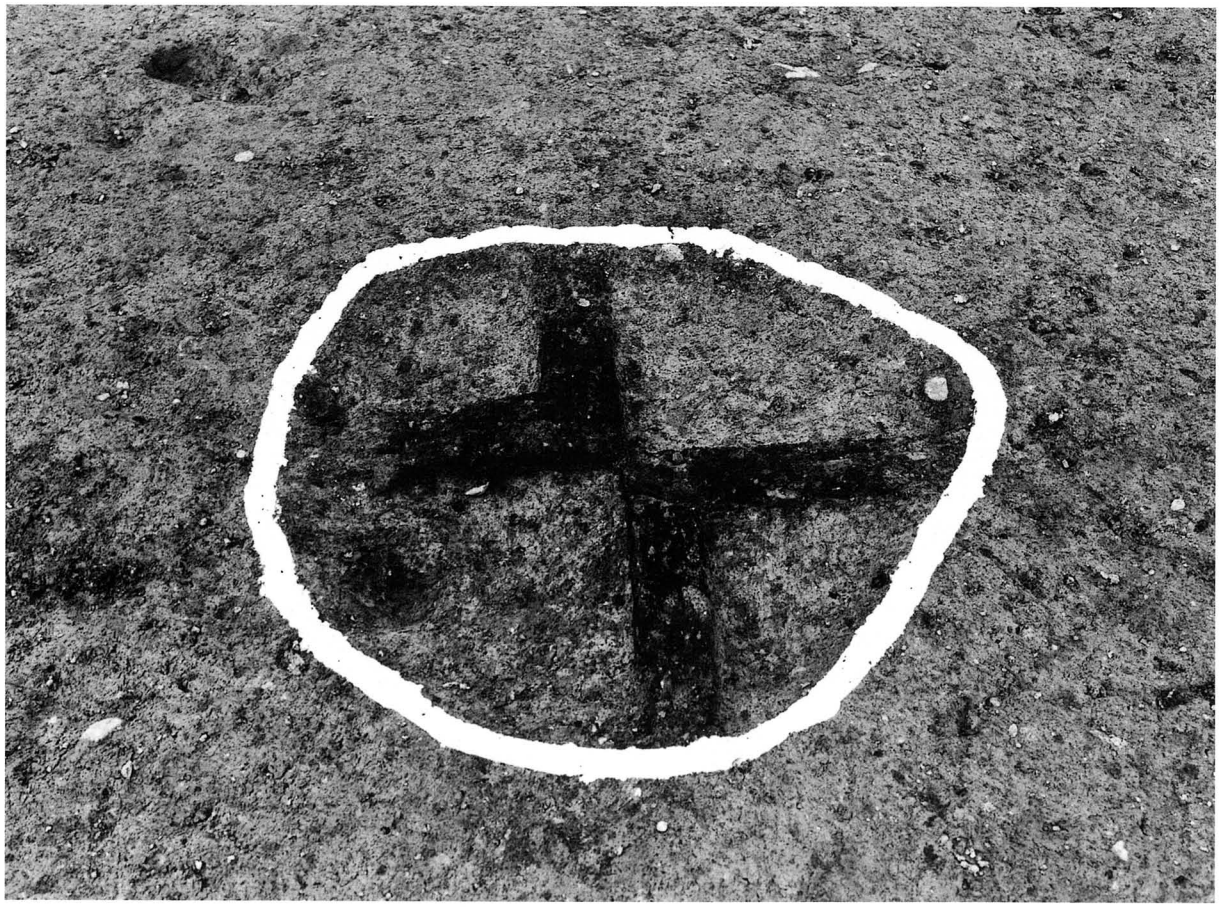
ＳＫ15（南より）



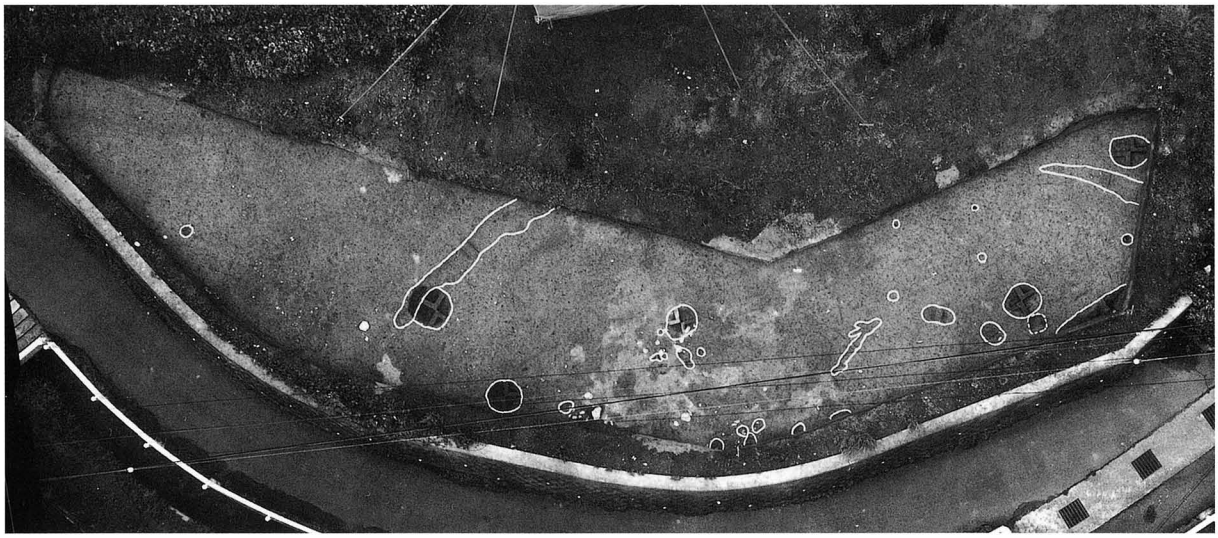
ＳＫ16（南より）



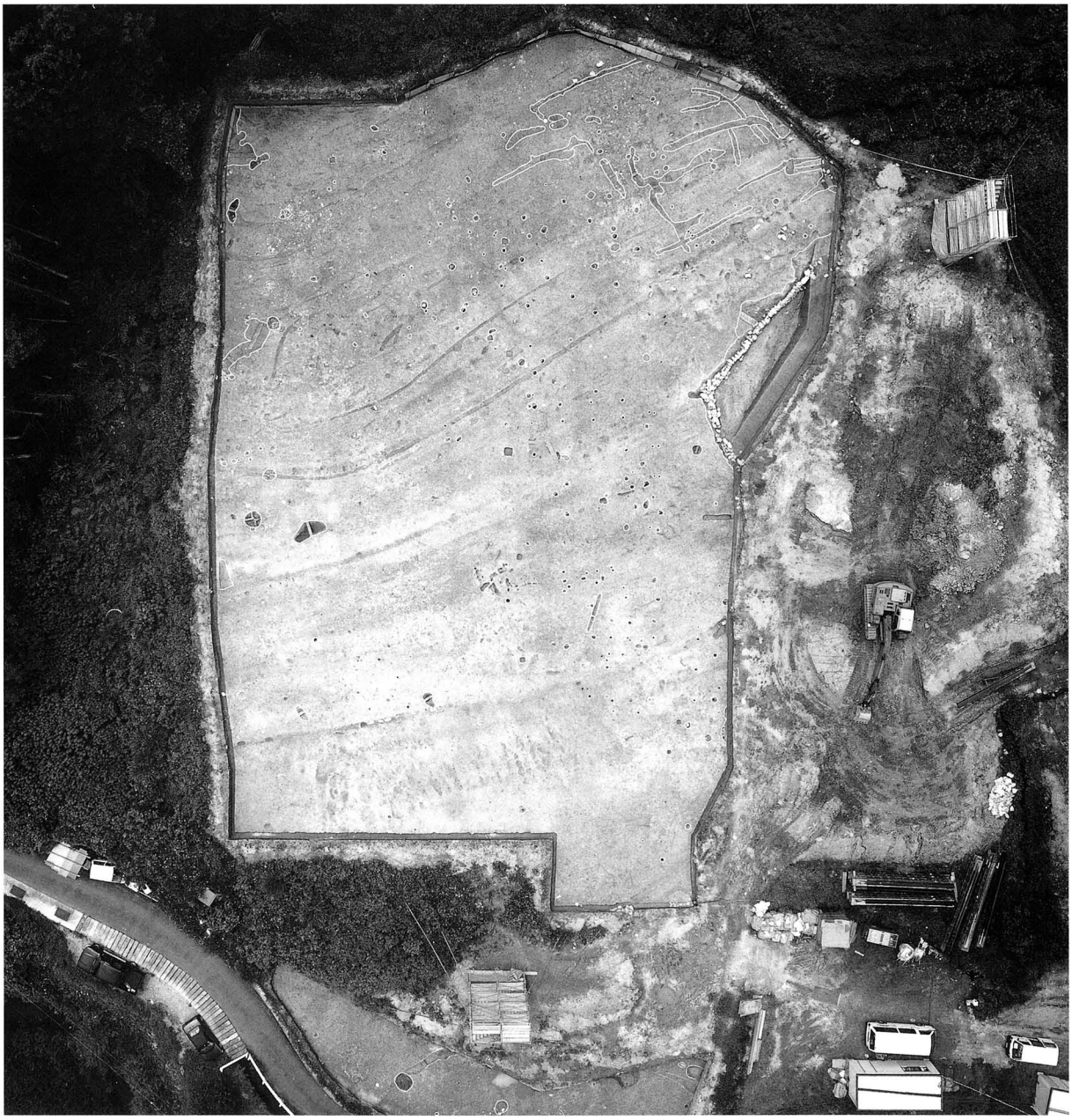
ＳＫ18（北より）



ＳＫ19（北より）



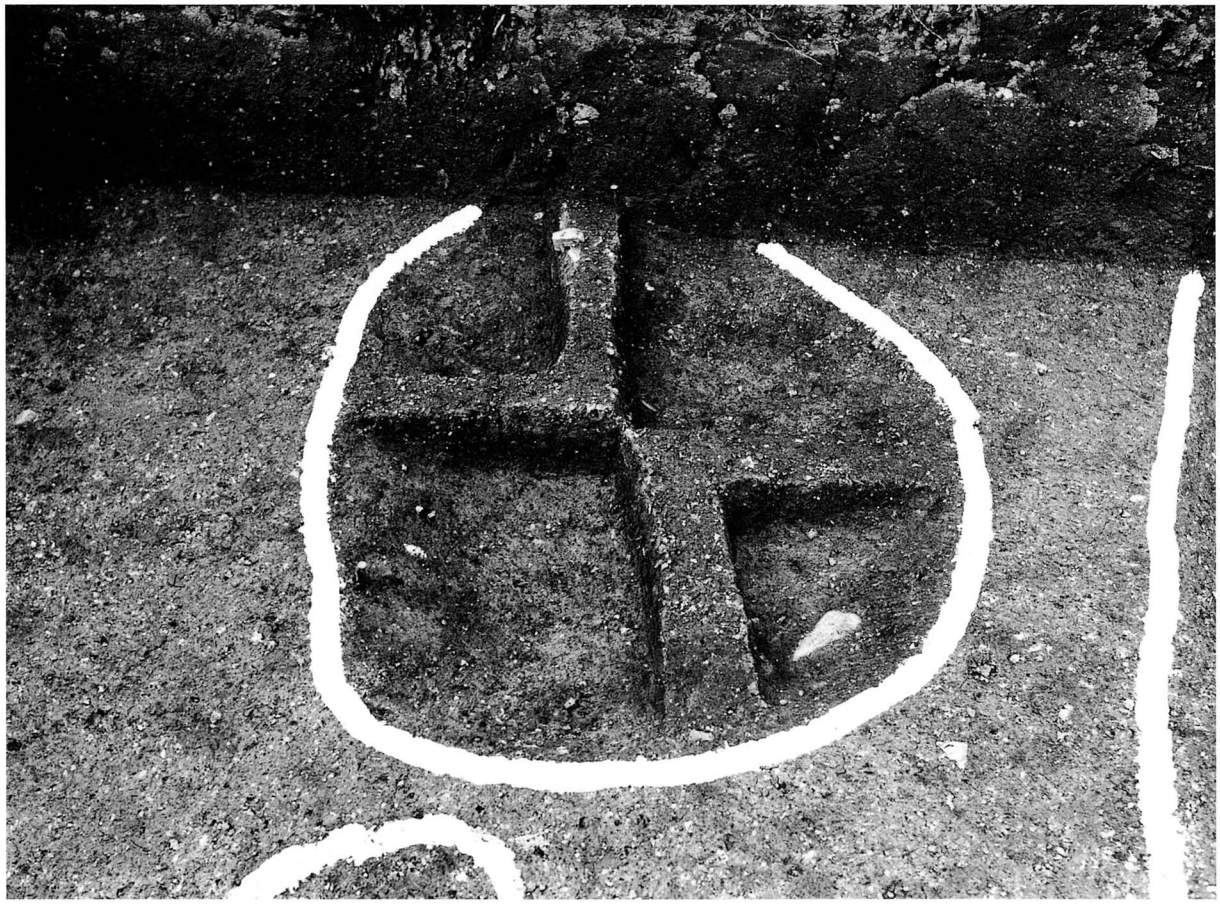
第Ⅱ－2調査区全景（西より）



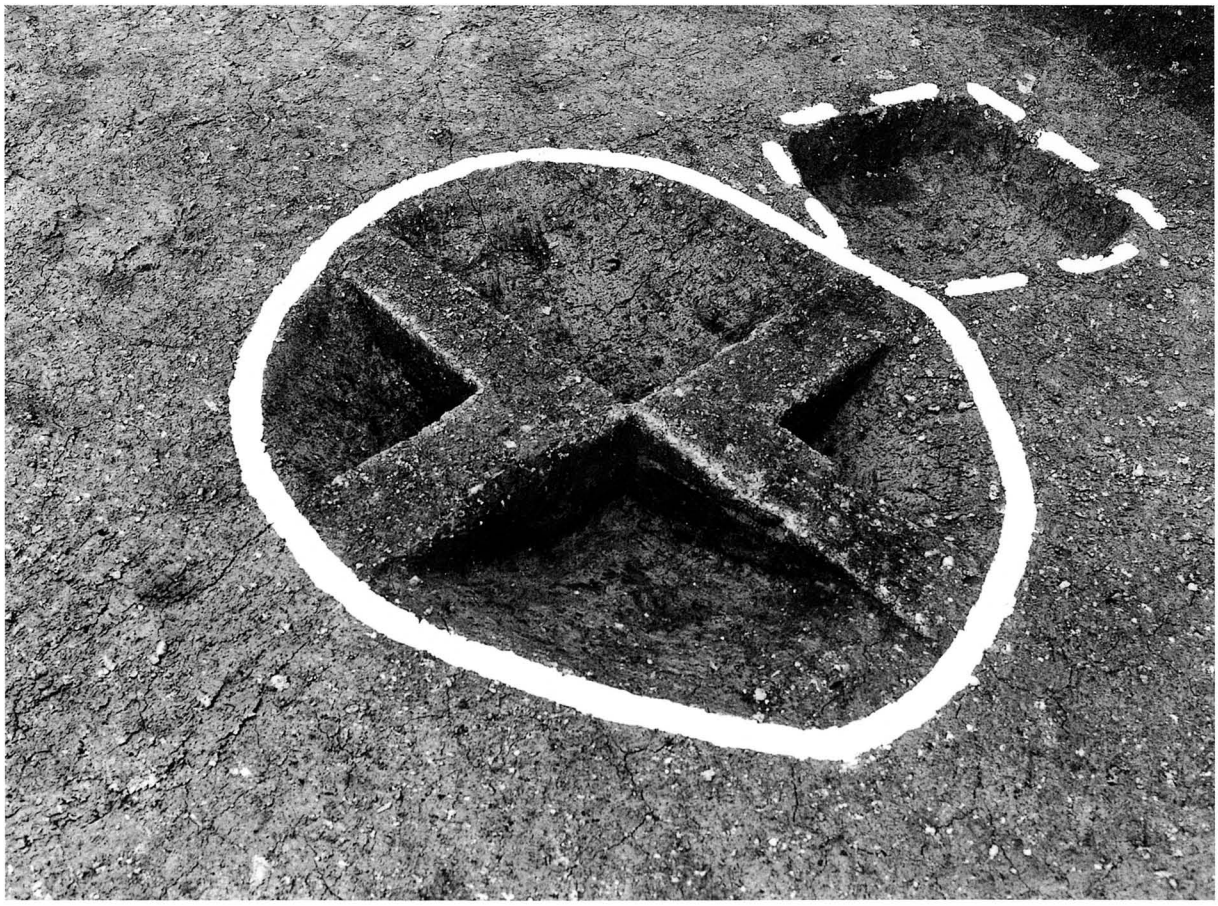
第Ⅱ－3調査区全景（東より）

調査区北部（西より）

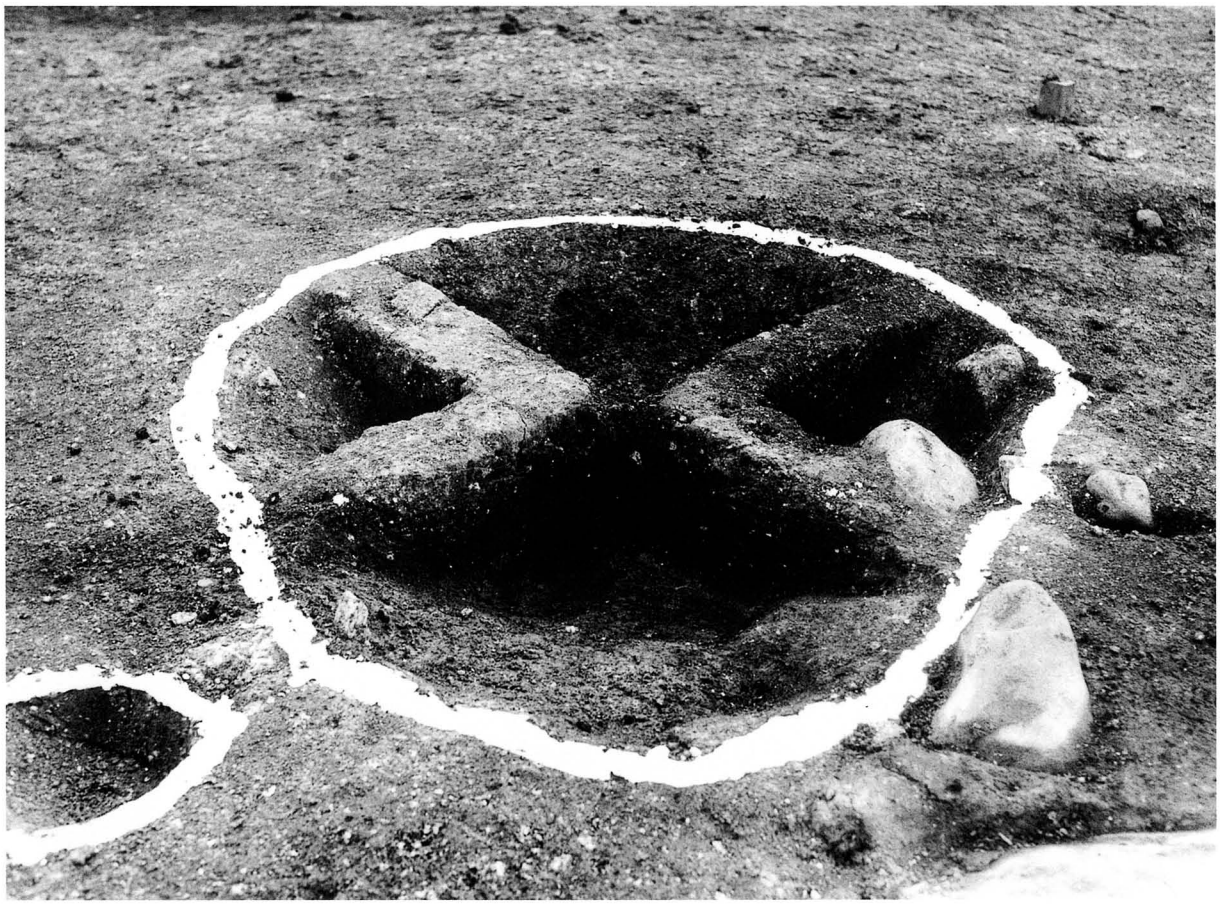
調査区南部（西より）



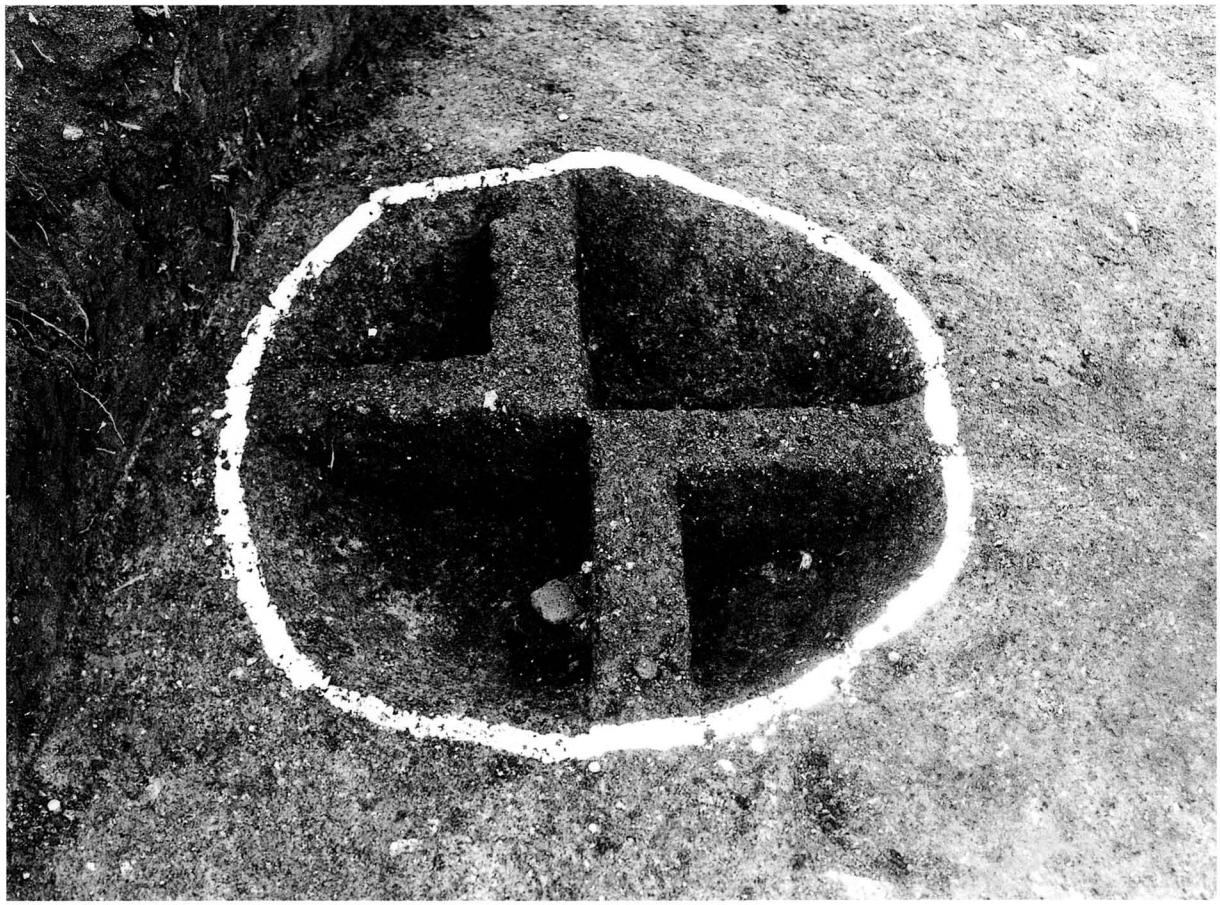
ＳＫ22（南より）



ＳＫ23（南より）



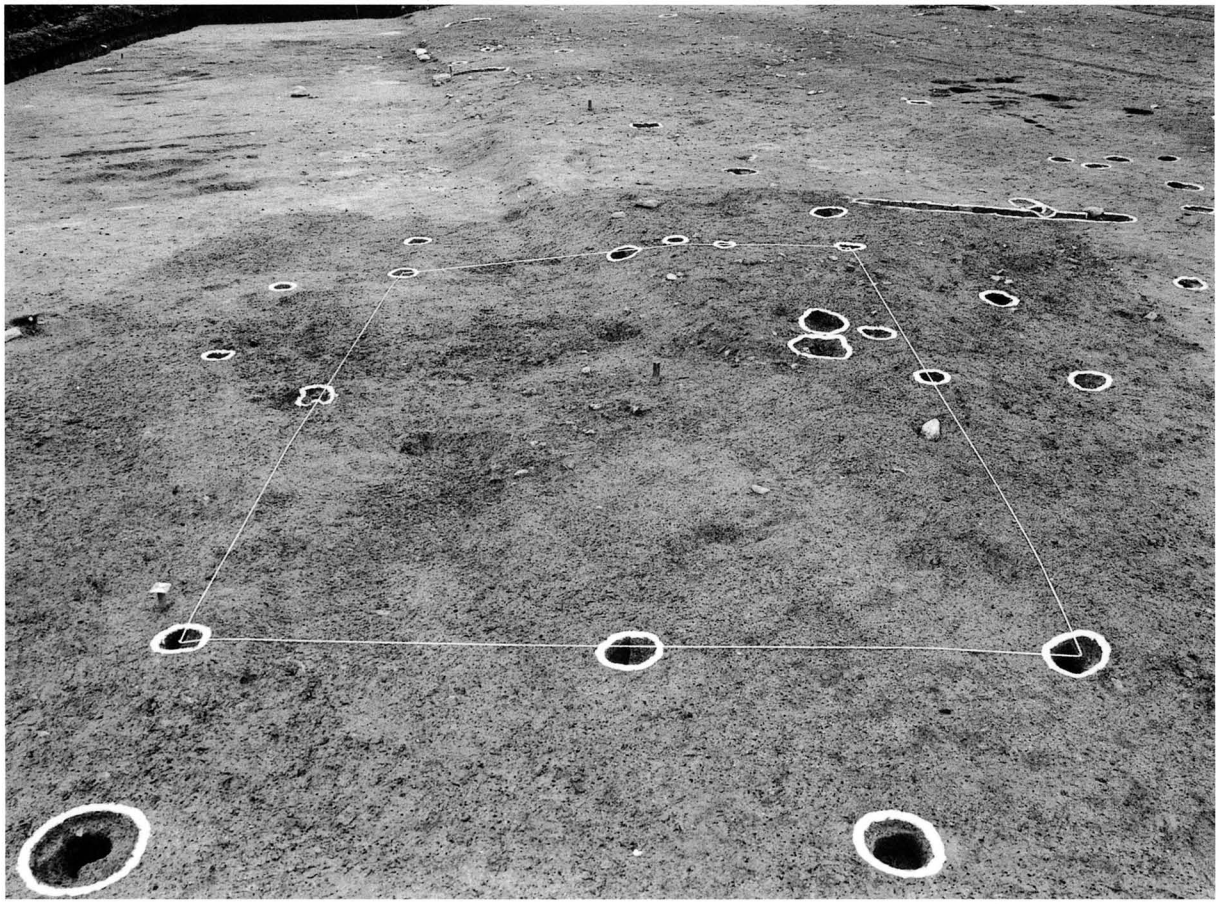
ＳＫ24（南より）



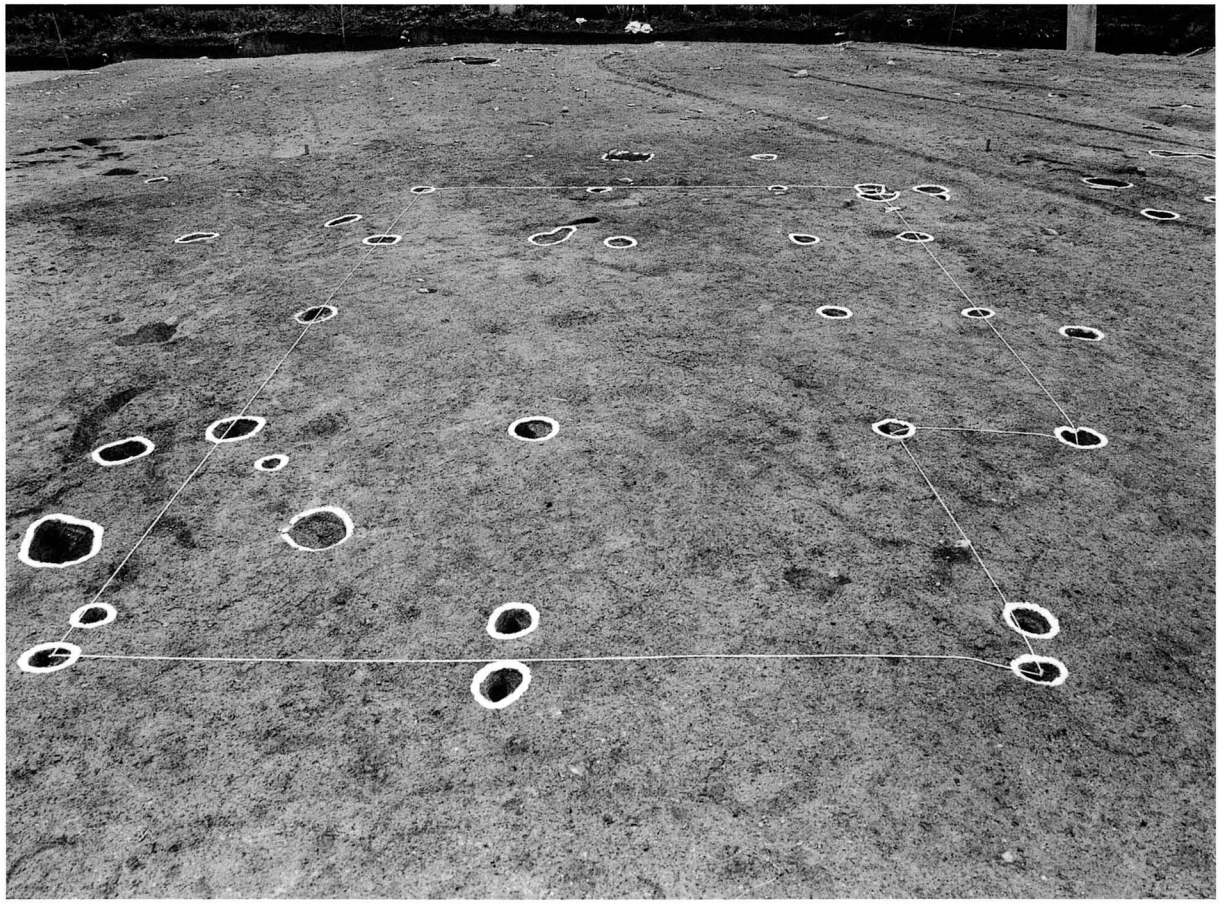
ＳＫ25（北より）

調査区全景（西より）

調査区全景（北より）

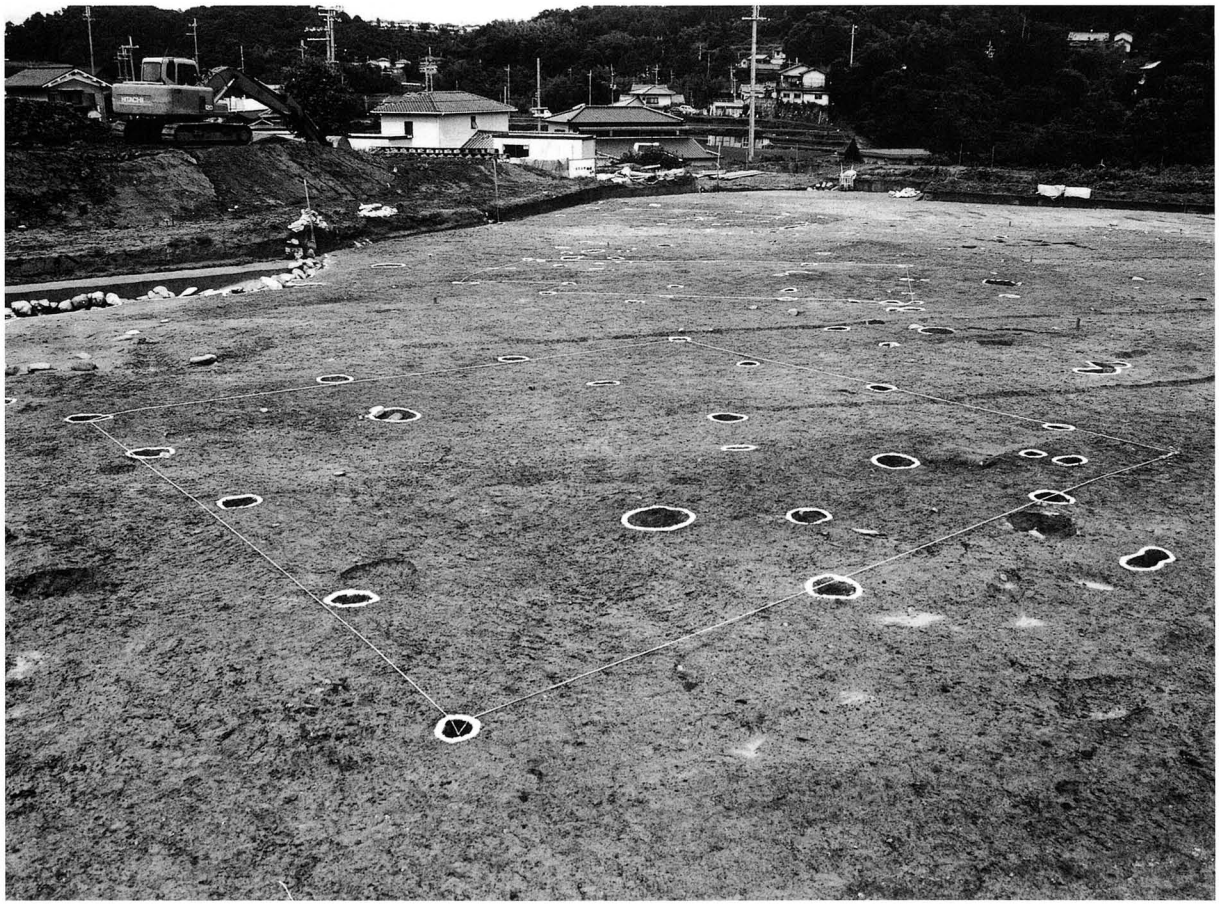


ＳＢ１（北より）

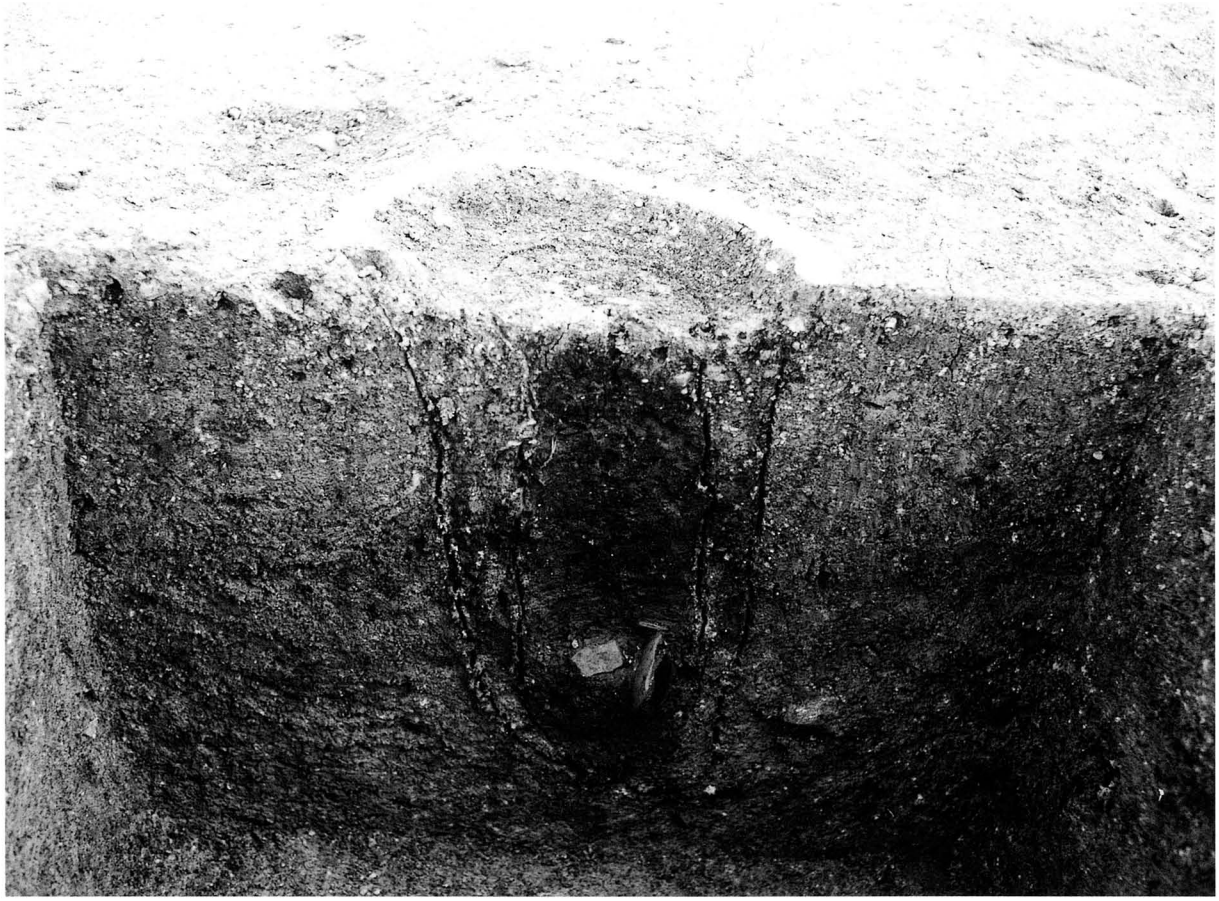


ＳＢ２（北より）

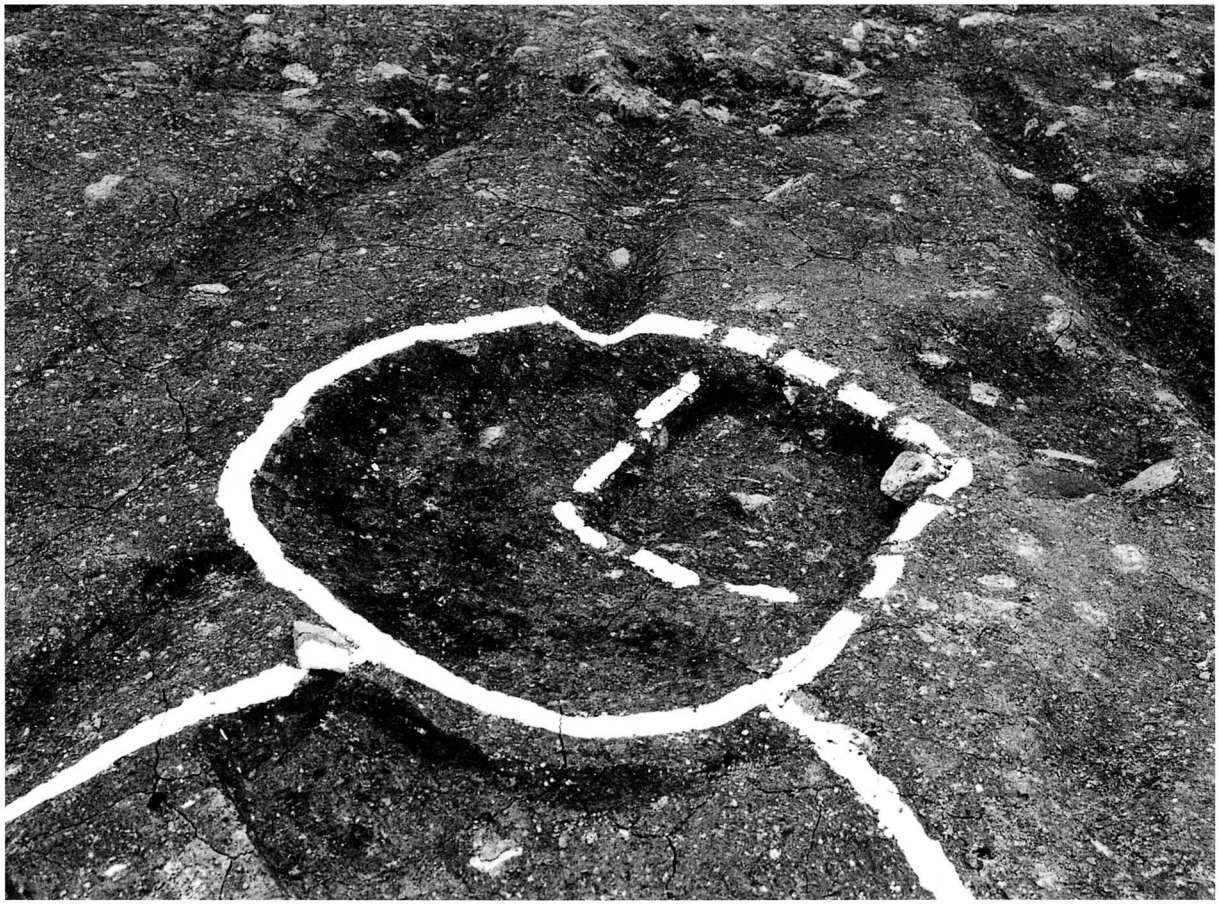
ＳＢ２・３（北より）



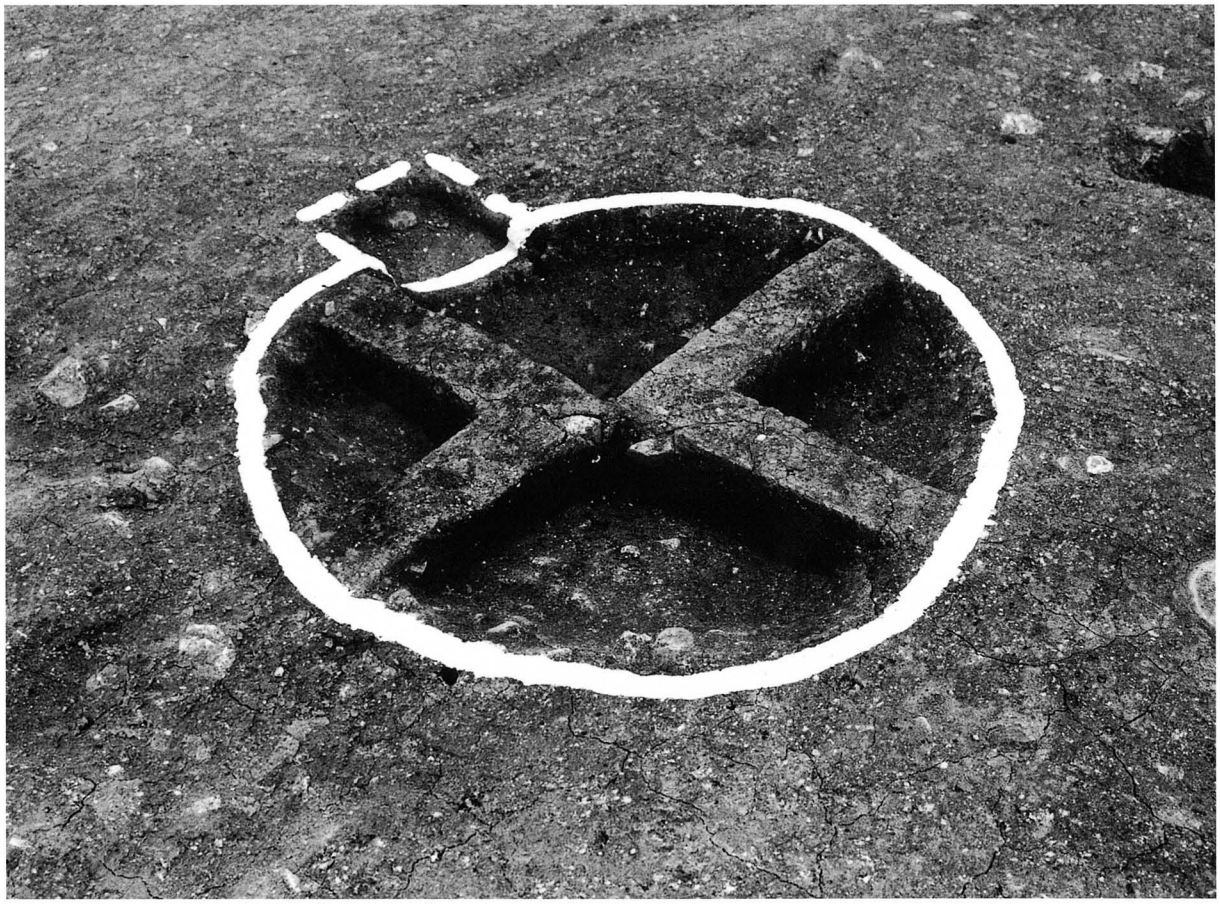
ＳＢ３（西より）



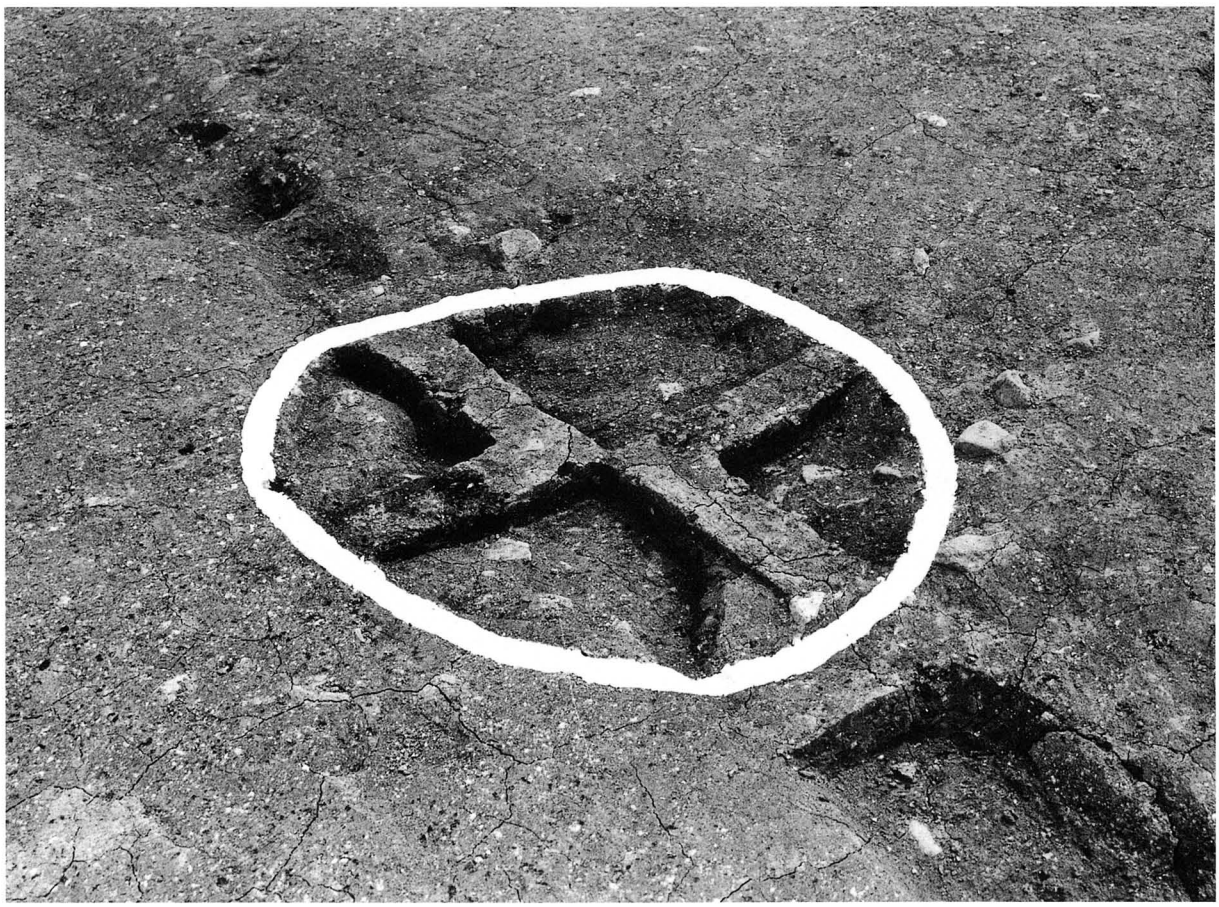
ＳＢ３－Ｐ１（北より）



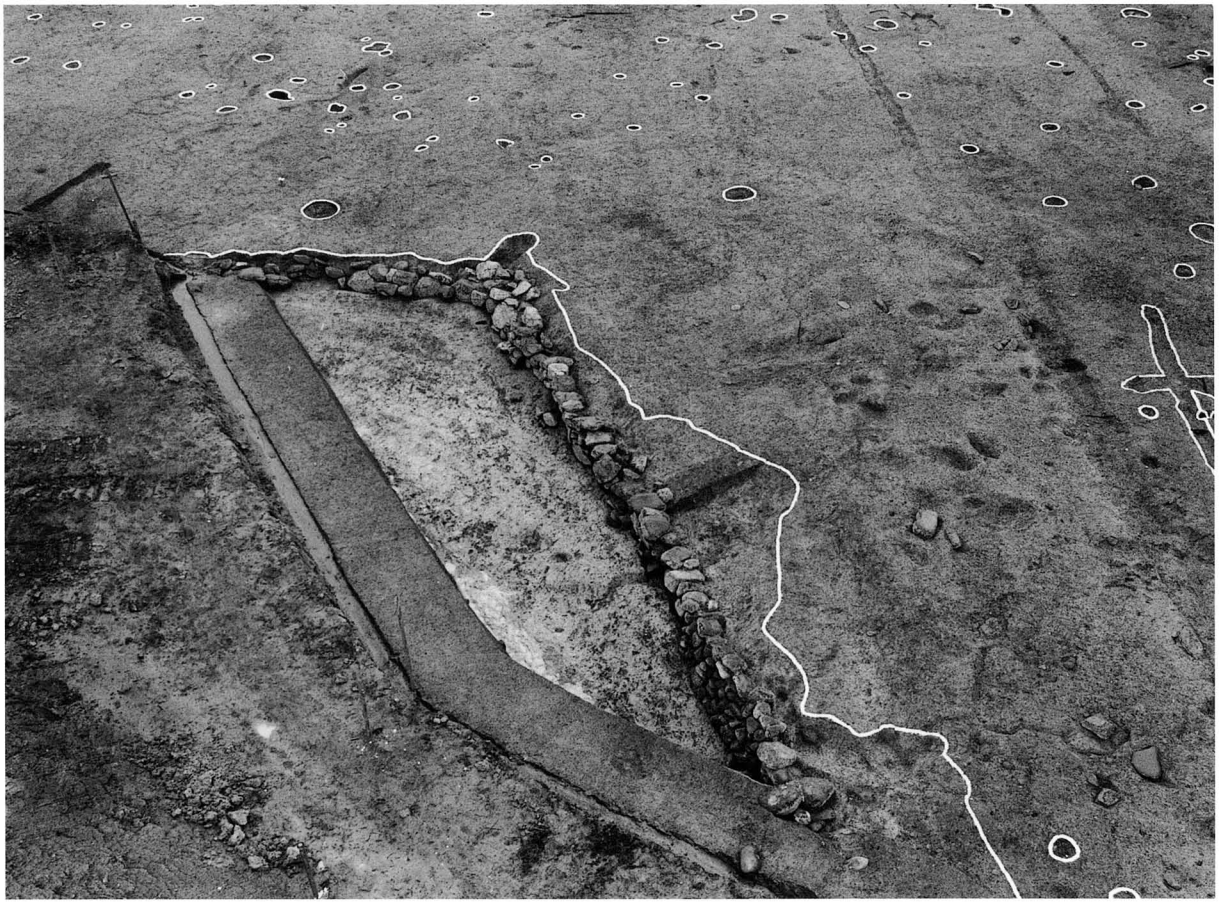
ＳＫ29（南より）



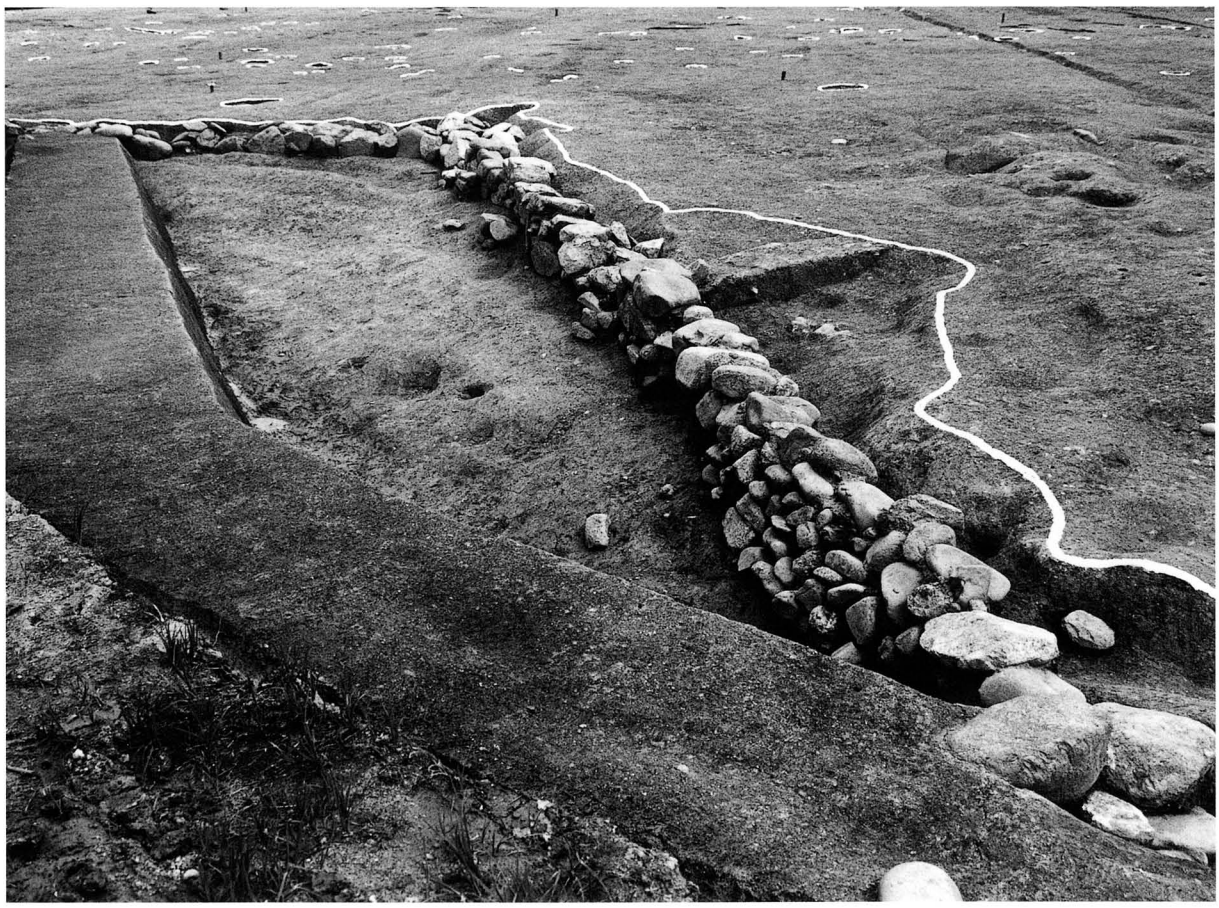
SK30（西より）



SK31（東より）



ＳＷ１（西より）



ＳＷ１（西より）

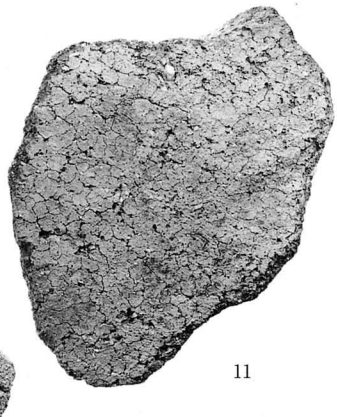
2

3

4 5

9

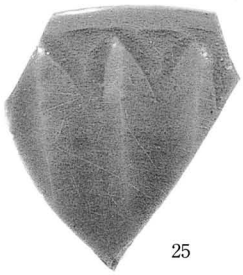
10

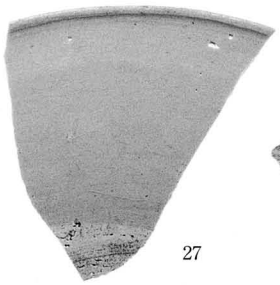

11

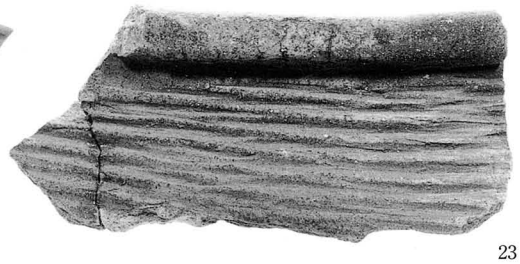
6

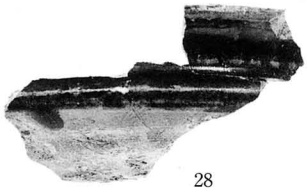
7

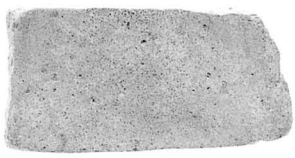
8


25


27


23


28


29

31

33

32

34

ＳＷ１（２・３）、第Ⅰ－１調査区第１包含層（４～11・23・25・27～29）、ＳＰ23（32）、ＳＰ31（31）、ＳＷ２（33・34）

35

42

36

43

37

44

39

45

40

46

41

47

51

57

56

58

ＳＷ２（35～37・39～47・51・56～58）

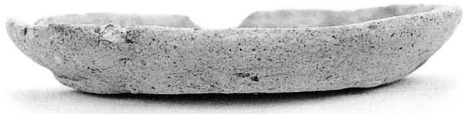
60

61

62

63

78


64

65

67

68

69

70

ＳＷ２（60～63）、ＳＸ10（64・65・67～70・78）

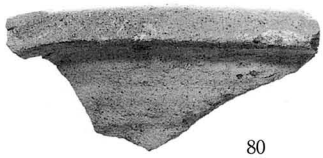
72

73

75

76

77


80

81

86

108

87

109

100

111

106

112

ＳＸ10（72・73・75～77・80・81）、第Ⅰ－２調査区第１包含層（86・87）、
第Ⅰ－２調査区第２包含層（100・106・108・109・111・112）

117

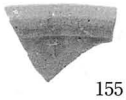
119

121

131

154

122


155

156

157

160

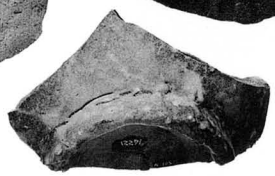
132

125

134

133

129


123

第Ⅰ－２調査区第２包含層（117）、ＳＸ12（119・121～123・125・129・131・132）、
ＳＤ13（154～157）、第Ⅰ－３調査区第２包含層（160）

164

165

162

168

169

170

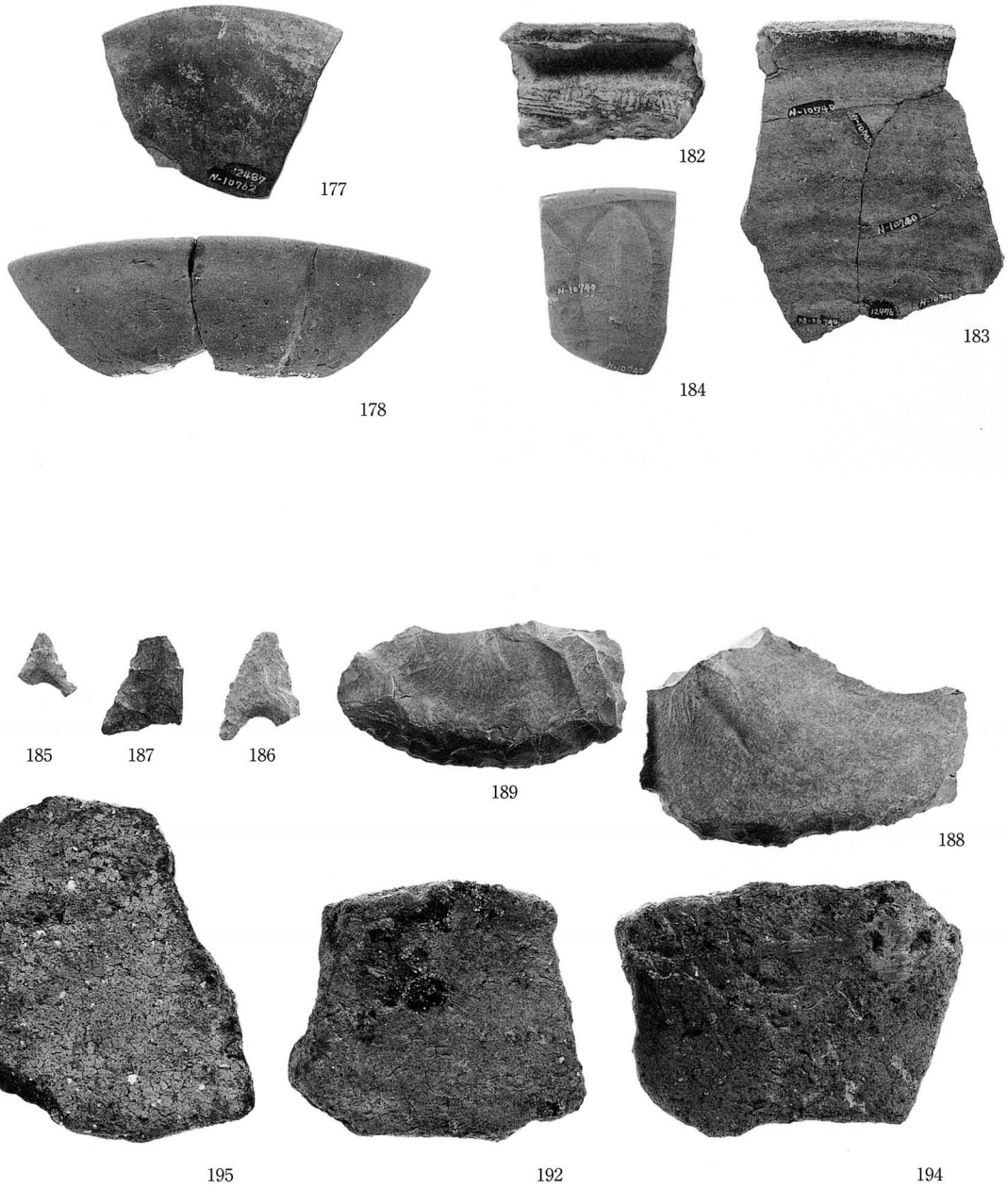
173

174

175

176

ＳＫ４（162・164）、ＳＫ５（165・168）、ＳＫ９（169・170）、ＳＢ３（173・174）、ＳＫ28（175・176）



ＳＰ２（177）、ＳＰ３（178）、ＳＷ１（182～184）、第Ⅱ－３調査区包含層（185～189・192・194・195）

報　告　書　抄　録

ふりがな	ひのかんのんじいせき
書名	日野観音寺遺跡
副書名	河内長野市遺跡調査報告　XXXI
シリーズ名	河内長野市遺跡調査報告
シリーズ番号	XXXI
編著者名	鳥羽正剛　福田和浩
編集機関	河内長野市教育委員会　河内長野市遺跡調査会
所在地	〒586-8501 大阪府河内長野市原町一丁目1番1号　TEL 0721-53-1111
発行年月日	2005年3月31日

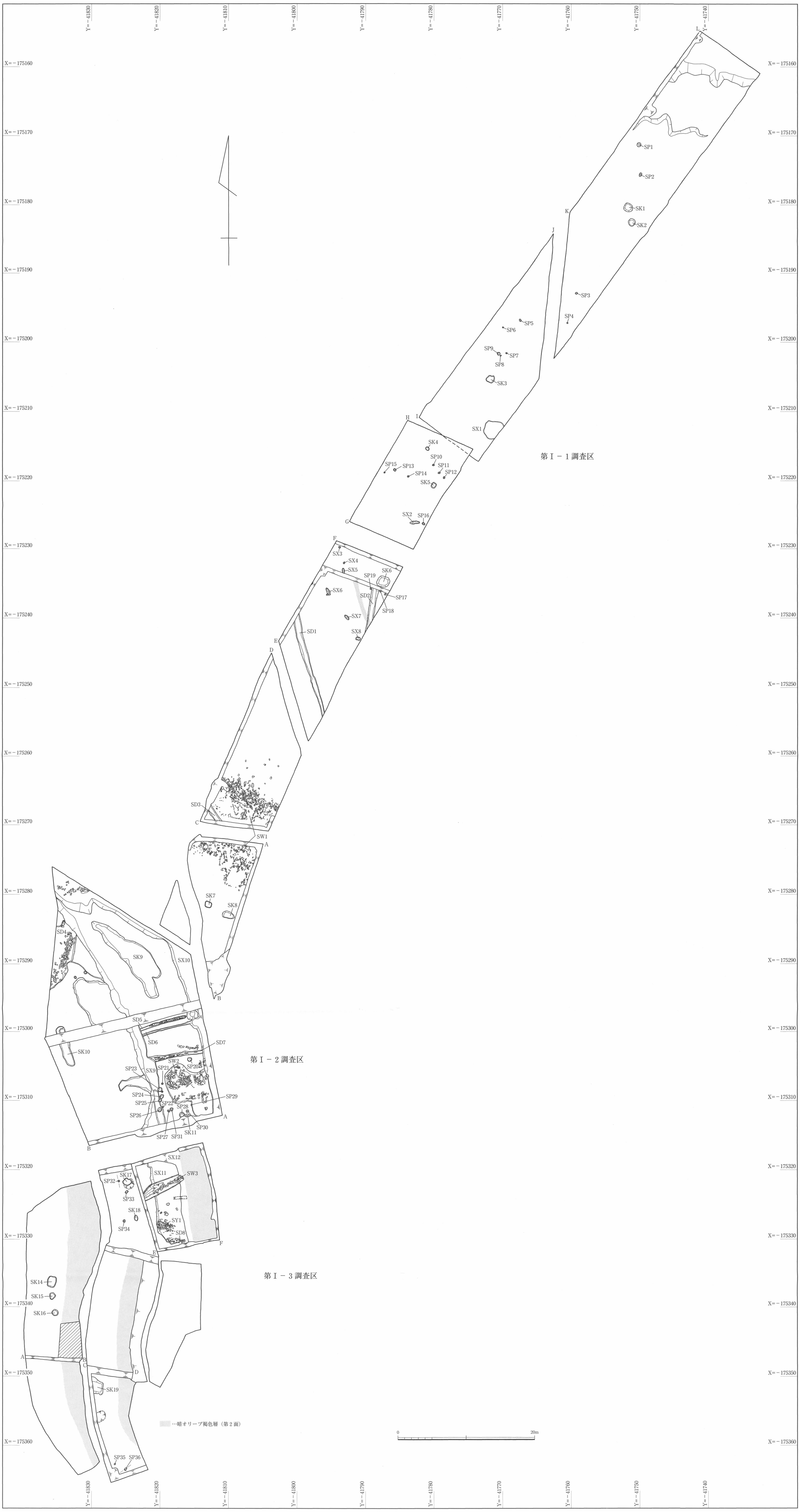
所収遺跡	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡					
日野観音寺遺跡（ひのかんのんじいせき）	大阪府（おおさかふ）河内長野市（かわちながのし）日野（ひの）	27216	府17 河15	34° 25′ 08″	135° 32′ 43″	2001.2.13 ～ 2002.9.13	3800㎡	(仮称) 日野地区大堂前ほ場整備事業
				34° 25′ 01″	135° 32′ 35″	2002.1.28 ～ 2002.7.31	3006㎡	(仮称) 日野ふるさと施設整備事業

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
日野観音寺遺跡 第I調査区 (ほ場)	社寺・生産	中世	溝、土坑、 ピット、石組、 落ち込み、窯	土師質 瓦器 瓦質	
第II調査区 (ふるさと施設)		中世	掘立柱建物、 溝、土坑 ピット、石組	土師質 瓦器 瓦質 陶磁器	

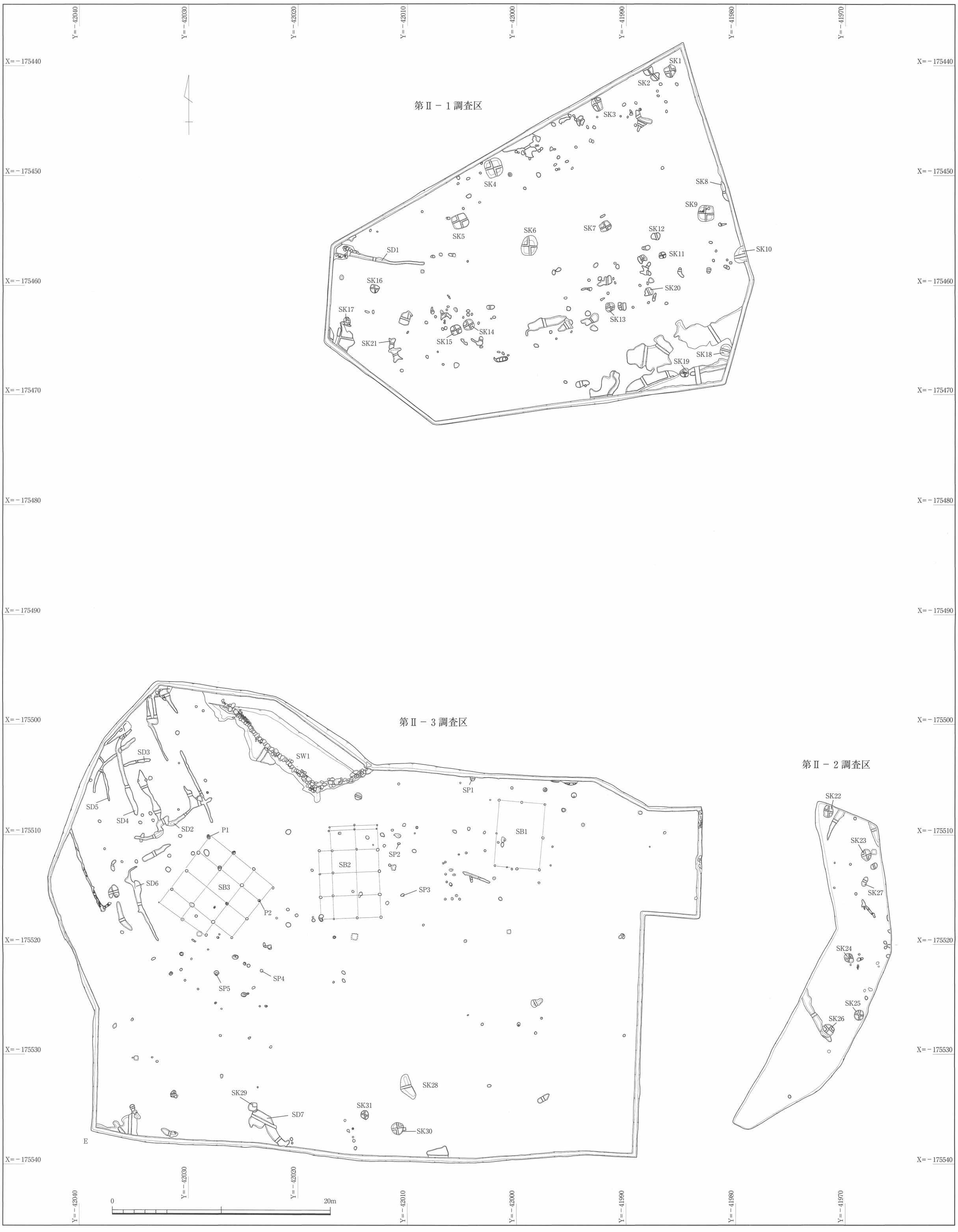
河内長野市遺跡調査報告書XXXI
日野観音寺遺跡

2005年3月31日発行

発　行　大阪府河内長野市原町一丁目1番1号
河内長野市教育委員会
河内長野市遺跡調査会
0721－53－1111
印　刷　(株)中島弘文堂印刷所



付図1　第Ⅰ調査区　遺構全体図（1／250）



付図２　第Ⅱ調査区　遺構全体図（１／200）